

ころも、こわさ

ころもで(衣手)固衣服の袖(の)、
ころもがえ(更衣)固四季時候の變化に依
りて、衣服を其々に着換(か)へるコトを云
ふ。
ころもばこ(衣箱)固衣物を入れて置く箱
即ち行李(のう)籠(のう)の類。
ころもつつみ(衣包)固風呂敷敷(のう)のコト
を云ふ。

(い)わ)

こわいら(聲色)固聲の容子(のう)人の音
聲に似せたる聲を出すコト、假令ば成
田屋(のう)の聲色など。
こわり(牛王)固守護札の一にて、京都の
祇園、山城の八幡、紀伊の熊野(のう)神社
等より出さるもの。
こわり(古往今來)固古(のう)より
今日まで云ふコト。
こわき(小脇)固身長の片脇(のう)。
こわきざし(小脇差)固短刀(のう)のコト、
即ちあひくち。
こわく(蠱惑)固他人をだまして、まじわ
するコト。
こわけ(小分)固細かく分ける。
こわざし(聲差)固聲の調子(のう)こわい

こわし、こん 焜、昆

ろのコト、
こわし(小驚)固驚(のう)の子のコト、
こわたか(聲高)固聲の調子(のう)の高きコ
ト。かん走りたる聲。
こわたり(古渡)固古(のう)に外國より渡り
來たりたる品物のコト、即ち昔の外國
の製作品。
こわづかひ(聲遣)固物の云ひやう、話の
仕振(のう)のコト。
こわね(聲音)固人の出す聲の容子、こわ
いらのコト。
こわらべ(小童)固子供(のう)。
こわらべ(小童)固又た小童も書く、年
のゆかぬ者、仕事(のう)などの拙(のう)なき
者ないやしめて云ふ語。
こわり(小割)固荒く挽き割りし材木など
を、更に細(のう)かく挽くコトを云ふ。

(い)ん)

こん(焜)固炭火(のう)のかやくコト。あ
きらかなるコト。
こん(昆)固のちのち云ふ意より轉じて
子孫(のう)又は後の世のコトを云ふ。兄
(のう)のコト。等(のう)しきコト。同じきコ
ト。

こん 焜、混、困、悃、悃、混七三四

こん(混)固まぜくる。まぜあへる。まぜか
へすコトを云ふ。
こん(混)固まぜる。合(のう)す。水などの濁
(のう)れる。盛(のう)に水の流れゆく状を
云ふ。大にして盛なる状を云ひ表はす
語。
こん(混)固山より出る美しき玉。
こん(混)固帯(のう)のコト。太き繩(のう)、又
は紐(のう)のコトを云ふ。
こん(混)固たげれるコト又はたげられたる
物のコトを云ふ。
こん(困)固こまるコト、くるしむコト。難
儀するコトを云ふ。
こん(悃)固はたたく。たくコト。かため
てかたくしめるコト。
こん(悃)固藁(のう)などをからめてたげぬ
るコト、又は其の物のコト。
こん(悃)固しきりのコト、即ち門の内外
を界せるもの。うつ。たく。それら
衣類物品等を入れるもの、即ちこ
り。旅行用のつららの類、やなきこり、
こん(悃)固網(のう)の。同じ門のしきり
のコトを云ふ。
こん(悃)固誠(のう)のコト、まこと。
こん(悃)固うらむコト。にくむ。
こん(悃)固押しのけるコト。引つぱりゆ

く。ひつ張るコト、

こん(墾)固土地を開くコト。土地を開き
てよろしくなすコト。
こん(懇)固れんころなるコト。ひたしき
コトを云ふ。
こん(關)固宮城の御門。門を番する人の
コトを云ふ。
こん(昏)固日の暮(のう)のコト。くらきコ
ト。妻(のう)の父のコトを云ふ、即ちしう
さ。くらきさ云ふ意よりして、亂(のう)れ
るコト。嫁(のう)なめさるコトを云ふ。
こん(昏)固心の亂だれてるコト。分別(のう)
びのつかぬコト。心をだへくるしめ
てるコト。
こん(跟)固足のきびす。かかと。
こん(鞞)固かむ。かじる。
こん(鞞)固ゆもじ。うんじし。
こん(誣)固ふざけたる言葉。しやれ言葉
。たはごとのコト。
こん(渾)固混(のう)に通ず其の條を見よ。
すて、殘(のう)らす。こころこく云ふ
意を表す語。
こん(羨)固天子の召(のう)せたまふ御衣(のう)
。の。コトを云ふ語。親切に言葉靜(のう)
かに云ひ聞すコト。
こん(漚)固水などの濁(のう)つてるコト。に

こん 墾、懇、關、昏、悃、跟、渾、渾、羨、漚

ころコト。みだれるコト。みだすコト
を云ふ。轉じてきたなきコト。不潔(のう)
。なコト。
こん(髮)固髪(のう)を切るコト、又はそるコ
ト。木や草の細かき枝を切り去るコト
を云ふ。
こん(園)固圃(のう)便所のコト。獸の名、
ぶたの園を云ふ。
こん(婚)固縁組(のう)を爲すコト。
こん(良)固易の八卦の一、動(のう)たり止
(のう)まったりする時機を失(のう)はぬ徳
にかたどりたるもの。方角の名、北と
東との間を云ふ。
こん(今)固いま目前。
こん(魂)固たまし精神。
こん(坤)固易(のう)の八卦(のう)の一、地にか
たどりたるもの。方角の名、西と南の
間のコト。
こん(根)固樹木の根。轉じて物事の基礎
(のう)。(のう)物事に能く堪へ忍(のう)ぶ精神の
活力(のう)、即ち根氣(のう)。
こん(痕)固あま、のりたるかたち。容子(のう)
。即ち痕跡(のう)のコト。
こん(紺)固染色の名、紫と青とを合した
る色合のコトを云ふ。
こん(猷)固接尾(のう)固酒座にて盃(のう)を他人

こん 髣、婚、良、今、魂、坤、根、痕、紺、猷

に指(のう)す其の度數(のう)を表(のう)はすに
用ゆる語、例ば一獻二獻。
こん(權)固物事の第二位即ちかり又はづ
きの意を表す語、例令ば權妻(のう)權頭
(のう)など。
こん(昏)固まつくらがり。くらき
コトを云ふ。
こん(悃)固したしきコト、仲のよき
コト。
こん(渾衣)固天子の召(のう)せ給ふ御衣
の事を申す語(袞衣)。
こん(混)固色々の物がまざつて、
一つとなるコト。
こん(婚)固夫婦(のう)なるコト、
縁組(のう)をなすコト。
こん(焜)固炭火(のう)の光り、か
やくコトを云ふ語。
こん(混)固まるきコト、まんまる
。轉じて地球のコトを云ふ。
こん(渾)固渾圓(のう)固凡て真圓(のう)の
形狀を爲せる物を云ふ。地球の別名。
こん(婚)固よめ入りなしたる夫(のう)
の家のコトを云ふ。
こん(婚)固嫁人(のう)結婚(のう)。
こん(言下)固只だ一言(のう)一言の下
(のう)のコト。
こん、こんか 權

こん、こんか 權

こんか
 こんかち(混淆) 混入り雑(雑)つてきたことになつてゐるコトを云ふ。
 こんかち(金剛) 固佛語。しつかりしてゐて容易(容易)に破損(破損)せざるコトに云ふ語。◎金剛石(コト)又は金剛砂(コト)の略語。
 こんかち(緋緋) 緋(緋)や(緋)屋(緋)。
 こんかち(混合) 混まざるコト。
 こんかち(緋紙) 緋紙に染めたる日本紙のコトを云ふ。
 こんかち(根幹) 固樹木の根と幹。
 こんかち(根限) 固精力のつゞくまで、根氣(根氣)のあらむかぎり。
 こんかち(緋飛白) 固又た緋緋とも書く白きかすりを緋地(緋地)に置きし物の稱。
 こんかち(金剛界) 固佛法の語にて、智慧と徳義とを具(具)えてる性質(性質)の科ト。
 こんかち(金剛砂) 固一種の鑽石(鑽石)にて、柘榴石(柘榴石)を砕きて、粉末となせし物、堅き物を擦(擦)るに用ゆるものなり。
 こんかち(金剛心) 固志願(志願)堅固にして信念深く、容易に節(節)を曲(曲)ぬ精神を云ふ。
 こんかち(金剛石) 固貴重なる礦物の

こんか、こんき
 名にて、即ちダイヤモンドなり、其質(質)最も硬(硬)く、光澤(光澤)の殊に優(優)れたる無色透明(透明)正八面体(正八面体)の石なり、光澤強きが故に、暗(暗)き處にても光を放つ、化学上より云へば、混(混)物なき炭素(炭素)の結晶体(結晶体)なりと、又た稀(稀)には緑色黄色青色淡紅色を呈せる物あり、寶石中の第一位を占むる物にて、古來支那にて夜光(夜光)の珠(珠)と云ひし。
 こんかち(金剛杖) 固佛(佛)に歸依して、諸國を修業し歩く人、即ち修験者の用ゆる白木(白木)の杖(杖)轉じて靈山(靈山)へ登(登)る時の杖。
 こんかち(金剛流) 固能樂(能樂)の一派の名。
 こんかち(金剛力) 固大方の(有ら)ん限りの腕力を振ふコト。
 こんかち(金剛童子) 固菩薩(菩薩)の一跡にて左の足を上げて、左の手に三又(三又)を持ちつつ、恐(恐)ろしき容貌(容貌)をなして立てる佛像。
 こんかち(金剛不壞) 固極めて堅(堅)くして容易に碎(碎)き能(能)はぬコトを云ふ。
 こんか(根基) 固ごだい根本(根本)。

こんき、こんく
 こんき(根氣) 固物事に精を出す力。
 こんき(固寄) 固外敵内亂等を鎮定する職務の科ト即ち將軍職。
 こんき(固置) 固財産の盡きて困難(困難)するコトを云ふ。
 こんき(固婚) 固女子の盛りの年、嫁に行く年頃。
 こんき(固婚儀) 固婚姻の儀式。
 こんき(固地球) 固地球の科ト◎皇后(皇后)の御盛徳(御盛徳)を申す。
 こんき(固却) 固難儀するコト、困(困)るコト。
 こんき(固窮) 固困却に同じ◎貧乏(貧乏)して困るコト。
 こんき(固根據) 固ごだいとして據(據)へるコト、おつさめ。
 こんき(固勤行) 固佛に仕へて修業するコト、おつさめ。
 こんき(固根據地) 固よりこころ根城(根城)となす場所の科ト。
 こんき(固苦) 固こまりくるしむコト、難儀するコト。
 こんき(固金鼓) 固佛語にて、鉦(鉦)の一種、即ち佛堂の前に吊(吊)されある鉦(鉦)を云ふ。
 こんき(固言句) 固短かき言葉(言葉)、一つの

文句(文句)
 こんくら(根比) 固俗語にて、根氣の比(比)べ合ひ、辛抱(辛抱)のしあひ、
 こんくら(混和) 固異なる物と互(互)ひに能く交(交)合(合)すコト。
 こんくら(混化) 固異なる物が、二種以上混(混)りて、更に異(異)なりたる一物體を爲すコト。
 こんくら(童訓) 固婦女子の教へ、
 こんくら(根塊) 固野菜類の根が、大きく固(固)つて、食料となる種類の物を云ふ、芋(芋)くわ(くわ)など。
 こんくら(固外) 固しきゐの外(外)◎區域外(区域外)へ征伐(征伐)に行くコトを云ふ語。
 こんくら(昏黄) 固くれ方、夕ぐれ、たそがれ、日ぐれの科ト。
 こんくら(焔焔) 固炭火(炭火)の盛んに、いこつてゐるコトを云ふ。
 こんくら(懇願) 固ひたすらに請ひねがふコトを云ふ。
 こんくら(固欸) 固極(極)めて中の善きコトを云ふ。
 こんくら(固頓) 固ひたすらに頼(頼)むコト、折り入つてねがふ。
 こんくら(固權化) 固神佛が他の姿(姿)に爲り

て、此の世に現(現)はれ給ひしと云ふコト。
 こんけい(根莖) 固草木の根より出てる一種の莖、地中を横(横)に延(延)び走つてる節(節)のある莖(莖)。
 こんげつ(今月) 固今の月、此の月、
 こんげん(権現) 固神佛が他の物に形を變(變)て、此の世に現(現)はれたるコトを云ふ◎轉じて神の事を更に貴(貴)さびて云ふに用ひし語、假令は熊野權現(熊野權現)など。
 こんご(今後) 固今日より後(後)。
 こんこう(婚媾) 固えんぐみ、げつ、こん、
 こんこく(昏黒) 固まつくらがり、
 こんこつ(固跟骨) 固足のきびすの骨の科トを云ふ。
 こんこん(渾渾) 固水の盛んに流れみなぎつてる状(状)を云ふ語。
 こんこん(懇懇) 固いさもれんごるなる◎たすらすと云ふ意を表はすに用ゆる語
 こんご(固老老) 固言語同断(言語同断)固話にならぬと云ふコト◎轉じて不埒(不埒)なるコトを云ふ。
 こんさい(根菜) 固其の根を食用と爲すべき野菜の科ト、大根など。
 こんさい(固權妻) 固めかけの科ト、

こんさ、こんし
 こんさく(墾墾) 固あれたる田地などを開きて墾(墾)さすコト。
 こんさつ(固殺) 固取り分けて困難(困難)するコト。
 こんざつ(混雜) 固物事の入り混(混)りて重(重)なるコト◎人の多く集(集)まりて入り混(混)るコト。
 こんじ(今時) 固いまどき。
 こんじ(今茲) 固こゝし。
 こんじ(固恨事) 固くやしきコト、残念(残念)なるコト。
 こんし(固潤所) 固便所。かばや、
 こんし(固金色) 固黄金色即ちこがれ色の科ト。
 こんし(固開者) 固門番の科ト、
 こんし(固懇意) 固懇意なるコト、したしきコトを云ふ。
 こんじん(今人) 固古人に對しての稱にて今の世の人。
 こんじん(固渾身) 固そふ身、即ち全身(全身)。
 こんじん(固金神) 固神の名、此の神のあます方に向つて事を爲さば、崇(崇)めがあらざる云ふ神、其の方角は歳に依りて異なるなり。
 こんじん(固固) 固門番の科ト。
 こんじ(固親) 固親(親)しむ心、親切(親切)の科ト、

こんし、こんす 困、混、婚、混、根

つなる心のコト、
こんじやち(言上)図尊上(ゴ)の人に、物事を申し上げるコトを云ふ、
こんしよく(袞職)図天子が國家を治め給ふ事を申す、内閣大臣の職責を云ふ語、
こんしよく(墾植)図荒地を開きて樹木を植(ウ)るコトを云ふ、
こんじんよけ(金神除)図金神のあます方角を避(ウ)て、物事を行ふ、
こんじきやしや(金色夜叉)図黄金の爲めに、夜叉さなる云ふ意よりして、高利貸のコトを云ふ、
こんしんくわい(懇親會)図懇親を厚くする爲めに、會合して酒宴を催(ウ)するコト、
こんす(困)自動こまる、くるしむ、なやむ、
こんす(混)自動多くの物を、一つにすまじらかす、入り亂れさす、
こんす(婚)自動夫婦になる、
こんす(混)自動一所(ゴ)になる、まじる、
こんす(根)自動根をたす、ねさす、即ち原因となる、
こんす(昏睡)図夢中(ムチュ)に爲つて、寢(イ)るコト、
こんす(精神疲)れて、呆然(ダウ)なるコト、
こんずる(跟隨)図後より附き従(ウ)るコト、

こんせ

行くコト、
こんせい(混成)図色々の種類の物が一つになり出来(ウ)てるコト、
こんせい(懇請)図ひたすらに、こひ願ふコト、
こんせい(今世)図現今の世、ちかごろ、
こんせい(今生)図今現在に生てるコト、即ち此の世、
こんせう(昏鈔)図古き紙幣(ヒ)を、
こんせう(今宵)図今晩(コト)今よひ、
こんせう(紺青)図紺物の一種にて、紺色に青味(アヲ)を帯びたるもの、之を粉として精具(ウ)る用、
こんせう(根性)図精神、心根、
こんせう(今夕)図今晩(コト)今よひ、
こんせう(今昔)図現今と昔時と、
こんせう(痕跡)図あざがた、
こんせう(懇切)図懇親(コト)に同じ、
こんせう(昏絶)図目がくらみて、氣を失(ウ)るコト、
こんせん(混線)図電話線又は電信線が、互(ウ)ひに觸れ合つて、電氣が流(ウ)つて亂れるコト、
こんせん(渾然)圖ばくさしてゐる物事の判然せぬ状(ウ)を云ふ、
こんせん(混戦)圖敵(ウ)と味方(ウ)とが

こんせ、こんた

入り亂(ウ)れて戦(ウ)かふコト、
こんせいしゆ(混成酒)圖二種以上の酒類を合したる酒、假令(イ)ば直(イ)しの如き物、
酒類に他の物を混じたる酒、假令(イ)ば葡萄酒など、
こんせいりやだん(混成旅團)圖軍隊の編制方(イ)の一種、即ち歩兵一旅團に砲兵騎兵工兵輜重兵等の兵種を適當に加へて成りたるもの稱、
こんぞめ(紺染)圖紺色(コト)に染めるコト、
紺色に染め上し物、
こんたい(困殆)圖こまりて、あやふきコトを云ふ、
こんたい(今代)圖今世に同じ、
こんたう(昏倒)圖目がくらみて、知らずに倒(ウ)れるコト、
こんたう(懇到)圖此の上もなきれんころなるコトを云ふ、
こんたう(混濁)圖物が交ぜつて、濁(ウ)れるコト、
こんだて(献立)圖膳部に上すべき肴の組立(イ)て、轉じて物事の組立の仕度、みつもりのコト、
こんたひ(紺疋袋)圖白足袋に對しての稱にて、紺木綿にて作(ウ)りたる足袋のコト、

こんたん(今日)圖此の朝、けさ、
こんたん(魂膽)圖心にたくみ居る工夫(ウ)の思案(ウ)を、くわだて、
こんち(根治)圖物事を根本より改良(ウ)するコト、
こんち(病氣)原因より瘴(ウ)して根絶(ウ)にするコト、
こんち(坤軸)圖地球の中心、
こんちゆう(昆蟲)圖虫の總稱、
こんぢりやうはふ(根治療法)圖病氣を根絶(ウ)にする療法(ウ)の仕方(ウ)を云ふ、
こんてい(金泥)圖金箔の粉を膠(ウ)の薄く解(ウ)たる物にて練(ウ)し物、
こんてい(昆弟)圖兄弟と弟と、即ち兄弟(ウ)のコト、
こんてい(根底)圖さだめ、れもさ、
こんてき(權的)圖他人の權妻、
こんでん(墾田)圖開(ウ)こなしたる、新規の田地のコト、
こんてんき(渾天儀)圖現今の地球儀の如き物にて、圓形の球(ウ)の表面に、日月星辰の象(ウ)を描きたる物にて、昔時天体の容子を測(ウ)るに用ひし物、
こんどち(混同)圖異(イ)なりし種類の物が、交(ウ)り合つて一つの物さなるコト、
こんどち(金銅)圖からかれのコト、

こんとく(懇篤)圖取り分けて懇(ウ)なるコトを云ふ、
こんとく(坤德)圖皇后陛下の御徳のコトを申す語、
こんとん(混沌)圖物の判然と、區別のつかぬコトを云ふ、
こんどき(紺土佐)圖土佐紙を紺色に染(ウ)たる物、
こんなん(困難)圖なんざするコト困り苦しむコト、
こんにふ(混入)圖亂れ入る。むちやくちやさなるコト、
こんやく(萑菑)圖草の名、三つに深(ウ)く裂(ウ)たる緑色の葉を有し、地下に莖(ウ)ありて、球状(ウ)をなせる物、其の球状の地下莖を、萑菑玉(ウ)と云ふ、
萑菑玉を煮して、製せし一種の食品、
こんやくばん(萑菑版)圖寒天版の一名、寒天を煮(ウ)き、其の内へグリリンと膠(ウ)を入れて、能く交(ウ)せて、箱(ウ)に流して、固(ウ)まらせたもの、一種の印刷(ウ)器具、
こんねん(今年)圖此の年、ことし、
こんばい(困憊)圖難儀(ウ)する、
こんばり(懇望)圖取り分けて厚く望(ウ)み願ふコト、

こんばり(棍棒)圖杖(ウ)の木などにて作(ウ)られし棒、
徳利(ウ)の如き形の物、
こんばり(昏聩)圖年をまつてもうろくなるコトを云ふ、
こんばく(魂魄)圖人間(ウ)のたましいのコトを云ふ、
こんばち(權八)圖博徒(ウ)の厄介(ウ)者(ウ)のコト、即ち親分(ウ)の家(ウ)に居候(ウ)せる博徒(ウ)のコト、
こんばふ(困乏)圖財産の盡きて、こまるコトを云ふ、
こんばん(今般)圖此たび、こんど、
こんばん(今晚)圖此の夜、今夜、
こんばるりち(今春流)圖能樂の一派の稱、
こんびら(金毘羅)圖讃岐國象頭山に祀(ウ)られてある神の名、
こんぶ(昆布)圖海藻の一種、其の色は褐色(ウ)にして、巾(ウ)の廣く宛然(ウ)帯の如きもの、其の長き物に至つては、二三丈に達するあり、甚だ軟(ウ)らかなれども、其質(ウ)強く滋養(ウ)ある食品にして、其の味甚だ美なり、
こんべい(困弊)圖くるしみよわる、
困難(ウ)して家計(ウ)の衰(ウ)えつかれるコト、

こんた、こんさ

こんさ、こんば

こんば、こんへ

いん、いんや

こんばき(熊闘)図荒(ハ)たる土地を開き耕(カ)やすコト、
こんべんとう(金米糖)図一種の菓子、砂糖の固(カ)りの周囲(ハ)に、砂糖の角(カ)の多く拵(カ)あるもの、
こんぼ(牛旁)図野菜の名、ぼう、
こんぼ(昏暮)図日ぐれのコト、
こんぼん(根本)図物事のぞだい、
こんぼんか(混本歌)图和歌の一體の名、五、七、七の三句より成れる和歌のコトを云ふ、
こんぼんてき(根本的)図基礎(ハ)から本(ハ)から云ふ意、
こんむらと(濃村濃)図染色の名、極(ハ)めて濃(カ)きむらこ色のコト、
こんめい(懸命)図情(ハ)あつき言葉(ハ)親切なる心根、
こんめい(昏迷)図心の迷(ハ)ひて、氣を失(ハ)ふコト、
こんめい(渾名)図あだ名のコト、
こんもり(根毛)図草木の根より不規則に出てゐる、毛の如きもの、
こんや(今夜)図此の夜、今日の夜、
こんや(紺屋)図染物を爲すを業とする家、
こんやく(困厄)図くるしむコト、難義す

いん、いんれ

こんゆ(懇諭)図かんでくくめるやうにさるコト、
こんよ(坤輿)図坤儀(カ)に同じ、
こんらん(昏亂)図心のくらみて、是非(ハ)善惡(ハ)の識別力(ハ)を失ひたるコトを云ふ、
こんらん(混亂)図入り込み乱れてるコト、
こんらん(昏亂)図物事の入り乱れるコトを云ふ、
こんりち(建立)図寺院を造り立るコト、轉じて新(ハ)に物を造(カ)る、
こんりち(根瘤)図樹木の根に生する瘤(カ)のコト、
こんりん(混林)図種類の異(カ)なりたる樹木にて成立(カ)てる林(カ)、
こんりんざい(金輪際)図つとつてつび即ち何處(カ)までも、
こんりよりぎよる(袞龍御衣)図昔時天皇の御大禮の時に用ひさせ給(カ)ひたる、赤色の絹(カ)に、日月星辰火龍蟲の模様を、金糸にて緇(カ)せし、御衣のコトを云ふ、
こんれい(婚禮)図婚姻の儀式(カ)を擧げ行ふコト、

いん、いんろ、さ

いんろ(焜爐)図道具の名、座敷用の小形のしりんのコト、
いんわ(懇話)図親(ハ)しき話(ハ)打ちさけて物語を爲すコトを云ふ、
いんわくわい(懇話會)図懇意の人々が集りて物語をなすコト、
いん(狭)図(接頭)或る語の上に附け加えて、せまきコト、又は中央(ハ)に云ふ意を現(カ)はすに用ゆる語、例は狭山(ハ)狭夜(ハ)などの類、
いん(紗)図すなすなつばらすなの澤山(ハ)に在る土地(ハ)海(ハ)の時(ハ)みぎは、はま音聲のしわがれる此の上もなき細かき分量のコトを云ひ表はす語、
いん(紗)図地合の薄き絹織物(ハ)、
いん(時)(接尾)或る語の下に附加(ハ)て其の詩々の時分(ハ)に云ふ意を表はすに用ゆる語、
いん(砂)図沙(ハ)に通ず其の條を見よ、

さ(左)図右に對しての語ひだり。ひだりす(ハ)下のす。さげる。落す(ハ)世話(ハ)せぬ。助けぬ。しりぞける(ハ)位置(ハ)のいやしきコト、下級(ハ)しやうい(ハ)證據(ハ)佐に通ずたすく(ハ)導(ハ)く、
さ(左)図たすけ。たすける。保護、
さ(埴)図みちかきコトを云ふ、
さ(座)図くまきコト。細(ハ)かききコト切りたる肉類のコト、
さ(埴)図けはしきコトを云ふ、
さ(詐)図いつはり。あざむく、
さ(榨)図器具の名、種油(ハ)を絞(カ)る機械(ハ)、
さ(酒を漉)図一種の器具の名、
さ(搥)図ひれるコト。よるコト。むむコト木などのゆがみ、曲(カ)りたるコトを云ふ、
さ(椀)図木や竹(ハ)などを編(カ)み合せて水に浮(カ)せるもの、名、即ちいかだのコトを云ふ、
さ(椀)図木を編(カ)て、水に浮(カ)べたるもの、即ちいかだのコト、
さ(査)図前條に同じ、
さ(査)図取しらへる。検査(ハ)するコト、
さ(査)図氣をつける。見廻(ハ)りて取りしらへる。さりしまる、
さ(装)図僧侶の着る衣物、けさ、

さ(剗)図物を切りて細かくする、即ちさむ(ハ)けづる(ハ)物の角(ハ)を切り落す(ハ)すつつけるコト、
さ(嗔)図首聲のしわがれるコト、
さ(葦)図枯草(ハ)を切りたるもの、即ちまぐさのコトを云ふ、
さ(梭)図機(ハ)に織(カ)に用ゆる器具の名、即ちおさの、
さ(収)図魚類を捕(カ)ふるに用ゆる器具の名、やすの、
さ(枝)図酒(ハ)に酔(カ)ふて、踊(ハ)り狂る木(ハ)の枝(ハ)の稱、
さ(徒)図酒(ハ)に酔(カ)ふて、踊(ハ)り狂(ハ)ぶ状態を云ひ表はす語、
さ(安)図安らかに坐(カ)り居るさま、
さ(褌)図(ハ)が、風などに巻きあがれる状(ハ)を云ふ、
さ(噉)図そののかす。おだてる。おびき出すコトを云ふ、
さ(瑳)図白色の玉(ハ)の光澤(ハ)あるコトを云ふ、
さ(美)図物の美(ハ)くしきコトを云ふ、
さ(消)図光澤(ハ)を消すコト、
さ(可)図可愛(ハ)らしく笑ふさま、
さ(魚)図醋浸(カ)にしたる魚類の稱、
さ(産)図れぶこの如き、小さき腫物(ハ)を云ふ、

さ(總)図總て腫物の根の、腫れ廣(ハ)がれるもの、コトを云ふ、
さ(製)図葉(ハ)にて製したる雨を防ぐ具、即ちみの(ハ)おほひ物のコト、
さ(蓑)図前條に同じ、
さ(鰓)図魚の名、ふか、
さ(鱈)図魚の名、ふか、
さ(足)図足を取られてつまくコト、
さ(過)図事の時機を過(カ)るコト、
さ(釜)図器具の名、釜(ハ)に同じ、
さ(傳)図くまりのコトを云ふ、
さ(又)図くまなく(ハ)まじえる。まじはる(ハ)またなる(ハ)またす(ハ)またの(ハ)二つに分れる(ハ)かざし(ハ)の(ハ)コト、
さ(瑣)図わづかなるコト。細かき。小さきコト、
さ(粉)図(ハ)層(ハ)いやしきコト、
さ(身)図身の低(ハ)きコト、
さ(錠)図くさり(ハ)錠前(ハ)かけがね(ハ)しめる(ハ)さなる(ハ)つなぐ、
さ(挫)図くじく。おろ(ハ)ばづかしめる(ハ)こまくなるコト、
さ(差)図ちがひ即ち相違(ハ)多き数(ハ)より少なき数を引きたる其の残分のコトを云ふ、
さ(差)図(ハ)又、瑣、挫、差、

左、佐、埴、嗔、詐、榨、椀、査、装

剗、嗔、葦、梭、収、枝、徒、安、褌

製、蓑、鰓、鱈、足、過、釜、傳、又、瑣、挫、差

座、采

座(座) 座すはるべき所。宴會などの席上
の座を云ふ。假令座が賑ふなど。凡
て道具類の金具の下に附けて飾(カサ)と
爲すもの。星(星)のやざれる所を云ふ。
徳川時代に金銀貨幣を鑄造せし場所
の座を云ふ。假令東京の銀座など。
座(座) 接尾。数字の下に加えて佛の像を
數(カサ)ふるに用ゆ。里神樂(カサ)の舞
曲(カサ)の數を數(カサ)ふるに用ゆ。芝
居などの小屋(カサ)の名の下に附け加え
る。語假令は歌舞伎座、帝國座などの類。

(カサカサ)

カサカサ(小雨) 細(カサ)かき雨。ぬか雨のこ
とを云ふ。
カサカサ(紗綾) 細絹織物(カサカサ)の名、統(カサ)
の如き薄き、あや織物(カサカサ)。

(カサカサ)

カサカサ(采) 采文章などのつや。いりざり
かざり。取締(カサカサ)即ち采領(カサカサ)取る
えらぶ。えりぬく。ありさま。やうす。
大名などの領して居る地所の座(カサカサ)に
供(カサカサ)へる幣帛(カサカサ)即ちぬまの座(カサカサ)。

犀、犀、犀、犀、犀、犀、犀、犀

犀(犀) 犀獸の名。犀の高き五六尺にて
形は水牛(カサカサ)に似て毛なく、大さは象
(カサカサ)の次に位し、皮の色は青黒(カサカサ)くし
て、多數の皺(カサカサ)あり、鼻の頭(カサカサ)に、一
本の角(カサカサ)ある物と、二本の角ある物と
あり、足は三蹄(カサカサ)なり。角は種々の器具
を製す材となる。此の獸は我國には産
せず、東南アジア及アフリカに産す。
犀(犀) 犀女の頭(カサカサ)に挿す飾(カサカサ)りも
の、かんざし(カサカサ)同(カサカサ)ひ。

(カサカサ)

カサカサ(犀) 犀(カサカサ)を盛(カサカサ)る具、うつぼの
ことを云ふ。
カサカサ(犀) 犀人(カサカサ)の名所、あ(カサカサ)あ(カサカサ)
の座を云ふ。
カサカサ(犀) 犀(カサカサ)に同じ。
カサカサ(犀) 犀(カサカサ)もやうす。うながす。追(カサカサ)り
来ることを云ふ。
カサカサ(犀) 犀(カサカサ)かくす。くたく。くじく
ほらほら。なくする。
カサカサ(犀) 犀(カサカサ)の光(カサカサ)り輝(カサカサ)やくことを
云ふ。總てつやつほく光(カサカサ)ることを
云ふ。玉(カサカサ)の垂(カサカサ)り下(カサカサ)つる状態を云
ひ表はす語。

(カサカサ)

カサカサ(犀) 犀水の深(カサカサ)き座(カサカサ)美しく、あ
ざやかなることを云ふ。
カサカサ(犀) 犀(カサカサ)大なり。高くありと云ふ意
のくづの座を云ふ。

裁、裁、裁、裁、裁、裁、裁、裁

裁(裁) 裁に同じわざわひ。さいなん
の座を云ふ。
裁(裁) 裁衣服(カサカサ)の裾(カサカサ)の座(カサカサ)の座、
裁(裁) 裁草木の類を植(カサカサ)へそだつ
ことを云ふ。
裁(裁) 裁かみくたきて食ふことを云ふ。
裁(裁) 少量の酒を飲むことを云ふ。
裁(裁) 裁(カサカサ)に流るさま。
裁(裁) 裁(カサカサ)に流るさま。
裁(裁) 裁(カサカサ)に流るさま。
裁(裁) 裁(カサカサ)に流るさま。
裁(裁) 裁(カサカサ)に流るさま。
裁(裁) 裁(カサカサ)に流るさま。

(カサカサ)

カサカサ(裁) 裁(カサカサ)の積(カサカサ)む。歳に通ず
しの座(カサカサ)知る座(カサカサ)十分なる。充(カサカサ)
る座(カサカサ)物事の初め。始むる座(カサカサ)成
る。爲す。行ふ。いたく。まつる。

(カサカサ)

カサカサ(裁) 裁(カサカサ)の積(カサカサ)む。歳に通ず
しの座(カサカサ)知る座(カサカサ)十分なる。充(カサカサ)
る座(カサカサ)物事の初め。始むる座(カサカサ)成
る。爲す。行ふ。いたく。まつる。

賽

賽(賽) 賽神を拜する禮として報(カサカサ)ゆ
る座(カサカサ)即ち賽錢(カサカサ)雙六(カサカサ)などにて勝
利(カサカサ)を争(カサカサ)ふ時に用ゆる小き四
角形の物に、一、二、三、四、五、六と其の
各面に點(カサカサ)を記したる具即ち、さい
ころ。

(カサカサ)

カサカサ(賽) 賽(カサカサ)の座(カサカサ)に同じ。
カサカサ(賽) 賽(カサカサ)彩色(カサカサ)を施したるあや絹
(カサカサ)の座(カサカサ)を云ふ。
カサカサ(賽) 賽(カサカサ)めて細かき狀を云ふ。
物の澤山に集まれる座(カサカサ)。

(カサカサ)

カサカサ(賽) 賽(カサカサ)もに。一所(カサカサ)に。同類即
ちさもがらの座(カサカサ)。
カサカサ(賽) 賽(カサカサ)を衣物とすべく切る即
ちたつ。たし調(カサカサ)べる。ほごよく
なす。取り計(カサカサ)ふ。鑑別(カサカサ)する。
みわける。ほごよくなす。きりもりす
る座(カサカサ)。

(カサカサ)

カサカサ(賽) 賽(カサカサ)ものいみする。つつしむ。部
屋(カサカサ)の座(カサカサ)即ち書齋(カサカサ)など。も
いみと云ふ意より轉じて喪服(カサカサ)の座
と云ふ。
カサカサ(賽) 賽(カサカサ)のみほりあきた。特に雜草

賽

賽(賽) 賽、賽、賽、賽、賽、賽、賽、賽

幸

幸(幸) 幸取り扱ふ。つかさどる又はつ
かさどる人即ち司(カサカサ)取締(カサカサ)りて
調(カサカサ)ふ。食品を料理する座(カサカサ)又は其
の人(カサカサ)畜類(カサカサ)を殺す座(カサカサ)を云ふ。
幸(幸) 幸(カサカサ)取る。さりとて。よる。えら
ぶ。摘(カサカサ)み取る。
幸(幸) 幸(カサカサ)座(カサカサ)を小さく伐(カサカサ)たるもの即
ちしば。たき木の座(カサカサ)。
幸(幸) 幸(カサカサ)座(カサカサ)から。技術(カサカサ)。
座(カサカサ)を云ふ。

(カサカサ)

カサカサ(幸) 幸(カサカサ)座(カサカサ)に添(カサカサ)えて
食ふもの。野菜(カサカサ)青物、
「あや。
カサカサ(幸) 幸(カサカサ)彩色の彩にて。いりざりつや。
カサカサ(幸) 幸(カサカサ)座(カサカサ)はこり打きの柄の短きが如き
物にて打ち振りて指揮(カサカサ)する具即ち
さいはいの座(カサカサ)。

(カサカサ)

カサカサ(幸) 幸(カサカサ)座(カサカサ)で小き座(カサカサ)の座(カサカサ)。
カサカサ(幸) 幸(カサカサ)座(カサカサ)をひめ即ち金銭を借る座(カサカサ)又
は金銭を貸(カサカサ)たる座(カサカサ)。
カサカサ(幸) 幸(カサカサ)座(カサカサ)たる木、即ち材木。ちえ
(智慧)原料(カサカサ)しな。生れつき、
カサカサ(幸) 幸(カサカサ)座(カサカサ)の座(カサカサ)にて、智慧(カサカサ)の働
(カサカサ)きを云ふ。

(カサカサ)

カサカサ(幸) 幸(カサカサ)座(カサカサ)たる木、即ち材木。ちえ
(智慧)原料(カサカサ)しな。生れつき、
カサカサ(幸) 幸(カサカサ)座(カサカサ)の座(カサカサ)にて、智慧(カサカサ)の働
(カサカサ)きを云ふ。

幸

幸(幸) 幸、幸、幸、幸、幸、幸、幸、幸

才

才(才) 才(接尾) 才(カサカサ)にて物をはかす量
を示すに用ゆる語。一才は一合の百分
の一。
才(才) 才(カサカサ)其の處に居ると云ふ意を表す
語。例は在宅など。
才(才) 才(カサカサ)つみ。悪事を敢てなしたるば
ち即ちさが(科)わざわひ。災難(カサカサ)
の座(カサカサ)を云ふ。
才(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。
才(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。
才(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。
才(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。
才(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。

(カサカサ)

カサカサ(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。
カサカサ(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。
カサカサ(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。
カサカサ(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。
カサカサ(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。
カサカサ(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。

(カサカサ)

カサカサ(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。
カサカサ(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。
カサカサ(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。
カサカサ(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。
カサカサ(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。
カサカサ(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。

(カサカサ)

カサカサ(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。
カサカサ(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。
カサカサ(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。
カサカサ(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。
カサカサ(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。
カサカサ(才) 才(カサカサ)座(カサカサ)を云ふ。

在

在(在) 在、在、在、在、在、在、在、在

さいかい 細妻、劑

さい(細) 圖ほそきコト。こまかきコト。少(な)きコトを云ふ。
 さい(妻) 圖女房(にやうぼう)の科ト。
 さい(在) 圖其の處にあると云ふ意を表はす。語例は在郷(にやう)など。田舎(にやう)の科トを云ふ。
 さい(劑) 圖二種以上の物を混(ま)せて味(あじ)を出したる物。二種以上の藥品を合して製したる藥品。調合(てうごう)したる薬を數ふる語。
 さい(差異) 圖こなつてるコト。相違(さ)ひせるコトを云ふ。
 さい(愛) 圖最もかあいがるコト。最もかあゆきコト。
 さい(悪) 圖最も悪(わる)きコト。
 さい(罪) 圖つみごと。正(ただ)しからぬ行を爲したるコト。不徳(ふとく)の行爲(こうぎ)をなすコトを云ふ。
 さい(案) 圖罪(つみ)の容子(ようし)を認めたる書類(しるひ)の類。
 さい(彩衣) 圖美(うつく)しき模様のある衣服の科ト。華美(けうび)の衣(え)物。
 さい(在位) 圖天子の御位(ごゐ)に在(あ)らせられ給ふ間を云ふ。
 さい(災異) 圖わざわひの科ト。さいなんの科ト。

さいいふ 采邑

さいいふ(采邑) 圖大名の支配してゐる領地(りやうち)ち食邑(じき)の科ト。
 さい(み) 圖舊(ふる)時加茂神宮に仕(つか)へたまひし内親王(うちねわう)の御事(ごじ)を申す。
 さい(雨) 圖細(こ)かき雨(あま)り、わか雨(わかあま)り(左右)の科ト。さい(右)とさい(左)とを轉じてそばかたわきの科ト。
 さい(座) 圖其の人の傍(わら)と云ふ意を表はす敬語(けいご)。我がそば、さい(彩雲) 圖様々(さまざま)なるあざやかなる雲の科トを云ふ。
 さい(在營) 圖兵營(へいえい)に在るコト。
 さい(最要) 圖最も大切なコト。第一に必要(ひつやう)なること、
 さい(細腰) 圖ほそき腰(こし)美人(びじん)の腰つき(こし)の科トを云ふ。
 さい(在役) 圖役(やく)に使はれてるコト。兵士(へいし)が現役(げんやく)に従事(じゆんじ)してゐるコト。軍艦(ぐんかん)が特殊(とくしゆ)の任務(にんむ)に従事(じゆんじ)してゐるコト。凡(たゞ)て一定(いぢやう)の役に使(つか)はれてるを云ふ。
 さい(菜園) 圖野菜(やさい)類(るい)を作(つく)つてある畑(はたけ)の科ト。
 さい(再縁) 圖二度の縁(ゆかり)づき、さい(才媛) 圖才能(さいのう)のすぐれてる女(に)詩文章(しもんぢやう)を巧(たくま)みに作る女子(むすめ)。

さいえん 再演

さいえん(再演) 圖同じ藝(げい)を二度くり返(かへ)して催(もよほ)すコト。同じ事を二度述(たづ)ねる、演説(えんせつ)などを、さい(英) 圖さいなん、なんぎ、わざわひの科ト。
 さい(再) 圖二度モウ一度、さい(再)のち(再)塞(さい)馬(ば)の昔(むかし)の支那(しな)の塞(さい)翁(う)と云ふ人の故事(こじ)より出(で)たる語(ことば)にて人生(じんせい)の禍福(くわふく)の定まりなきコトを云ふ語。
 さい(裁可) 圖臣下(しんげ)の申し出たる事實(じじつ)を天子(てんし)が可(よ)くして御許(ごきよ)可(よ)くおぼさるるコトを云ふ。天子(てんし)が國事(こくじ)に關(か)り、お志(こころ)をお定めおぼせされて御發表(ごはつぱつ)せられたるコトをいふ。
 さい(再嫁) 圖二度のよめいり、さい(在郷) 圖田舎(にやう)其の地方(ちほう)、さい(災) 圖防(ぼう)ぎ得(え)ずして自然(じぜん)に來(き)る災(わざ)い、風水(ふうすい)害(がい)等(とう)突然(とつぜん)に自家(じか)に來(き)る災(わざ)い、假令(かじやう)ば火難(かたがひ)盜難(たうなん)など、さい(際涯) 圖はてしなく、さい(齋戒) 圖精進(しやうじん)を爲(な)し、身體(しんたい)を清(きよ)めて、謹慎(きんじん)を守るコトを云ふ、即ち(すなは)ちものいみの科ト、さい(再開) 圖一旦(いつたん)閉(と)まる會(かい)などを更(さら)に開(ひらく)コト。

さいか

さいかい(西海) 圖西(にし)の方(かた)の海(うみ)九州(きゅうしゅう)地方(ちほう)の科トを云ふ。
 さい(幸) 圖天子(てんし)を輔(すけ)け奉(ほう)つて國政(こくせい)を執(と)る、即ち大臣(だいじん)宰相(さいしやう)の科ト。
 さい(再考) 圖二度の考(かう)へ、再び(また)思案(しあん)するコト。
 さい(再校) 圖校正(けいしやう)せし物を又(また)校正(けいしやう)するコト。二度(にど)の校正(けいしやう)。
 さい(菟葵) 圖木(き)の名(な)、其(その)葉(は)は羽(は)の形(かたち)を爲(な)して、恰(ただ)も柳(やなぎ)の葉(は)の如(ごと)く小さく刺(さ)り多(おほ)し、幹(み)にも亦(また)多少(たうしやう)の刺(さ)りあり、夏(なつ)に淡黄色(たんわうしき)の花(はな)を開(ひら)き、秋(あき)に至(いた)りて實(み)を結(む)ぶ、實(み)は一尺(いちせき)内外(ないわい)もあり、莢(えい)の中に在(あ)りて細(こ)き大豆(だいず)の如(ごと)きもの薬(くすり)となる。
 さい(犀角) 圖犀(さい)の角(かく)にて、之(これ)を研(ひ)き、飾(かざ)り、其(その)色の黒(くろ)き物は至極(しごく)上品(じゆんぴん)なり、又(また)其(その)黒(くろ)き角(かく)の先(まへ)はウサイ角(うさいかく)にて薬(くすり)に用(もち)ゆ、さい(才) 圖才智(さいち)と學問(がくもん)、さい(在) 圖學校(がくがう)にて、教(おし)えを受けてゐるコト、さい(才) 圖才(さい)智(ち)ありて物(もの)の役(やく)に立つ(た)つ夫(う)を云ふ。

さいかん

さいかん(歳寒) 圖冬(ふゆ)の季節(きせつ)の科ト、さい(再感) 圖同じ病氣(びやうき)の二度發(は)するコト。ふりかへり、さい(推陷) 圖敵城(てきじやう)敵營(てきえい)などを攻(せ)めて陷(おと)されるコトを云ふ。
 さい(細問) 圖まわしもの、さい(再刊) 圖再版(さいばん)に同じ、さい(細好) 圖根性(こんじやう)の小(こ)さくしてれ(れ)じてる人(ひと)、さい(才幹) 圖智恵(ちゑ)、才能(さいのう)、さい(在監) 圖囚(い)はれて監獄(かんごく)に在(あ)るコト、さい(再返) 圖動元(どうげん)へもどる病氣(びやうき)などの再發(さいはつ)する、さい(才氣) 圖智恵(ちゑ)の科ト。精神(しんせい)に盛(も)つたる勳(いさ)のあるコト、さい(材器) 圖物の役(やく)に立つ、又(また)其(その)人(ひと)の役(やく)に立つ器(き)具(ぐ)の科ト、さい(彩旗) 圖種々(しゆしゆ)の色(いろ)を取り合(あ)せて美しく染(ぞ)め出したる旗(はた)、さい(猜忌) 圖人(ひと)をれたみきらふコト、人(ひと)をそれむコト、さい(再記) 圖改(かい)めて記載(きざい)するコトを云ふ、さい(才器) 圖才智(さいち)ありて物(もの)の役(やく)に立つコト、又(また)其(その)人(ひと)。

さいき

さいき(債鬼) 圖借(か)りたる金子(かね)を取り立て(と)る人(ひと)、又(また)掛取(かきとり)に來(き)る人の科トを云ふ、さい(猜疑) 圖うたがふコト、疑(ぎ)ふて信(しん)ぜざる心(こころ)をいふ、さい(再議) 圖同一(どういつ)の事(こと)に就(つ)きて、再び(また)評議(へいぎ)するコト、さい(再歸) 圖もたへかへる。もその通(と)りになるコト、さい(細技) 圖こまかきわざ。こまかき細工(さいご)の科ト、さい(祭儀) 圖祭(まつり)の營(えい)になむ其(その)儀式(ぎしき)の科トを云ふ、さい(再舉) 圖二度のくわだて、二度(にど)のはたあげの科ト、さい(裁許) 圖裁決(さいけつ)して許(ゆる)すコト。取り調(とりにて)りて許(ゆる)す、さい(最近) 圖最も近(ちか)きコト、さい(在勤) 圖勤務(きんむ)しつつかあるコト。役に在(あ)るコト、さい(細道) 圖わずかばかりの過(あや)ち。少しばかりのきづ、さい(再動) 圖二度のつとめ、さい(細菌) 圖肉眼(にくがん)にては、所詮(しよせん)見るコトの出來ぬ、極めて小(こ)さき虫(むし)の

種類を云ふ、其の類種々あれども、皆な他物に附着(ツケ)して、養分を吸ひ取りて、迅速(ツク)に甚だしく繁殖(ツク)するもの、中には甚大なる害を爲す者もあれば、又た益を爲す者もある、原名をバクテリア云ふ。

さいきんみ(再吟味) 図くりかへして調(ツク)へるコト。調へなほし。

さいく(細工) 図細々した物を拵(ツク)えるコト。細かき器物(ツク)を造るコト。物事の取計ひ、工夫(ツク)。

さいぐら(齋宮) 図いつきのみこのコトを申す、即ち昔時天子の御即位(ツク)おはせし毎(ツク)に、御未婚(ツク)の内親王、又は女王を、伊勢の大神宮に奉仕せしめられたるを云ふ。

さいくつ(採掘) 図土中に埋(ツク)もれてる物を掘(ツク)り出す。

さいくば(細工場) 図細工(ツク)を爲す場所仕事場(ツク)のコト。

さいくわ(財貨) 図金錢及び財産のコトを云ふ。

さいくわ(細過) 図いさかななるあやまちわづかなしそんじ。

さいくわ(彩畫) 図美しく色ざりたる畫(ツク)の(ツク)コトを云ふ。

さいくわ(罪科) 図つみごが、

さいくわ(罪過) 図つみご、あやまり、

さいくわ(妻君) 図他人の女房のコトを云ふ語。

さいくん(細君) 図前條に同じ。

さいくじん(細工人) 図細工をする人。

さいくもの(細工物) 図さいくを爲したる物。細工せしもの。

さいくわい(際會) 図めぐりあふコト、であふコト。

さいくわい(再會) 図再びめぐりあふ、二度の對面(ツク)のコト。

さいくわい(崔嵬) 図山などのそばだつてゐる(ツク)に云ふ語。

さいくわい(罪魁) 図其の犯罪についての張本人(ツク)のコト。

さいくわい(塞外) 図國さかひの外。そりでの外(ツク)を云ふ。

さいくわい(在外) 図外國にさごまつてるコト。外國にあるコト。

さいくわい(探鐵) 図山より礦物(ツク)を掘り出すコトを云ふ。

さいくわん(災患) 図さいなん。わざわいのコトを云ふ。

さいくわん(在官) 図官途についてるコトを云ふ。

さいけ(在家) 図田舎(ツク)の家をいふ。僧侶より僧侶以外の人、即ち俗人(ツク)を呼(ツク)に用ゆるの稱。

さいけ(濟家) 図宗教(ツク)の名にて、臨濟宗(ツク)の(ツク)コトを云ふ。

さいけい(歲刑) 図陰陽家の云ふ八將軍の一、地を守(ツク)るさいふ神の名、此の神のぬます方に向つて、土を掘(ツク)れば咎(ツク)ありと云ふ。

さいけい(歲計) 図一年中の費用の總高(ツク)の(ツク)コトを云ふ。

さいけい(細徑) 図ほそき路(ツク)。

さいけい(才藝) 図智慧(ツク)と藝術。

さいけつ(裁決) 図裁判に依りて曲直を定むるコト。又た定めしコト。

さいけつ(採決) 図議事堂にて、議長が議事に就いての可否を、議員(ツク)に問ひ、多數の意見を採用して、其の議事を定むるコト。

さいげつ(歲月) 図さしつき。

さいげん(才歎) 図天災の爲めに五穀の出來の悪しきコトを云ふ。

さいげん(財源) 図財貨(ツク)を收(ツク)め得べきごだいのコト。

さいげん(細見) 図細(ツク)かくしらべる、くわしく見るコト。

さいき、おつく

さいく

さいけ

七四六

さいげん(債權) 図財産(ツク)に関する權利の一にて、明(ツク)りやくす云へば、金錢財物を貸したる其の貸主(ツク)の權利のコトを云ふ。

さいげん(債券) 図法律の規定(ツク)に依りて、銀行會社等より發行する、借用證書の如きもの。

さいげん(再現) 図再びあらわれるコト。二度あらわすコトを云ふ。

さいげん(際限) 図くぎり、きげん。

さいげん(最惠國) 図通商(ツク)貿易(ツク)等の關稅(ツク)に對して、最も利益なる條約を取り結んでる國のコトを云ふ語。

さいげん(最敬禮) 図皇室に對し奉つて、行ふ敬禮のコト。

さいげん(債權額) 図貸したる金子の總高のコト。

さいげん(債券額) 図其の債券に記載してある金高のコト。

さいげん(抵當) 図抵當物件のコトを云ふ。

さいげん(再現力) 図一たび精神に感じたる現象(ツク)を、再び心に思ひ現はす働(ツク)を云ふ。

さいご(最後) 図一番のしまひ、一番のう

しろのコトを云ふ。

さいご(最期) 図物事の終(ツク)りの時(ツク)ぬコト、死なんとするさき。

さいご(再興) 図一旦(ツク)棄(ツク)れた物事が、再び盛に爲つて來る。

さいご(罪業) 図罪(ツク)なるべき行ひを犯したる罪のむくい。

さいご(在郷) 図都會(ツク)よりして田舎(ツク)の(ツク)コトを云ふ。郷土(ツク)に在るコト。田舎(ツク)にあるコト。

さいご(催告) 図法律の語にて、或る行為又は不行爲に對して、其をうながし知らせるコトを云ふ。

さいご(西國) 図西の方に在る國。西國三十三ヶ所の略。九州地方のコトを云ふ。

さいご(在國) 図其の國許(ツク)に居るコトを云ふ。

さいご(在獄) 図在監(ツク)に同じ。

さいご(最期尻) 図馳(ツク)などが進退(ツク)きわまりたる時に、敵(ツク)を困(ツク)らす目的にて、肛門(ツク)より放つ悪臭(ツク)を轉じて困(ツク)りたる時に、施(ツク)す無理な策略(ツク)。

さいご(菜根) 図野菜物(ツク)の根と云ふコト。轉じて粗末(ツク)なる食品のコト

さいごん(再婚) 図一旦(ツク)婚姻(ツク)せし者が、互ひに別れて、更に他へ婚姻するコトを云ふ。

さいごん(再建) 図二度の設立(ツク)假令ば寺院を再建するなど。

さいごん(在郷者) 図其の土地に住つてる人。田舎に住む人。

さいごん(在郷軍人) 図豫備(ツク)及び後備に在る。凡ての軍人のコトを云ふ。

さいごん(再再) 圖たびたび、何度も、

さいごん(細細) 圖こまこま、

さいごん(細碎) 圖細(ツク)かくたく、

さいごん(在在) 圖そこら、そこら、さいしよのコトを云ふ。

さいごん(才藻) 図才能(ツク)と文章即ち文才のコトを云ふ。

さいごん(酒掃) 図そうじするコト、はききよむるコトを云ふ。

さいごん(再昨) 図其の日より、三日前の日、即ちさきさき、

さいごん(細作) 図しのびの者、即ち密偵

さいご、さいご

さいご

さいごん、さいごん

七四七

さいしよ(在所) 國我(クニノミ)のゐる所 國許(クニノクサ) 田舎(イナ)のこト、
 さいしん(再進) 國更に進めるこト、再び進むこト、
 さいしん(再診) 國二度の診察(シヤク)。
 さいしん(再伸) 國手紙を書き終りて更に又た事柄(ワケ)を述べする時に、其の初(ハジメ)へ一字下(シタ)けて書く語にて、二度述(ツ)ぐる云ふ意、即ち尙々(ナラナラ)書(カ)すのこト、
 さいしん(再審) 國更(マシ)に取り調(シヤク)へる二度の調へ 國裁判所にて民事及び刑事に關(カ)する取調を爲して、判決の定(サ)りたる後に、更に新事實を發見(ハツク)するか、又は其の判決の誤(アヤマ)りなどを發見せし場合に、更(マシ)ためて裁判するを云ふ、
 さいしん(最新) 國最も新(アタラ)しきこトを云ふ、
 さいじん(才人) 國智惠のある人、文章などを巧(ウマ)みに作る人、
 さいしん(細辛) 國草の名にて、其の莖(シマ)は上にのびず、春の頃に、かも葵(アオイ)に似たる葉を生じ、根元(ネノヘ)に紫黑色の三瓣(サンペタ)の花を咲かす、根は藥用となるもの、

さいし(妻子) 國妻(メウ)と子に、
 さいし(才子) 國智惠(チ)ある人、すぐれたる人のこトを云ふ、
 さいし(才思) 國志想(シヤク)の確(タカ)かりしこト、考(カガ)への確(タカ)かなる、
 さいし(財施) 國財物を貧者(ヒナシ)に施(シタ)すこト、
 さいし(細思) 國念(ネン)の入たる考へ 國細(コト)かき考のこト、
 さいし(細字) 國細かき字、小書き文字のこト、
 さいし(細事) 國細細(コト)しきこト、一寸(ツツ)したこト、
 さいし(際次) 國其の時、其の折、
 さいし(歳次) 國其の歳(シ)、こしまわりのこトを云ふ、
 さいし(祭祀) 國まつり、祭(マツ)を執(シ)り行ふこト、
 さいし(祭樂) 國神靈(カミ)を祀(マツ)る時に、供(カ)える種々の食品、
 さいし(祭事) 國まつりに關(カ)する事柄(ワケ)、まつりのこトを云ふ、
 さいし(殺傷) 國事物が、餘(ヒヨリ)に小さく手を出すほどの事もなしさいふ意を表はすに用ゆる語、
 さいし(祭式) 國祭典に同じ、

さいし(才識) 國智惠と學問、
 さいし(彩色) 國いろどり、色をつけるこト、色にてかざるこト、
 さいし(齋食) 國法事(ホウジ)の時に差し出す食事、即ちさき(サキ)まきほごに食事を爲すこトを云ふ、
 さいし(罪實) 國其の犯罪の性質、假令(カレバ)常事犯(ジョウジツト)さか、國事犯(クニジツト)か云ふが如し、
 さいし(祭日) 國神靈(カミ)を祭(マツ)る日、祭事を營(カ)む日、
 さいし(採集) 國えらび取りてあつむるこト、
 さいし(歳首) 國年のはじめ、
 さいし(催主) 國物事を催(カ)する主人(ウヂ)、
 さいし(採取) 國えりさる、えらびさる、えりぬくこト、
 さいし(債主) 國金錢の借り主、
 さいし(祭酒) 國昔時の官名、現今の文部大臣に同じ、
 さいし(伊勢) 國伊勢大神宮の長官を云ふ、皇族を以て此れに任ぜらる 國祭事(マツ)を行ふ主(ウヂ)、
 さいし(最初) 國一番の初め、極く初めのこトを云ふ、

さいしよ(在所) 國我(クニノミ)のゐる所 國許(クニノクサ) 田舎(イナ)のこト、
 さいしん(再進) 國更に進めるこト、再び進むこト、
 さいしん(再診) 國二度の診察(シヤク)。
 さいしん(再伸) 國手紙を書き終りて更に又た事柄(ワケ)を述べする時に、其の初(ハジメ)へ一字下(シタ)けて書く語にて、二度述(ツ)ぐる云ふ意、即ち尙々(ナラナラ)書(カ)すのこト、
 さいしん(再審) 國更(マシ)に取り調(シヤク)へる二度の調へ 國裁判所にて民事及び刑事に關(カ)する取調を爲して、判決の定(サ)りたる後に、更に新事實を發見(ハツク)するか、又は其の判決の誤(アヤマ)りなどを發見せし場合に、更(マシ)ためて裁判するを云ふ、
 さいしん(最新) 國最も新(アタラ)しきこトを云ふ、
 さいじん(才人) 國智惠のある人、文章などを巧(ウマ)みに作る人、
 さいしん(細辛) 國草の名にて、其の莖(シマ)は上にのびず、春の頃に、かも葵(アオイ)に似たる葉を生じ、根元(ネノヘ)に紫黑色の三瓣(サンペタ)の花を咲かす、根は藥用となるもの、

さいじん(祭神) 國神を祭るこト、又は祭つてある神のこト、
 さいじやう(罪狀) 國罪の容子、罪のありさま、
 さいしやう(妻妾) 國つまごめ、めかけ、
 さいしやう(罪障) 國罪業(ツミ)に同じ、
 さいしやう(災祥) 國わざわひ、
 さいじやう(宰相) 國内閣諸大臣、
 さいじやう(在城) 國城に居る、
 さいじやう(最上) 國すぐれてよき、飛切上等のこトを云ふ、
 さいしゆち(最終) 國んじまい、おわり、おしまひのこト、
 さいしゆく(在宿) 國家に居るこト、
 さいしゆつ(歳出) 國一ケ年間に支出する費用のこト、
 さいしゆつ(再出) 國再び出づ、二度表(ハツ)れるこトを云ふ、
 さいしゆん(才俊) 國才智のすぐれてあるこトを云ふ、
 さいしやう(濟勝) 國名所の土地を見物して歩くこトを云ふ、
 さいしよく(采色) 國食物不十分にして、衰(シヤ)へて、元氣なき顔色のこト 國單(ヒツ)に元氣なき顔色、
 さいしよく(才色) 國才智さきりようのこト

さいしよく(采食) 國野菜類(サイ)を常の食物とせるこト、
 さいしよく(栽植) 國果實(クワ)の生る木を植(ウ)へ、養(カ)ふこト、
 さいしよく(在職) 國職務につかへてるこト、官途(クワン)に在るこト、
 さいしき(彩色繪) 國彩色をほごしたる繪(エ)のこト、
 さいしき(彩摺) 國色刷(シヨ)となしたる印刷物、
 さいじゆち(再從兄) 國年上のまたいさこのこトを云ふ、
 さいじゆち(再從弟) 國年下のまたいさこのこトを云ふ、
 さいせい(濟清) 國借財(カマ)を綺麗に返済(カ)せしこトを云ふ、
 さいせい(再世) 國いき返る、よみ返る 國九死一生の場合を述(ツ)れたるこトを云ふ、
 さいせい(祭政) 國祭を行ふ事と政事(マツ)のこトを云ふ、
 さいせい(歳星) 國木星(セウ)の一名、
 さいせい(在世) 國此の世に在るこト 國生きながらえてる間(マヒ)、

さいせし(在世) 此の世にあるコト、生
さいせし(財政) 金銭の支出(出)及び收
入(入)を調(しら)むるコト、一口に云へば、
金(金)まわりのコト、法律の語にて、國
家(カ)團體(タ)會社(シャ)などが生存
(シ)維持(キ)發達(ハツ)の目的を全(マツ)
する爲めに、收入(ニユツ)を圖(カ)り、支出
(ニシツ)を辦(シ)する有様のコトを云ふ、
さいせり(最少) 圖最も少なき、
さいせり(最小) 圖極めて小なき、
さいせり(再進) 圖二度のよめ入りを爲す
コトを云ふ、
さいせき(裁籍) 圖書物のコト、
さいせき(在昔) 圖いにしへ、昔、
さいせき(罪跡) 圖罪を犯したる容子、
さいせつ(挫折) 圖をれくだけの、
さいせつ(細説) 圖細かく説き明す、委(ウ)
しく説明す、
さいせつ(歳殺) 圖陰陽家にていふ、八將
軍の一、此の神のあます方に向つて、嫁
(ヨ)を取り、又た藝術を習ひ始(ハジ)むな
と云ふ、
さいせん(裁剪) 圖細かく、たち切(キ)るコ
トを云ふ、
さいせん(賽銭) 圖神社佛閣に詣(マ)りて

奉納(ホウダク)する金銭、
さいせん(再選) 圖選(シ)び直(サ)すコト、
二度選舉(ニド)に當選(トウセン)するコト、又
は爲したるコト、
さいせん(最前) 圖さきほど、極(キョク)く前
(マヘ)の目の前のコト、
さいせん(最善) 圖此の上もなく善きコト
最も善きコト、
さいせいか(財政案) 圖財政の事務をたく
みに、執(シ)る人を云ふ、
さいせいがく(財政學) 圖財政に關する學
問のコト、
さいせつがん(碎屑岩) 圖其の質(シツ)のも
ろくして、われ易き石、
さいせんばこ(賽銭箱) 圖賽銭を受くる爲
めに設けたる箱、
さいせいねん(財政年度) 圖政府の會計
年度のコト、即ち四月の一日より翌年
三月三十一日まで、
さいそ(再祥) 圖天子が再び御位(ミタラシ)につ
かせ給ふコトを云ふ、
さいそ(才藻) 圖詩歌(シカ)を巧みに作る、
腦力(ノウリキ)のあるを云ふ、
さいそく(細則) 圖こまき規則、
さいそく(催促) 圖うながすコト、せつく
コトを云ふ、

さいぞく(在俗) 圖未だ僧侶にならぬコト
即ち僧侶(ソウリ)が俗人でありたる時のコ
トを云ふ、
さいた(最多) 圖多きコト、
さいたい(妻帯) 圖女房を持つ、
さいたい(菜羹) 圖飯(イ)や、おかずを載
(カ)せる羹(シユ)のコト、
さいたい(菜代) 圖飯(イ)の菜(サイ)を買ふべ
き代金のコト、
さいたい(最大) 圖すぐれて大なるコト、
さいたい(細大) 圖細(コ)かきと大きいと
區別(カク)なく、残らず、
さいたく(在宅) 圖我が家に在るコト、家
(カ)にあるコト、
さいたく(採擇) 圖數(カズ)のある物の中より、
えりぬくコトを云ふ、
さいたん(歳旦) 圖歳首に同じ、
さいたん(柴炭) 圖柴と炭、
さいたん(歳端) 圖年の始め、新年、
さいたん(裁斷) 圖きつぱりさ、たち切る
コト、轉じて是非善惡の區別(カク)を明
かにするコト、
さいたん(祭壇) 圖祭(マツル)を行ふ壇、
さいたじは(齋田) 圖阿波の齋田地方よ
り、製出する上等の鹽(シホ)。

さいせ

さいせ

さいせ

七五〇

さいち(采地) 圖領分(リョウブン)の土地、支配(シ)
(シ)せる土地のコト、
さいち(才智) 圖智恵、智識、
さいち(細緻) 圖極めて細かきコト。めん
みつなるコトを云ふ、
さいちよ(才女) 圖智恵のある女、智識の
すぐれたる女、
さいちや(祭場) 圖祭事(マツル)をいさなむ場所
のコトを云ふ、
さいちゆう(最中) 圖まつさかり、物事の
さかりのとき、
さいちゆう(細註) 圖委(ウ)しくなしたる
註解(ケツ)の細(コ)かき文字にて記した
る註解のコト、
さいちゆう(在住) 圖其處に住つてゐるコト
を云ふ、
さいちゆう(在中) 圖其の中に入つてある
コト、内にあるコト、
さいちち(木椎) 圖木にて作(ツク)られたる
小(コ)さき槌(ツチ)のコト、
さいてい(裁定) 圖曲直(マコト)をさばき定むるコ
ト、裁決(サイケツ)のコト、
さいてい(再訂) 圖更に改め訂(ツ)す、二度
の訂正(ツ)す、
さいてい(最低) 圖最も低(ヒ)きコト、最
下等(ゲイテイ)のコト、

さいてち(在朝) 圖朝廷に奉職(ホウシキ)してゐるコト
を云ふ、
さいてつ(絳経) 圖喪服のコト、
さいてん(祭典) 圖祭を行ふ儀式、
さいてりがき(西條柿) 圖伊豫西條地方よ
り産出する柿(カキ)の實(ミ)り、
さいてりまさ(西條正) 圖伊豫(イヨ)の西條
地方より産出する紙の名、
さいど(濟度) 圖佛敎の語にて、人間の苦
惱(ガウ)を助けて、成佛(ブツ)安樂(アノク)の
境(キョウ)へ赴(イダ)せるコトをいふ、轉じ
て人間に佛敎を傳(ツ)へて、善道(ゼンダウ)を
踏(フ)しむるコトをいふ、
さいど(妻孥) 圖妻子に同じ、家族の人々
のコトを云ふ、
さいど(再度) 圖二度、再(マタ)び、
さいとく(才徳) 圖才能と德行、
さいとり(才取) 圖商品(シヤウヒン)の賣買の世話
をなして、手数料を取るコト、又は其を
業(ゴト)させる人、
さいなち(採納) 圖とりをさめる、とりあ
げる、とりいれる、
さいなむ(苛責) 圖勵(ツツ)せめたる、いじめ
る、しかる、
さいなん(災難) 圖思ひもよらぬ不幸(フク)
さ、災(サイ)を受るコト、

さいなんよけ(災難除) 圖災難を避(カ)る
る方法のコト、
さいにち(齋日) 圖精進して、身體を清(ス)め、
謹慎(キンシ)を守(モ)る日、
さいにち(賽日) 圖一月及び七月の十六日
に、數入(カズイ)して、えんまへ詣(マ)りする
日のコト、
さいにふ(歳入) 圖一ケ年間の收入金のコ
トを云ふ、
さいにん(再任) 圖再び其の人を任用する
コト、同じ役に二度つかへるコトを云
ふ、
さいにん(罪人) 圖罪を犯したる人、まが
人のコト、
さいのち(財囊) 圖金銭を入れる囊(フクロ)、
即ち財布(サイフ)のコト、
さいのち(才能) 圖智識の活用(カクワ)の、す
ぐれたるコトを云ふ、
さいのめ(采目) 圖双方(ソウホウ)や賭博(カク)
などに用ゆる采(サイ)の面(オモ)に記しある一より
六までの印(イン)の、采(サイ)の如き小(コ)さき四角
形の物の稱、
さいのかはら(賽河原) 圖冥土に在りま云
ふ、想像上の河原のコト、
さいは(歳破) 圖陰陽家が祀る八將軍の一
歳に依りて其の環(ワタ)る方角(カタカ)は異

さいち

さいて

さいな

七五一

さいばり(再犯) さいばん(再版) さいはん(再販) さいはん(再販) さいはん(再販)...

さいばん(在番) さいばん(在番) さいばん(在番) さいばん(在番)...

さいばん(在番) さいばん(在番) さいばん(在番) さいばん(在番)...

さいひつ(才筆) さいひつ(才筆) さいひつ(才筆) さいひつ(才筆)...

さいばん(在番) さいばん(在番) さいばん(在番) さいばん(在番)...

さいばん(在番) さいばん(在番) さいばん(在番) さいばん(在番)...

さいもくし(材木石) 図岩石が自然に裂けて、柱(柱)の如き形をせる物を云ふ。
 さいもんよみ(祭文讀) 図俗語(俗)の一種にて、小唄(小唄)に面白き節をつけて、二味線に合してうたふを云ふ即ちさいもんがたり。
 さいや(在野) 図物事の出来る人が、官に仕(仕)ずして、民間(民間)に在るコトを云ふ。
 さいやく(採藥) 図藥なるべき、草根木皮を取るコトを云ふ。
 さいやく(災厄) 図さいなん、わざわひ、さいゆち(采邑) 図さいはしいして土地、りよらぶん地のコト。
 さいゆにゆう(再輸出) 図一旦輸出したる貨物が、其の國へ輸入されて来るコトを云ふ。
 さいゆしゆう(再輸出) 図一旦其の國へ輸入されたる貨物を、更らに外國へ輸出するコトを云ふ。
 さいより(採用) 図あげ用ゆ、とりたてるコトを云ふ。
 さいより(財用) 図財産と費用、さいより(裁抑) 図無理に止(止)ます、おさへつけてやめさせるコト。

さいよく(財慾) 図佛敎の語にて、五慾の一なる、財物を得んとする慾(慾)のコトを云ふ。
 さいらい(再來) 図再び来る、生れかへつて来るコト。
 さいらい(在來) 図ありふれて、ありきたる、ありきたり。
 さいらち(宰老) 図諸侯(諸侯)の家老。
 さいりち(細流) 図巾のせまき川。
 さいり(犀利) 図極めて堅(堅)くして、且つ鋭(鋭)きコトを云ふ。
 さいりち(在留) 図其の土地に、ごまつてるコト、外國に寄留してあるコトを云ふ。
 さいりふ(推拉) 図さりひしぐコト。
 さいりん(細鱗) 図こまかきうるこま云ふ意より轉じて小魚のこト。
 さいりやち(幸領) 図他へ運び行く荷物に附き添ふて、取締(取締)を爲す人のコトを云ふ。
 さいりやく(才略) 図智慧と計(計)の、さいりやく(才力) 図智慧の活力、即ちはたらきのコト。
 さいりやく(財力) 図財産に關する勢力(勢力)の、費用の支出にたゆるだけの金力(金力)のコト。

さいれい(祭禮) 図神を祭(祭)りて、禮を盡すコト、おまつり。
 さいれい(洋囃) 図刀劍(刀劍)を研ぎみがくコト、轉じて精神を研(研)ぎて才智を増(増)すコトを云ふ。
 さいれい(罪戾) 図つみ、さが、さいれち(最良) 図最もよろしき、すぐれて上等なるコト。
 さいれち(材料) 図物を作るべき種(種)、物事の生じたるごだひ。
 さいれつ(推裂) 図さけて細かく碎(碎)けるコトを云ふ。
 さいろち(菜籠) 図籠(籠)にて造(造)りたる炭取(炭取)の籠(籠)を云ふ。
 さいろち(豺狼) 図山犬(山犬)と、おほかみのコト、轉じて慾(慾)深く、義理(義理)人情を辨(辨)ぜぬ人。
 さいわか(幸者) 図舞(舞)の名、能樂(能樂)の種類(種類)なれども、音樂(音樂)を用ひず、謡(謡)ひながらに、扇子(扇子)を持ちて舞ふもの、幸若丸(幸若丸)が始めて舞ひしものなりと云ふ、此は音敷山(音敷山)の稚兒(稚兒)なりと云ふ。
 さいわりびき(再割引) 図一旦割引して、更に又た割引するコト、銀行にて一旦割引したる手形を、更に他へ譲りて

さいもくし

さいよく

さいれい

七五四

さいん(坐隱) 図支那の故事(故事)にて、碁(碁)を打つコトを云ふ。
 (saijin)
 さう(桑) 図木の名、くはのこト。
 さう(草) くさ 図物事を始むるコト、いやしきコト、くさの生へてる原(原)の文(文)章などの下がき、書體の一、草の體(體)心(心)を苦(苦)します、心配(心配)す。
 さう(呻) 図草の字に同じ、くさ。
 さう(争) 図あらそふ。口にて云ひ合ふ、諫(諫)める。意見する。
 さう(峰) 図山などの高くして峻(峻)しき狀(狀)を云ふ語。
 さう(琴) 図樂器の名、琴(琴)のこト、古は絃數(絃數)十二なりしも、後世に至りて十三絃となり。
 さう(諍) 図云ひあらそふ、吟味(吟味)するた、す、意見する諫(諫)む。
 さう(鐸) 図下に置きて、しゆもくにて叩(叩)きて鳴すかれ、即ち鉦(鉦)の鳴る音を云ふ語。
 さう(巢) 図す。すをする、轉じて人、鳥獸(鳥獸)その他、物の集まつてる處のこトを云ふ。
 さいん、さう 桑、艸、争、呻、琴、諍、巢

さう(勦) 図暴力を以て物を取るコト、殺(殺)すコト、物を興へてなぐさめ、いたはる、たち切るコト、速(速)やかに、疾(疾)し。
 さう(阜) 図阪(阪)のこト、馬の食物を入れる器、即ちかひば桶(桶)、椎(椎)の木(木)の實(實)、即ちどんぐり、自分の賤(賤)しき者を云ふ、くるし、くるき絹(絹)のこト。
 さう(倉) 図物を藏(藏)めて置く所、くら、米を入れて置くくら、あわたしき、あわたるこト。
 さう(瑠) 図妙(妙)なる音樂(音樂)の聲、總(總)て美(美)しき音(音)のこト。
 さう(滄) 図寒(寒)きコト、水の廣々として、青色(青色)を呈せる狀を云ふ、例は滄海(滄海)など。
 さう(瘡) 図ふき出もの、かさ、皮膚(皮膚)に受けたる傷(傷)のこト。
 さう(僮) 図いやしき身分の人、總ていやしきコトを云ふ。
 さう(蒼) 図青(青)きコト、物の年を経(年)たるこトを云ふ、樹木の茂(茂)ひ繁(繁)つてるこト。
 さう(鎗) 図鐵製の器具の名、なべ及び釜

さう(鐘) 図音のこト、吊(吊)して叩(叩)く鐘(鐘)の音のこト。
 さう(槍) 図武器の名、やりのこト。
 さう(樺) 図すくひて魚類を捕ふる綱(綱)のこトを云ふ、すくひあみ。
 さう(窠) 図す。ねぐら。
 さう(鷓) 図鳥の名、鷓(鷓)まなづのこトを云ふ。
 さう(霜) 図しものこト、寒(寒)き狀(狀)を云ひ表はすに用ゆる語。
 さう(蠶) 図やもめ、後家。
 さう(蚤) 図虫の名、のみのこト、ばやき、こト、速(速)かなるこト。
 さう(振) 図爪(爪)などにてかく、やかましきコト、騒(騒)がしきコトを云ふ。
 さう(騷) 図さばぐコト。さわがしきコト、おそろしきコト、物すこきコト、支那の屈平(屈平)と云ふ人の故事に出で、世事に關せずして、詩歌(詩歌)などを作り、樂(樂)しむコト、即ち風流(風流)のこト。
 さう(飄) 図白米をかしく音。
 さう(颯) 図風の騒(騒)がしく吹きすさむ聲のこトを云ふ。
 さう(曹) 図宮中に於けるお局(お局)の事務を取り扱ふ役所のこト、仲間(仲間)くみともがら、もろもろ。たくさん、獄屋

さう 勦、阜、倉、滄、瘡、童、蒼

さう 槍、窠、霜、蚤、曹 七五五

さうごう(創口)きづ口の口。
 さうごう(蒼昊)固あをそら。
 さうごう(相好)固かほつき、顔貌(容)即ち人相の口。
 さうごう(相尅)固陰陽學(陰陽)の語にて、五行(五)の運行(運)に依り、木は土に尅(く)ち、土は水に尅(く)つなごま云ふコトを云ふ。
 さうごう(相國)固太政大臣の別名。
 さうごう(藏穀)固倉庫に納(納)めてある穀物(穀)の口。
 さうごん(早婚)固年の若き中に、婚禮するコトを云ふ。
 さうごん(創傷)固傷(傷)あご。
 さうごん(草根)固草の根。
 さうごん(雜言)固いろいろの惡口(悪口)にくまれ口。
 さうごん(壯嚴)固いかめかしく、立派(立派)なるコトを云ふ。
 さうごし(操觚者)固新聞雜誌の記者又は著作家の口。
 さうざ(造作)固つくりなす、①しわざ②住宅(住宅)の内部の作り方。
 さうざ(草座)固草(草)にて編(編)みたる敷物の口。

さうさい(掃灑)固はきのけて、きれひにするコト、さうじの口。
 さうさい(壯歲)固さかんなる年齢(年齢)①轉じて成年時代の人。
 さうさい(贓罪)固不正品を賣買し又は隠匿(隠)する罪の口。
 さうさい(遺災)固わざわいにあふコト。災難(災)にかゝるコト。
 さうさい(葬祭)固葬式と祭禮。
 さうさう(早早)固いそぐさま、せくさまを云ひ表はす語。
 さうそち(葬送)固死者の靈(霊)を送り、はらむるコトを云ふ。
 さうさう(蒼蒼)固空(空)などの青々としたる状態を云ふ。
 さうさう(嘈嘈)固多くの人が口やかましく囂(囂)る聲の口。
 さうさう(蒼蒼)固あなをたしたる状態(状態)に云ふ語。
 さうざり(創造)固新(新)らしく物事(物事)を、いさなみつくるコト。
 さうざり(草草)固念のいらざる①ざりいそぐ②待遇(待遇)の粗末なりし③手紙の終りに書きていそがはしく、念(念)の入りざりしと云ふ意を表(表)はすに用ゆ、さうざり(錚錚)固よくきたえたる鐵(鐵)の口。

さうさ、さうし
 のうなるコトを云ふ語①轉じて多くの人々の中で、器量(器量)のすぐれてるコトを云ふ語。
 さうさう(草創)固事業(事業)をくわだて、はじめコトを云ふ。
 さうさう(想像)固思ひみる、即ちあてずありやうの口。
 さうさく(搜索)固さがしもさむ。
 さうさく(創作)固新(新)に作(作)りたる文章(文章)又は詩歌(詩歌)の口。
 さうさく(造作)固器具類(器具)を製作するコト②家の内部の附屬物を取り附けるコト。
 さうさつ(相殺)固法律の語にて、二人が互(互)に債權者(債權)であつて、而して又た債務者(債務)でありし場合に於て、双方が互(互)に讓(讓)り合ひて、其の債務(債務)も債權(債權)も、差引して消滅(消滅)するコト。
 さうさつ(叢雜)固雜草(雜草)のむらがつてゐるコト①細々(細々)しき物の、むらがりまざつてゐるコト。
 さうし(曹司)固昔皇居(昔皇居)の官吏、即ち宮内官吏、及び女官方の御用部屋(御用部屋)の口を云ふ②位の高き公卿(公卿)方の、部屋住(部屋住)の息子の稱。

さうし(創始)固はじめはじむる。
 さうし(雙子)固ふたご(二子)。
 さうし(叢誌)固種々の物語を集めて一冊(一冊)の書物(書物)なしたる物。
 さうし(叢至)固凡て物事の、むらがり集(集)まるコトを云ふ。
 さうし(相思)固お互ひに思ひ合ふコト①男女のあひほれの口。
 さうし(草紙)固物語などを記したる本②文章などの下がき③手習(手習)をする紙をさしたるもの。
 さうし(壯士)固精神のさかんにして活動(活動)力(力)の強(強)き若者③勇氣(勇氣)の優(優)れてる男④一定(一定)の職業(職業)なくして、人の依頼(依頼)に依り、談判(談判)を脅迫(脅迫)的行(行)ふ奴(奴)。
 さうし(壯志)固さかんなる氣風(氣風)、いさましき考(考)の口。
 さうし(槍子)固鐵砲の丸(丸)。
 さうし(壯時)固血氣盛(血氣盛)なる時代(時代)①青年時代の口。
 さうじ(相似)固互ひに相似合(合)つてゐるコト。
 さうじ(造次)固わづかの間(間)即ち瞬間(瞬間)。
 さうし(早秋)固秋の初め。

さうしき(葬式)固死者を葬(葬)むる儀式(儀式)の口を云ふ。
 さうしき(相識)固知り合ひ。
 さうしつ(喪失)固失(失)なひなくするコトを云ふ。
 さうしや(雜舍)固物置(物置)及び小屋(小屋)などのコトを云ふ。
 さうしや(壯者)固わかもの。
 さうしゆ(操守)固心に堅(堅)く守(守)りて變らざるコト、みさは、
 さうしゆ(喪主)固葬式を行ふ家の主人の口。
 さうしゆ(造酒)固酒を製造する。
 さうしゆ(雙手)固兩方の手。
 さうじゆ(叢樹)固むらがりて、生(生)へてゐる木の口。
 さうじゆ(草樹)固草(草)と樹(樹)。
 さうしよ(叢書)固種々の書物。
 さうしよ(草書)固書體の一つにて、漢字(漢字)の行書(行書)を、更にくづしたる書體(書體)の名。
 さうしよ(藏書)固所藏の書籍。
 さうしん(雙身)固二つの身體。
 さうしん(霜晨)固霜の降つた朝。
 さうしん(壯心)固さかんなる心、いさましき心。

さうしん(爭臣)固君主(君主)の非(非)を諫(諫)め争(争)ふ家來(家來)の口。
 さうしん(雙親)固二親(二親)の口。
 さうしん(喪心)固氣を失ふコト、即ちきぬけるコト。
 さうてん(掃珍)固はらひのけて、根絶(根絶)せしにするコトを云ふ。
 さうじん(驢人)固風雅(風雅)なコトを好(好)む人、即ち文人(文人)の口。
 さうじん(相人)固人相(人相)見。
 さうじん(桑椹)固桑の樹に生するいちご(いちご)の如き實(實)の稱。
 さうしきり(草紙錐)固錐の一種にて、書物帖簿(書物帖簿)などを綴(綴)るに用ゆもの、千枚(千枚)さうしの口。
 さうしまち(曹司町)固皇居内に、つばれ方の部屋(部屋)の口を云ふ。
 さうしやち(爭訟)固あらそひ事の是非(是非)を決(決)すべく爲めに訴(訴)するコト。
 さうしやち(瘡傷)固きづづけが、
 さうじやち(躁擾)固さわきたつる、かたれさわぐコト。
 さうしやち(藏相)固大藏大臣の別名。
 さうじゆち(操銃)固鐵砲を放(放)つコト

さうす、さうす
●鐵砲を取り扱ふコト、
さうじゆり(操縦)器上下左右に物を動
令ば軍艦(艦)を操縦すなど、
さうじゆく(早熟)器果物(果)などの早く
熱(熟)するコト●子供の知恵(知)の附の
早きコトを云ふ、
さうじゆつ(早出)器早や出、
さうじゆつ(相術)器人相や家相(家)など
を見る術(術)の器を云ふ、
さうじゆつ(槍術)器槍をつかふ武術の器
を云ふ、
さうじゆり(相乘)器数学の語にて二つ以
上の数を、互(互)ひに乘(乗)け合すコト
を云ふ、
さうじゆり(相稱)器双方さも、相似(比)
たるコトを云ふ、
さうじゆく(裝飾)器がさり装(装)ふ、即ち
飾(飾)を附けるコトを云ふ、
さうじゆく(草食)器野菜物のみを食ふ●
草(草)を食ふコト、
さうじゆく(草食動物)器草を食
用とする動物、即ち牛馬の類を云ふ、
さうす(相)器動人相(相)を見るコト、家
相を見るコトを云ふ、
さうす(請)器動又せうすとも讀む人をむ

さうす、さうす
かへ呼ぶ、扱きて厚くこりなしたなす、
さうす(藏)器動なほして置く●我の所持
物(物)即ち我が物(物)さし有(有)てる、
さうす(雜炊)器ダシの汁の中へ、米を
入れ、肉類(肉)野菜(菜)類を入れて煮
入(入)たるもの、
さうする(葱翠)器ふかみどり色、
さうする(蒼翠)器青き緑色(緑)の、
さうせい(叢生)器草などの、むらがり生
成(成)てるコトを云ふ、
さうせい(相生)器陰陽學の語にて、五行
(行)の運行に依り、木より火を生じ、火
より土を生じ、土より金を生じ、金
より水を生じ、水より木を生ずるコト
を云ふ、
さうせい(蒼生)器人民の器、
さうせい(創生)器世界(界)の出来(来)初
め、天地の開(開)び、
さうせい(早世)器世を早く去るを云ふ意
味にて、若死(死)の器、
さうせい(草聖)器書體の中の、草書(書)の
を殊に巧(巧)みに書く人の稱、
さうせい(創製)器初めて製造(造)し出す
コトを云ふ、
さうせい(相製)器相互(互)に製(製)し合
ふコトを云ふ、

さうす、さうす
さうせい(早成)器手早く出来る●物事の
早く成就(成)するコト、
さうせい(霜夕)器霜(霜)の降りたる夜の
コト、
さうせい(創設)器初めて物事を考へ設
計(計)くるコト、
さうせい(叢説)器種々(種)の説(説)を集
めてたるコト、
さうせい(早雪)器早く降り雪(雪)は、
さうせい(造設)器つくり設(設)くるコト、
即ちいさなみつくるコト、
さうせい(草場)器草原に現はれる賊(賊)云
ふ意にて、おひばき、
さうせい(霜雪)器しもゆき、
さうせい(壯絶)器きわめていかめしき●
すぐれていさましきコト、
さうせん(蒼蒼)器青々としてる苔(苔)の
コトを云ふ、
さうせん(鏗然)器鐘(鐘)の鳴り響く音の
状を云ふ●水の流る、音の状を云ひ表
はす語、
さうせん(雙線)器二つのすじ、
さうせん(造船)器舟をつくる、
さうせん(愴然)器いたみかなしむ状(状)を
云ひ表はす語、
さうせん(蒼然)器色のあなをなしたるさ

まに云ふ語、
さうせん(騒然)器さわがしきさまに云ふ
語、
さうせん(造船學)器軍艦其の他の船
を造る理論を教ふる學問、
さうせんじゆつ(造船術)器造船に關(關)する
技術(術)の器、
さうそく(裝束)器身仕度をする、よそふ
コトを云ふ、
さうそく(草賊)器こそ泥棒(棒)●百
姓一揆(揆)の器、
さうそく(相續)器受けつぐコト●先代の
後を引きつぎ受(受)ふる、
さうそつ(走卒)器身分のいやしきもの、
さうそつ(忽卒)器にわか、だしぬけ、あ
わて、うるたへるコト、
さうそつ(草卒)器あわたしきコト、い
そがわしきコト、
さうぞく(相續人)器其の家の後目
(目)をつぐ資格(格)ある人、
さうたい(蒼苔)器あなをなしての苔(苔)の
コトを云ふ、
さうたい(雙胎)器ふたこのコト、
さうたい(相對)器互に向ひ合つて、
相對(對)してある、
さうたい(壯大)器美事(事)に大なるコト

さうす、さうす
優(優)れて立派なるコト、
さうた(草堂)器わらぶきの家●我が家
の器、へりくだつて云ふ語即ち拙
宅(宅)の器、
さうた(雙刀)器二本の刀(刀)の器、
さうた(相當)器あてはまる●相同じき
●能く似たる、其れだけ定め置きた
るコトを云ふ、
さうた(爽達)器はきはきとしてゐて、
活潑(活)なる氣質(質)の器、
さうた(早達)器早く届けるコト●早く
届(届)くコト、
さうた(走脱)器走り逃げる、
さうた(爭奪)器あらそひうばふ、喧嘩
(嘩)して取るコト、
さうたん(早旦)器朝の早きコト、
さうたん(壯男)器元氣のさかんなる男、
血氣(血)盛りの男子、
さうたん(叢談)器種々(種)の物語をあつ
めたるもの、
さうたん(雜談)器さつだんに同じ、種々
雜多(多)の器の器、
さうたん(爭端)器いさかひのおこり、
さうたん(騒壇)器詩人や歌まみのなかま
の器を云ふ語、

さうす、さうす
さうた(相當官)器其の執(執)る
べき職務は、異なるも、其の官等(等)の
相等しき役人の器、假令(假)は大佐相
等官(官)大尉相等官、
さうち(裝置)器仕掛(掛)の器、出来上りたる
物の有様(様)の器、
さうち(藏置)器品物を藏(藏)になほし置
くコト、
さうち(雜地)器家屋(屋)に附屬(屬)して
ある土地の器を云ふ、
さうち(掃除)器物を清潔(潔)にする●芥
(芥)を取り去りて美しくす、
さうち(雙兒)器二子、
さうち(藏蓋)器なほしたくわえて置く
コトを云ふ、
さうち(掃除)器はらひの器、
さうち(象筭)器象牙(牙)にて作りたる
算(算)の器、
さうち(曹長)器陸軍(軍)の下士官中
の最上官(官)の器、
さうち(草圖板)器測量(量)の器に用ゆ
る器具の一種にて、見取圖(圖)を引く
時の用に供(供)するもの、即ち薄(薄)き
板の四週(週)に、紐を付け、其を頭(頭)に
に掛(掛)け、胸の邊に、其板を支(支)ふ
るやうになしある物、

さうてい(装釘)

さうてい(装釘) 図がざりに釘(サ)を打つ
コト 書物などをさして表紙(ハ)を付
さうてい(漕艇) 図漕(カ)ぎ行く小舟
さうてい(創定) 図最初(サ)の定
さうてい(壯丁) 図わかもの
さうてい(早朝) 図朝(ア)つばら
さうてい(搜別) 図かきわけて物をさぐる
コトを云ふ
さうてい(早天) 図夜の引き明けあさつば
らのコトを云ふ
さうてい(装墳) 図或る手段(カ)を施(サ)
して物をつめるコト 假令ば銃(カ)に
彈丸を装墳(サ)す
さうてい(掃珍) 図賊徒や悪者どもを討
(サ)て根たやしにするコト
さうてい(蒼天) 図あを空(カ)
さうてい(相傳) 図受けつたふるコト 假
令ば一家相傳(サ)す
さうてい(桑田) 図桑をうへつけてある畑
(カ)のコト くらわばだけ
さうてい(壯圖) 図いさましくわだて
さうてい(搦頭) 図頭(カ)をかくコト 一
んさしのコト
さうてい(曹洞) 図曹洞宗(カ)の略 禪
宗の一派

さうてい(叢香)

さうてい(叢香) 図かさなり合ふ
さうてい(搜討) さがしうつ
さうてい(騷動) 図あらそひさわぐコト
動亂に同じ
さうてい(雙頭) 図兩頭のコト 即ち頭
(カ)が二つ並(ツ)びて付いてる
さうてい(蒼頭) 図下男 めしつかひの異
稱(カ)
さうてい(争鬪) 図争(カ)そひたかふコ
ト けんくわするコト
さうてい(掃蕩) 図拂(カ)ひける 討(カ)
て追ひ散(サ)すコトを云ふ
さうてい(藏匿) 図かくし置くコト
さうてい(瘡毒) 図ひえかさ
さうてい(電突) 図かまごに附いてある煙
突(カ)のコトを云ふ
さうてい(遭難) 図災難(カ)に出遇(カ)ふ
コトを云ふ
さうてい(雜煮) 図食品の一種にてすまし汁
又は味噌汁(カ)の中へ 餅を入れたる
ものを云ふ
さうてい(挿入) 図物を其の中へ挿し入れ
る 又ははめこむコト
さうてい(雜人) 図身分のひくき者 下賤
(カ)のもの コトを云ふ
さうてい(壯年) 図さかんなる年頃(カ)

さうてい(壯丁)

さうてい(壯丁) 図其の時々の物の直段(カ)
のコトを云ふ
さうてい(龍馬) 図虫の名 いさんど
さうてい(走馬) 図はしり行く馬
さうてい(早梅) 図早咲(カ)の梅
さうてい(躁妄) 図からばづみにして精神
の確實ならざるコト
さうてい(雙方) 図兩方に同じ 即ち彼(カ)
も此(カ)ものコト
さうてい(草茅) 図草や ちがやの生へて
る處を云ふ 意よりして民間(カ)のコト
を云ふ語
さうてい(喪亡) 図なくなつてしまふコト
ほろびてしまふコト
さうてい(相親) 図かほかたち 即ち人相
(カ)のコト
さうてい(艘舶) 図舟のコト
さうてい(蒼白) 図あを白き色のコトを云
ふ例ば顔面蒼白(カ)
さうてい(糟粕) 図酒のかす
さうてい(相場師) 図相場する人
さうてい(創版) 図受けたる創(カ)の遺(カ)
りたるあまのかたのコト

さうてい(蔵版)

さうてい(蔵版) 図倉庫(カ)に納めてある
版木(カ) 轉じて自家の出版にかゝる
書籍のコト
さうてい(早晚) 図をそいか ばやいか
をそければやかれ
さうてい(雙盤) 図寺院などにて打ち鳴
(カ)すものにて鐵板(カ)の如きもの之
を打(カ)き鳴らす
さうてい(雙峰) 図肉の鞍(カ)の二つ
脊にある駱駝(カ)のコト
さうてい(相場附) 図日用品の其の日の
相場を記(カ)したるもの
さうてい(桑皮) 図くはのかは
さうてい(愴悲) 図かなしみいたむ
さうてい(象皮) 図象の皮のコト
さうてい(雙美) 図甲の物も 乙の物も共に
勝(カ)れてよろしきコトを云ふ 二人
の美女を云ふ意味(カ)
さうてい(走筆) 図早や書きするコト 走
り書きするコト
さうてい(雙鬢) 図左右の髪
さうてい(蒼長) 図あをそらの事を云ふ
即ち晴れたる天空(カ)
さうてい(債父) 図田舎の人 田舎(カ)の老
翁(カ)のコトを云ふ

さうてい(走夫)

さうてい(走夫) 図走り行く男 轉じて使
(カ)を爲す男 即ち脚夫(カ)
さうてい(孀婦) 図やもめ 後家(カ)
さうてい(孀姨) 図年老の後家(カ)
さうてい(壯夫) 図血氣盛(カ)なる男
さうてい(壯武) 図殊に勇氣(カ)の強(カ)き
コトを云ふ
さうてい(霜楓) 図樹木の葉が霜(カ)を帯
(カ)て赤(カ)くなりしを云ふ
さうてい(喪服) 図葬式の時に用ゆる衣服
(カ) 即ち喪服(カ)
さうてい(雜物) 図種々(カ)さまじりたる
物のコトを云ふ
さうてい(贖物) 図ぬかし品物
さうてい(造物主) 図天地間に在る萬
物を造り爲す神
さうてい(想夫戀) 図雅樂の曲(カ)の名
さうてい(造物者) 図造物主(カ)
さうてい(造兵) 図武器(カ) 即ち兵器を製
作(カ)するコト
さうてい(造幣) 図貨幣を製造するコトを
云ふ 即ち金銀貨幣并びに銅貨を造る
コト
さうてい(雙鬘) 図二人一所に鬘(カ)れる
コト 即ち情死(カ)
さうてい(雜兵) 図兵士雜卒(カ)

さうてい(造兵局)

さうてい(造兵局) 図陸海軍の武器
(カ)を造るところ
さうてい(造幣局) 図金銀銅貨を造
るところ
さうてい(蒼茫) 図見渡す限りひろくさ
してささまを云ふ
さうてい(雙峰) 図二つ並(カ)んでる山の
峰(カ) 即ち二子山(カ)
さうてい(忽忙) 図せわしきコト いそが
しきコト
さうてい(想望) 図おもひ ねがふ
さうてい(雙眸) 図左右の眼の瞳(カ)
さうてい(草本) 図文章の下がき
さうてい(藏本) 図藏書(カ)に同じ其の條
を見られよ
さうてい(桑麻) 図くわさ あさ
さうてい(相馬) 図馬の相(カ)を見て 其の良
否(カ)を見分るコト 紋所(カ)の名
杭(カ)に馬を繫(カ)きたる形(カ)を描
(カ)きしもの 相馬焼(カ)の略 福島
縣相馬より産す
さうてい(葬埋) 図死者の靈(カ)を送り死
體(カ)を埋(カ)むるコト
さうてい(草昧) 図世の中の闇(カ)け進(カ)
まぬコト 即ちあひまいのコト
さうてい(走馬燈) 図まわりさうらのコ

さうや、あつり

さうや、あつり(相馬焼)陶器の一種にて、福島縣宇多郡の中村、即ち舊相馬藩地より産する物にて、外觀(かん)は粗雑(ろさつ)なれども、一種の雅致(みやう)を呈し、多くは奔馬(ほんば)の模様(よう)を染め出せるもの。

さうや、あつり(早眠)陶夜早く眠(ね)する、さうや、あつり(滄溟)陶あなうみ、大海、さうや、あつり(勳滅)陶賊徒を、みなころしにするコトを云ふ、

さうや、あつり(草綿)陶木綿綿(わた)を、即ちきわたの一名、

さうや、あつり(草芥)陶草原(くさげ)を云ふコト、轉じて民間(かみ)の義、草芥の臣など、

さうや、あつり(霜毛)陶白髮(しも)を、白髮頭(しらげ)のトを云ふ、

さうや、あつり(草木)陶草木木、

さうや、あつり(桑門)陶僧の別名、

さうや、あつり(蚕衣)陶あささ、よる、

さうや、あつり(草野)陶草(くさ)の生えしげつてる野原のト、

さうや、あつり(瘡瘍)陶きづ(かさ)腫物(しゅぶつ)のトを云ふ、

さうや、あつり(裝藥)陶彈丸を發射せしむべく爲めに、銃砲(じゆうぽう)に填(こ)る藥、即ち火

さうや、あつり

藥(くすり)のト、

さうや、あつり(雜役)陶さつ役のト、賤(せん)しき仕事(しごと)をするコト、

さうや、あつり(桑榆)陶夕陽(くわん)のト、即ち夕暮(ゆぐ)の太陽の影(かげ)を、轉じて老人(らうじん)なりしコトを云ふ、

さうや、あつり(倉庚)陶くら(蔵)のト、

さうや、あつり(壯勇)陶元氣(げんき)の盛(さか)なる若者(わかもの)、單(ひと)に若者、青年、さうや、あつり(雜用)種々(しゆしゆ)、さ入り交(まじ)つたる用事(ようじ)を云ふ、

さうや、あつり(雙翼)陶左右のつばさ、

さうや、あつり(草萊)陶草の生じてある原(はら)を、荒(わづ)たる土地のト、

さうや、あつり(騷亂)陶みだれさわぐコト騒動(さうどう)のト、

さうや、あつり(喪亂)陶亂(らん)れほるびてしまふコト、

さうや、あつり(草履)陶藁(わら)にて編(あ)みたるはき物のトを云ふ、

さうや、あつり(創立)陶はじめて設け立つるコト、初めて營(えい)み起すコト、即ち會社の創立(けいしや)を云ふ、

さうや、あつり(造立)陶つくり立つる、家など(たけ)を建(た)るコトを云ふ、

さうや、あつり(桑林)陶桑の樹の生(う)えぬ(う)えぬ

さうや、あつり

さうや、あつり(造林)陶樹(じゆ)を植(う)えて、林を作るコト、樹木(じゆ)を養成(やうせい)するコト、

さうや、あつり(倉廩)陶米くら、

さうや、あつり(雙輪)陶二つの輪、即ち車の兩輪(りやうりん)のト、

さうや、あつり(草履下駄)陶脚(あし)の下等なる物にて、普通の脚(あし)下駄(げだ)より、稍(しやう)や低く、表は藁(わら)にて編(あ)みたるものを用ゆ、

さうや、あつり(草履取)陶主人の穿(は)く草履(わらじ)を持って、主人の後(あと)に従(したが)ふて行く人、

さうや、あつり(草履持)陶草履取(わらじとり)と同じ、

さうや、あつり(蒼嶺)陶樹木の盛(さか)んに生(う)ひ茂(さか)れる山(やま)のみのト、

さうや、あつり(壯麗)陶きわめて美(うつく)しく、勝(か)れてうるはしきコト、

さうや、あつり(葬禮)陶ほうむる禮式(らいしき)、

さうや、あつり(壯烈)陶其の心根(こころ)のいさましく、其の行(な)ひの正(ただ)しく、且つ忠節(ちゆうせつ)なるコト、

さうや、あつり(操練)陶兵士に戰爭(せんそう)の稽古(けいこ)をなさしむるコト、練兵、

さうや、あつり(走路)陶走り行く路(みち)即ち逃(に)げ

七六六

路(みち)、

さうや、あつり(草廬)陶草の家(くさのや)轉じて世(よ)でて人などの住(す)へる家の稱、

さうや、あつり(滄浪)陶酒(さけ)に酔(よ)ふて足許(あしあと)のヨロつくコト、

さうや、あつり(滄浪)陶あををさしたる海の波(なみ)、

さうや、あつり(藏六)陶頭(かぶ)と尾(お)と、兩手(りやうて)をかくす云ふ意より、轉じて龜(かめ)のトを云ふ、

さうや、あつり(叢錄)陶いろいろの物事をあつめたる記録(きこく)のト、

さうや、あつり(爭論)陶いさかひ、云ひ合(あ)ひ、

(くさかえり)

さうや、あつり(牙返)陶うつくしきコト。はつきりせるコト。曇(くも)りなきコト。明(あ)りかなるコト、

さうや、あつり(牙返)陶自動甚だしくさえる。能くさえてある、

さうや、あつり(牙返)陶うつくしきさえてあり。能くさえてあり、

さうや、あつり(牙返)陶才智(たうち)の殊(こと)にすぐれてあるかの如(ごと)き顔付(かお)なり、

さうや、あつり(小枝)陶樹木(じゆ)や草(くさ)などの小(こ)さき枝(えだ)

(くさ)のトを云ふ、

さうや、あつり(小枝草)陶小(こ)さき枝(えだ)の澤山(さわ)にある草(くさ)を云ふ意にて竹(たけ)のトを云ふ、竹(たけ)の別名(な)なり、

さうや、あつり(茶園)陶茶(ちや)の植(う)えてある畑(はたけ)のトを云ふ、

さうや、あつり(菜園)陶野菜(やさい)物の植(う)えてある畑(はたけ)のトを云ふ、

(くさかお)

さうや、あつり(竿)陶竹(たけ)の葉(は)を、小(こ)枝(えだ)を去(い)りたるもの、秤(はかり)の量目(りやうもく)のきざんである棒(ぼう)田畑(でんはたけ)の段別(だんべつ)を測(はか)るに用ゆる語(ことば)舟(ふね)を漕(こ)ぐ、長(なが)き棒(ぼう)長持(ながもち)や算筒(そろり)などを荷(か)ぶ棒(ぼう)のト、

さうや、あつり(棹)陶舟(ふね)を漕(こ)ぐ長(なが)き棒、

さうや、あつり(棹)陶尾(お)長持(ながもち)や算筒(そろり)などを數(かず)ふるに用ゆる語、

さうや、あつり(竿入)陶間尺(かんぶし)にて土地(ち)の坪數(へいすう)を測(はか)るコト、

さうや、あつり(竿金)陶又(また)た棒(ぼう)金(かね)も書(か)く金銀(きんぎん)を溶(と)かして、竹(たけ)の筒(つつ)に流(なが)し込み、棒(ぼう)の如(ごと)きもの、必(かならず)用(もち)の時に切(き)りて用(もち)ゆ、

さうや、あつり(棹)陶動(うご)く棹(さし)を水中(すいじゆう)に立て、舟(ふね)を進(すす)ましむる、

さうや、あつり(小男鹿)陶をじか(牡鹿)のトを云ふ、

さうや、あつり(棹竹)陶又(また)た竿(ぼう)竹(たけ)も書(か)く、棹(さし)なす、長(なが)き丈夫(ぢゆうぶ)な竹(たけ)枝(えだ)を拂(は)いて、棹(さし)せし竹、

さうや、あつり(竿立)陶馬(うま)が前足(まへあし)を地(ち)より離(はな)して、後足(あし)のみにて立つコトを云ふ、

さうや、あつり(早乙女)陶田植(でんぢ)をする女のト、小娘(こむすめ)少女、

さうや、あつり(竿登)陶立てたる竿(ぼう)にのぼる曲藝(まが)のト、

さうや、あつり(棹秤)陶棹(さし)に量目(りやうもく)を記(し)してある、普通(ふつう)の秤(はかり)のト、

さうや、あつり(狭織)陶巾(きん)を、せまく織(お)りたる粗末(こまつ)な布(ぬい)のト、

(くさか)

さうや、あつり(嵯峨)陶山(やま)の高(たか)くして、且つ峻(たけ)な(たけ)に云(い)ふ語、

さうや、あつり(榎)陶木(き)の枝(えだ)の、互(たが)ひに交(まじ)り合(あ)つてる状(じやう)を云ふ、

さうや、あつり(逆)陶さかさま、あ(あ)べ、さ(さ)やく凡(たふ)ふ

七六七

さか、さかか、坂、祥、酒、榮、頤

て順序(シヨウ)の違ふコト、
 さか(坂) 一方高く、一方の低(ヒ)き道路
 のコトを云ふ、
 さか(祥) 図芽出度(シヨウ)しるしき云ふコト
 を云ふ、
 さか(酒) 図さけの詠り、
 さか(祥) 図めてたきコト、しるし、
 さか(座下) 図其の人のおひざ元に呈する
 こ云ふ意を表はす爲めに、手紙の宛名
 (シヨウ)の下に記す語、
 さか(月代) 図さかやきの詠、
 さか(鎖港) 図港(シヨウ)をさざして、外國
 の船(シヨウ)を入れぬコト、外國と交際(シヨウ)
 して貿易(シヨウ)を爲さぬコト、
 さか(麝香) 図香氣高き香料の一種、じ
 やかうのこト、
 さか(榮) 図運勢(シヨウ)の盛なる、勢力の
 盛んなる、商賣の繁昌(シヨウ)する、目的
 の達するコトを云ふ、
 さか(おとし) 逆落(シヨウ) 図さかさまに落すコト
 ●山の崖(シヨウ)の切りたる如く爲つて
 處を云ふ、
 さか(がめ) 酒壺(シヨウ) 図酒を入れて置く瓶(シヨウ)
 のコト、土製(シヨウ)の酒だる、
 さか(がり) 酒(シヨウ)に酔(シヨウ)て怒り狂(シヨウ)ふコ
 ト即ち酒亂(シヨウ)。

さかき、さかさ、榊、倒

さか(榊) 図木の名、山茶花(シヨウ)の類に
 て、常緑木(シヨウ)なり、葉は卵圓形(シヨウ)
 にして大ならず、色は綠色にて光澤(シヨウ)
 あり、又た葉の周圍(シヨウ)に、細かき齒
 (シヨウ)のある物もあり、其の齒の無き葉の
 枝は、之れを専ら、神に供(シヨウ)す、常緑
 木(シヨウ)の總稱、
 さか(倒木) 図木材(シヨウ)の木目(シヨウ)をさ
 かきにして用ゆるコト、
 さか(さげん) 酒機嫌(シヨウ) 図酒に酔(シヨウ)て心地
 のよきコト、
 さか(く) 座客(シヨウ) 図其席(シヨウ)にある人、
 さか(ぐら) 酒藏(シヨウ) 図酒を樽に入れて、貯(シヨウ)
 はえ置く蔵(シヨウ)のこト、
 さか(くさし) 酒臭(シヨウ) 図酒のにおひがしてあ
 り、
 さか(け) 酒氣(シヨウ) 図酒の氣、酒を飲んで其の
 香氣(シヨウ)の、呼吸(シヨウ)に交(シヨウ)つて出る
 コトを云ふ、
 さか(と) 逆事(シヨウ) 図さかもしり、
 さか(と) 酒蔵(シヨウ) 図酒樽をつつむこト、
 さか(さ) 倒(シヨウ) 図又た逆の字を用ゆ、物事の
 轉倒(シヨウ)せるコト、
 さか(さま) 倒(シヨウ) 図ひつくりかへる、あへ、
 べになつてゐるコト、
 さか(さま) 逆事(シヨウ) 図さか事、さやく

さか、さかた、嶮、賢 七六八

事のコトを云ふ、
 さか(さま) 逆語(シヨウ) 図其の主義(シヨウ)、云ふ
 こトが、反對せるを云ふ、
 さか(し) 嶮(シヨウ) 図けはしき、けんそ、
 さか(し) 賢(シヨウ) 図かこしすぐれてあり、智
 恵(シヨウ)あり、
 さか(し) 搜(シヨウ) 図書(シヨウ)の中に、或る書を
 かくして書きしもの、即ちえさかしの
 コト、
 さか(し) 酒(シヨウ) 図魚類を煮く時に味(シヨウ)
 をつけべく入れる酒、
 さか(し) 座頭(シヨウ) 図芝居其他歌舞音楽の一
 座中の頭(シヨウ)のこト、
 さか(し) 物(シヨウ) 図さがしたづねつあ
 る人又は其の物品、
 さか(す) 搜(シヨウ) 図たづねる、せんまくする
 たづねまはる、しらべる、
 さか(し) 酒代(シヨウ) 図酒のあたひ、酒をかふ
 代金のこト、
 さか(ち) 逆立(シヨウ) 図凡てさかたつコトを云
 ふ、遊戯(シヨウ)の一種、兩手(シヨウ)を肩(シヨウ)を
 下につけて兩足を揃(シヨウ)えて上へさし上る
 コトを云ふ、
 さか(た) 逆立(シヨウ) 図さかさまに立つ、毛
 などのするごとくたつ、
 さか(た) 酒樽(シヨウ) 図酒を入れる樽、

さか(た) 酒刀(シヨウ) 図酒を造るコトに従
 事する人、
 さか(づ) 盆(シヨウ) 図陶器(シヨウ)木(シヨウ)又は金銀
 にて作りたる、茶碗の小さき形を爲せ
 る物、酒を盛りて飲む具、
 さか(づ) 酒壺(シヨウ) 図酒を入れて置く陶器製
 のつば、
 さか(づ) 逆類(シヨウ) 図鏡(シヨウ)のほうあてのこ
 トを云ふ、
 さか(づ) 盆(シヨウ) 図集(シヨウ)まつて酒を
 飲むコトを云ふ、
 さか(づ) 盆(シヨウ) 図盆をのせる臺、多
 く陶器にて製せらる、
 さか(て) 逆手(シヨウ) 図引き下(シヨウ)る時又は逆(シヨウ)
 る時などに手を打つコト、
 さか(て) 酒代(シヨウ) 図酒の代價(シヨウ)、
 さか(て) 逆手(シヨウ) 図逆(シヨウ)に持つコト、逆
 取るコト、
 さか(て) 逆手(シヨウ) 図相撲(シヨウ)四十八手の一
 相手の手を逆に取り、鉢(シヨウ)をせをふて投
 りなげるコト、
 さか(ど) 酒殿(シヨウ) 図酒を造る所、
 さか(な) 肴(シヨウ) 図酒を飲む相手(シヨウ)となるべ
 き食品の總稱、魚類野菜(シヨウ)等を煮
 (シヨウ)き炙(シヨウ)りして、味(シヨウ)を付けたるも
 のを云ふ、

さか(な) 逆浪(シヨウ) 図さかまく浪、
 さか(な) 魚屋(シヨウ) 図魚類(シヨウ)を賣る、人又
 は其の家のこト、
 さか(な) 魚市(シヨウ) 図魚を賣る市場、
 さか(な) 魚賣(シヨウ) 図魚を賣る業をせ
 るコト、又は其の人、
 さか(な) 魚河岸(シヨウ) 図魚の市の立つ、は
 ま邊のこトを云ふ、
 さか(な) 魚問屋(シヨウ) 図魚の間屋、
 さか(な) 逆捨(シヨウ) 図さやくにれちるコト、
 さか(な) 責め立てられたのを、反對に其
 の人の弱點(シヨウ)を捕えて、責めるコト
 を云ふ、
 さか(の) 逆(シヨウ) 図自動水の上流の方へ進み
 行く、逆(シヨウ)に進む、過ぎ去つた事か
 らに及ぼす、
 さか(は) 阪及(シヨウ) 図薙刀(シヨウ)や、太刀(シヨウ)の及
 の反(シヨウ)たる部分の稱、
 さか(は) 逆羽(シヨウ) 図鳥類の羽(シヨウ)のよれて、逆
 (シヨウ)になりたるを云ふ、
 さか(は) 逆刺(シヨウ) 図刺(シヨウ)を殺して、其
 の皮を尻(シヨウ)の方よりはがすコトを云
 ふ語、
 さか(は) 酒旗(シヨウ) 図酒店の看板(シヨウ)として
 出して置く旗(シヨウ)、徳川時代に用ひら
 れしと云ふ、薬(シヨウ)を球(シヨウ)の如くに丸

(シヨウ)めて、掛(シヨウ)て置く物、此れを出せば
 酒を賣(シヨウ)てる云ふしるしになる、
 さか(は) 倒柱(シヨウ) 図木の木目(シヨウ)の、さ
 かになつてゐる柱のこト、
 さか(は) 酒林(シヨウ) 図酒旗(シヨウ)と同じ、
 さか(は) 逆(シヨウ) 図昔時の最も慘酷な
 る處刑の一、鉢(シヨウ)をさかさまにして、はり
 つけにするコト、
 さか(は) 境(シヨウ) 図物と物との、互ひに接合せ
 る其の場處、土地などの區域(シヨウ)の定
 まる場處、物と物との互ひに、分れ離
 れんとする時、又は處、假令ば生死の境
 にあふなど、
 さか(は) 境目(シヨウ) 図さかひのこト、
 さか(は) 逆(シヨウ) 図云ふ事を聞かぬ、從(シヨウ)が
 はぬ、そむく、てむかふ、もどる、
 さか(は) 酒樽(シヨウ) 図酒を樽(シヨウ)に用ゆ
 る、長方形の箱、底(シヨウ)の兩側(シヨウ)に孔
 (シヨウ)のあるもの、
 さか(は) 酒袋(シヨウ) 図酒のもろみを入れて
 しぼる袋を云ふ、
 さか(は) 酒浸(シヨウ) 図日々酒を飲みつづけ
 てるコト、
 さか(は) 逆卷(シヨウ) 図自動波(シヨウ)が、水の流れの
 反對(シヨウ)の方に向(シヨウ)つて、打つ、ばげ
 しく打つ波、

さかま、さかや
 さかまた(逆股) 又た逆又とも書く、我が國の西南海に、多く棲める一種の魚にて、大さ一丈以上二丈ほどあり、形はイルカに似て、脊(せ)の鱗(うろこ)は二つに裂(ひ)く、因て此名あり、齒するごとく肉は味(あじ)よろしかられど、あぶら甚だ濃(こ)し、性質はあらくして時に人を食ふつげ、目をつくに依り害あり、
 さかまくなみ(逆巻浪) 海水の底(そこ)より、まき上げらるる如き、形を爲して打つ浪(なみ)のコトを云ふ、
 さかみせ(酒店) 酒を賣る家、
 さかみち(坂道) 坂になつて路、斜(かた)になつて路、
 さかむけ(逆剃) 手足の指(ゆび)の甲(かぶ)の皮(かわ)、さかさにさけるコトを云ふ、又はそのもの、稱、
 さかもぎ(逆茂木) 軍隊語にて、鹿(か)の類にて、鹿の角(つる)の如き形を爲せる、いばらの類の枝を集め作りたる垣根(かき)の如きもの、敵の攻撃を防ぐに用ゆ、
 さかもり(酒盛) 酒人々寄集(つ)まりて、酒を飲んで樂(たの)むコト、
 さかや(酒屋) 酒類を賣る家、

さかや、さかり 榮
 さかや(月代) 昔時男が髪を結(むす)たる時に、額(かみ)より、てつへんへかけて細長く毛をそりしコト、
 さかゆ(榮) 自動さかえる、
 さかよせ(逆寄) 圖攻め寄(よ)て来た敵に向ひて、味方(あか)の方より、攻め立つるコト即ち逆襲(さかむ)なり、
 さからひ(逆) 自動さからふコト、
 さからふ(逆) 自動さかるとも、たがふ、てむかふ、
 さがらふ(相良鉄) 圖鉄の一種にて、厚(あ)きすだれ鉄の如きもの、
 さがらめ(相良布) 圖海草の名、あらめの種類、食用を爲る、
 さがり(下) 圖下の方に垂(た)るる物の直打(うち)が安くなる引(ひ)きさがる退(ひ)く勢(いき)の衰(し)ゆる學問藝術(がくぶんぎゆつ)などの拙(ち)くなるコト凡(たゞ)て物の下の方に垂(た)れるコトを云ふ、
 さかり(盛) 圖さかんなるコト、勢(いき)のつきよきコト血氣(けつぎ)の十分なる壯年時代(さむらい)にさあふコトを云ふ、
 さがり(嵯峨流) 圖庭園の築山(つきやま)の拵(かま)へ方の流儀(りうぎ)の名、
 さかり(盛場) 圖人の集(あ)り來りて賑(にぎ)ふ場所、

さかり、さがる 盛、下 七七〇
 さがりば(下葉) 圖下の方を向ひて出てる草木の葉(は)筍(たけのこ)の調子(ていし)の名、
 さがりくも(下蜘蛛) 圖蜘蛛の一種、鉢圓(はちだん)く腹(はら)大きくして、足(あし)長く、全體に黒色にして白(しろ)き斑點(はんてん)あり、
 さがりぢ(下口) 圖物價の安くなつたるコトを云ふ勢(いき)のなごろえ初めたるコトを云ふ、
 さがりどけ(下苔) 圖老木(らうぼく)に生ずる一種の苔(こけ)にて、灰色を爲して、糸(いと)の如くに枝(えだ)なごより下れるもの、
 さかりひと(壯人) 圖血氣盛(けつぎ)りの事男子(おとこ)のコトを云ふ、
 さがりふぢ(下藤) 圖衣服の紋處(もんぢ)の名、藤(ふじ)の房(ふさ)を二つ左右より合せて、圓(まる)き形にえがきたるもの、
 さがりゆり(下百合) 圖草花の名、白百合(しろはく)の一種にて、其の花の下の方を向(む)けて咲くもの、
 さがる(盛) 自動勢力(せきり)が、ふるひを、る商賣(しょうばい)が榮(さか)へ進む凡(たゞ)て物事の満足(まんじつ)なる最中(さいちゆう)はやるもてはやさる、
 さがる(下) 自動垂(た)れさがる物の價(あ)が安くなる勢(いき)をさるるもてまかり出る、假令(たと)ば御殿(ごてん)より下る

拙(ち)なくなる、
 さがる(交尾) 自動鳥獸類(ちゆうぶつるい)がつるむ、交接(けつご)する、
 さがる(逆船) 圖舟を進め、又は退(ひ)くす等の自由(じゆう)を得せしむるが爲めに舟の軸(ねじり)にも軸(ねじり)にも、取り付けたる櫓(かじ)を云ふ、
 さかんに(盛) 圖勢力つよく大(おほ)ひに十分(じふぶん)にさきめくを云ふ、
 (さか) (さか) (さか)

即ち前途(ぜんず)のコト相手(あて)のコト即ち先方(せんぽう)過ぎ去りたる日のコト、即ち先日(せんじつ)さか、先月(せんげつ)さか早きコトさきかけ、急(いそ)なる勤(ごん)め、大切(たいせつ)なる勤(ごん)め此れより末(すえ)の勤(ごん)め、
 さき(詐欺) 圖いつはりたばかるコト、あざむくコト法律(はふり)の語にて、人を欺(たぶらか)して財物(ざいぶつ)を奪(うば)ひ取るコトを云ふ、
 さき(先案) 圖先(せん)に立つて案内(案内)するコト、又は其(その)の人、
 さき(先駆) 圖他人(たにん)に先(せん)ちて、敵陣(てきじん)へ攻め行くコトぬきん出るコト、さき入(い)るコト、
 さき(先貸) 圖仕事(しごと)せぬに先に貸(か)す幾分(いくぶん)かかす渡(わた)すコト、
 さき(先方) 圖せん方(せんぽう)、あい手、
 さき(先肩) 圖先棒(せんぼう)に同じ、
 さき(先金) 圖まへ金(まへかね)に同じ、
 さき(先借) 圖仕事をせぬ前に、仕事(しごと)賃(か)り(かり)るコト、
 さき(先潜) 圖人より先(せん)へ廻(まわ)りて、こつそりて物事を爲す、
 さき(先頃) 圖先日(せんじつ)、せんだつて、
 さき(先先) 圖さきから先(せん)き、さき(せん)の

さきまで、
 さき(先下) 圖物の先(せん)の方が、下(した)へ下(くだ)つてゐるを云ふ、
 さき(詐欺師) 圖人を巧(たくま)みに欺(たぶらか)す、財物(ざいぶつ)を奪(うば)ひ取る事(こと)を業(わざ)とせる人、
 さき(詐欺取財) 圖人をたぶらかして、財物(ざいぶつ)を奪(うば)ひ取りし罪(つみ)を云ふ、
 さき(先備) 圖先手(せんて)の軍隊(いくさ)、即ち前衛(ぜんゑい)のコト、
 さき(咲揃) 自動花(はな)の咲き切つた、花(はな)が盡(つ)く咲く、
 さき(幸田) 圖神の守らせる田、
 さき(先立) 圖さきにたつ、
 さき(先立) 自動人より先(せん)きに出て行く人(ひと)の前に立つ老人(らうじん)より先(せん)きに死(し)する、
 さき(先達) 圖先(せん)ころ、せんだつて、せんじつを云ふ意、
 さき(義長) 圖正月(しょうげつ)の十五日(じゅうご)に、七五三繩(しちごさんづな)や、飾(かざり)り松(まつ)を焼く儀式(ぎし)のコトを云ふ、
 さき(先頃) 圖さきころ、
 さき(先手) 圖一番先(いちばんせん)に進み行く人、又は軍隊(いくさ)凡(たゞ)て先(せん)に手(て)を出すコトを云ふ、

さがる、さき、幸、崎、驛、先

さか

さか

さきども(先供) 図行列(ツツ)の先きに立つて行くこと。
 さきどり(先取) 図他人より先きに受け取るコト。
 さきとりとくけん(先取持権) 図債権者が債務者(ツツ)の破産(ツツ)等に對して、他の債権者より先に自己の債権を執行し得る特權。
 さき(先) 圖まへつ方(ツツ)いせん、さきのち(先後) 圖まへ、うしろ、さきのよ(先世) 圖前の世、さきのよ(前世) 圖先世に同じ、生れぬ以前の世のコトを云ふ、さきのり(先乘) 圖行列の前(ツツ)に立ちて、馬に乗り行くコト、又は人、さきのこり(咲殘) 圖散(ツツ)すに木に在る花、さきのこれる花、さきのこる(咲殘) 圖花の散らずに咲(ツツ)てある(ツツ)後(ツツ)れて咲く(ツツ)咲すに在る。さきそんす。
 さきのまつ(先松) 圖行列の前に立ちて、持ち行く、松火(ツツ)の稱、さきはひ(幸) 圖さひひい、しやわせ、さきはしり(先走) 圖さき走るコト、野菜物などの、其の季節に先(ツツ)つて出るコト、即ち走り、
 さきばしる(先走) 圖人より先へ走り行く(ツツ)出す(ツツ)物事をなす、さきばお(割羽織) 圖ツツサキ羽織のコト、脊筋(ツツ)の二つにさけてあるやうに、仕立(ツツ)たる羽織のコト、さきばらひ(先拂) 圖昔時大小名、又は身分の高き人の通行に際し、先に立つて往來の人を除(ツツ)させて、道を闊(ツツ)させるコト、荷物などを送る時に、其の賃金(ツツ)を受取るの方に、支拂ふコトを云ふ、さきぶと(先太) 圖先細の反對、末の方が段々さ太くなつて行くコト又は物を云ふ、さきぶれ(先觸) 圖其の事を前よりあらかじめ、知らせ置くコト、さきぼち(先棒) 圖籠駕(ツツ)のはなの方を擔(ツツ)コト、又は擔(ツツ)てる人、さきぼそ(先細) 圖物の先(ツツ)の方の細きもの、細くなつて行くもの、さきぼど(先程) 圖先刻(ツツ)まつき、さきぼち(先棒) 圖駕(ツツ)や荷物(ツツ)などの、ハチの方の棒をかつぐコト又はかつぐ人の稱、さきみたま(幸魂) 圖人を守りて、福を與(ツツ)へらる、神の靈(ツツ)、さきみだれる(咲亂) 圖今を盛(ツツ)咲いて

さきば、さきみ

さきも、さく

昨、昨、昨

七七二

さく(非) 圖木を伐るコト、さきやぶる。さき割(ツツ)コト、さける、さく(琴) 圖せまきコト、押しせまる。寄(ツツ)つて来る、さく(送) 圖ちむコト、ちまかる、怖(ツツ)れて小さくなる、さく(脊) 圖昔時の刑罰の名、いれ墨の刑、竹にて編みある籠(ツツ)、さく(册) 圖爵位(ツツ)又は食品(ツツ)等を賜(ツツ)はる時の詔(ツツ)又は辭令書のコトを云ふ、文書類のコト、計略(ツツ)のコト、さく(索) 圖大なる太き繩(ツツ)さかす。もさむる、おちつかする状(ツツ)怖(ツツ)る、状を云ふ、手本(ツツ)散(ツツ)る。ちらかす。なくなる、繩(ツツ)をなふコト、さく(柵) 圖だんご。しんごの科ト、粽(ツツ)の科トを云ふ、さく(責) 圖せめるコト、せめたつコト、やくめ。せめ、あし、こして問ひたす、さく(噴) 圖やかましきコト、口けんくわをなすコト。云ひ争ふ、さく(糞) 圖よしの莖(ツツ)又は竹などにて編(ツツ)みたるもの、即ちすのこ、床板(ツツ)の科ト、集りかさむ、さく、排、琴、册、索、糞、噴、糞

さく(唐) 圖砥(ツツ)の科ト、轉じて研(ツツ)くコト、葬(ツツ)るコト、さく(醋) 圖すうき汁(ツツ)即ちす、客が主人に盃をさすコトを云ふ、さく(割) 圖魚の鱗(ツツ)をはぎ取るコト、ちち切るコト、さく(晴) 圖おしやべりの科ト、口かづを多くきくコト、鳥の鳴き叫ぶ聲の科トを云ふ、さく(策) 圖策(ツツ)に通ず、はかりこさ、さく(策) 圖文書(ツツ)即ちかきたる物、ふだ、手紙、はかりこさ、杖(ツツ)又は鞭(ツツ)、杖にてたたく、教ふべく發する命令、さく(槩) 圖矛(ツツ)の科ト、双六(ツツ)の盤(ツツ)の科トを云ふ、さく(錯) 圖器具の名やすりの科ト、砥(ツツ)の荒きもの即ちあらさう、まさる混(ツツ)する、入り亂(ツツ)れる、そむく。もさる。従はぬ、山などの高く峻しきさま、さく(械) 圖葉のなきさびしき木の枝又は木、木の葉の落るコトを云ふ、さく(鑿) 圖器具の名、のみ、うがつ。ほる。孔(ツツ)をあける、さく(鰐) 圖魚の名、さめの科ト、

さく(昨) 圖前の日、きのう、凡て過ぎ去りし最近の科トを云ふ、さく(柵) 圖木材(ツツ)を粗(ツツ)に立てたる圍(ツツ)の如きもの、こりて、さく(作) 圖こしらへるコト、たがやすコト、わざしこさ、はたらき、さく(策) 圖はかりこさの科ト、「北。さく(朔) 圖月の第一日、初め、方角の名、さく(裂) 圖動切れて離れる、別々になるはなれる、さく(裂) 圖動引きて無理にやぶる、別(ツツ)れしむ、はなさしめる、間(ツツ)をそぐ、さく(下) 圖動上の物を下へやる、位置(ツツ)をおさす、物の直段(ツツ)を安くする、物を糸にて結びて下(ツツ)す、劣(ツツ)かす、悪くなす、さく(咲) 圖動花がひらく、さく(避) 圖動其の物事に出遇(ツツ)ぬやふによげる、他へ轉する、さく(提) 圖動手にて物を、ブラ下げて持つ、さく(座具) 圖坐(ツツ)る時に下へ敷くもの、坐布團などの類、僧侶の勤をなす時に下に敷くもの、さく(昨) 圖前日の朝、昨日の朝、さく(作意) 圖物を持(ツツ)へるこ云ふ考

さく、排、琴、册、索、糞、噴、糞

さく、唐、醋、割、策、策、錯、鑿、鰐

さく、さく、昨、作、策、裂、七七三

さくぬ、さくか
 へ物製造する意匠、
 さくぬ(作爲)図物を作り拵(こしら)えるコト
 ①製作(せいぞう)するコト、
 さくぬん(索引)図字引の文字や又は書物
 の中に在る事柄(ことば)を、早くさぐり出
 せるやうに、なしたる目錄の如きもの
 即ちみだし、
 さくぬ(座隅)図座敷(ざしき)のすみ。部屋の
 はしはしのコトを云ふ、
 さくぬ(策應)図計(けい)を立て、人の
 相手(あひま)となるコトを云ふ、
 さくぬ(作家)図歌(うた)や詩(し)や小説(せつせつ)
 や繪畫(えいざ)や彫刻(ていこく)などを爲す人
 の總稱、
 さくぬ(作歌)図和歌を作るコト、
 さくぬ(昨夏)図去年の夏(なつ)、
 さくぬ(鑿開)図切り開きて、道をつく
 るコトを云ふ、
 さくぬ(錯行)図たがひちがひに交(まじ)
 つてるコト、
 さくぬ(斜)図ならびて行くコ
 トを云ふ、
 さくぬ(互ひに代)図りあつて行く
 コトを云ふ、
 さくぬ(錯愕)図おそろきあわてるコト
 うるたへるコトを云ふ、
 さくぬ(作柄)図凡て作物の出来上りた
 る有様(ようさま)のコト、

さくぬ(索求)図さがしもさむ、
 さくぬ(索居)図別々になつて住(す)つ
 てるコト、
 さくぬ(作曲)図歌を音楽の調子に合
 ふやふに曲(まが)をつけるコト、又は其
 の作りたる曲、
 さくぬ(鑿空)図ありもせぬ理屈をか
 がへ作るコト、
 さくぬ(道なき處)図道を開くコ
 トを云ふ、
 さくぬ(錯過)図しそんじ、あやまちの
 コトを云ふ、
 さくぬ(朔晦)図一日さ三十日即ちつ
 いたちさみそか、
 さくぬ(物事の入り)図乱れて、
 判然せぬコトを云ふ、
 さくぬ(方法)図はかりごさを、めぐ
 らす、方法手段を考へ出す、
 さくぬ(作毛)図稿(こう)に、實(じつ)のみ
 のつてるを云ふ、
 さくぬ(翠蹊)図谷間(やま)の細き道、極
 めて狭(せま)き道のコトを云ふ、
 さくぬ(昨曉)図前日の夜明け方のコト
 昨朝(けさ)のコト、
 さくぬ(削減)図げすりへらす、取りて
 少なくすコトを云ふ、
 さくぬ(策源)図戦争に關する計略を立
 つるごたひ、即ち參謀部のコト、

計畫を立てる基礎のコトを云ふ語、
 さくぬ(策源地)図策源の場所を定め
 られたる所、尙ほさくぬ(げん)の條を見よ
 さくぬ(錯謬)図まちがひ、しそんじ、あ
 やまりのコト、
 さくぬ(作興)図おこるコト。おこすコ
 ト。進んで物事をなすコト、
 さくぬ(昨今)図きのうきよう、このこ
 ろ、ちかごろのコト、
 さくぬ(索搜)図さがすコト、たづねる
 コト、しらべるコト、
 さくぬ(鑿鑿)図物事をよく云ひ當るさ
 まに云ふ、
 さくぬ(明らかなる)コト、
 さくぬ(噴噴)圖多(おほ)くの人が口々にや
 まく、しやべり立る、
 さくぬ(競争)図入り亂れる、むちやむ
 ちやにまじるコト、
 さくぬ(炸雷)図かき、この一種にて、黄
 ばんだる魚茶色(うなぎ)を爲せる虫、同様
 の色の繭(まゆ)を出す、
 さくぬ(髻)圖もろし、こわれやすし、た
 やすし、よわし、
 さくぬ(作事)圖普請(うづま)のコト、即ち家
 や藏(くら)などを建てるコト、

さくぬ、さくけ

さくぬ、さくけ

さくぬ(策士)図物事に對(たい)して、巧みに
 工夫(くわ)を爲す人、
 さくぬ(智恵)多(おほ)く、計
 (けい)を保護(ご)す云ふ神、
 さくぬ(朔日)図月の一日、即ちついた
 ちのコトを云ふ、
 さくぬ(昨日)図きのう、まへの日、
 さくぬ(作者)図詩歌文章等を作りたる
 人、
 さくぬ(書物)を著(しよ)はしたる人、
 さくぬ(芝居)の
 筋書(しんしょ)を作る人、
 さくぬ(搾取)圖しぼりて汁(じゆ)を取る
 コト、しぼり取るコト、
 さくぬ(策書)圖命令書、辭令書、
 さくぬ(決)圖えぐる、切りぬく、切り
 取る、
 さくぬ(横合)より出で、物事
 をなす、
 さくぬ(まじり)なす、
 さくぬ(作述)圖書物を著(しよ)すコト、
 即ちまじり、
 さくぬ(昨春)圖昨年(けつねん)の春、
 さくぬ(作成)圖こしらへ上る、つくり
 出す、
 さくぬ(成就)圖なす、
 さくぬ(作製)圖つくりこしらへるコト
 製作するコトを云ふ、
 さくぬ(昨宵)圖前日の夜、ゆうべ、

さくぬ(削籍)圖戸籍(こせき)を、のぞくコ
 トを云ふ、
 さくぬ(昨夕)圖ゆうべ、前の夜、
 さくぬ(錯節)圖物事のこんざつせるコ
 ト、入りくんでる事件(じけん)、
 さくぬ(索然)圖趣きやおもしろ味のな
 き状態(じたい)を云ひ表はす語、
 さくぬ(作戦)圖味方のたたくべき手
 段(たてまわ)り、
 さくぬ(軍略)圖、
 さくぬ(戦計)圖戦争の
 仕方に就ての、はかりごさを立つるコ
 トを云ふ、
 さくぬ(錯綜)圖互(たが)ひにまざる、入り
 亂れるコト、
 さくぬ(削除)圖げづりのぞく、取りの
 ける、
 さくぬ(鑿道)圖道なき處に道をつくる
 コト、
 さくぬ(錯陳)圖入りみだれて陳(ちん)な
 る、
 さくぬ(種々)まじりてなるコト、
 さくぬ(昨朝)圖前日の朝(あ)さ、
 さくぬ(索敵)圖敵の所在(しよん)をさがす
 コト、
 さくぬ(作得)圖小作人が、年貢米(ねんぎん)を納(な)めたる、残りの米、即ち自己の
 得る所の米、

さくぬ(作人)圖物をこしらへる人、田
 畑(はたけ)をたがやす人、
 さくぬ(昨年)圖去年、まへ年、
 さくぬ(作場)圖普請(うづま)大工(おほ)の木
 材(ま)を取り扱(あ)ひて、建築(けんちく)の木組
 (きぐみ)を爲す所、
 さくぬ(朔望)圖ついたち十五日さの
 コトを云ふ、
 さくぬ(炸發)圖砲彈(たうだん)の中に仕込(しこ)め
 られる火薬(くわやく)の破裂(はくはく)するコト、
 さくぬ(索漢)圖さびしきコト、
 さくぬ(昨晩)圖昨日の夜のコト、
 さくぬ(錯謬)圖あやまり、しくじり
 のコト、
 さくぬ(作病)圖こしらへ病氣(びやうき)にせ
 やまひのコトを云ふ、
 さくぬ(朔風)圖北風(きたかぜ)、寒(せむ)き風、
 さくぬ(作文)圖文章を作るコト、
 さくぬ(朝幣)圖ぬわさの一種、
 さくぬ(素餅)圖昔時(むかし)七夕(たなばた)の日に、
 内膳(うちぜん)より、きやく病(びやう)のまぢなひさし
 て、宮中(みやうち)へたてまつりたる、むぎなわ
 のコト、
 さくぬ(索辨)圖髪(かみ)の毛(け)をよりてまきつ
 べん(べん)の毛(け)をよりてまきつ

さくぬ、さくけ

さくぬ、さくけ

さくぬ、さくけ

さくらば、さくら

けて置くコト。又は其の物。さくらばり(策謀)図はかりこゝ。軍略(ツツ)の口を云ふ。さくらばり(冊封)図天子が命令されて、大名に土地を與(分)へらるるコト。さくらばり(作毛)図さくらげのコト、作毛(ツツ)の條を見られよ。さくらばり(舳舻)図形の小さき舟のコト。さくらばり(策命)図聖上陛下の命令書御沙汰書(ツツ)を申す。さくらばり(作物)図こしらへし物。田畑(ツツ)にて出来し物。さくらばり(欄門)図さくらでの入口。かこひの門。さくらばり(昨夜)図前日の夜、ゆうべ。さくらばり(炸薬)図大砲の彈丸の中に仕掛けてある薬にして、彈丸を裂製せしむる爲めのもの。さくらばり(昨夕)図昨日の夕方。さくらばり(櫻)図木の名、我國特有(ツツ)とも稱ふる木、大小種々あれども、其の大きな物は、二丈余(ツツ)に達す、木の皮(ツツ)は薄(ツツ)くして、節(ツツ)の痕(ツツ)の如き紋理(ツツ)あり、之(ツツ)を研(ツツ)けば、光澤(ツツ)あり、葉は卵圓形(ツツ)にして、周圍(ツツ)

さくら

(ツツ)に鋸(ツツ)の加き齒あり、色は青緑(ツツ)なり、花は五瓣(ツツ)にして、色は淡紅色(ツツ)なり、春花を咲きて、其の美觀(ツツ)は光澤(ツツ)ありて、實(ツツ)密なるより、種々の家具を製するに用ひられ、又彫刻(ツツ)の板木(ツツ)に用ひらる。紋所の名、櫻(ツツ)の花の形を、正面(ツツ)に見たる體(ツツ)を描きたるもの。さくらばり(櫻木)図櫻の科。さくらばり(錯落)図まざり合つてるコト。飛々にちらかつてるコト。さくらばり(櫻田)図櫻の木、澤山に植(ツツ)つてる所を云ふ。さくらばり(櫻煮)図一種の料理、章魚(ツツ)を五分切りにして、タイ味噌にて櫻色に煮しもの。さくらばり(櫻湯)図櫻の花を、鹽づけさせし物を、湯へ入れたるもの。さくらばり(錯亂)図むちやくちやくに亂れるコト。くるひ亂れるコト、精神錯亂なるもの。さくらばり(櫻煎)図櫻煮(ツツ)に同じ。さくらばり(櫻色)図櫻の花の如き、淡紅色の色合を云ふ。さくらばり(櫻貝)図小さき貝(ツツ)の名、其

さくら

の殼の白色、又は淡紅色を呈せる美しき物、種々な細工に用ひらる。さくらばり(櫻粥)図小豆(ツツ)を入れる粥の口を云ふ。さくらばり(櫻狩)図櫻の花を見物に出掛るコト。花見(ツツ)。さくらばり(櫻草)図草の名、多く山野に自生す、葉は卵形(ツツ)にて小さく、長き莖(ツツ)の光に、櫻の花の如き白紅(ツツ)等の、やさしき花を咲かす愛すべく美しき花。さくらばり(櫻酒)図櫻の花を絞つたる汁を、焼酎(ツツ)に混ぜ、此れに砂糖を加へて煮きたるもの。さくらばり(佐倉炭)図くぬ木を焼きたる上等の炭、切りて、用ゆ、下總の佐倉地方より、産出するに依り、此名ありと云ふ。さくらばり(櫻調)図四月頃に、多く捕れる赤き色の鯛を云ふ。さくらばり(櫻月)図陰曆の三月、太陽曆の四月のコト。さくらばり(櫻漬)図櫻の花を鹽づけにしたるもの、稱。さくらばり(櫻海苔)図海苔の名、櫻の如く薄赤き色を呈して、海苔(ツツ)味(ツツ)淺草

七七六

海苔より悪し、

さくらばり(櫻花)図開きたる櫻の花の口を云ふ。さくらばり(櫻張)図煙管(ツツ)の拵(ツツ)の名、京都より製出さる。さくらばり(櫻餅)図菓子的一種、小麦粉を薄く焼きて、餡を包み、更に櫻の葉にてあみ筍につみたる物。さくらばり(櫻味噌)図牛蒡(ツツ)や人参(ツツ)や生姜(ツツ)などを細(ツツ)かく切りて、味噌に混ぜ、砂糖を加えて煮きたるもの。さくらばり(櫻實)図一種の櫻に生ずる實(ツツ)、熟(ツツ)すれば黒くなる、之を鹽漬(ツツ)として用ゆ。さくらばり(鹿子)図元祿時代に流行たりと云ふ櫻色の、しほり。さくらばり(櫻結)図紐の結び方の一種、開ひて、櫻の花の如き形に結ぶコト、又た結びたるもの。さくらばり(割)図えぐるコト、くりぬくコト、ほるコトを云ふ。さくらばり(探)図ほじくるコト、さがすコト。秘密(ツツ)にさぐるコト、即ち探偵(ツツ)。醫療用の器具の名、銀(ツツ)又は洋銀(ツツ)にて作(ツツ)られたる長き太(ツツ)き

さくら、さくら、割、探

針(ツツ)の如き物にて、其の尖(ツツ)を球(ツツ)の如く爲せし物、之を傷口(ツツ)に差し入れて、内部の病状を調(ツツ)ぶるに用ゆる具。さくらばり(嚙)図しやくりのコト、即ち呼吸(ツツ)がつまりて、其れが俄(ツツ)かに出(ツツ)やふさするに依り、其れが咽喉(ツツ)に響(ツツ)きて、一種の聲を出す。聲(ツツ)を吸ひ込んで泣(ツツ)く。さくらばり(坐纏)図器具の名、坐(ツツ)して糸をくりて、わくに巻き附ける具。坐纏(ツツ)にて、掛(ツツ)て取りし物。さくらばり(冊立)図詔(ツツ)を奉じて、皇后、皇太子に立させらるるコトを云ふ。さくらばり(探手)図物事を、こつそりささぐる人。さくらばり(削立)図山などが、けづりたる如くに、つ、立つてる状(ツツ)を云ふ。さくらばり(探足)図足にて前の方をさぐりつつ歩むコト。さくらばり(抉入)図木材をえぐりて、其の後(ツツ)へ他の木材を充(ツツ)るコトを云ふ。さくらばり(策略)図はかりこゝ、てだての口。さくらばり(割)図くりぬく、えぐる、掘(ツツ)

さくら、さくら、嚙

りて穴をあける。さくらばり(探)圖さぐす、しらべる。手や足にて物(ツツ)に觸(ツツ)つて容子を試(ツツ)む。秘密(ツツ)に吟味(ツツ)する。さくらばり(作例)図詩歌文章等を作る手本を示したるコト。さくらばり(作料)図物を作りたる手間賃(ツツ)のコトを云ふ。さくらばり(炸裂)図さけられる。さげくだけるコトを云ふ。さくらばり(錯列)図入りみだれてならんでるコト。不揃(ツツ)のコト。さくらばり(柘榴)図木の名、高さ一丈餘に達す、葉は長き卵圓形にして、且つ平らかに滑(ツツ)らかにして、飛々(ツツ)に生ずる花は小さくして厚(ツツ)く、且つ光澤(ツツ)ありて、其の色は赤(ツツ)し、其の果實は大きく、腫る堅(ツツ)くして、其の中に無數(ツツ)の丸薬(ツツ)の如き實を以て充(ツツ)たる、熟(ツツ)すれば、其の色赤くなる、味は甘(ツツ)くして酸(ツツ)し、眺(ツツ)美しきより、人は之を栽培(ツツ)す。さくらばり(石榴口)図舊式の風呂屋の浴室(ツツ)への入口を云ふ。はぜわねて、がこさき形を爲して、口の口を云ふ。さくらばり(石榴石)図一種の石、菱形(ツツ)

さくら、さくら

七七七

さくら、さけ、鮭、酒

びを爲し、其の面十二乃至廿四に分れ
る、透明(トウメイ)又は半透明の石なり、色は
紅(ベニ)緑(キナ)黒(クマ)等種々ありて美し、
さくら(石楠)の條を見られよ、
さんだんの條を見られよ、
さくらば(石楠)一種の皮膚病、鼻
の頭(カサシ)が腫(オド)つて、赤くなる病氣の
名、
さぐわ(坐臥)坐(カ)るさ臥(カ)る云ふ
意より、起き臥しをなしてると云ふ意
になる、
さくわん(左官)圍壁をぬる職人のコト、
さくわん(佐官)圍武官の階級にて、將官
と尉官の間の官位を云ふ、

(サケ)

さけ(鮭)昭川の海(ウミ)に移(ウツリ)らんさする
處に、生する魚の名にて、秋の頃に海よ
り川(カハ)へ溯(ノボリ)つて、卵(タマゴ)を生む、大
さ三尺内外に達する平(ヘ)たくして、
細長き魚なり、鱗(ウロコ)細かく背は薄赤
くして、腹(ハラ)は白く黒く、其の肉は赤
色にて、味(アジ)の極めて美なるもの、
さけ(酒)一種の飲料にて、米(コメ)を麴
(カビ)を爲して製したる、無色透明(トウメイ)

さけ(下紙)圍文書中の或る箇處(カ所)に
自己の意見又は理由などを、小
さき紙にしたためて、はり付けて置くも
の、
さけ(下髪)女子が髪を切つて、後
へ下げて置くコト、
さけ(提刀)圍腰にさす、すに、さけ
て歩く大なる刀を云ふ、
さけ(酒嫌)酒を好まぬコト、又
は其の人を云ふ、
さけ(酒臭)酒を飲んで、呼氣(カキ)
に酒の香あり、

さけ、さけく、葉

のものは、一種の芳香(カハ)を有して、味
(アジ)稍(チカ)辛(カキ)甘(カマ)く、人の好んで用
ゆるもの、此を飲めば精神(カハ)興奮(カキ)し
多く用ゆれば麻酔(カハ)す、
さけ(鼻)圍鼻ふる鳥の古名、
さけ(垂尼)圍髪を切り下げにした
る尼坊主の曹、
さけ(左契)切手などの左の方の部分の
コトを云ふ、
さけ(下帯)圍昔時四月の一日より、
九月の八日まで、即ち夏期の女の禮服
に用ひし帯にて、巾(カハ)の稍や廣き組
(カハ)の如き物を後で結び下げて置き
し物を云ふ、

き札(カハ)を下げしもの、
さけ(下振)圍組や針金などの端(カハ)
に、重(オモ)をつけて、下げて振(カキ)せる
もの、假令は時計の下にさがつてふ
り、などの類を云ふ、
さけ(裂目)圍破(カキ)れてある部分
のコトを云ふ語、
さけ(提物)圍腰に提(カキ)て持ち歩く
もの、假令は巾着(カハ)など、
さけ(下尻)圍人民より官府へ差し
出したるものを、官府より下げ渡され
るコトを云ふ、
さけ(避)圍通よける、のがれるやふに
する、
さけ(左券)圍約束した證據、
さけ(査検)圍さりしらべる、吟味(カキ)
する、検査(カキ)する、
さけ(左舷)圍向つて左の方の舷側(カハ)
のコトを云ふ、

(サケ)

さけ(沙轂)圍熱帯地方に産する木の名、
重(オモ)に東印度(カハ)の諸島に産す、其
の形は棕櫚(カハ)に似て、高さ二三丈か
らに達(カキ)す、此の木(カハ)の心(カハ)より出づ
る、白き汁(カハ)は、重病者の食料に供し、
又は煮(カキ)て糊(カキ)を製す云ふ、
さけ(雜魚)圍小き魚 小き種類(カハ)の魚
の交(カハ)りたるもの、
さけ(差誤)圍あやまり、まちがひ、ちがひ
たるコトを云ふ、
さけ(鎖國)圍外國との交際(カハ)を絶(カキ)つ
コトを云ふ、
さけ(雜穀)圍さつこの訛米(カハ)等
種々の穀物のコト、
さけ(青箭魚)圍魚の名(カハ)の小き
物を云ふ、
さけ(左社)圍左やふ、さてこそ、され
ば、あはれに、

(サケ)

さけ(鎖骨)圍胸の最上部に在りて、肩
(カハ)の骨(カハ)と連(カハ)なる骨(カハ)のコトを云ふ、
さけ(雜魚)圍種々の魚(カハ)が市場(カハ)に轉
(カハ)がつてゐる如く、男女打ち(カハ)りて
寢(カハ)るコト、
さけ(雜魚場)圍魚市場(カハ)のコト、
さけ(左近)圍昔時の宮中に在りし武官
の名、さこんえの曹、
さこんのさくら(左近櫻)圍京都御所の紫
宸殿(カハ)の前、左の方に在る櫻の木
のコトを云ふ、

ささえ(草) 穂、
ささえのしり(榮螺尻) 圈心根(心)の曲(カ)りし人をあざけり云ふ語。
ささえのつばき(榮螺蜃) 圈一種の料理にて、榮螺の肉(ニ)を取り出して、細かく切り、其の殻(カ)の内へ入れて、醬油(カ)味淋(カ)にて味(カ)をつけ、殻を鍋(カ)として煮(シ)きしもの味(カ)中々に宜し。 ささ(カ)がは(榮螺) 圈小さきかに云ふ意なり、
ささ(カ)がは(榮螺) 圈小さきかに云ふ意なり、
ささ(カ)がは(榮螺) 圈小さきかに云ふ意なり、
ささ(カ)がは(榮螺) 圈小さきかに云ふ意なり、
ささ(カ)がは(榮螺) 圈小さきかに云ふ意なり、

ささ(カ)げ(竹筒) 圈小さき竹の筒(カ)にて、酒(カ)を入るるに用ゆる具(カ)。
ささ(カ)げ(木角豆) 圈小豆(カ)の種類にて、春(カ)の末(カ)に種を下し、秋(カ)に至りて、其の内に豆に似たる平(カ)き實(カ)を蔵(カ)む、其の若き物は、蒸(カ)ぐるみ煮(カ)て食ふ、其の實(カ)は赤き白き等種々あり、質(カ)に製し又は飯に入れたりして食ふ。
ささ(カ)び(柄) 圈たてまつる物、即ち献上の品のコト。
ささ(カ)こ(酒事) 圈酒を飲むコトと云ふ意味にて、酒宴の物。
ささ(カ)つ(査察) 圈しらべさつする、しらべ考(カ)るコトを云ふ。
ささ(カ)な(細波) 圈こまかきなみ、
ささ(カ)な(小波) 圈同上。
ささ(カ)つ(笹葉) 圈笹の葉、

ささ(カ)のみ(笹實) 圈竹に生る果實、即ちじれん(カ)のコトを云ふ。
ささ(カ)のは(蘆) 圈小(カ)き蘆(カ)の島(カ)を去りて、乾物(カ)に爲したるもの稱。
ささ(カ)は(笹葉) 圈笹の葉の科ト、
ささ(カ)は(笹原) 圈ささ(カ)の生(カ)てる野原の科トを云ふ。
ささ(カ)は(障) 圈さわりのあるコト、
ささ(カ)は(障) 圈動(カ)さしつかふ(カ)病氣になる(カ)都合あしし、
ささ(カ)ふ(支) 圈動(カ)ツツばる、持ちこたへる(カ)こむ(カ)ふせぐ、
ささ(カ)ふ(蓀生) 圈笹のたくさんに生えてる地面の科トを云ふ。
ささ(カ)ふ(笹吹) 圈銅(カ)を小さき粒(カ)になせし物。
ささ(カ)ふ(笹舟) 圈笹の葉を舟の形になしきたるを云ふ。
ささ(カ)ふ(笹舟) 圈笹の葉を舟の形になして、水に浮(カ)べし物。
ささ(カ)ふ(笹舟) 圈衣物のヘリや、袋などの縫(カ)ひ目を、裏(カ)よりふせ縫(カ)ひに爲したる、組紐(カ)の科ト、
ささ(カ)は(笹穂) 圈穂(カ)の穂尖(カ)の名、其の穂尖(カ)を笹(カ)の葉の如くになしたる

ささ(カ)え(草) 穂、
ささ(カ)げ(竹筒)
ささ(カ)のみ(笹實)
ささ(カ)のは(蘆)
ささ(カ)は(笹葉)
ささ(カ)は(笹原)
ささ(カ)は(障)
ささ(カ)ふ(支)
ささ(カ)ふ(蓀生)
ささ(カ)ふ(笹吹)
ささ(カ)ふ(笹舟)
ささ(カ)ふ(笹舟)
ささ(カ)は(笹穂)

もの、稱。
ささ(カ)まくら(笹枕) 圈草枕の科ト、野原などのコトを云ふ形容詞。
ささ(カ)みづ(細水) 圈ささ(カ)水(カ)の科ト、即ち細き川などのコトを云ふ。
ささ(カ)むしろ(笹籠) 圈笹にて織りたるむしろの科トを云ふ。
ささ(カ)め(私語) 圈一人(カ)言(カ)ひ、
ささ(カ)め(私語) 圈私語をたて、叫びさわぐコトを云ふ、
ささ(カ)め(細少) 圈こまかきコト。少なきコトを云ふ。
ささ(カ)ゆ(私語) 圈自動小聲にて話をする。ひそひそ言(カ)ふ。
ささ(カ)ゆ(笹籠) 圈笹(カ)の澤山に生(カ)えしげつてる籠(カ)を云ふ、
ささ(カ)ゆ(細小) 圈極く、こまか、きわめて小(カ)きコトを云ふ、
ささ(カ)ゆ(私語) 圈内證話(カ)シシ、ひそひそ話、
ささ(カ)ゆ(酒湯) 圈湯(カ)に酒(カ)を少しく入れて、わかしたるもの、昔時天然痘(カ)の瘡(カ)りし後の、小兒(カ)を此の湯に入れしと云ふ、
ささ(カ)ら(篋) 圈竹を六七寸に切り、尖(カ)り節(カ)までを、極(カ)めて細(カ)かく割

(カ)たる物、勝手道具(カ)を洗ふに用ゆる具(カ)竹の尖(カ)を細(カ)かく割(カ)りたる物、田樂(カ)などに摺(カ)り合せて、調子(カ)を取るに用ゆるもの凡て尖(カ)の細(カ)かく細(カ)かく裂(カ)たる物の稱。
ささ(カ)りん(笹籠) 圈紋所(カ)の名、リンダウの葉を、笹(カ)の葉の如く、五枚に別れてる様に、描き、其の上(カ)に花を三つ描きし物。
ささ(カ)る(刺) 圈自動つき立つ、突き入れられる。
ささ(カ)れいし(小石) 圈こまかき石、
ささ(カ)れか(小石川) 圈小石の上を流れてる小川の科トを云ふ。
ささ(カ)れは(小秋) 圈秋の一種にて、葉及び花の共に小さき物。
ささ(カ)れみづ(小石水) 圈小石の上をチヨロチヨロと流れてる水。
ささ(カ)ん(左懸) 圈昔時支那にて、貴人の外出の時などに、東の方の方角に、附けたる添(カ)馬の稱。
ささ(カ)ん(茶山花) 圈木の名、椿(カ)の種類にて、椿(カ)より小さき物、其の葉、其の花、又其の實(カ)も椿(カ)と同様なり、花の色は、紅白(カ)など種々

ありてうるはしく、質(カ)より油を取る、
(カ)カ)
さし(尺) 圈物尺(カ)の科ト、即ちくじらさし、かれさしたを云ふ。
さし(差) 圈尺(カ)に同じ(カ)動詞(カ)に冠(カ)らせて、其の意を強(カ)むるに用ゆる語、
さし(縫) 圈葉(カ)を十分に叩(カ)きて、細くなへたる細(カ)繩(カ)、重(カ)に青(カ)錢(カ)などを通(カ)すに用ひらる、
さし(刺) 圈袋(カ)に入れたる穀類(カ)を外より、少しく取り出す時に、用ゆる具(カ)竹の筒の一方を、斜(カ)にそきたるもの、
さし(匙) 圈器具(カ)の名、物をすくふ用をなすもの、金屬(カ)木(カ)等にて、作られたる小(カ)き杓子(カ)の如きもの、
さし(砂嘴) 圈地理學(カ)の語、河中や海岸(カ)等に在る、砂洲(カ)の風、又は水流(カ)などの爲めに、長(カ)くなりしもの科トを云ふ語、
さし(蠶子) 圈虫の名、酒又は酢(カ)などに生ずる小(カ)き、うじの如き小(カ)虫の名、
さし 尺、差、繒、刺、匙 七八一

ささ(カ)え(草) 穂、
ささ(カ)ら(篋)
ささ(カ)り(刺)
さし 尺、差、繒、刺、匙

さし(坐視)面見ていながら、知つていな
がら、其の物事に、關係(関係)せざるコ
トを云ふ。
さじ(座次)座座(ざざ)るべき順序、
さじ(些事)座少なきコト、わづかなコト、
いさ、のコト。
さし(嗟咨)嗟なげき、かなしむ聲のコト
を云ふ。
さし(茶肆)茶肆(ちゃし)茶を賣る家、即ち茶屋
のコトを云ふ。
さじ(茶事)茶事(ちゃじ)茶の湯の儀式に、關(かん)
たるコトを云ふ。
さしあむ(差上)差上(さじあむ)の方へ高く上げる
さしあし(差足)差足(さしあし)のび足、
さしあつ(差當)差當(さしあつ)ちつけて、物事を
なす、じかになす。
さしあひ(差合)差合(さしあひ)つかえるコト、さ
さばるコト。
さしあふ(差合)差合(さしあふ)つかえる。互に
でつくわす。
さしあみ(刺網)刺網(さしみ)にて、あみたる魚を
捕ふる網の總稱。
さしあたり(差當)差當(さしあたり)あたつて、もつ
か、いま。
さしあたる(差當)差當(さしあたる)其の事につくは
す。其の場(ば)にのぞむ。

さし(左支右吾)左支右吾(さし)左と右の
こするコトを云ふ。
さし(差出)差出(さし)出で、すぎる、えち
ばる。
さし(差入)差入(さし)中へはいり。
さし(差入)差入(さし)入れ込む。
さし(差入)差入(さし)入れ物のコト。差
し、むコトを云ふ。
さし(差出)差出(さし)出す。前へ
出す、さし出す。
さし(差入)差入(さし)未決監(みけつ)に
囚(とら)はれて、刑事被告人に、親戚(せんとく)
知友(ちゆう)などが、厚意(こうい)にて差入れる物品、
さし(沙洲)沙洲(さし)の中などにある砂地
(すな)のコトを云ふ。
さし(差俯)差俯(さし)下方の方を向ひて
いる。
さし(差挿)差挿(さし)図書物や雑誌又は新聞紙な
どの中に、刷(し)り込んである輪(りん)のコト
さし(差置)差置(さし)其のまゝにして置くコ
ト、ひかへるコト。
さし(差置)差置(さし)置くてなく、其のま
ゝにして置く。
さし(差送)差送(さし)おくりやる、つか
はす。
さし(差押)差押(さし)債務(せむ)を辨(わ)せ

さし(左支右吾)左支右吾(さし)左と右の
ざる時に、裁判權(さいばんけん)を以て、債務者
の財産を、封じて自由にさせぬコトを
云ふ語。
さし(差押)差押(さし)おさへつける。お
さえて動(うご)けぬやうにする。
さし(差掛)差掛(さし)おさしかける、さしか
さす。
さし(差掛)差掛(さし)上より物をかざすコト
假令(かり)傘(かさ)をさしかける。本家(ほんけ)に添(そ)へ
て、低く作りたる、家のコトを云ふ。
さし(差掛)差掛(さし)傘(かさ)を細く削り紙を貼り
たる物、雨を防ぎ目を防ぐに、さし掛
けて用ゆるかさ、からかさのコトを云
ふ。
さし(差金)差金(さし)工匠(こうせい)の用ゆるまがり金
のコト。さしづるコト、入れ智恵(ちえ)
するコト。芝居(しばい)にて蝶(ちょう)を飛ばせたり
する時に、其の蝶(ちょう)に附けて、動かす極
めて細き、はれのコトを云ふ。
さし(差換)差換(さし)換(か)りかへる。
さし(差紙)差紙(さし)官府(くわんぷ)より特に指定した
る人を、呼び出す、よび出し(じ)の
コトを云ふ。
さし(差掛)差掛(さし)自動(じどう)まぎはになる、せ
まつて来る。其の場(ば)に行く。傘(かさ)な
ごをさしかける。

さし

さし

さし

七八二

さしかかり(差掛)差掛(さしかかり)コト、
さしかける(差掛)差掛(さしかける)上よりかぶせる。
さしかびん(匙加減)匙加減(さしかびん)を調合(てうが)す
るほどあひ。物事(ぶつじ)を行ふ程度(ていど)の(てい)手
心(ていしん)の(てい)コト。
さしかざす(差騎)差騎(さしかざす)同じ其の
條(じょう)を見よ。
さし(刺木)刺木(さし)草(くさ)や木(き)を分けてふやす爲
めに、地(ぢ)へ刺(さ)して、培養(たいうよう)なす切
り枝(き)の(き)コト。
さし(棧敷)棧敷(さし)一段(いちだん)高く設(た)けた物
見場席(けんじやく)の(けん)コトを云ふ。
さし(座敷)座敷(ざし)酒宴(しゆえん)などを催
す室(むろ)の(むろ)客(きやく)を案内(案内)して物語(ぶつご)を爲
す室(むろ)の(むろ)コトを云ふ。
さし(差金)差金(さし)座内金(ざない)と同じ。足ら
ずまへを補(おぎな)ふべく爲めに、差し出す金
子の(きん)コト。
さし(差寄)差寄(さし)座敷(ざし)座敷狂人(ざしきやうじん)を入れ
て置く爲めに、座敷(ざし)の中に櫓(こ)などを
設けたる所。
さし(差掛)差掛(さし)として結びたる
髪(かみ)に、さす櫓(こ)を云ふ。
さし(差合)差合(さし)自動(じどう)眼(がん)になみだを含む、
なみたぐむ。
さし(差掛)差掛(さし)コト、

さし(差入)差入(さし)又た注薬(ちゆうやく)も書く、
さし(差入)差入(さし)目(め)へ注(ちゆう)ぐ薬品(やくひん)の(やく)コト
を云ふ。
さし(差加)差加(さし)加(か)わえる、よせる
そえる、ふやす。
さし(差毛)差毛(さし)馬(ば)などの毛(け)に異(こと)なり
たる毛(け)の交(まじ)り居るもの。
さし(差下)差下(さし)齒(は)の入(い)つてる下敷(した)の
コト。
さし(刺子)刺子(さし)木綿織(きわた)の地(ぢ)の厚(あ)き物を、
二三枚合せて、太(お)き糸(いと)にて刺(さ)し縫(ぬ)ひに
なしたる物を云ふ、消防夫(しょうぼう)の着る
もの。
さし(指子)指子(さし)無地(むぢ)の平絹(へいぎん)にて作ら
れたる、ゆびぬきの(ゆび)コト。
さし(差越)差越(さし)越(こ)すコト、
さし(差越)差越(さし)出(で)す。地方(ちほう)より
送(おく)つて来る。順序(じゆんじゆ)を(じゆん)へ
して、事をなし行ふ。
さし(差小旗)差小旗(さし)小旗(せうし)に挿(さ)し
て歩く小旗(せうし)旗(はた)。
さし(差込)差込(さし)込(こ)の起(お)こるコトを云
ふ。
さし(差込)差込(さし)自動(じどう)腹(はら)や胸(むね)の痛(いた)み出して
来る。
さし(差込)差込(さし)おし入れる、つきこ
ます、さしこ

さし(差込)差込(さし)おし入れる、つきこ
む、つきこめる。
さし(差込)差込(さし)戸(かど)を閉(と)めて、其の
中(ちゆう)にすつこんでる。
さし(差縫)差縫(さし)縫(ぬ)ひつけにせる縫(ぬ)ひの(ぬ)コト
さし(差障)差障(さし)障(さ)りのある、さ
わりさなる。
さし(差潮)差潮(さし)潮(うしほ)として来るしほ、即ち
みちしほ、あげしほ。
さし(差追)差追(さし)追(お)つて来る、即ち
まぎわになつて来る。
さし(差添)差添(さし)添(そ)へる爲(ため)すべく、附
きそふて行くコト、又は其(その)人の(ひと)コト
を云ふ。
さし(差添)差添(さし)添(そ)へる人の(ひと)を助(たす)く
く附(つ)き従(したが)ふて人(ひと)。
さし(差足)差足(さし)足(あし)を更(さら)に、糸(いと)にて
細(こ)かく縫(ぬ)ひたるを云ふ、さし(足袋)足袋(あしあひ)の
コト。
さし(差樽)差樽(さし)樽(たる)に入れて、神(かみ)に供(とも)し
ふるに用ゆる樽(たる)にて、形長(かたちなが)方形(かたがた)を爲(た)し
丈(たけ)低(ひか)く黒塗(くろぬ)になしたるもの、

さし

さし

さし

七八三

さしぢえ(差智慧) 圖横合より智慧をつけ
るコト、即ち入れちえのコト、
さしぢがふ(刺違) 自動二人が互に及(及)に
て突き合つて死する、
さしづ(指圖) 圖指(さ)しをして教ゆる、
即ち云ひつけるコト、
さしつぎ(差繼) 圖次から次ぎへこ、つ
くコト、さし引き勘定のコトを云ふ、
さしつむ(差繼) 自動後(さ)よりつひて
来る、つき従ふて来る、
さしつぐ(差付) 自動つきつける、あては
まる、あてこする、
さしづと(差智) 圖芝居にて用ゆる、かづ
らの一種の名、
さしづぬ(指綱) 圖馬をつなぐに用ゆる細
(さ)の綱を云ふ、
さしづめ(差詰) 圖さしたつて、今のさ
ころでは、
さしつかふ(差支) 自動じやまになる、さ
またげになる、
さしつかへ(差支) 圖さしつかふるコトを
云ふ、
さしつどひ(差問) 圖さつたふするコト、
こみいるコト、
さしづとふ(差問) 自動さしつかえる、こ
みいる、こんさつする、

さしつまる(差詰) 自動おしせまる、おし
つまる、其の場(に)のぞむ、
さしつらぬ(刺貫) 自動突き通(す)す、え
ぐる、くりぬく、
さしつおさへつ(差抑) 圖酒宴の席にて互
ひに、盃のさりやりをするコトを云ひ
表はす語、
さしづしよりけん(指圖證券) 圖受取人を
定めたる證券、
さしで(差出) 圖横合(さ)より其の場へ出
るコト、横合より餘計(さ)なコトを云
ひ出る、即ちさし出口、
さしでをち(差出口) 圖横合(さ)より餘計
な事を云ふコト、いらざる世話口をき
くむだ口、
さしでもの(差出者) 圖出すぎもの、餘計
な世話をやく人、
さしとむ(差止) 自動おさへさむ、きん
する、やめにさす、
さしとどむ(差止) 自動おし止む、やめさ
せる、控えさせる、
さしとむす(刺通) 自動さしつらぬく、ぬ
きさす、
さしなは(指綱) 圖さしづなと同じ、さり
なは、早や繩(さ)の綱、
さしなむ(差並) 自動連(さ)なつて、互ひ

さしに、さしひ 挿 七八四
に列(さ)むでる、
さしに(差荷) 圖棒(さ)を貫して荷(さ)ひ行
く荷物のコトを云ふ、
さしにぬ(差荷) 圖物を棒に貫して、前
後より、になひ行くコト、
さしぬま(指貫) 圖務(さ)の一種、左右の
繩(さ)をふくらかせて、紐(さ)にて足へ
結び附ける物、
さしぬひ(刺縫) 圖一針技(さ)に縫(さ)コト
、布帛(さ)を幾枚も合してぬふコト、
さしにぞく(差視) 自動顔(さ)を出して、う
かひ見る、のぞきみる、
さしは(差羽) 圖昔時に於て用ひられたる
傘(さ)の如きもの、長き柄(さ)の上端
(さ)に鳥の羽毛(さ)を用ひて、大團扇
(さ)の如く張りし物、貴人(さ)の後
(さ)よりさしかけるかさ、
さしはさむ(挿) 自動物の間(さ)へはさみ
込む、胸(さ)に持つて、いだく、たより
さす、力さす、左右より持つと云ふ
意にて、たすける、
さしひき(差引) 圖さし引くコト、拂(さ)
ふべき物さ、受取るべき物さの計算を
なすコト、病人の熱が出るさ引くコト
、海(さ)の潮(さ)のみつるさ、引くさのこ
ト、

さしひく(差引) 自動引き去る、
さしひかへ(差扣) 圖さし控へてるコト、
遠慮(さ)するコト、
さしひびき(差響) 圖さしひびくコト次の
條を見よ、
さしひびく(差響) 自動響が他へつたわる
、さしさわりを來す、即ち影響(さ)す
る、
さしふた(差蓋) 圖おさしふたの綱、差
し込みて爲す蓋(さ)、
さしまねく(鷹) 自動さしづする、さよぶ、
戰場にて、軍隊を指揮しつゝ進む、我
が方へ近寄(さ)らす、
さしみ(刺身) 圖新(さ)らしき魚類の肉を、
生(さ)のまゝにて、薄く切りたる物、山
葵(さ)醬油などを附けて食ふ一種の料
理の名、
さしみづ(差水) 圖水をつぎこむコト、井
戸へ他處より水の流れ入るコト又は流
れ入る水、
さしみぼちちやち(刺身庖丁) 圖巾(さ)せ
まく、丈(さ)長くして、及(さ)の極く薄
き庖丁、刺身(さ)を作(さ)るに用ゆるに
依り此名あり、
さしむぎ(差向) 圖さしあつて、もつかい
まさ云ふ意を表す語、

さしむく(差向) 自動其の方へむく、其の
方へ心をよす、
さしむかひ(差向) 圖互ひに向ひ合つて
るコト、
さしむかふ(差向) 自動互(さ)ひに向ひあ
つて、相對して、
さしもの(刺物) 圖糸にて細かく縫ふコト
又は縫し物、即ちぬひ、
さしもの(指物) 圖木と木とを、さしちが
へて組(さ)たる家具、即ち障子、戸、机、
箱などの類、昔時戰場にて、目標とし
て用ひし、背にさせし小旗の綱、
さしもの(差艾) 圖草の名よもぎの綱、
さしもの(指物師) 圖指物細工(さ)を
する人のコト、
さしもの(指物屋) 圖指物細工を業とせ
る家、又は其の人、
さしもの(さいく) 指物細工、圖戸障子、箱、
机などの類を、こしらへるコトを云ふ、
又は其の物、
さしゆ(指矢) 圖さし添へる矢と云ふ意に
て、矢数を多く放つ時に用ゆる矢、
さしゆ(控傷) 圖くじきたる疵、
さしゆ(坐上) 圖集會の席、
さしゆ(坐乘) 圖軍艦に乗りて、艦隊の

さしづをつかさどる人、
さしゆ(嗟賞) 圖感服してほめ立つるコ
トを云ふ、甚だしくほめる、
さしゆ(鎖鑰) 圖外國をしりぞけて、交
通(さ)をせぬコトを云ふ、
さしゆ(指宿) 圖甲の地の宿屋より、乙
の地の宿屋へ、旅人を照會(さ)するコ
トを云ふ、
さしゆ(杖首) 圖柱(さ)や棒の尖(さ)が、股
(さ)に爲りて、其處(さ)に横木(さ)を載
せ得らるゝやふに、なつてゐるものを云
ふ、
さしゆ(詐取) 圖あざむきて、財物を奪(さ)
ひ取るコト、
さしゆ(又手) 圖兩腕(さ)を組(さ)み合す
コト、即ち腕組(さ)するコト、
さしゆ(坐守) 圖じつとして手出をせず
其の處を守るコト、
さしゆ(査收) 圖十分にしらべて受取る
コトを云ふ、
さしゆつ(詐術) 圖だますでだて、わるだ
くみのコトを云ふ、
さしよ(差照) 圖しらべあわす、
さしよ(詐稱) 圖官位氏名をいつはりて
このふるコト、
さしよ(査證) 圖取りしらべて證明する

さしよ、さす 剌、刺

さしよ(嗟稱)困感心(感)して、ほめそやすコトを云ふ。
さしよ(坐職)困坐つて、爲す職業のコト、即ちぬしよ、
さしよ(坐食)困何事もせず、遊びて暮してゐるコト、
さしよ(差寄)困其の方へ近づく。傍へ寄り添ふて来る。
さしれち(指料)困自分のさして歩く刀(サシ)のコトを云ふ。
さしわたり(徑)困此方(サシ)より彼方(サシ)まで直(サシ)ぐに引きたる長さ即ちわたり。直徑(サシ)のコト、
さしわたる(棹渡)困舟をこぎて水を越しゆく。さほさす。
さじん(左衽)困衣物を左前(サシ)に合すコト。野蠻人(サシ)のコトを云ふ。

(サシヤ)

さす(刺)困刺突き込む、其の内に突入る。●虫が突きて毒を入れる假令(サシ)ば蜂(サシ)がさす。●一針(サシ)抜きにして縫ふ假令(サシ)足袋(サシ)をさす。●竹の尖(サシ)にトリモチを付けて鳥を捕る。●木の枝(サシ)を

さす、さすか 殘、差、坐

切りて土へ突き込んで芽を出させる。
さす(殘)困物事を半(サシ)にて止る。物事をしのこす。しらす。
さす(差)困(自)動潮(サシ)が満(サシ)て来る、潮がさす。●太陽(サシ)の光線(サシ)が照り込む。即ち日がさす。●出来る、表(サシ)はれて来る、即ち青色(サシ)がさす。
さす(差)困(自)動其れに定めて云ふ。●物を高くへさげ上げる。●指にて方向(サシ)を教へ示(サシ)す。●物尺(サシ)にて、寸尺を測(サシ)る。●ささる。●さして行く。●將(サシ)の駒(サシ)を動かして、勝敗(サシ)を争ふ。●つける、ぬる假令(サシ)紅をさす。●つぐ、ささる。●假令(サシ)油をさす。●帯(サシ)の間に物を突き入れる。●假令(サシ)煙草(サシ)入(サシ)をさす。●さし通す、假令(サシ)青錢(サシ)を(サシ)にさす。●相手(サシ)の人に盃(サシ)を呈す、即ち盃をさす。●竿(サシ)を水の中に突き込んで、舟を動(サシ)かす、即ち棹をさす。
さす(坐)困(自)動する、其處(サシ)にゐる。●物事に關係(サシ)する。●かかりあひまなる。●管長(サシ)のコトを云ふ。
さす(刺)困(自)動刀の小さきもの、即ち短刀(サシ)のコト、

(サシヤ)

さす(坐)困(自)動する、其處(サシ)にゐる。●物事に關係(サシ)する。●かかりあひまなる。●管長(サシ)のコトを云ふ。
さす(刺)困(自)動刀の小さきもの、即ち短刀(サシ)のコト、

さすか、させう 摩 七八六

さすか(流石)困さは云ふもの、しか云ふけれども、さはさりながら。●凡て真心に馳(サシ)ざる意を表はす語。
さすのみ(刺鑿)困道具の名、つき込み、のみコトにて、柄の長さ一尺餘もあるもの。
さす(假床)困假に設けたる床(サシ)●樓敷(サシ)のコトを云ふ。
さす(刺股)困長き柄の先に、二又(サシ)に爲りし、鐵具(サシ)の附きてある物、昔時罪人を捕(サシ)ふるに用ひし具。
さすのみ(指御子)困物事の容子を其れを察するコト。●豫言者のコトを云ふ。
さす(流離)困さすらふコト、
さす(流離)困(自)動浪人(サシ)して歩く、家なくして、さまよい歩く、
さす(摩)困(自)動輕(サシ)くする、軟かくなる。こする。

(サシヤ)

させ(些少)困少しのコト。わづかなるコト。いさゝかのコト、
させ(坐礁)困船船軍艦などが、暗礁(サシ)へ乗り上げて、動(サシ)かぬを云ふ、
させ(坐席)困坐るへき場席、

させ(砂磧)困砂や小石のある原(サシ)の。●コト。●かはらのコト、
させ(挫折)困くじけてなれるコト、曲(サシ)りて折(サシ)るコト、
させ(瑣屑)困細かきコト。●些少(サシ)なる事(サシ)らのコト、
させ(左遷)困官職を下げられるコト、即ち高き官職より、低き官職に落(サシ)されるコト、
させ(差舛)困ひたがはぬコト。●そむきたがへるコトを云ふ、
させ(座禪)困靜かに坐して、心神(サシ)を安んじ、世事(サシ)は素より、人間(サシ)一切(サシ)の事を思はずに、心を安樂に保ちつゝあるを云ふ。

(サシヤ)

させ(嗚)困さだめて、さもありなむ、如何にも其の通り。左様(サシ)に。さぞかしなごさ云ふ意を表はす語、
させ(早速)困さつそく、即ち一事を爲すにぐす／＼せぬコト、
させ(座側)困すはつてるそば。●我が片脇(サシ)に云ふコト、
させ(誘)困さそふコト、さそひ出すコト、

させき、さそひ 誘、誘

させ、させす 定

させ(定)困さめる、さだまるコト、
させ(蹉跎)困ころがるコト、けつまづくコト、間違ふコト、
させ(沙汰)困官省より發する命令。●消息(サシ)おさづけれ。●うわさ、評判、
させ(左大臣)困昔時の太政官の長官の名にて、専ら宮中の事をつかさどりたるもの、
させ(左大辨)困昔時の官名宮中に仕(サシ)へて雜務に従事する役の人、
させ(茶道)困茶や湯の作法。●昔時武家に仕(サシ)へて茶の科をつかさどりし人即ち茶坊主、
させ(砂糖湯)困砂糖を湯にて、さかしたるもの、
させ(定)困(自)動然(サシ)こしてゐるコト、明らか(サシ)に知れてゐるコト、

(サシヤ)

させ(定)困さだめて、さもありなむ、如何にも其の通り。左様(サシ)に。さぞかしなごさ云ふ意を表はす語、
させ(早速)困さつそく、即ち一事を爲すにぐす／＼せぬコト、
させ(座側)困すはつてるそば。●我が片脇(サシ)に云ふコト、
させ(誘)困さそふコト、さそひ出すコト、

させ、させす 定

させ(定)困さめる、さだまるコト、
させ(蹉跎)困ころがるコト、けつまづくコト、間違ふコト、
させ(沙汰)困官省より發する命令。●消息(サシ)おさづけれ。●うわさ、評判、
させ(左大臣)困昔時の太政官の長官の名にて、専ら宮中の事をつかさどりたるもの、
させ(左大辨)困昔時の官名宮中に仕(サシ)へて雜務に従事する役の人、
させ(茶道)困茶や湯の作法。●昔時武家に仕(サシ)へて茶の科をつかさどりし人即ち茶坊主、
させ(砂糖湯)困砂糖を湯にて、さかしたるもの、
させ(定)困(自)動然(サシ)こしてゐるコト、明らか(サシ)に知れてゐるコト、

させ、させす 定 七八七

させ(定)困さだめて、さもありなむ、如何にも其の通り。左様(サシ)に。さぞかしなごさ云ふ意を表はす語、
させ(早速)困さつそく、即ち一事を爲すにぐす／＼せぬコト、
させ(座側)困すはつてるそば。●我が片脇(サシ)に云ふコト、
させ(誘)困さそふコト、さそひ出すコト、

ざたん(嗟嘆) 図なげくコト、
ざたん(座談) 図席上にての物語、
ざたん(詐証) 図だます。いつはる。あざむくコト、

(ざんざん)

ざち(幸) 図さひわひ。しやわせ、
ざち(挫) 図戦争に負(つ)るコト。戦ふて敗(た)れるコト、
ざちゆち(砂柱) 図沙漠(さばく)に旋風(せんぷう)の起りて、砂を巻き揚げて、生じたる砂の柱(はしら)のコト、
ざちゆち(座中) 図集會(あひまひ)酒宴(しゆゑん)等の座敷の中(なかに)役者(やくしや)や遊藝人(ゆうぎにん)の仲間(なかに)のコトを云ふ、
ざちゆみ(幸弓) 図狩獵(かり)に用ゆる弓のコトを云ふ、
ざちん(砂塵) 図すなほほこりさ、

(ざんざん)

ざつ(刷) 図清(せい)めて美しくする。はらいのける。ふく拭(ふ)ふ。けづる。す。こする、

ざつ(撒) 図又たさんとも讀む、まく。まき

ざつ、ざつえ、察、殺、利、撮、抄、冊、札、雜

ちらす。ちらばす、

ざつ(察) 図考(かう)へるコト。知るコト。明(めい)かなる。つまびらかなる。くわしき。いちちるしき、

ざつ(殺) 図ころすコト。からすコト、枯(かわ)るコト。そぐ。なきたつ。火(ひ)にかけて焼く。ちらかす。ちらす。はらふ。ほるはす、

ざつ(利) 図寺(てら)のコト。柱(はしら)。非常(ひじょう)に短(みじ)かき時間を云ふ、即ち其の途端(とたん)に云ふ。云ふ。表(あらわ)すに用ゆる語、例(れい)は。一利那(いちりな)、

ざつ(撮) 図にぎら。つまむ。さる。うつす。まさめる。あつめる。あつまる。升目(しやうめ)の名、

ざつ(抄) 図及(およ)びし近く、即ちせまるコトを云ふ、

ざつ(冊) 図接尾(けいび)書籍(しよき)などを數(かず)ふるに用ゆる語。即ち二冊(にさつ)三冊(さんさつ)など、

ざつ(札) 図ふだ。紙幣(しへい)。文書(ぶんしよ)、
ざつ(雜) 図まさつてるコト、單純(たんぜん)ならぬコト。こま。まじり。こま。あらさ。コト。あまつのコト、

ざつえい(撮影) 図姿(すがた)をうつし取るコト、又はうつし取りたる物、寫真(しやしん)をうつすコトを云ふ、

ざつこく(雜殺) 図いろ／＼の殺類(ころ)の

を云ふ、

ざつごん(雜言) 図漢詩(わんし)の一種、五言七言等の語數(ごごんしちごん)の交(まじ)りて、成り立つて、漢詩(わんし)のコトを云ふ、

ざつごころる(雜穀類) 図穀類(こく)中の、豆(まめ)類、蕎麥(そば)及び胡麻(ごま)等の類(るい)を云ふ、

ざつさう(雜草) 図いろ／＼の草(くさ)のコトを云ふ、

ざつさく(雜錯) 図混(まじ)りつてるコト、

ざつさつ(風風) 圖秋(あき)の風の吹く聲、

ざつさん(雜纂) 図いろ／＼なる事實(じじつ)を、かき集(あ)めたるもの、

ざつし(察) 図さつするコト、

ざつし(冊子) 図書物(しよぶつ)のコト。さじたる本のコトを云ふ、

ざつし(刷紙) 図印刷(しよつ)に用ゆる紙、印刷紙(しよつし)のコト、

ざつし(殺死) 図人を殺すコト、

ざつし(雜誌) 図種々の事を一まとめにして記したる書物、月に何回も其の回数(かいすう)を期日(きじつ)を定めて、發行(はつぎん)する冊子(さつし)、

ざつじ(雜事) 図いろ／＼の、細き事、さまざまを云ふ、

ざつえい(雜詠) 図種々なる物事を詠(えい)たる和歌、

ざつえち(雜術) 図種々(しゆしゆ)な賦役(ふじやく)の

コトを云ふ、

ざつかり(刷行) 図書物(しよぶつ)や雜誌(まじ)を、印刷(しよつ)して賣り出す、即ち出版(しよばん)、

ざつかり(雜考) 図さまざまなる考へ、種々(しゆしゆ)交りたる證據(しよこ)の

ざつかり(授) 図さづかるコト、

ざつさ(阜月) 図陰曆(いんれき)の五月(ごご)の別名、

ざつさ(先穆) 図さきのほど、

ざつさ(殺氣) 図あららしき氣、たげき氣、さつばつなる氣、

ざつさ(雜記) 図種々(しゆしゆ)の事實(じじつ)を、(しよ)を、記(しよ)すコト、又は記したるもの、又は記したる書物の稱、

ざつさ(雜器) 図種々なる器物(しよぶつ)に物を奉る時に盛(も)てる白木製(しろきせい)の壺(か)や、又は白木製(しろきせい)の神酒(かみ)の口、

ざつさ(座附) 図芝居(しばい)の語、其の座(ざ)に附(つ)いてるコト、假令(かじやう)ば座附(ざづ)の役者(やくしや)、座附(ざづ)の茶屋(ちや)席(ま)にて藝者(げしや)が最初(さいしよ)に唄(うた)ふ、祝儀(いはひ)の歌(うた)、

ざつさ(早急) 圖非常にいそぐ。さつぜ

ん、にわか、

ざつきよ(雜居) 図いろ／＼の人の混(まじ)りて、一ヶ所に住(す)む居るコト。異(い)なりたる人種(にんしゆ)の、入り混(まじ)りて住(す)む居る、即ち内地(うち)雜居(ざきよ)など、

ざつきばな(五月花) 図木(き)の名、山(やま)うづきのコトを云ふ、

ざつきやみ(五月闇) 図梅雨(つゆ)のやみのコトを云ふ、

ざつきんざい(殺菌劑) 図ばいきんを殺して、其の害(がい)を去(い)る薬物(やくぶつ)の總稱(そうせう)、

ざつぐ(授) 圖動(うご)かす、あたえる、わたす、つたへる、

ざつぐ(雜具) 図いろ／＼の道具(どうぐ)、

ざつぐる(授) 圖動(うご)かしたる、たまふ、渡(わた)す。教(おし)える。すく。つたへる。さつぐ。知らせる、

ざつぐわ(雜貨) 図色々の貨物(かぶつ)、

ざつぐわ(擦過) 図こするコト、かすれるコト、

ざつぐわてん(雜貨店) 図種々の貨物を商(あ)ふ店、西洋(せいやう)小間(せま)物店、

ざつぐい(雜藝) 図種々なる技藝(ぎぎ)色々のなる遊藝(ゆうぎ)、

ざつげん(雜件) 図いろ／＼の物事(ものごと)の

を云ふ、

ざつこく(雜殺) 図いろ／＼の殺類(ころ)の

を云ふ、

ざつごん(雜言) 図漢詩(わんし)の一種、五言七言等の語數(ごごんしちごん)の交(まじ)りて、成り立つて、漢詩(わんし)のコトを云ふ、

ざつごころる(雜穀類) 図穀類(こく)中の、豆(まめ)類、蕎麥(そば)及び胡麻(ごま)等の類(るい)を云ふ、

ざつさう(雜草) 図いろ／＼の草(くさ)のコトを云ふ、

ざつさく(雜錯) 図混(まじ)りつてるコト、

ざつさつ(風風) 圖秋(あき)の風の吹く聲、

ざつし(察) 図さつするコト、

ざつし(冊子) 図書物(しよぶつ)のコト。さじたる本のコトを云ふ、

ざつし(刷紙) 図印刷(しよつ)に用ゆる紙、印刷紙(しよつし)のコト、

ざつし(殺死) 図人を殺すコト、

ざつし(雜誌) 図種々の事を一まとめにして記したる書物、月に何回も其の回数(かいすう)を期日(きじつ)を定めて、發行(はつぎん)する冊子(さつし)、

ざつじ(雜事) 図いろ／＼の、細き事、さまざまを云ふ、

さつせ、さつた

さつせら(雑税) 図いろいろの種類の税
さつせら(殺青) 図書物の異名
さつせい(殺生) 図殺生(サツシ)に同じ其の條を見られよ
さつせつ(雑説) 図様々の意見を述べたるコト、又は其の意見
さつせん(風然) 圖風のすさまじく吹く状態に云ふ語
さつそく(早速) 圖すみやかに、早く、すぐたゞいまのコト
さつそつ(雑卒) 圖兵士のコト
さつた(薩埵) 圖佛教の語にて、ぼさつ(ト)を云ふ
さつた(雑多) 圖種々、入り亂(カ)れて、交(カ)つてるコト
さつた(雑題) 図いろいろの仕方に依つて、説き明かす算術(サツ)なぞの問題
さつばり(殺別) 図つぎがたき物を入れ合したる名題のコト
さつた(察當) 圖無法(カ)きわまるコト
さつた(殺到) 圖勢いするごとく進んで來

さつた、さつひ 風、雜

さつた(雑香) 図こんざつするコト。人の多くむらがり、あつまるコト
さつち(察知) 圖能く物事を、おしきわめて知るコトを云ふ
さつちゆりやく(殺虫薬) 圖害虫を殺す薬劑
さつと(風) 圖にわか、だしのけに風などの吹くに云ふ
さつと(雜) 圖あらし、おほかた
さつと(撮土) 圖少し許(カ)りの土のコト
さつと(札版) 圖ふだ、かきつけ、一寸さしたる手紙
さつば(薩津波) 圖こぼの如き小魚を云ふ、多くは干物(カ)とせる物の稱
さつばら(雜報) 図色々の出来事の知らせ又は知らせるコト
さつばく(雜駁) 圖物事の入り亂(カ)れて、めちやめちやになる
さつばつ(殺伐) 圖殺(カ)すコト、害(カ)なふコト、
さつばん(刷版) 圖いんさつ版
さつひ(雜費) 図いろいろ、細々しき事の費用のコト

さつひ、さつま

さつひつ(擦筆) 圖擦筆(サツヒツ)を描(カ)く時に用ゆる、一種の筆にて、多くは吸取紙を細く巻(カ)いて、筆の如き形に爲したるもの、又中には鹿革(カ)を巻き筆の如く爲せしもあり
さつびん(雜品) 図いろいろの品物のコトを云ふ
さつぶつ(雜物) 図いろいろの物
さつぶち(殺風景) 圖風雅(カ)ならぬコト、興(カ)のさめたるさま、興をさませるコトを云ふ
さつま(薩摩) 圖さつまやき、又はさつま餅(カ)の略語
さつまい(薩摩語) 蔓草(カ)の名、其の葉は心臓形にして大きく、且つ柄(カ)あり、花は漏斗(カ)の如き形を爲して、紫色を呈す、其の根は肉(カ)殊に多く、大切なる食品なり
さつまいり(薩摩炒) 圖菓子的一种、いりたる米に、さつま薯(カ)を細かく切りて揚(カ)たる物を加へ、醬油と砂糖とにて和えて、固(カ)まらせた物を云ふ
さつまげた(薩摩下駄) 圖下駄(カ)の一種、たけの高き巾(カ)の廣き胸下駄(カ)の稱
さつまじる(薩摩汁) 圖一種の料理、鳥の肉又は豚(カ)の肉を細かく切りたる物

さつま

に、人参(カ)午芎(カ)大根等を細かく切りし物を加えて、煮きたる味噌汁(カ)を云ふ
さつます(薩摩杉) 圖大隅國の屋久島(カ)に産する杉、節(カ)多くして、木理(カ)の殊に美しきもの
さつまひ(薩摩琵琶) 圖琵琶の一種にて其の言の悲壯(カ)なるもの
さつまふし(薩摩節) 圖薩摩の國より製出するかつをぶし
さつまやき(薩摩焼) 圖陶器の一種、薩摩國苗代川地方より産出する物にて、黒き地色に、金銀丹朱等にて、模様を表はしたる上等の物にて、鉢(カ)ひび焼に類す
さつまかすり(薩摩飛白) 圖織物の名、紺地(カ)に白にて、かすりを織り出したる木綿織物、其の紺染の殊に上等なるもの、其の名頗る表(カ)はる
さつまこく(薩摩國府) 圖薩摩より産出する、上等の煙草葉(カ)の名
さつまいも(薩摩芋) 圖さつま薯(カ)蒸米(カ)と製して製したる甘き酒
さつまいち(薩摩上布) 圖織物の名、麻系(カ)を精製して、藍(カ)にて染めたる上等の夏期用の衣服地なり、薩摩よ

さつま、さつて

り産するに依り、此の名ありと云ふ
さつまろち(薩摩蠟燭) 圖魚油を以て製したる下等の蠟燭を云ふ
さつむ(雜務) 圖種々の仕事、細々しき事務(カ)のコト
さつりく(殺戮) 圖むごたらしく殺すコト
さつりよ(雜慮) 図いろいろな考へ、いろいろの思案のコト
さつりやく(殺掠) 圖人物を殺して、物品を奪ひ取るコトを云ふ
さつりやく(殺略) 圖人を殺して財物を取るコト
さつわ(雜話) 図色々入り亂(カ)れてる取り止めなき話
(カ)

さつて、さつて

て、確(カ)と定(カ)めるコト
さつていあん(査定案) 圖十分に取り調べて定めたる案文
さつてい(左提有掣) 圖兩手に物を下げ持つコト
さつてお(扱置) 圖其のまゝにして置く打ちすて、置く
さつて(扱扱) 図さつてもさつても
さつて(蹉跌) 圖けつまずき、しそんじ、やりそ、こないのコト
さつては(扱) 圖或る語の上に附け加へて、改(カ)ためる意を表はすコト、さては出掛(カ)やふかななど
さつて(扱) 図そんなら、左様(カ)なれば、然(カ)らばなど
さつてん(茶店) 圖葉茶(カ)を賣る店
さつてん(鎖店) 圖店を閉(カ)るコト
さつてん(鎖店) 圖店を閉(カ)るコト
(カ)を止るコト
(カ)

され、さい、實、鯖、澤

さね(實) 図核(サ)に同じ其の條を見(シ)られよ。
さね(小艇) 図れるコト眠るコト。
さねかづら(實葛) 図草の名、生垣(サ)などに生ずる蔓草の名。
さねふと(核太) 図果物(サ)の種の太(シ)き物を云ふ、果物の名棗(サ)の一名、

(サネハ)

さば(鯖) 魚の名、大き四五寸より、一尺六七寸に達す、脊(サ)は青色にて、腹へ行くに従つて、次第に薄くなる、腹は殆ど白色なり、尙ほ脊に黒き數多の斑點(サ)あり。
さば(澤) 図平地より一段低(サ)くして、水草生じ、且つ水ある處を云ふ、物の數の多きコトを云ふ語。
さば(婆) 図しやばの訛りにて、此の世浮世(サ)云ふコト。
さばい(坐拜) 図坐(サ)つて、挨拶(サ)を爲す、禮式(サ)のサ、
さばい(差配) 図人々の執(サ)る事務(サ)を監督(サ)するコト、地主又は家主に代りて、其の借地借家の取締(サ)をなす

さばい、さばく 捌

さばいばん(差配人) 図土地家屋等を、其の所有主に代りて、取り締(サ)つて人さばち(詐妄) 圖あざむく、うそ。
さばかり(然許) 圖是れしき、是れ位、是れほど。
さばがめふし(鯖魚節) 図鯖の肉をかつほぶしの如く、製造せるもの。
さばき(捌) 圖物事の是非(サ)を定(サ)るコト、亂(サ)れたる物事(サ)の仕末(サ)を附けるコト、商品(サ)を賣り拂ふコト、仕事(サ)のこなし。
さばきり(多勢) 図秋(サ)の別名。
さばきがみ(捌髮) 圖女の髪を解きて、パラにせるもの。
さばく(捌) 自動打ちさける、賣れてしまふ、わけ離れる、無理(サ)を云はぬ、物事の能く分(サ)る。
さばく(捌) 自動商品を賣てしまふ、混入つたる物事の仕末をなす、是非の區別(サ)を明かに立てる、仕事をはかざりよくなす。
さばく(沙漠) 圖極(サ)めて廣き砂原(サ)のサ、コトをいふアジヤ、アフリカなどの、内地に在り。
さばく(佐幕) 圖幕府を助(サ)ける。幕府に

さばく、さばよ 弄、酬、睡 七九四

味方するコト、
さばくる(弄) 圖動もてあそぶ、なぐさむ、おもちゃさす。
さばけ(捌) 圖品物の賣れてしまふコト、物の解け離(サ)るコト、物事の定(サ)をつけるコト。
さばけかた(捌方) 圖商品の賣れ方、商品を賣り盡す方法のサ、
さばしる(狭走) 自動はしる、かける、板(サ)を腹(サ)に當て、水上を泳ぎ走る、さばしがき(誦柿) 圖誦柿(サ)の誦を去りたる實(サ)を云ふ。
さばす(誦) 圖水につけて物を白くす、誦柿(サ)を誦(サ)して其の誦をぬく、
さばす(澤田) 圖水の多き田地(サ)、
さばなざつぎ(早花咲月) 圖陰曆の三月の別名。
さばは(澤) 圖多く、たくさん云ふ意を表はすに用ゆる語。
さばふ(作法) 圖さようきのコト、
さばへ(五月蠅) 圖陰曆の五月頃に出る、多き蠅(サ)、轉じて、うるさき事、さばがしきコト。
さばめく(誦) 自動さわく、
さばよみ(誦讀) 圖物の數量(サ)を許(サ)はりて、利益を貪(サ)るコト、

さばら(椹) 圖木の名、植物學上、松や杉の部類に屬す、葉は細かくして光澤(サ)あり、幹(サ)の下の方には、葉群(サ)り生(サ)じて、多けれど、上の方には少し、又た豌豆(サ)の如き圓き種を結ぶ、其の木材(サ)は、櫃(サ)等の日用器具を製するに用ひらる、

(サバク)

さばら(鱈) 圖魚の名、海に産す、形細く長くして、其の大なる物は、三尺内外に達す、全身(サ)に細かき鱗(サ)あり、頭(サ)は短かくして、光(サ)り、脊は青くして一面(サ)に、淡(サ)黒き斑(サ)あり、腹部は稍や白し、其の肉(サ)は頗る美なり、

さばり(障) 圖さしつかへ、さまざま、病氣(サ)に爲る、女子の月やくのサをいふ、

さばり(綱) 圖物にふる、コト、物に手をさえて、熱(サ)いさか冷(サ)たいさを巧みに感(サ)じ知るコト、義太夫(サ)の文中の、極(サ)めて巧みに感(サ)つてある部をいふ、

さばり(響銅) 圖合せて製したる金屬(サ)にて、銅(サ)十分に、錫(サ)鉛(サ)を二分づ、合して製せる物、

さばる(障) 自動さしつかへる、じやまにさばら、さばる 椹、障、障、綱

さばる(病氣) にかゝる、
さばる(觸) 自動手にて物をいぢる手を物にあてる、

さび(錆) 圖金屬(サ)の表面の酸化(サ)するコト、惡(サ)き習慣(サ)のサ、草や器物などが古くなりて、自然(サ)に一種名状すべからざる趣味(サ)を呈せるコトを云ふ、景色(サ)などの一種名状すべからざる趣きを呈するコトを云ふ、

さび(寂) 圖錆の、同じ、
さび(荒) 圖年數を経(サ)たるコト、古くなりて、其の趣きを變(サ)たるコトを云ふ、

さび(瑣尾) 圖末(サ)の方、すそ。
さびいろ(錆色) 圖鐵のさびたる如き色、即ちうすき茜色(サ)、
さびかたな(錆刀) 圖及(サ)のさびてなまくらさなりたるもの、

さびこゑ(荒聲) 圖遊藝人などが、歌をうたひつけてるために、聲の太(サ)くなりしコトを云ふ、
さびし(淋) 圖にきやかならず、さかんなさばる、さびし 錆、寂、荒、淋

さびぬり(錆塗) 圖さび色にぬるコト、
さびる(錆) 自動さびがでる、さびつく、
さびる(荒) 自動さびれる、さびれて来る、
さびれ(荒) 圖古(サ)びる、をさるる、あれはつる、貧しくなる、

さび(挿) 圖差し入れる、差し込む、さす、
さび(杖) 圖杖(サ)のサ、
さび(劔) 圖小形(サ)の劔(サ)、即ち手ば、のサを云ふ、

さび(簾) 圖扇(サ)のサ、
さび(颯) 圖烈(サ)しく吹きすさぶ風のサ、
さび(嗟) 圖吸(サ)ふ、す、水鳥の餌(サ)を、ついでむを云ふ、

さび(誦) 圖器具の名、すきのサ、
さび(障) 自動ふせぐ、さへきる、ささはる、
さびつ、さぶ 挿、劔、颯、障 七九五

さふ、さふる 荒、籍、淋、候、侍

さふ(荒)自動甚だしく古くなる。うつり行く。あれてかわりゆく。

さふ(籍)自動さびる。

さふ(左府)固官名、左大臣のコト。

さふし(淋)固さびしきのなまり。

さふとん(座蒲團)固坐(ま)る時に、足を載せる。二尺四方内外の小布團のコトを云ふ。

さふらふ(候)自動さむらふに同じ。

さふらひ(侍)さむらひに同じ。

さふらん(泊夫藍)固草の名、赤き五瓣(び)の花を咲かす。一種の香ありて、薬用を爲す。

わふらんしゆ(泊夫藍酒)固一種の混成酒にて、サフランと茴香(ふ)を煎したる汁を、焼酎に混ぜて砂糖を入れて製せるもの。

さふらふふん(候文)固普通の手紙の文のコト。

さふらひあらべ(侍童)固小姓(こ)のコトを云ふ。

さふりり(佐分利流)固佐分利重隆と云ふ人の、工夫せし権術の一派の稱。

さふるま(座振舞)固其座席にて、馳走するコト。

さへき、さほし 遮、囀

(さへき)

さへきる(遮)自動ふさぐ。ささふ、じやます。さまたげる。まぢふせして撃つ。

さへづり(囀)固鳥のかまびすしく鳴(な)くコト。口やかましく、しやべるコト

さへづる(囀)自動鳥がやかましく鳴く。ベチヤベチヤしやべる。やかましく俗歌(うた)なうたふ。

さべつ(差別)固わかち、しな、分別(べつ)是、非、善悪の區別(べつ)。

さへのかみ(道祖)固道路を守らせらるるさ云ふ神のコト。

(さほし)

さほし(坐忘)固靜(じや)かに坐して、人事を考へずして、心を樂(たの)しましむコトを云ふ。

さぼり(座傍)固すはつてる、其のそばのコト。

さぼり(詐謀)固いつはりのはかりごま、だますたて。

さぼし(座星)固兜(た)の鉢(は)に打ち付

さまた、さま様 七九六

さまた(早稲田)固早く熟(ま)する稻を植

てある星の如き形をなせる鉄(てつ)のコトを云ふ。

さぼてん(霸王樹)固木の名幹は平つたくして緑色を呈し、夏期に黄紅色の花を咲すもの。仙人掌の名あり。

さぼど(左程)固それほご、そんなにそのやうにの意を表す語。

さほひめ(佐保姫)固春の神のコトを云ふ

さぼん(朱欒)固木の名、蜜柑(みかん)の一種木及び葉共に類する蜜柑に類す、其果實(は)は頗る大きくして、丸く、其の皮の色は黄色にして、其味(あじ)は非常に酸(す)りけれども、四國九州等の暖地(ぬる)に産(う)する物は、其の形稍や平(ひら)くして、味も亦た酸(す)からず、且つ一種の香氣ありて、味頗る美なりと云ふ。

さま(様)固其の有様(よう)をさして、の、しるに用ゆる語。

さま(様)固物事の成(なり)たる容子、即ちありさまのコト。

さま(様)固(接尾)人の姓名の下に、附け加

(さま)

をさせる糸、一二三と大きに三種あり、生糸(なま)をより合せて、薄糊(うす)を黄色に染めし物。

さみせん(三味線草)固田野(の)に自生する一種の雜草にて、ペンペン草のコト。

さみせんごま(三味線駒)固三味線の糸をはるべく、胴(た)の方にて、糸の下に置くもの名。

さみせんどう(三味線胴)固桐の木にて、四角に作り、両面に猫の皮をはりしもの。

さみせんひき(三味線弾)固三味線を巧みにひく人。

さみだれ(五月雨)固陰曆の五月頃に降り

つづく雨、即ちつゆ(梅雨)。

さみだれかみ(亂髮)固女の髪の毛の亂れるコト。亂れてある毛。

さみどりつき(早緑月)固陰曆の正月の別名。

さむ(覺)固眠(ね)より起る、迷(まよ)り離れる。

さむ(覺)自動熱を失ふ、つめたくなる、さむ(醒)自動酒の酔(よ)が無くなる。

さみせ、さむ 覺、冷 七九七

えて、敬意を表はすに用ゆる語。

さま(方)固其のむき其の様子(よう)を表はす語、假令ば横さまになご。

さま(狭間)固物と物との間の、極(た)めて少なくすいてるを云ふ。

さまがはり(様變)固有様の以前と變つて

るコト。

さまたま(様様)固思ひ思ひ、

さまたす(醒)自動酒(さ)をなくせ

る。

さまたす(冷)自動ひやす、つめたくする、

熱(あつ)を奪(は)ひ去る、

さまたす(覺)自動眠より起る、目をさます、

目がさめる。

さまたす(消)自動面白(おもしろ)みの失(し)せる、

さまたぐ(妨)自動さわりがある、じやま

をする、害をなす、

さまたげ(妨)固さまたぐるコト、

さまたつ(瑣末)固極(た)めて僅(ち)かのコト

甚しく少しのコト。

さまつ(早松)固早松竹(はやまつ)の略にて、陰

曆の五月頃に出る、松茸(まつたけ)のコトを

云ふ、

さまつ(横付)固人の氏名を、呼ぶに尊

(た)びて横さま云ふ字を、つけるコトを

云ふ、

さまつたけ(早松茸)固五六月の頃に出る

松茸(まつたけ)を云ふ、

さまで(然迄)固其れほごまでに、さほご

までに、

さまのかみ(左馬頭)固昔時宮中に在る馬

に關する役所の長官のコトを云ふ、

さまよふ(彷徨)自動何の的(め)もなく歩

きまはる。思案にこまる、工夫がつか

ぬ。

さまれり(左馬寮)固昔時宮中に在りし、

馬を飼ひ、又た馬に關する事務を、取

り扱ひし役所の名、

さみ(三味)固三味線(さんまい)のコトを洒落

(せ)て云ふ語、

さみし(淋)固さびしきなり、まづしきな

り、困難してあり、

さみす(輕侮)自動又た貶(おとし)の字を用ゆ、い

やしむ、あなごる、馬鹿にする、

さみせん(三味線)固俗曲に用ゆる樂器の

一種、猫(ね)の皮を張りたる方形の胴に

長き棒(ぼう)をつけ、絲(いと)を三筋(さん)につけ

たる物、ばちにて弾(う)きて音を發す、

さみせんと(三味線絲)固三味線の音

を云ふ、

さみせ、さむ 覺、冷 七九七

さむ(消)自動面白く無くなる、面白味(おもしろ)がうせる。
 さむ(褪)自動色がわるくなる、色がはげる、光澤(ひかり)が無くなる。
 さむ(瑣務)一寸さしたつさめ、いささかなるつさめのコトを云ふ。
 さむかせ(寒風)図冬の寒き、北風のコトを云ふ。
 さむけ(寒氣)図寒(やま)を感じる。●身體(からだ)に熱(あつ)を出して、寒むく心地のあしきコトを云ふ。
 さむけし(寒)図さむし●さむそうなり、さむけたり(寒氣立)自動熱(あつ)出て、さむけを感じる。
 さむざ(寒)さむき、冷(ひや)るコト。
 さむし(寒)図寒くあり、さむまつよし。
 さむしろ(狭縫)图中(ちゆう)のせまきむしろのコトを云ふ。
 さむそら(寒空)図又た寒天(かんてん)も書く、冬の寒くかんする空の容子。
 さむぬる(去)圖過ぎ去りたるコトを云ひあらはすに用ゆる語。
 さむらひ(侍)圖武士のコト●昔時身分たかき人の傍(そば)にはんべつて、用事を勤めたる人のコト。
 さむらひ(候)自動さむらふに同じ。

さむらひ(侍)圖一名をよこさびと云ふ、昔時身分低きもの、被りしえほうしにて、頂(かぶ)にて三角形に折られあるもの。
 (さむらひ)

さめ(鮫)圖海に棲む魚の名、其の大なる物は一丈餘に達(いた)す、鱗(うろこ)は圓くして長く、尾に至(いた)つて尖(とが)むる、尾の尖(とが)及び其の鱗(うろこ)は、宛然(あつせん)及(およ)びの如し、皮(かわ)は極めて疎(うす)くして、一面に疣(うぶ)の如き物生ず、この魚は其の性荒(あつ)くして、海中に在る人も、亦た時に捕(とら)へて食ふコトあり、其の肉(にく)は食料となり、其の皮は乾(かわ)かして、研(ひ)物なすに用ひらる。
 さあ(雨)圖あめのコト。
 さめ(白眼)圖馬の兩眼の白きコト。
 さめいし(鮫石)圖鮫の皮の如く、其面の粗雑なる石のコトを云ふ。
 さめかみ(鮫貝)圖貝の一種、形細長くして鮫のひれの如き小きき物の左右に突き出である貝。
 さめざめ(潜潜)圖なみだをこぼして泣くさまを云ふ語。

さめざめ(鮫鮫)圖鮫の皮を巻きたる刀のさやのコトを云ふ。
 さめのあぶら(鮫油)圖鮫のあぶら肉より取りたる魚油のコト。
 さめはだ(鮫肌)圖鮫の皮の如く、サラザラして肌(かわ)のコト。
 (さめざめ)

さもし(鄙劣)圖いやしきなり、つたなきなり、あさましきなり。
 さもじ(左文字)圖刀の銘(なづ)に、正宗(まさむね)の弟子(でし)の、左衛門三郎(ざゑもんざぶろう)云ふ人の鍛(か)し物なりしと云ふ。
 さもと(座元)圖芝居(しばい)其他興行場(きぎやうば)の持ち主(も)のコトを云ふ。
 さもも(早桃)圖なつ桃(なつもも)五月頃(ごがつごころ)に實(み)の熟(う)する李(なし)の稱(なづ)。
 さもにたり(髯鬚)圖能く似てある。そのまゝなりと云ふ意。
 さもあらば(逃莫)圖されば。どうあらふとも。そんなら。
 さもん(左門)圖昔時の官名、左衛門の略語なり。
 (さもん)

七九八

七九八

七九八

七九八

さや(鞘)圖刀の身(み)に入れるもの●凡て及物類(あつぶつるい)の身を包む具(ぐ)●筆(ふで)の穂(ほ)にはめて置くも。
 さや(莢)圖凡て豆類(まめ)の實(み)の入(い)つてる袋(ふくろ)のコトを云ふ。
 さや(紗綾)圖織物の名、薄き絹織物(きんぬ)の地に、種々の模様(ようばう)を表(あらわ)したるもの。
 さやあて(鞘當)圖昔時、武士が道中(みちな)にて、刀のこじりを互(たが)ひにあて合(あ)ひて喧嘩(けんか)をなせしコト●一人の女子を二人の男子が、互(たが)ひに手に入れんと争(あら)ひ合(あ)ふコト。
 さやいんげん(莢腰豆)圖莢(まめ)に入(い)つてるままの腰豆(こし)のコト、即ち未だ充分(じゅうぶん)に實(み)の入(い)らぬ物。
 さやえんどろ(莢腰豆)圖莢(まめ)に入(い)つてるままの腰豆(こし)のコト、即ち莢のまま煮(に)きて用ゆる小(こ)さきもの。
 さやか(分明)圖たしかに明(あ)きかなるコト、又は判然(はんぜん)せる状(じやう)を云ふ。
 さやく(坐樂)圖樂の名、肛門(こうもん)より腸(ちゆう)内(ない)へ差(さ)し入れる薬(くすり)。
 さやく(鎖鑰)圖錠(じやう)と鍵(かぎ)の(かぎ)のコト●轉じてしまりの城壁(じやうへき)邸宅(てい)なごの内部へ、入り行くべき大切(たいせつ)なる

關所(せきすう)。
 さやくち(鞘口)圖刀のさや、上の方の口のコトを云ふ語。
 さやわけ(分明)圖あきらかなり、はつきりせり。判然(はんぜん)せり。
 さやし(鞘師)圖刀(やいば)の鞘(さや)を作(つく)る職人(しやくじん)のコトを云ふ。
 さやぢり(鞘走)圖さやばしる、半(はん)ば鞘(さや)よりぬけ出(で)る。
 さやま(狭山)圖小(こ)さき山(やま)のこやま。
 さやま(鞘卷)圖刀の柄(えい)と鞘(さや)を糸(いと)にて巻(ま)き漆(うるし)を塗(ぬ)りしもの●つばの無(な)き短刀(たんば)に、下緒(げじゆ)を巻(ま)きつけて、つばとして、腰(こし)にさせしもの、コトを云ふ。
 さやめ(莢豆)圖莢(まめ)の中(ちゆう)に入(い)つてる豆(まめ)。
 さやめ(蠟)自動風吹きて、まわんする。風(かぜ)がさわつく。
 (さやく)

さゆ(五)自動ひゆる、あざやかになる。さゆる。
 さゆ(白湯)圖飲料水をわかしたるもの、即ちしらゆのコト。
 さゆり(座右)圖此の座の右の方、我が座(ざ)の側(わき)のコトを云ふ。
 さゆり(小百合)圖草の名ゆり。
 (さゆり)

さよ(小夜)圖夜のコトを云ふ。
 さよあらし(小夜嵐)圖夜あらし。
 さよち(作用)圖一つのはたらきを起すコト●一つのはたらきをいさなむコト、假令(たと)ば胃(い)の作用(さよう)さ、酒(さけ)の作用(さよう)などの如し。
 さよちげん(作用言)圖はたらきを表はす語、即ち動詞(どうし)のコト。
 さよく(砂浴)圖海濱(うみづら)の白砂(しろ)が、太陽(たいやう)の光線(こうせん)にて、自然(じぜん)に熱(あつ)せられたる物の中に、入(い)つて身體(からだ)を温(ぬ)むるコトを云ふ●化学(かがく)上の語にて、硝子壺(びやう)を温(ぬ)める爲めに用ゆる具(ぐ)にて、鐵(てつ)にて作(つく)られたる皿(わ)の中に、砂(すな)を盛りし物。
 さよく(坐浴)圖腰湯(こしゆ)のコト。
 (さよく)

七九九

七九九

七九九

七九九

さくま、さら 新

さよく(左翼) 固本隊の左に在る一部隊、
 即ち本隊の左備(左翼) 隊列(左翼)の左
 側のコトを云ふ。
 さよくだい(左翼隊) 固本隊の左の方に控
 へてる軍隊(左翼)のコト。
 さよごるも(小夜衣) 固夜分に着る衣物、
 即ちれまき。
 さよしどれ(小夜時雨) 固夜降る小雨のコ
 トを云ふ。
 さよすがら(終夜) 固夜もすがら。夜ごう
 しのコトを云ふ語。
 さよなな(小夜中) 固まよなか、しんの夜
 中のコトを云ふ。
 さより(針魚) 固海に産する魚の名、體は
 細く圓く、稍や平(平)く、長くして脊
 (背)は淡黒(淡黒)く、腹(腹)は銀色(銀色)を
 呈す、體の長さ一尺内外にて、眼(眼)は
 殊に大きく、下顎(下顎)は非常に長くし
 て、且つ鋭(鋭)く、其の棘(棘)は不様
 (不様)なり。
 さよまくら(小夜枕) 固枕のコト。
 (suyoku) 固あたらしきコト、しんきのコ
 トを云ふ。

さらし、さらし 皿、籠

さら(皿) 固食物を盛る器物の名、淺く平
 (平)たき陶器(陶器)を云ふ。
 さらいぼつ(再来月) 固來月の又た來月の
 コトを云ふ。
 さらいねん(再来年) 固來年の又た來年の
 コトを云ふ。
 さらがみ(粗紙) 固さらしたる西洋紙
 即ち新聞の紙などを云ふ。
 さらがへる(更返) 固動あたらまりて、以
 前(前)の狀に立ちかへる。
 さらざ(更紗) 固模様の名、金巾(金巾)に
 種々の模様を型(型)にて、美(美)くしく
 押し染め出したるもの。
 さらさら(更更) 固かりにも、少しも、ゆめ
 にも、斷(断)じて云ふ意。
 さらざがた(更紗形) 固さらさ模様の如き
 形を云ふ。
 さらざがみ(更紗紙) 固さらさ模様の置き
 たる、細工(細工)に用ゆる色紙のコトを
 云ふ。
 さらざぞめ(更紗染) 固さらさ模様に染め
 たるコト、又は其の物。
 さらし(晒) 固さらすコト、さらしたる木
 綿(綿)類の稱、徳川時代に行(行)はれ
 たる一種の刑罰の名。
 さらしこ(晒粉) 固米を水に浸(浸)つて、十分

さらし

に白くして挽(挽)たる粉、木綿(木綿)類
 を純白(純白)と爲すべく、用ゆる一種の
 臭氣(臭氣)を放てる灰色の粉の稱、世し海
 物なり。
 さらして(晒手) 固さらし屋の職人。
 さらしや(晒屋) 固木綿(木綿)をさらして、純
 白色と爲すを、業とせる人。
 さらじゆ(婆羅樹) 固多く山中に自生する
 木の名、幹(幹)には皮なくして、恰も百
 日紅(百日紅)の如き觀あり、葉(葉)はたが
 ひに生じて、薄(薄)くけれども、一種の光
 澤(澤)あり、夏の頃に四瓣(四瓣)の白き花
 を咲す。
 さらしあめ(晒糖) 固糖(糖)を、日光にさら
 してからからにせしもの。
 さらしがき(晒柿) 固つるし柿。
 さらしぐび(晒首) 固くもん。
 さらしぬの(晒布) 固さらし木綿。
 さらしもの(晒者) 固徳川時代の刑罰の一
 罪人を道ばたに置きて、往來の人に見
 せしめる刑のコト。
 さらしろろ(晒蠅) 固精製したる純白色
 の蠅のコトを云ふ。
 さらしねそば(更科蕎麥) 固上等なるそば
 切のコトを云ふ、信州の更科地方より
 産出するそば粉。

さらし、さらし 晒、曝、遊、更

さらしもめん(晒木綿) 固布(布)を水にて
 さらして、純白色になしたるもの、即ち
 さらし布(布)のコト。
 さらす(晒) 固木綿類を水にて十分に漂
 (漂)り洗ひて、日光(日光)に照(照)して、
 其の色を純白(純白)に爲す、世間の人
 に知らせる、假令(假令)ば恥(恥)す、
 さらす(曝) 固太陽の光線に照(照)して
 置く、雨(雨)や風(風)のあたるにまかせて置く
 さらす(不去) 固動遊(遊)にたれぬ。
 さらす(不) 固然(然)固知らぬかほ、さあ
 らむ容子(容子)のコト。
 さらそろじゆ(婆羅雙樹) 固一種の樹皮青
 く光澤(澤)あるもの、堅固にして正し
 きコトを云ふ。
 さらぢ(更地) 固あき地、何にも手入を施
 (施)してあらざる土地。
 さらつと(粗糖) 固動凡て物の面のさらさ
 らする假令(假令)ば手がさらつとくなど。
 さらで(不) 固左(左)でない、こゝなる
 然らずと云ふ意を表す語。
 さらば(更) 固あらためて、新(新)たに、其
 の上に、尙ほ(尙ほ)少しも、全く、假令(假令)ば更
 に存(存)せぬなど。
 さらぬてら(不) 固然(然)固さらむ容子、さ
 あらぬてら。

さらば 然、波、擲、曉

さらば(然) 固然(然)らば、そんならば、其
 れではと云ふ意を表す語。
 さらばかり(盤秤) 固秤の一種、皿のついで
 るばかりのコト。
 さらひ(波) 固さらふコト、掃(掃)つて美(美)の
 しく爲すコト。
 さらひ(復習) 固習(習)ふた事を、自分にて
 勉強(勉強)するコト、三味線(三味線)や舞(舞)の
 師匠(師匠)が、弟子(弟子)を多く集めて、教(教)の
 へた遊藝(遊藝)を演(演)ぜしむるコトを云ふ。
 さらひ(竹柵) 固一種の農具、竹を細く割
 (割)つて、其の先を圓く曲(曲)たる物を、
 七八本(七八本)扇子(扇子)形に組(組)んで、竹の柄
 (柄)の尖(尖)に附けたる物、塵埃(塵埃)を寄集
 (寄集)むに用ゆる具。
 さらふ(淺) 固動川(川)や井戸(井戸)や、溝(溝)などの
 底に在る、土(土)や泥(泥)を堀(堀)り取りて
 深くする。塵(塵)を取る。
 さらふ(擲) 固動はきする。突然(突然)に
 他人(他人)の物を奪(奪)ひ取る。
 さらふ(蜡燭) 固昔時支那にて行はれたる
 歳末の祭の名。
 さらふ(復習) 固動さらひをなす。
 さらば(曉) 固動人や動物の死體が雨風
 にさらされて白骨(白骨)となる。おさる
 へる。よわりはてる。

さらま、さらは

さらまはし(皿蓋) 固皿(皿)を蓋(蓋)ふ又は竹の
 尖(尖)などに載せて巧(巧)みに廻(廻)はす一
 種の曲藝(曲藝)。
 さらめ(粗目) 固白砂糖(砂糖)を更に精製
 したる物にて細(細)かくかかたまつてる
 上等の砂糖。
 さらり(斷然) 固きつぱりと思ひ切よく未
 練(練)したる(未)練(練)の意。
 (sarama) 固(砂利)シヤリの説にて、極(極)めて細
 かき石を云ふ。
 さらがた(退盤) 固東北地方の山川に棲む
 蟹(蟹)の一種にて、前へは進まずあさすさ
 りのみするより、此の名ありと云ふ。
 さらがたし(難避) 固のがれがたし。見す
 てるに忍びずあり。
 さらびなし(無然氣) 固何氣なし、そんな
 容子なし。
 さらじやち(去狀) 固りえんじやう。
 さらぬがら(去乍) 固さは云ふもの、さ
 うだけれども。
 さらば(去場) 固芝居にて用ゆる一種の囃
 (囃)し方の名にて、たての場にて、鐘(鐘)や
 太鼓(太鼓)を鳴(鳴)して、念佛歌(念佛歌)を唄(唄)ふ

さりば、さる 猿、申
はやし方の稱、
ざりば(砂利場) 図細(こ)かき石の置いて
ある處のコトを云ふ、
ざりふ(簀笠) 図みのこ、まんじゆう笠(か)
このコトを云ふ、
ざりや(作略) 図さくりやく、即ちばか
りこのコトを云ふ、
ざりん(紗輪) 図織物の名、輪子(ま)織の
極(こ)く薄(や)さきもの、稱、

(yokoro)

さる(猿) 図獸の名、其の形は殆んど人間
に似て、其の四つ足は悉く手の如き用
を爲す、全身の毛色は、暗褐色(シラカ)に
して、顔(か)鬚(ひげ)は赤く、好んで果實
(くだもの)を食し、能く木を傳ひ能く走る、性
質(せう)は伶俐にして、教へざるも能く真
似(まね)を爲す、我が國到處の深山に棲
む、小才(せうさい)の利く狡猾(くわく)なる人を嘲
(あざわら)けりて云ふ、戸(と)の締(ひ)を爲すべ
く、戸に取り付けられてある栓(かぎ)の如
きもの、稱、
さる(申) 圖十二支の第九番目の名、方角
のコト西南の西の隅(すみ)を云ふ、時
の今の午後四時、

さる、さるか 猿、去、戲

さる(猿) 器具の一種、竹を極(こ)めて細
かく割(わ)けて作りたる器、
さる(曝) 自動雨や風にさらされて色のか
はる、色のはげる、
さる(去) 自動遠く行く、離(は)れる、
さる(死) 死ぬる、禍(わざ)などを逃れる、
さる(去) 自動追ひ出す、遠くへ離れ行か
しむ、
さる(戯) 自動ふざける、たはむる、
さる(然) 接尾或る語の上に附け加へて、
其の物の確かに定(さ)らぬ意を表はす
に用ゆる語、

さる(猿) 猿尾(ざる) 圖三味線(さんま)の名所(ところ)、
棹(さ)と扇(あふ)との繋(つ)ぎ目の部を云
ふ、
さる(猿) 猿柿(ざる) 図柿の一種にて、其果實
(くだもの)は小さく、其の形は細長し、澁柿(しぶ)な
れば、此より澁を取り、又た其澁を去
りて食料とす、
さる(猿) 猿樂(ざる) 圖一種の舞曲(ぶきょ)、雅樂
(が)に對しての稱にて、謡(うた)を唄ひ
音樂の調子に合せて舞ふ一種のなごけ
舞にて、昔(むかし)武家の家中に賞(あ)げられしもの、能樂(のう)は此より別れしものな
り云ふ、
さる(散) 散樂(さん) 圖おどけたる似(に)を爲

さるか、さるそ

して踊(おど)る一種の舞樂の名、
さるかへり(猿返) 圖芝居道の語、トンボ
返りのコト、
さる(猿) 猿木(ざる) 圖(ざる)にて、馬を繫(つ)ひ
て置く木のコトを云ふ、
さる(つわ) 猿聲(ざる) 圖聲を立てせぬ爲めに
手拭(てぬぐい)を口にはめて、頭(かぶ)へくりつ
けるコトを云ふ、
さる(わん) 猿環(ざる) 圖金具(かね)の環(わ)の、自
由にまわる物を云ふ、
さる(猿) 猿子(ざる) 圖綿(わた)を入れたる袖(そで)な
しの半衣服(はんいぶ)を云ふ、
さる(猿) 猿酒(ざる) 圖猿(ざる)の果實(くだもの)を
樹(き)の穴(あな)などに貯(たくわ)へたる物が、自
然(じ)に熟(じゆ)して、酒(さけ)の如く
爲りしもの味(あじ)甘(あま)し、
さる(猿) 猿芝居(ざる) 圖猿(ざる)に藝(わざ)をしこみて
芝居(しばい)をさせるもの、
さる(猿) 猿滑(ざる) 圖木の名、高さ一丈餘
に達し、幹(か)の皮は極めて薄く、且つ
光澤(ひかり)ありて、滑(なめ)かなり、葉は小
さき卵(たまご)形(かたち)にて、對(むか)ひ合(あ)つて生(な)す
七八月の頃に紅色の花を咲く、花の保
つてる間はきはめて長し即ち百日紅
(ひゃくじつこう)のコト、
さる(猿) 猿手(ざる) 圖手打(てうち)を、猿

に盛りたるものを云ふ、
さる(猿) 猿智(ざる) 圖小才(せうさい)、あまはか
なる智慧(ち)のコトを云ふ、
さる(猿) 猿繫(ざる) 圖つま月に用ゆる、か
きがれのコトを云ふ、
さる(猿) 猿道(ざる) 圖さるまわしに同じ、
其の條を見られよ、
さる(猿) 猿木(ざる) 圖木の名、其の質白くし
て、樹皮(こぶし)の滑(なめ)らかなるもの、建築材
料として用ひらる、
さる(猿) 猿形(ざる) 圖篋(か)の如き形状をなして
るものを云ふ、
さる(猿) 猿手(ざる) 圖一人前の櫃(び)など
添(そ)ゆる、小さき杓子(しやくし)の稱、
さる(猿) 猿幟(ざる) 圖くり猿を附けたる
幟(ぼし)のコト、
さる(猿) 猿腰(ざる) 圖古き樹木に生
する、さのこの一種、其形蓋(か)は平た
くして柄太く、宛然(あつ)腰掛(こし)の如くな
るより此の名あり、素より食用には成
り難(むづ)きも、床の飾(か)り物となすコトあ
り、
さる(猿) 猿腹(ざる) 圖猿の腹に紐を付け、あ
やつりつ、踊(おど)らせるもの、即ちさるま
わしのコト、
さる(猿) 猿頰(ざる) 圖又たさるをとも云ふ、

さるち、さるほ

猿(ざる)が口へ物を入れて、貯へ置く袋、
猿(ざる)が物食ひつゝ、頬を膨(は)らすは、
此の袋の中へ入れるからである、片方
(かた)にのみ手の附いてある、小さき桶
(か)ち、即ち片手桶(かち)のコトを云ふ、
さる(猿) 然(ざる) 圖其の中に、左様(さ)斯様
(ごと)しての中に云ふ語、
さる(猿) 猿股(ざる) 圖半、引、
さる(猿) 猿松(ざる) 圖口やかましき狹輪(か)ち
なる人を罵(のの)して云ふ語、
さる(猿) 猿仕(ざる) 圖猿に藝を仕こみて、
踊(おど)らせて金錢をもらふコト又は其
の業の人、
さる(猿) 猿耳(ざる) 圖猿へ水を入れても、皆
出てしまふと云ふ意より轉じて、忘(わ)さ
れつぱきコトを云ふ、
さる(猿) 猿丸(ざる) 圖猿(ざる)の一名、
さる(猿) 然(ざる) 圖然るべき胸前(むね)に、又
は技量(わざ)を具(か)へてる人を云ふ、
さる(猿) 猿程(ざる) 圖あるべきはづのもの、さる人
なにかし、
さる(猿) 猿股引(ざる) 圖さるまたに同
じ、
さる(猿) 猿柳(ざる) 圖川柳(か)の一名、
さる(猿) 猿利口(ざる) 圖小才(せうさい)の利くコト、
又は其人のコト、

さるほ、さるり

(yokoro)

さる(猿) 猿茶(ざる) 圖茶の湯にて定められたる
禮儀(れいぎ)作法(さく)のコト、
さる(猿) 猿座(ざる) 圖坐(ざ)つて爲す禮式、即ち
坐拜(ざはい)の稱、
さる(猿) 猿歌(ざる) 圖おどけたる歌、たはむれ歌、
即ち狂歌(きやうか)のコトを云ふ、
さる(猿) 猿骨(ざる) 圖人の頭の骨が、風雨
にさらされて、白くなりたる物、即ちど
ころ、
さる(猿) 猿砂(ざる) 圖砂(さ)の稱、
さる(猿) 猿句(ざる) 圖おどけたる文句、面白き文句
(ぶんご)、即ち狂句(きやうご)の稱、
さる(猿) 猿事(ざる) 圖おどけたる事を云ふコ
ト、ふざけ、こぼ、笑談(わらわ)り、
さる(猿) 猿心(ざる) 圖ふざけたる事をなすを
云ふ、
さる(猿) 猿心(ざる) 圖たはむる心、ふざけ
る心、みだらなる心、
さる(猿) 猿心(ざる) 圖たはむる心、ふざけ
る心、みだらなる心、

さるわ、されと

さん 算、残、算、燦、燦、産、讀、慘、酸
◎以前(シキ)まへかど、かつて云ふ意を表はす語。
さん(算) 算帝王を害して、其の位を奪(ウ)ふコト、大逆(ウキヤク)。

さん(三) 三、算、散、讀、算
さん(三) 三を二を加えし數◎三味線の糸の最も細きものにて彈(ヒ)げば最も低(ヒ)き調子の出るもの。
さん(算) 算かぞふるコト◎くわだてるコト◎そるばんの科トウらなふコト。

さんえ(産穢) 産子の生れたる時に出たる不潔物(ウキヤク)が、父母の身體に掛りて、けがれてる云ふコトにて、父は七日間、母は三十五日間、神事を營(イ)なまぬ云ふ、古(イ)よりの規定(イ)なり。
さんえ(三衣) 僧侶の着る三種の衣服の科トを云ふ、即ち三種の袈裟(イ)の科ト大衣(イ)と、七條と、五條との科トを云ふ。

さん 算、残、算、燦、燦、産、讀、慘、酸

さん 三、算、散、讀、算

さんえ、さんか

八〇六

トむこたらしき損害。
さんがい(殘害) 害むこたらしくそこなふコト。
さんかち(整潔) 図城のほり、
さんかち(参向) 図ゆくコト、まあるコト、まありむかふコト。

さんかん(算勘) 算そるばんを置きて、勘定するコト。
さんかん(参看) 図共々にみるコト◎互ひに照り合せてみるコト。
さんかん(三竿) 図竿(イ)を三本つなぎたるほどの高さに、太陽(イ)が上つてゐる云ふので、朝の遅きコトを云ふ。

さんがつたいこん(三月大根) 図秋の末に種子を下して、春に根を掘(イ)る大根、皮は厚(イ)けれども色は白くして、味よし。
さんき(算木) 図和算(イ)にて、算盤(イ)を用ひて計算(イ)し得られぬ數(イ)を求むる時、即ち代數(イ)式などを立つるに用ゆる具にて、木を四角に細長く切りたる物、赤色(イ)と黒色の二種あり、加を示す場合には、赤色の物を用ひ減を示す場合には、黒色の物を用ひ(イ)を立つる時に用ゆる具、細(イ)き方形の木を二三寸ほどの長さに切り、其の中央(イ)の部を、凹(イ)ませて、赤色に塗ひたるもの、之を六本用ひ、三本づつを一組(イ)とし、箆竹(イ)を數(イ)えて、出でたる數に依り、三本づつ、二段に竝(イ)べて、卦(イ)を求むるものとす。

さんか

さんか

さんか、さんき

八〇七

さんき

て評議(びやうぎ)するコト。明治の初めに置れたる高官の名、現今の國務大臣(こくわつだいじん)に同じ官位(くわんい)。
さんきく(殘菊) 園遊(えんゆう)くまで、咲てる菊の、
さんきよ(山居) 園山中に住ひ居るコト。山中の住宅(たけやう)。
さんきり(散切) 園さんばつに同じ。髪を刈(か)切るコト。
さんきん(參勤) 園出掛て行きつてつさむるコト。徳川時代に、諸國の大小名が、交代で江戸へ勤(ごん)に行きしコトを云ふ。
さんきん(殘金) 園のこつてる金銭(きんせん)轉じて支拂(しはらひ)ひ残りの金子。
さんきやう(慘況) 園あわれなるありさまむごたらしき狀(じやう)。
さんきやう(山脚) 園山の麓(ふもと)の長く延(ひ)たる處を云ふ。
さんきやう(殘虐) 園むごたらしく取り扱ふコト。
さんきらい(山歸來) 園蔓草(まんそう)の名にして、春の頃に其の根より蔓(つた)を生じて葉に竹の葉の如き葉を生ず。花は葉と葉との間より柄を生じて咲く。色は黄色なり、其の根は之を干して薬用と爲す。

さんき、さんく

さんきりまたま(散切頭) 園さんばつあたまの、
さんぐ(寶具) 園かいこを飼(か)に用ゆる、必要な種々の器具、
さんぐ(産具) 園出産の時に、用ゆる種々の器具、
さんぐら(參宮) 園伊勢の大神宮へ參拜するコト、
さんぐら(三宮) 園太皇太后宮、皇太后宮、皇后宮の御事を申し上げ奉る、
さんぐわ(山花) 園山中に自然と咲く花、又は咲きし花の、
さんぐわ(産科) 園醫術の科にて、出産に就て生ずる諸種の疾病を専ら治療するを云ふ、
さんぐわ(殘火) 園燃(も)残りの火、
さんぐわ(殘花) 園散(ち)すして、咲き残つてる花、
さんぐわ(殘果) 園のこつてる菓子、又は果物(くだもの)、
さんぐん(三軍) 園戰爭に従事する全體の軍隊、即ち大軍(だいぐん)、
さんぐづし(算崩) 園縞柄(か)の名、いし、たみになしたる物に縞横(か)の筋あるもの、

さんく、さんけ

さんくわい(三槐) 園宰相(さうし)大臣の、
さんくわい(殘懷) 園くちをなきコト、くやしきコト、
さんくわい(參會) 園集會の席へ赴く(き)會議に列(り)なる、
さんくわい(散會) 園集會をさざるコト會すみて人の散(ち)するコト、
さんくわん(參觀) 園參(ま)つて見るコト。行き見て見物する、
さんくわん(散官) 園官位のみありて、實際上職務のなきコト、
さんくわい(三回忌) 園其の人の死後滿二年目の日を云ふ、
さんけ(産氣) 園出産を催する心地(こころ)の、
さんげ(懺悔) 園爲したる曲事を物語(ものがたり)つて、後悔(こうかい)するコト。さんげ話を爲すコトを云ふ、
さんげい(山徑) 園山の中に在る細き阪道(かみち)の、
さんげい(山翁) 園山中に在る谷、
さんげい(參詣) 園神社、佛閣又は墓地(かみち)などへ行き禮拜するコト、
さんげい(山系) 園山のついでるコト、即ち山みやく、

八〇八

さんげつ(殘缺) 園物の、われかけてるコトを云ふ、
さんげつ(殘月) 園明方(あき)に未だ出てる月のコト、
さんげつ(殘孽) 園のこつてる悪者(あくもの)の、
さんげふ(産業) 園人々のいさなむべき仕事、世渡(よわたり)りのわざ、
さんげん(散見) 園ちらほらと見ゆるコト、
さんげん(三軒) 園芝居にて用ゆる一種のかづらの名。三月の家を云ふコト、
さんげん(三絃) 園三味線(さんまいせん)の、
はこ、琴(こと)、小琴の三樂器の、
さんげん(諺言) 園ありもせぬ事を悪しく告ぐコトを云ふ、
さんご(三鈷) 園獨鈷(どこ)の一種、左右の、
さんご(三五) 園十五夜の、
さんご(珊瑚) 園さんごうじゆの略語、
さんご(産後) 園子を産(う)みたるあま、分娩(ぶんべん)したる後(のち)の身、
さんごち(參候) 園行きて御機嫌(ごきげん)などを伺(うかが)ふコトを云ふ、
さんごち(譏稱) 園さんげんして人を罪におとさんとする心、

さんごち(三后) 園三宮に同じ、
さんごち(諷口) 園わるくち。さんげんの、
さんごく(山谷) 園山と谷、
さんごく(殘酷) 園むごたらしきコト、むごきコトを云ふ、
さんごく(慘酷) 園むごたらしきコトを云ふ、
さんごじゆ(珊瑚樹) 園海底にさんご虫が結合して、樹の枝の如き形を爲せるものを云ふ、
さんごじゆ(珊瑚珠) 園さんごの樹を、圓く珠(たまご)の如くに細工(さい)せしもの、稱(なづ)種類多し、
さんごち(珊瑚島) 園さんご樹の、甚だ多く集まりて、島の如き觀を呈せるもの、
さんごじゆ(珊瑚樹菜) 園さんごちの、
さんごのつぎ(三五月) 園陰曆の十五夜の月のコト、
さんご(散散) 園めちや、めちや、さんごさんご云ふ意味、
さんご(參座) 園集會(しゅうかい)又は宴會(うたい)の席へ出掛(でかけ)るコト、
さんさい(三才) 園天地人、

さんさい(三災) 園三つの災難を云ふコト、水難、火難及び風難、
さんさい(山妻) 園山家住みの妻を云ふ意にて、我が妻の、
さんさい(山寨) 園山賊の、
さんさい(散財) 園財物をまきちらす、
さんさい(散刑) 園粉(こな)をなしたる薬、
さんざり(殘像) 園専門語なれども亦た普通(ふつど)に用ひらる、即ち或る物の色を暫(しばらく)らく諦視(ていし)して、目を閉じても暫くの間は、其の色の見ゆるコトを云ふ、
さんざつ(慘殺) 園むごたらしく殺すコトを云ふ、
さんざつ(殘殺) 園むごたらしく殺すコトを云ふ、
さんざつ(斬殺) 園斬りて殺す、

八〇九

さんさ、さんしん

さんざん(散散) 園れこそぎ、のこらず
 たくさん、おびたくしく見苦しき、
 めちやめちやに、
 さんざがり(三下) 園三味線の調子(調子)の
 名、本調子にて三の線の音(音)のひくき
 ものを云ふ、
 さんついたち(三朝日) 園徳川時代の稱呼
 にて正月の元日、六月の一日八月の一
 日のコトを云ふ、
 さんざんくど(三三九度) 園婚禮の式に用
 ゆる盃事にて、三度つゞ三度、新夫婦の
 間に盃をさりやりするコトを云ふ、
 さんざいふくろ(散財囊) 園しゅうぎ袋の
 コト、即ちボチ袋、
 さんし(蠶絲) 園かいこの作(作り)たる糸、
 即ちきぬ糸、
 さんじ(蠶兒) 園かいこのコト、
 さんし(散士) 園官に仕へず、民間にあり
 て、風流(ワカ)に世を送(送)られる人のコト
 を云ふ語、
 さんし(散史) 園官途(途)に就(就)す民間
 (民間)に在りて著作(著作)などをしたる人
 のコトを云ふ、
 さんじ(山寺) 園やまでら(極)めて淋
 (淋)しき所に在る寺、
 さんじ(参事) 園或る事務に、たづさはる

さんし

コト 高等官(高等官)の或る事務(事務)に
 たづさはる職名、即ち参事官(参事官)の
 さんじ(暫時) 園暫(暫)ちくの間、少しの間
 (間)、
 さんしち(三秋) 園秋三ヶ月の間のコトを
 云ふ、
 さんしつ(産室) 園子をうむ部屋、産所の
 コトを云ふ、
 さんしつ(産室) 園かいこの飼ひ置く部屋
 のコト、
 さんしつ(散失) 園ちらかつてなくなるコ
 トを云ふ、
 さんじつ(残日) 園入相(入相)の太陽(太陽)轉じ
 て日ぐれのコト、
 さんじつ(三日) 園みつか、
 さんじつ(散日) 園寺院にていさなむ法會
 (法會)の結願(結願)の日のコト、
 さんしふ(参集) 園來り集る、むらがりた
 かるコト、
 さんしや(養者) 園さんせいせる人、同意
 する人のコト、
 さんしや(山車) 園祭禮の餘興(餘興)に、引
 き出すだしのコトを云ふ、
 さんしや(算者) 算術の心得ふかき人、即
 数学家のコト、
 さんしや(三舍) 園支那の故事にて、三つ

さんし

の舎(舎)さ云ふ意より轉じて、軍隊の
 三日路(三日路)云ふコト、
 さんしや(讒者) 園さん人に同じ、
 さんしゆ(斬首) 園首をきるコト、
 さんしゆ(蠶種) 園かいこの種(種)、
 紙(紙)のコトを云ふ、
 さんしゆ(殘酒) 園あまりたる酒、
 さんしよ(山椒) 園木の名、さんしように
 同じ、
 さんじよ(産所) 園産婦の養生して居る部屋
 (部屋)のコトを云ふ、
 さんしよ(殘暑) 園のこりの暑さ、土用あ
 け後のあつさのコト、
 さんしん(酸辛) 園酸(酸)くして辛(辛)き味
 (味)かんなん辛苦(辛苦)を重ぬるコトを云
 ふ、
 さんじん(散人) 園官に就かず、民間に在
 る文人(文人)墨客(墨客)などの事をいふ、
 さんじん(山人) 園浮世をばなれて、山家
 住ひせる人、雅號(雅號)などに附け用ゆ
 る語、
 さんじん(山神) 園山中にいます神、やま
 の神のコトを云ふ、
 さんしん(讒臣) 園さんけんを云ふ臣(臣)分(分)
 さんじん(譏人) 園さんけんする人、
 さんしん(斬新) 園工夫(工夫)のすぐれて新

さんし

しきコト、極(極)めて新らしき考(考)の
 コトを云ふ、
 さんしやち(山椒) 園木の名、細き枝に針
 (針)の如き刺(刺)あり、葉は薔薇(薔薇)の其
 れの如くにして稍や長く、周圍(周圍)に
 齒あり、春新芽(新芽)の出でたる物は、香
 氣あるに依り、其の葉を其のまゝにて
 食ふ、即ち木の穿(穿)なり、其の實(實)は
 小さく圓く、中に黒き核(核)あり、其の
 味辛(辛)くして、一種の香氣あり、又た
 皮は薬用となる云ふ、
 さんしやち(讀稱) 園ほめたゞえるコト、
 ほめて云ふコト、
 さんじやち(参上) 園他人の家へうかがふ
 コトを云ふ、
 さんじやち(山上) 園山のうへ、
 さんしやち(参照) 園てらし合せて考がへ
 るコト、
 さんしやち(殘照) 園のこつてる光り、夕
 焼(夕焼)のコト、
 さんじやち(慘狀) 園むごきさま、
 さんじやち(駭乘) 園身分たかき人のお供
 (侍)をして、一つ車に乗るコトを云ふ、
 さんじやち(殘刺) 園のこり、あまり、のこ
 つてあるもの、
 さんじやち(三尺) 園三尺帯の略語、其の

さんし

條を見られよ、
 さんしやち(桑酌) 園くみはかる、みつも
 るコトを云ふ、
 さんじやち(山鶴) 園鳥の名かささぎの一
 種にて、嘴(嘴)赤く尾は白く長くして、
 頭に白きさかさかの如きものあり、
 さんしゆつ(産出) 園こしらへ出す、つく
 り出すコトを云ふ、
 さんじゆつ(算術) 園數量を數字を用ひて
 計算する一學科の名、代數に對して平
 算(算)と云ふ、
 さんしゆん(三春) 園春季三ヶ月の間のコ
 トを云ふ、
 さんじゆん(三旬) 園十日を一句として上
 旬、中旬、下旬の三つを云ふ、
 さんじゆん(三十日間) 園三十日間の
 コトを云ふ、
 さんしよく(山色) 園山の容子、山のけし
 きのコトを云ふ、
 さんしよく(産殖) 園こしらへふやすコト
 うみふえるコト、
 さんしよく(殘蝕) 園次第次第に端の方よ
 り、くひ込んで行くコト、
 さんしよく(蠶食) 園かいこの桑の葉を、
 次第次第に食ひ行く如く、土地をジリ
 ジリと攻め取つて行くコトを云ふ、

さんし

さんじよく(産孽) 園産婦のやうじようし
 てる、れど、
 さんじくわい(参事會) 園府、縣、郡、市の
 参事會のコトを云ふ、
 さんじくわん(参事官) 園官名、大臣又は
 局長の命に依りて、物事を評議又は考
 を立つる役、
 さんしやちち(山椒魚) 園多く山中の溪
 流(溪流)に棲める一種の動物にて、體形
 (體形)はさかげに似て大きく、四つの足
 あり、其の大きな物は、五尺内外に達す
 るなり、頭は圓く平たくして、眼は小さ
 く、背部は黒褐色にて小さき疣(疣)あり
 腹は黄色にして、其の鳴(鳴)や小供(小供)
 の鳴が如し、其の肉の味(味)甚だ美な
 り云ふ、我が國にて名高きは、箱根
 の山椒魚是れなり、
 さんじやちおび(三尺帯) 園木綿巾の布を
 三尺の長に切りて、帯の代(代)となせ
 るもの、
 さんじやちたね(三尺店) 園小さき店、又
 は小さき家を云ふ、
 さんしやちもち(山椒餅) 園山椒の實(實)
 を細かくすりつぶして、餅にまぜたる
 物、
 さんしよくばん(三色版) 園石版印刷法の

さんし

一種にて、凡て異なりたる三種の色を用ひて、種々の色を表はす印刷術のコトを云ふ、
さんしゆのしんぎ(三種神器)固我が國、御歴代の天皇の、天日嗣(アマノヒノミコ)をしろしめす御璽(ミシロシ)として、御繼承(ミツグシ)あそばす、三つの御寶物のコトにて、即ち八咫(ヤス)の鏡、草薙(クサナギ)の劍、八尺瓊(ヤス)の曲玉(マツタマ)のコトを申す、
さんす(産)自動生(ツク)れる、生れ出る、
さんす(産)自動子を生む(ツク)そだてる(ツク)製造する作り出す、
さんす(参)自動まかり出る、まいる、
さんす(讚)自動ほめる、たゞえる、
さんす(贊)自動力を添へて、事を爲さしむ(ツク)其の事に賛成(ツク)する(ツク)心を合す(ツク)みちびきて、事の成就(ツク)をたすく(ツク)る、
さんす(散)自動ちらかす、ちらばらす(ツク)なくす(ツク)はしらかす、
さんす(算)自動勘定(ツク)する、數(ツク)えるはかる、くわだてる、かんがへる、
さんす(譏)自動在もせぬコトを、在つたやふに云ふて、他人を誣(ツク)ゆる、
さんす(山水)固山水と水を配合(ツク)したる景色を云ふ、

さんす、さんせ

さんすの(撒水)固又たさつすぬとも云ふ水をまくコト、水うち、
さんすの(熨炊)固米を洗(ツク)ふて、たくコトを云ふ、
さんすの(算數)固かすの(ツク)そろばんにて計算せし數(ツク)單に算術のコトを云ふ、
さんすの(三助)固風呂屋の雇ひ男、即ち風呂焚(ツク)男のコト、
さんすの(算數字)固さんよう數字のコト、即ち123の類、
さんすの(三疎縮)固俗語にて、蛙(ツク)は蛇を恐れ、蛇はなめくじを恐れ、なめくじは蛙を恐れるコトを云ふ、
さんせい(參政)固政事の相談にあづかるコト、
さんせい(刪正)固さりのけて正(ツク)しくするコト、
さんせい(贊成)固意見を同ふするコト(ツク)物事をたすけて、成功させるコトを云ふ、
さんせい(三聖)固世界の三聖人と云ふコトにて、釋迦(ツク)、キリスト及び孔子(ツク)の三子と云ふ、
さんせい(三世)固過去(ツク)と現在(ツク)と未來(ツク)との稱、

さんせ

さんせい(酸性)固酸味の性質を有てるもの、總稱、
さんせい(殘星)固あけ方の星、
さんせい(殘稅)固納(ツク)むべき税金の、このつてる物のコト、
さんせい(殘生)固生きながらへてるコトを云ふ、
さんせい(慘慄)固いたましく、あわれなるコトを云ふ、
さんせい(鑽石)固金剛石(ツク)のコトを云ふ、
さんせい(殘雪)固積(ツク)りたる雪の、春まで消(ツク)すあるもの、即ちこの雪の(ツク)コトを云ふ、
さんせい(山泉)固山中の水の湧(ツク)き出る所を云ふ、
さんせい(山川)固やまこ、かは、
さんせい(山戰)固山地の戦ひ、
さんせい(殘喘)固長らへてるコト、長いきしてゐるコト、
さんせい(産前)固子の生れてんとする前の時のコトを云ふ、
さんせい(參禪)固禪學の教(ツク)を學ぶコトを云ふ、
さんせい(潸然)固さめんと涙をながして、泣くさまを云ふ、

八二二

さんそ、さんそ

さんそん(燦然)固うつくしく、ひかりかやくさまを云ふ、
さんそんせかい(三千世界)固あらゆる世界と云ふコト、
さんそ(酸素)固化學上の名、酸素の一、人体其の他凡ての動物(ツク)の生活(ツク)に欠くべからざる大切(ツク)の物にて、空氣及水に多量に含有(ツク)するもの、
さんそ(譏訴)固尊上(ツク)に對(ツク)して、ざん言するコト、他人の事を誣(ツク)さまに云ひ觸(ツク)す(ツク)かげ口を利くコトを云ふ、
さんそち(山莊)固山地にいなみたる別莊(ツク)を云ふ、
さんそち(山僧)固山寺の僧、
さんそち(攢叢)固あつまりたるコト、むらがるコト、
さんそく(山足)固山のすそ、ふもこのコトを云ふ、
さんそく(山賊)固山の中に住んでる賊の(ツク)コト、
さんそく(殘賊)固撃(ツク)もれてる賊徒の(ツク)コトを云ふ、
さんそく(殘族)固一族中の生き残つて者(ツク)のこつてる、やから、
さんそん(殘樓)固酒の残つて入つてる樽(ツク)さんせ、さんそ

さんそ、さんそ

さんそん(三尊)固三つのたうきき物と云ふ意にて、君と父と師とのコトを云ふ(ツク)佛法の語、釋迦(ツク)文殊(ツク)普賢(ツク)の三如来の(ツク)コトを云ひ、又た彌陀(ツク)觀音(ツク)勢至(ツク)の(ツク)コトを云ふ、
さんそんがた(三尊形)固庭園の築山の拵(ツク)へ方の名、
さんたい(三體)固三つの形(ツク)佛の三つの像の(ツク)コトを云ふ(ツク)書法の語、楷書(ツク)草書(ツク)及び行書、
さんぢち(參堂)固他人の家へ行くコト、おこづれるコト、
さんぢち(算道)固算術の道、そろばんの仕方(ツク)の(ツク)コト、
さんぢち(山道)固山阪道(ツク)、
さんぢち(棧道)固山中などのけわしき所(ツク)にかけたる橋、即ちかけはしのコトを云ふ、
さんぢち(殘黨)固のこつてるさまから、生き長らへてるやから、
さんぢち(山刀)固木を伐(ツク)に用ゆる、山かたな、即ちなたや、よきの類を云ふ、
さんぢち(算當)固けいさんを算するコト、勘定(ツク)をなすコト、
さんぢち(鑿刀)固ほりもの細工を爲すに用ゆる小さき及物(ツク)、
さんそ、さんそ

さんた

さんぢち(殘盜)固捕(ツク)損(ツク)したる盜賊、撃ちもたらされた盜賊、
さんぢち(殘高)固金銭の出入を計算したるのこり高の(ツク)コト、
さんぢち(篡奪)固帝王の位、又は政治の大權を、うばひ取るコト、
さんたん(山丹)固山中に在つて、赤しさいふ意より、轉じてひめ百合(ツク)の(ツク)コトを云ふ、
さんたん(三嘆)固大ひに嘆息(ツク)するさまを云ふ、
さんたん(霰彈)固彈丸の一種にて、中に細き彈丸が澤山に填(ツク)てある物、之(ツク)を放てば破裂して霰(ツク)の如く丸(ツク)が八方に飛ぶ、
さんたん(慘慄)固なげかはしきコト、いたましきコト、心をくだき、なやますコトを云ふ、
さんたん(慘怛)固はなはだしく悲しき、此の上なきあわれなるコト、
さんたん(算段)固つもり、くめん、
さんたん(讚嘆)固ほめたゞえる、ほめそやすコト、
さんたぢち(三田燒)固攝津の三田地方より産出する陶器(ツク)の(ツク)コトを云ふ、
さんたぢち(三太夫)固華族や金満家に事(ツク)さんた

八二三

さんた、さんて

(た)えて、會計の事務を取り扱ふて人
 のコトを云ふ、
 さんた、さんて(三大節)元始祭(ヤサシ)と、
 紀元節、天長節のコト、
 さんた、さんて(霰彈砲)榴散弾を放つに
 用ゆる、大砲、榴散弾を仕込みたる大砲
 さんち(山地)圍山の多くある地方のコト
 を云ふ、
 さんち(産地)圍其の物の生(な)たる土地、
 其物の作(つ)り出されたる土地のコト
 を云ふ、
 さんち(參知)圍關係(む)するコト、
 さんち(散茶)圍椿(つばき)の一名、
 さんち(贊助)圍たすけて、其の物事の、
 成功を企(め)するコト、
 さんち(爰勤)圍草などを、かり取り去
 るコト、
 さんち(削除)圍けづりさる、
 さんち(三女)圍三番目の娘、
 さんち(三男)圍三番目の男の子、
 さんち(酸痛)圍うづきて、いたむコト
 を云ふ、
 さんち(三途川)圍冥途(よみ)に在り
 して云ふ、想像上の川、
 さんてい(刪定)圍悪きをけづりて、善し

さんて、さんて

きさなすコト、
 さんてち(山頂)圍山のいたつき。山のて
 つべんのコト、
 さんてち(參朝)圍朝廷へまかり出るコト
 を云ふ、
 さんてち(殘敵)圍撃ちもらしたる敵、撃
 ちもらされたる敵、
 さんてん(懸視)圍はづるコト、はじをか
 くコト、
 さんてん(山嶺)圍山のちようじよう、山
 のいたつき、
 さんてん(三傳)圍三つの傳記物と云ふコ
 トにて、春秋左氏傳、穀梁傳及び公羊
 傳を云ふ、
 さんど(産土)圍産地に同じ、
 さんどち(殘徒)圍のこつてる者ども。生
 きのこつてる兵卒、
 さんどち(山統)圍山脉の重(かさ)なり合つ
 てるコト、
 さんどち(蠶豆)圍そらまめ、
 さんどち(斬頭)圍頭(び)を斬るコト、
 さんどち(贊同)圍相談又は議論に賛成す
 るコト、
 さんどち(三冬)圍十二、一、二の三箇月の
 冬の間を云ふ、
 さんどち(殘燈)圍きえずにある燈火(しほ)

さんて

即ちありあけのコト、
 さんどち(眞匪)圍のがれかくる、
 さんどち(慘毒)圍さんがいと同じ、甚だ
 しくむごきコト、
 さんどち(三德)圍智、仁、勇の三つの徳
 のコト、
 さんどち(徳川時代の盛なる時に、流行
 (り)し一種の紙入(しり)

さんどめはり(棧留針)圍木綿針の長き物
 を云ふ、
 さんない(山内)圍山の内(ま)寺のかま
 へ内のコト、
 さんない(參内)圍朝廷へまかり出るコト
 を云ふ、
 さんなん(三男)圍三番目の男の子、
 さんなん(三女)圍三番目の娘、
 さんないがさ(參内傘)圍昔、自分の高き
 人が、朝廷へ參内する時に、供(た)にさ
 しかけさせたる柄の長き、からかさの
 類、
 さんいふ(算入)圍かぞへ入れる、計算の
 内へ加える、
 さんいふ(算入)圍のがれ入る、にげ込む
 コトを云ふ、
 さんいん(殘忍)圍なすけ少なく、むごき
 コトを云ふ、
 さんいん(殘熱)圍のこりのあつき、ほこ
 ぼりのコト、
 さんいん(殘年)圍のこりの年齢、即ち生
 き長らへてるコト、
 さんいん(殘念)圍思ひの後にのこるコト
 おしきコト、
 さんいん(三年物)圍魚類などの生れ

てより、三年の月日をへたる物をさし
 て云ふ、
 さんいけ(産氣)圍産産を、もやうして來
 るコト、即ち、しきり、
 さんいば(産婆)圍産婦の手當、出産の世話
 (を)を爲す業とせる婦人、
 さんいば(三拜)圍三度おがむ、たびく
 禮を爲すコトを云ふ、
 さんいば(三方)圍一種の器具、木にて作り
 たる四角形の臺にて、其の四角形の脚
 (び)の三方に、圓き孔(び)の穿(あ)たれあ
 るもの、又た三寶とも書く、
 さんいば(參拜)圍行きて、おがむ即ちさ
 んけひのコト、
 さんいば(山砲)圍大砲の一種、野砲に對
 しての稱にて、山地の戦ひに用ゆる小
 形の物、
 さんいば(殘亡)圍ほるびなくなるコト、
 さんいば(謀誘)圍人の事を悪く云ふてそ
 するコト、
 さんいば(機橋)圍海岸より海中へ突き出
 したる、木製の橋の如き形をなせるも
 の、
 さんいば(訕謗)圍そしるコト、
 さんいば(斬伐)圍きるコト、斬り殺すコ

トを云ふ、
 さんいば(散髮)圍髪の毛を刈り揃(と)え
 るコト又は刈り揃へたる頭のコトを云
 ふ、
 さんいば(斬髮)圍髪を切るコト、髪を刈
 るコトを云ふ、
 さんいば(算法)圍算術の仕方、即ち方法
 のコトを云ふ、
 さんいば(殘飯)圍喰ひ残しのめし。食ひ
 あまりのめし、
 さんいば(三鞭)圍西洋の酒の名、即ちシ
 ヤンパン酒のコトを云ふ、
 さんいば(三孟酢)圍酢六分に、醬油と
 酒とを二分宛、合したる物を云ふ、料理
 に用ゆる、
 さんいば(三番叟)圍芝居(わらわ)や猿樂
 などにて、翁(おきな)の面をかぶりて踊る
 舞を云ふ、
 さんいば(俗曲老松)圍高砂(たかご)と
 東北の三つの稱、
 さんいば(斬髮屋)圍髪を刈(と)る業
 とする家、
 さんいば(酸敗液)圍胃病などにて、
 胃より出る、すっぱき汁、むしづのコト
 さんいば(三鞭酒)圍西洋の上等の酒
 の名、
 さんいば(葡葡汁)圍葡萄(ぶどう)の實(み)の
 汁と莓(いちご)の汁(じ)と、梨の汁を加へ

さんひ、さんふ

て、製せる物にて、香氣を云ひ味を云ひ
共に美の美なるものなり。
さんび(散飛) 図ちらかり飛ぶ、飛びちら
がるコトを云ふ。
さんび(酸鼻) 図甚だしく悲(た)しきコト
す(り)泣(け)の図。
さんび(讚美) 図ほめるコト、さなへるコ
ト。
さんびか(讚美歌) 図キリスト教にて、神
の徳をほめたる歌。
さんびつ(算筆) 図文字をかくコト、算術
(ソツ)の図。
さんびつ(三筆) 図我が國の三人の大書家
と云ふコトにて、即ち嵯峨天皇を初め
奉り、弘法大師及び橘の逸勢の三人の
コトを云ふ。
さんびん(三一) 図昔時給料の安き武家の
下僕(しもべ)を、いやしみて云ふ語。勝負
事にて、養(や)を二個一所に振りたる時
に、一の目と三の目の表(ひ)はれしを云
ふ語。
さんびやり(痘病) かいこに發する病氣の
コトと云ふ。
さんぶ(散布) 図まきちらかす、まきてし
く。
さんぶ(産婦) 図産後の婦人。

さんふ

さんぶ(三賦) 図三つの賦課を云ふ意にて
即ち租(ソツ)、庸(ソツ)、調(ソツ)。
さんぶ(産婦) 図かいこを飼(ソツ)ている婦
人のコトを云ふ。
さんぶ(産婦) めしたき女、おさんぶんの
コトを云ふ。
さんぶ(参府) 図徳川時代に大名の江戸へ
行くコトを云ふ。
さんぶ(三府) 図東京、京都、大阪のコトを
云ふ。
さんぶ(殘部) 図のこつてる部分のコト、
さんぶ(譚話) 図無實(まじ)の事を眞實(まじ)
のやふに云ふて、の、しりしゆるコト
を云ふ。
さんぶ(山腹) 図山のなかほどの處のコ
トを云ふ。
さんぶ(窟伏) 図のがれかくる、ひそみ
かくるコト。
さんぶ(三伏) 図夏の最もあつき時のコ
トを云ふ。
さんぶ(三復) 図幾度(まじ)もなく、くり
かへすコト。
さんぶ(産物) 其の國にて作る、諸種の
物品のコトを云ふ。
さんぶ(殘物) 図のこつてる物。
さんぶ(散文) 図文字數(まじ)の一定して

さんふ、さんへ

あらぬ文、即ち普通の文章のコト、和歌
や唱歌などに對しての稱なり。
さんぶ(殘分) 図のこつてる物、のこり
だか。
さんぶ(三幅對) 図かけじの、三つ
揃(そろ)えて掛(か)るやふになせし物。凡
て物の三つ揃(そろ)ふてをコトを云ふ。
さんぶ(参着) 図ゆきつき即ち到着
(ソツ)の図。
さんぶ(山中) 図山の中。
さんぶ(三重) 図淨るりの筋(ソツ)の名、
一つの句を、三つに切りてうたふコト
を云ふ。
さんべい(傘柄) 図松茸(まじ)などの、軸
(ソツ)の太きコトを云ふ。
さんべい(散兵) 図軍隊の語、兵士を一所
(まじ)にかたまらせて置かすに、ばらま
ひて置くコト。
さんべい(殘兵) 図のこつてる兵士。生き
長らへてる兵士。
さんべい(散兵) 図散兵隊の語、兵士が其
の内に隠れて敵を射撃す。
さんべい(散兵線) 図相當の幅(まじ)を
置きて、兵士を配置せし其の列のコト
を云ふ。

八一六

さんべい(三平二滿) 図おたふく顔
おかめ顔のコト。
さんべ(散歩) 図目的(マシ)を立てずして歩
く、そゆる歩き、うんごうのコトを云
ふ。
さんべ(参謀) 図陸海軍の武官の名、戦
争の仕方軍略等の相談にあづかり、軍
中に在つて、謀(ま)をめぐらす役。黒
幕(くま)に居て、種々の工夫を廻(ま)らす
人のコトを云ふ、假令ば選舉運動の参
謀など。
さんべ(山録) 図祭禮に用ゆる山ほこの
コトを云ふ。
さんべ(散木) 図物の用にたぬ木材の
コトと云ふ。
さんべ(三盆) 図上等の白砂糖即ち三盆
白の略語。
さんべ(三盆) 図名精製なしたる、
上等の白砂糖のコト。
さんべ(参謀本部) 図國を防ぐコ
ト、兵を用ゆるコト等の、一切の計畫
を立て、及び指揮(し)する等の事務を取
り扱ふ役所。
さんべ(三寶荒神) 図佛教の
語、佛(ブツ)と法(ホウ)と僧(ソウ)との三寶を
守らせらるる云ふ神の名。鞍(アサ)の

左右に框(ツ)を設け、三人の者が、共に
一つの馬に乗れるやうになしたるもの
さんべ(三枚) 図紙の如き物三つの稱。
料理の語、魚の兩側の肉を脊骨に添ふ
て、切り取るコトを云ふ。
さんべ(散米) 図惡魔(まじ)をたいさんせ
しむべく爲めにまく米。
さんべ(三昧) 図佛教の語、他の事を思
はず、一心に佛經を唱(な)ふるコト。轉
じて一つの物事に、一心になるコトを
云ふ。
さんべ(散漫) 図漠然(まじ)としてるコト
即ちさりまめなきコト。
さんべ(三味場) 図墓地、はか所のコ
トを云ふ語。
さんべ(酸味) 図すうき味(まじ)。
さんべ(山脈) 図山の其れから、其れ
へさつてきて、長くなつてるものを云
ふ。山のつらなれるもの。
さんべ(山務) 図其の寺に關(まじ)する、事
務(ソツ)の図。
さんべ(殘夢) 図みのこしたる夢(まじ)。
轉じて眼のさめたる許(まじ)り云ふ意を
表はすに用ゆる語。
さんべ(殘務) 図のこつてる事務(ソツ)、未だ
濟(まじ)ざる事務。

さんべ(山門) 図寺の入り口にある、二
階(かい)の門。
さんべ(三門) 図中門と左右の兩門のコ
トを云ふ。佛教の語にて、教と律と禪
との三つのコトを云ふ。寺の門のコト
を云ふ。
さんべ(山野) 図山と野原。
さんべ(殘陽) 図夕日、入りあひの空(ソツ)
のコトを云ふ。
さんべ(散藥) 図こな藥のコト。
さんべ(三役) 図相撲道(まじ)の語にて、
大關と關脇と小結のコト。
さんべ(山藥) 図山の芋(まじ)を藥として
用ゆるコトを云ふ。
さんべ(参與) 図其の事に、たづきはるコ
ト。明治の初めに、大政官内に置かれ
たる高官の名。
さんべ(讚譽) 図ほまれ、めいよ。
さんべ(殘餘) 図のこつてるコト、あまつ
てるコト。
さんべ(算用) 図算法に依りて、計さん
するコト。
さんべ(算用數字) 図算數字に同
じ即ちローマ數字。
さんべ(蠶卵) 図かいこのたまご。
さんべ(散亂) 図ばらばらになる、ちら
ちら

八一七

さんらさんれ

さんらん(燦爛) 図金具(かな)などのキラ
 さんらんし(蠶卵紙) 図かいこをして、紙
 に卵子をうみつけさせし物、即ちたれ
 紙。
 さんり(三里) 図炎(えん)の名。
 さんりち(殘留) 図のこり、さまるコト。
 のこつてあるコト。
 さんりち(殘溜) 図のこつてるしづくの
 こりのひたまり。
 さんりち(竄流) 図島へ流す。
 さんりつ(慘慄) 図ふるへおののく、ぞつ
 と身ふるひするコト。
 さんりん(山林) 図山さばやし、山中の林
 のコト。
 さんりやく(刪略) 図文章中の無駄文句
 (ぶつご)を、さりのけるコト。
 さんりんがく(山林學) 図山林に關(かん)す
 る、學理を研究する學問。
 さんるる(醜類) 図凡て、すうき味を有(あ
 び)てる物のコトを云ふ。
 さんれい(山靈) 図山の神、山のぬしのコ
 トを云ふ。
 さんれい(山嶺) 図山のはし、山のみれの
 コト。山のいたゞき。

さんりさんわ

さんりより(三稜) 図角(かく)の三つあるコ
 ト、又は其の物、即ち三角。
 さんりより(山陵) 図天子のみささぎのコ
 トを云ふ。
 さんれつ(參列) 図其の式につらなるコト
 を云ふ。
 さんれつ(慘烈) 図さんこくなるコト。む
 ごたらしきコト。
 さんりよりしん(三稜針) 図尖(せん)の方が、
 三角形に爲つて、尖(せん)つてる針、鍼醫
 の用ゆるもの。
 さんりよりはり(三稜玻璃) 図三角形に爲
 つてるガラスの棒。
 さんろ(山路) 図山みち、坂路(さかぢ)、けはし
 き道のコトを云ふ。
 さんろく(纂錄) 図物事をあつめ記して、
 書物となすコト。
 さんろち(參籠) 図願をこむべく、神社佛
 閣へ行きて、おこもりをなすコト。
 さんろち(山樓) 図山中に建てられてある
 寺院などの、たかごの。
 さんろく(山麓) 図山のすそ、即ちふもと。
 さんわち(山王) 図近江國に在る日吉神社
 のコトを云ふ語。

志 子、籽、仔、孜、氏、嗚、腫 八一八

志じ

(志じ)

志(動) 圖過去(かき) 即ち以前(いま)の意を表
 はず語、例は在りし昔(むかし)など。
 志(子) 圖こども。なごこのこ。十二支
 の第一位の名、即ちれ果物(くだもの)の實
 (じ) 即ちたれ五等爵の第四位の名。人
 の姓名の下に附け加えて敬意を表は
 す語、例は孔子孟子。
 志(籽) 圖土にて養ふさ云ふ意にて、草木
 を培養(たぐ)するコト。つちかふ。
 志(仔) 圖克(く) ます。たゆ。
 志(孜) 圖背を折つて動(うご)むはげむ
 甚だしく愛する。心にかける。念々
 (ねんねん)に思ふ。
 志(氏) 圖二に二を加へたる數、よつ、
 志(氏) 圖うじ、みやうじ。人の種類即ち
 やから。人の姓名の下に附加へて、其
 の人と呼ば稱(なづ)ふるに用ゆる語。
 志(嗚) 圖鳥の名、小くるふのこト。
 志(腫) 圖かみのコトを云ふ。
 志(紙) 圖ねぐる。なめるコト。

志(帯) 圖紙に同じ。
 志(祇) 圖うやもふ。つしむコト。
 志(趾) 圖足(あし)。あしのうら。
 志(趾) 圖もさ。以前に在りたる處。あと、
 例は城趾(しろすぢ)など。
 志(址) 圖前條に同じ。
 志(址) 圖水ぎは。なごさ。水の淺(あ)きこ
 ころを云ふ。
 志(此) 圖こゝに。この。これ。
 志(稱) 圖鳥や獸の肉を去りたるあごの骨
 の稱。死人の骨。
 志(雌) 圖めす。めんだ。女性は男性より
 弱しと云ふ意より轉じて、力量の少な
 き人のコトを云ふ。
 志(髭) 圖ひげ。ひげのこト。特に上唇
 (かみゆげ)に生へてるひげの稱。
 志(玼) 圖珠玉に生じたるきづのこト。轉
 じて人の欠點(けつてん)の稱。
 志(疵) 圖身体に受けたる損處(しんじ) 即ちき
 づ。轉じてきづつくるコト。更に轉じ
 て害(がい)す、そなふ。
 志(疵) 圖惡く云ふ。そしる。氣ま。ほ
 しいま。推しはかる。思ひ考(かん)ふ
 ④きす。欠點(けつてん)。
 志(贅) 圖紙に同じ、前條を見よ。
 志(贅) 圖腐(く)れたる筋肉(にく)の附着(つ
 け)。
 志(帯) 圖祇、趾、址、此、雌、髭、玼。

志(正) 圖草の名、よろひ草のこト。
 志(昔) 圖あざける。そしる。怠(おご)る。な
 まける。志(おご)るのよばきコト。④いち
 める。せめたつる。
 志(駟) 圖駟馬の駟にて、四頭立の馬車の
 コト。四頭の馬を一輛の車に附けたる
 もののこトを云ふ。
 志(相) 圖器具の名、匙(し)のこト。
 志(泗) 圖鼻(び)より出る水、即ちはなじる
 志(底) 圖物を研(けん)く石、さいし。研く、
 みかく。つかはす。いたる。物事を定
 (ぢ)むるコト。
 志(支) 圖分(ぶん)れたる物、即ちえだ。物事
 のわかれ。分(ぶん)るコト。分(ぶん)つコト
 ④十二支の稱。ささゆる。さそふ。さ
 へ。肢に通ず、手及び足のこトを云ふ。
 志(貴) 圖、嘴、嘴、低、止、正、昔、駟、摺、支

志(肢) 圖身体(てい)のえだ。さ云ふ意にて、手及
 び足のこトを云ふ。
 志(枝) 圖草木の幹(かん)より分れ出たるも
 の、即ちえだ。支に通ず、即ち手足(てあし)
 へ。さそふ。わかかる。わかつか。わかれ、
 志(伎) 圖いたむ。損(しん)する。害(がい)す。そむ
 く。もさる。よこしま。
 志(示) 圖又た、じとも音す、表(ひょう)はす。知
 らせる。しめす。おしへる。
 志(肢) 圖大豆(だいず)のこトにて製したる一
 種の食品、みそのこト。
 志(視) 圖確(かく)かに見る。みはる。氣をつ
 けて見る。表(ひょう)す。知(し)る。知(し)る。なす。
 あしらふ。おさめる。入る。ならふ
 ならふ。
 志(視) 圖視に同じ、前條を見られよ。
 志(祠) 圖神を祀(まつ)つてある處、即ちほこ
 ら。やしる。まつる。祭(まつり)のこト。神
 に物を奉(まつ)つてまつる。
 志(祀) 圖神佛をまつるコト。
 志(伺) 圖うかがふ。たづねる。おこづれる。
 ④十分に察(さつ)する。
 志(徒) 圖うつる。他へ行く、即ちうつす。
 ④うつる。こす。よける。
 志(俟) 圖又たじこ音す、まつ。まつてる。
 うかがふ。かんがふ。總て多きコトを

志 帯、祇、趾、址、此、雌、髭、玼

志 貴、贅、嘴、低、止、正、昔、駟、摺、支

志 肢、枝、伎、示、視、徒、俟 八一八

志 修、侍、似、使、仕、士、至、傀、已、
志 汜、矢、淡、淡、只、泉、香、枳、咫、系
志 緇、絲、市、姉、姉、姉、八二〇

志(修) 圖資澤(修)する。おこる。十分なり。ゆたかなり。多し。あまる。大(修)いなり。廣(吐)がる。張る。

志(侍) 圖又たじこ音す。側(心)につき従ふ。侍(心)ふてる。はんべる。お側(心)づきの人。つき添ひ人。

志(似) 圖又たじこ音す。にたる。コト。にせる。にる。うけつぐ。コト。

志(使) 圖物の役(心)につかふ。めしつかふ。つかひに立つ人。つかはれてる人。しむ。させる。せしむ。命令を云ひ表はす。助動詞。

志(仕) 圖つかへる。官職に就く。かしづく。つかまつる。明(心)かにする。

志(士) 圖武士。さむらひの。コト。轉じて男子の。コト。を云ふ。中流の。官吏の。コト。を敬(心)ふて。云ふ。

志(至) 圖いたる。行く。来る。物事の。極度。きはみ。例ば。慶賀の。至り。など。いたつて。きはめて。此の上なし。云ふ。意を表はす。語。轉じて。甚だ善(心)しき。コト。

志(傀) 圖互ひに勉(心)め合ふ。勵(心)み合ふ。コト。才智の。すぐれたる。コト。在りし。事を。思ひ起す。即ち。しのぶ。

志(已) 圖十二支の第六位の名。み。

志(汜) 圖にこれる。水。よごみ。水。きわ。きし。支(心)が。下流にて。再び。本流に。合したる。水。の。稱。

志(矢) 圖箭(心)の。コト。正直(心)なる。コト。正しき。コト。あたふ。爲す。おこなふ。ほごす。つられる。云ひ。の。ぶる。堅く。約束する。ちかふ。コト。を。云ふ。

志(淡) 圖水邊。みづ。ぎは。の。コト。

志(只) 圖俟(心)に。同じ。其。條。を見。よ。

志(泉) 圖草の名。麻(心)の。コト。を。云ふ。

志(香) 圖相談(心)す。互ひに。は。かる。たづねる。たづね。嘆息する。くやむ。なげく。くやしが。る。

志(枳) 圖うちて。受(心)たる。紙。即ち。打撲症(心)の。きつ。つけ。け。が。する。

志(咫) 圖木の名。から。たち。の。コト。

志(咫) 圖そ。こ。な。ふ。害。する。コト。

志(咫) 圖支那の。尺度の名。にて。八寸。を一咫。云ふ。轉じて。其の。隔りの。極めて。短かき。コト。を。云ひ。表はす。に。用ゆる。語。

志(系) 圖絲に。同じ。い。こ。極めて。細(心)かき。コト。極めて。細(心)き。コト。を。云ひ。表はす。に。用ゆる。語。

志(紫) 圖色の名。むら。さき。紫色に。染めたる。衣。物。の。コト。を。云ふ。

志(緇) 圖黒き。色。の。コト。總て。黒く。染めたる。物。の。稱。黒色。の。衣服。僧は。常に。黒色。の。衣。を着て。ある。より。僧侶。の。コト。を。云ふ。語。

志(絲) 圖いと。物事の。すぢ。みち。絹糸(心)にて。織(心)たる。物。即ち。絹布(心)の。琴(心)三味線。胡弓(心)など。總て。絲(心)を。震(心)は。せて。奏(心)する。樂器。の。稱。數の名。一毛。の。十分の一。轉じて。極めて。僅(心)か。ばかり。の。コト。を。云ふ。

志(市) 圖まち。いち。物。を。うり。か。ひ。する。コト。轉じて。物。を。取り。か。ゆる。コト。物の。直段(心)相場。地方。自治。團體。の。一つ。の名。即ち。市制。を。敷。れて。ある。一。區域。の。稱。委(心)しく。云。へ。ば。郡部。に。屬。せ。ざる。一。區域。の。土地。の。稱。

志(姉) 圖あれ。我れ。より。年。の上。なる。女子。を。呼ぶ。語。女子。を。敬(心)ふて。呼ぶ。語。

志(姉) 圖姉に。同じ。

志(姉) 圖木の名。かき。

志(姉) 圖數量の名。一。種。は。億。の。萬。倍。なり。は。かり。得。られ。ざる。大。數。の。コト。を。云ふ。

志(姉) 圖骨。つ。きの。乾(心)きたる。肉。の。コト。即ち。ほ。じ。しの。コト。

志(姉) 圖嫂に。同じ。あ。によ。め。姉に。通。す。あれ。の。コト。

志 姿、姿、哆、施、弛、始、志、侍
志 思、恣、恣、恣、詩、之、芝、厄、史
志 駛、詩、詞、噴、噴、翅、脂、八二一

志(姿) 圖すがた。あり。さま。か。ほか。たち。物事の。容子。あり。さま。顔。や。身。装(心)など。を。美しく。か。ざ。り。た。つ。る。コト。を。云ふ。

志(姿) 圖侈に。同じ。お。こ。り。ぜ。いた。く。

志(哆) 圖口を。大きく。開(心)る。コト。大聲にて。語る。口。や。か。ま。しく。しゃべ。り。た。つ。る。人物。など。の。甚だ。多。く。ある。さま。を。云ふ。

志(施) 圖粗末。なる。絹織物。の。コト。袖(心)の。節糸織(心)などの。稱。

志(弛) 圖ほごす。あた。ふる。爲(心)す。行(心)陣(心)ふ。用(心)ゆる。設(心)く。加(心)ふ。張(心)る。て。が。ら。ほ。れ。を。り。び。る。の。ば。す。ゆる。む。喜。び。嬉。し。がる。状態。を。云ひ。表はす。語。

志(弛) 圖ゆる。く。す。ゆる。める。の。ば。す。損。じ。る。や。ぶ。る。我。が。思。ふ。ま。に。爲。す。き。ま。興(心)へ。る。ほ。ご。す。め。ぐ。む。コト。を。云ふ。

志(始) 圖だ。い。は。じ。め。は。じ。まり。は。じ。む。る。

志(志) 圖こ。ころ。さ。し。かん。が。へ。思案。精神。たま。しい。精神。の。堅。固。に。して。節義。に。富。める。コト。を。云ふ。考。を。記(心)す。コト。又。は。記。した。る。もの。

志(侍) 圖又た。じ。こ。音。す。た。の。む。コト。た。

志(姿) 圖。姿、姿、哆、施、弛、始、志、侍

志(思) 圖恣、恣、恣、詩、之、芝、厄、史

志(駛) 圖詩、詞、噴、噴、翅、脂、八二一

志(思) 圖考(心)へ。おも。ふ。コト。おも。ひ。願(心)ふ。コト。感。ず。る。コト。愛(心)く。し。み。慕(心)ふ。あ。は。れ。む。不。慙(心)に。感(心)ず。る。ふ。び。ん。に。思。ふ。コト。

志(恣) 圖我。ま。ま。ほ。しい。ま。ま。氣。ま。ま。恣(心)人。の。皮。膚(心)に。生。ず。る。斑。點(心)即ち。あ。ざ。墨。子(心)。

志(恣) 圖飾(心)ら。す。に。云。ふ。へ。つ。ら。ば。す。に。云。ふ。遠。慮。なく。云。ふ。こ。ば。がる。お。そ。る。

志(詩) 圖總て。事實(心)を。記。する。コト。又。は。記。した。る。物。總て。一つ。の。纏(心)り。た。る。事實。を。記。した。る。物。の。稱。

志(芝) 圖此(心)れ。此。の。の。云。ふ。接。續(心)の。意。を。表はす。語。ゆ。く。おも。む。く。た。つ。す。いた。る。

志(厄) 圖菌(心)の。一。種。にて。聖。耳(心)を。稱。し。其。の。莖。及。び。蓋(心)共。に。極めて。堅。さ。か。づ。き。女子。の。化粧。に。用。ゆる。紅(心)の。コト。を。云ふ。

志(厄) 圖玉(心)にて。作り。たる。盃。單(心)に。さ。か。づ。き。女子。の。化粧。に。用。ゆる。紅(心)の。コト。を。云ふ。

志(史) 圖在。りし。事跡(心)を。記。す。コト。事。跡。を。記。す。官。歴。史(心)國家。の。記。録。

志(駛) 圖の。コト。を。云ふ。

志(駛) 圖馬の。速(心)かに。走。る。状態(心)を。云ふ。極めて。疾(心)き。コト。を。云ふ。

志(噴) 圖一句。毎。の。末。字。に。韻(心)を。ふ。か。た。る。もの。即ち。から。う。た。五。絶(心)七。絶(心)律(心)古。體。等。種。類。多。し。

志(詞) 圖言語(心)言葉(心)の。コト。詩。歌。文章。の。總。稱。申(心)す。知。ら。せ。る。云。ひ。た。つ。る。

志(噴) 圖ため。す。こ。ころ。む。る。さ。ぐる。し。ら。へ。こ。ころ。み。る。コト。

志(噴) 圖た。し。な。む。好(心)む。す。く。

志(噴) 圖あ。な。な。り。笑。ふ。あ。さ。げ。る。

志(翅) 圖鳥。の。つ。ば。さ。の。コト。轉じて。鳥。の。飛。び。行。く。状態。を。云ふ。語。

志(脂) 圖ゆ。び。ゆ。び。さ。す。さ。し。知。ら。す。さ。し。づ。する。考(心)へ。

志(脂) 圖あ。ぶ。ら。か。た。ま。り。た。る。あ。ぶ。ら。あ。ぶ。ら。き。つ。つ。や。ある。あ。ぶ。ら。こ。ゆ。る。女子。の。化粧。に。用。ゆる。紅(心)の。コト。を。云ふ。

志(厄) 圖厄(心)に。通。す。其。の。條。を見。よ。

志(家) 圖獸。の。名。い。の。こ。ぶ。た。

志(戸) 圖しか。ば。れ。し。に。が。ら。つ。ら。れ。の。ぶ。る。主(心)として。取り。扱。ふ。つか。さ。ど。る。俸。給。を。受。け。る。者。が。其。の。職務。に。不。

志(旨) 困むれ。おほせ。おもむき(味)のうまきコト。事實(か)のよろしきコトを云ふ。

志(屍) 困しかばれ。しにがら。

志(死) 困生命(け)の絶ゆるコト。しぬ殺(く)すコト。總て草木類の枯(し)れしむコトを云ふ。

志(屎) 困大便(せ)のくそ。

志(廁) 困便所(せ)の雪隠(せ)かばや。そばわき。かたばら。いやしきコト。いやしむコト。岸邊(せ)の水ぎはのこたを云ふ。

志(獵) 困容貌(か)のみにくきコト。劣情(せ)つてある。つたなきコト。女子の淫情(け)に厚きコト。馬鹿。愚鈍(お)の白痴(お)のこた。

志(嗣) 困つぐ。引き受く。あさつき。代(り)のこた。

志(師) 困教師。師匠。先生。人の上(う)に立つ人。即ちなま。かしら。學識德行共に優れたる人に尊敬の意を表すべく。附け加はへる語。例は。何々大師。昔時の軍隊の編成の稱にて。二千五百人を一師と云ふ。軍勢(け)のこた。いくさ。轉じて人數の多きコト。もろもろ。

志(筒) 私刺。刺。飾。刺。刺。裂。漸。漸。ろ。あまた。手本。す。ひたがふ。のつさる。

志(筒) 困方形の平つたき箱。衣類を入れる具。飯(め)を盛る器。

志(私) 困われ。わたくし。拙者。わたくし。する。おほやけならぬコト。正(ち)しからぬコト。あはれむ。めぐむ。かあいがる。小便(せ)す。放尿(せ)す。

志(刺) 困さす。さうす。つらく。さし殺す。傷(け)つける。さげ。針(い)の(刺)の尖(せ)の稱。鋭く云ふ。そのる。名刺(め)を施す。即ちぬひ。又た單に針にて縫(ぬ)ふコト。

志(漸) 困魚の名。ふり。魚類の年數を経て大きく爲りたる者の稱。

志(器) 困器具の名。ふるひのこた。

志(鷄) 困鳥の名。鶏(け)のこた。

志(薪) 困木の名。いばら。木又は草などに在る。さげのこたを云ふ。

志(斯) 困これ。この。こに。又たかやう。かく。云ふ意を表はす語。なる。さく。裂(き)身分低し。いやしきコトに云ふ。

志(漸) 困召し使ひ。下男。下僕。

志(漸) 困水が枯(こ)る。水が。つきる。散(ち)かる。散(ち)ばる。

志(漸) 困水がこられる。氷(こ)が解(と)けて流れゆくコト。

志(履) 困藁(わら)にて作られたる履物(げ)の草鞋(わらじ)のこた。草履(わらじ)の草鞋(わらじ)などを穿(き)きて。走り行く状を云ひ表はすに用ゆる語。

志(徒) 困離(り)れて移(うつ)り行く状を云ひ表はす語。

志(是) 困こ。これ。この。正(ち)しくして。善良(せ)なるコト。

志(匙) 困器具の名。さじ。かひ。

志(鏝) 困鑿(じ)のこた。さじのこた。咲(き)を吐く。蠶(こ)の矢(や)しり。

志(謔) 困是(こ)に同じ。物事を正しく明らかに云ふ。即ち直言(ち)す。

志(提) 困容貌(か)の美しきコト。やさしきコト。安(やす)らかなるコト。委(あ)しなく明らかなるコト。

志(得) 困靜(じ)かに。やさしく歩み行く状(じ)を云ひ表はす語。

志(資) 困財寶(ざい)のたから。金錢(けん)資本(ざん)も。こ。材料(ざい)のた。は。か。助(たす)く。世話(せ)す。力を添(たす)ふ。た。よる。取り用ゆる。たち。性質(じ)だ。ち。困五穀(ご)の一つ。さびのこた。もちだんご。酒(さけ)のこた。

志(越) 困立ち止(と)る。くすむ。總て進み能はぬ状を云ひ表はす語。

志(蹠) 困草履(せ)の草鞋(わらじ)のこた。

志(飼) 困家畜(け)の家禽(け)の類ひ。食品(ひん)を飼(か)へて養ふコト。即ちかふ。

志(賜) 困あたへる。たもふ。下(くだ)したまはりたる物のこたを云ふ。即ち下され物。たま物のこた。

志(證) 困死したる人(に)後(け)よりつくる命(いのち)の即ちおくり名(な)。いみ名(な)。

志(演) 困つげる。うるほはす。ぬらす。ひたす。こた。

志(盜) 困陶器(てい)の一種。其の質(しつ)堅(かた)くして。特に光澤(くわ)ある陶器(てい)の總稱。

志(幟) 困標識(ひし)を現(あらわ)したる旗(ひ)のぼりのこた。轉じて旗(ひ)のぼり。目(め)じるしのこたを云ふ。

志(載) 困魚類又は獸類の肉の切りたる物のこたを云ふ。

志(熾) 困盛(さか)なるコト。勢(せい)の猛(たけ)さ状(じ)を云ふ。火(ひ)の盛(さか)にもゆる。狀(じ)物を煮(ゆ)たきするコト。

志(箇) 困荒(わ)れ果(は)つたる田地(ち)の。あれ地(ち)あれ地(ち)を開くコトを云ふ。

志(輜) 困物を運搬する車(くるま)の。輜(こ)。

志(鱧) 困魚の名。ほらのこた。

志(鯨) 困魚の名。大刀魚(たい)のこた。

志(鱒) 困六兩又は八兩のこたを云ふ。

志(鰒) 困魚の名。しびのこた。鹽(しお)と酢(す)にて漬(つけ)たる魚(い)の調(てい)にて。すしのこたを云ふ。

志(罎) 困酒を盛る器。さかづきのこた。

志(齒) 困は(か)き。轉じて齒(は)の列(り)へる如く。物の正しくならべるを云ふ。更に轉じて美しき石の列(り)なれる。狀(じ)を云ふ。年令(ねん)の。まはひ。書き記す。つら。れ。書く。こたを云ふ。

志(颯) 困風吹きて涼(すず)しきコト。風(かぜ)の涼(すず)しき狀(じ)を云ふ。

志(釀) 困五穀の名。さび。酒(さけ)を煮(ゆ)る。

志(滓) 困底(ぞ)にたまりたる物。即ちかす。おり。あか。あかじ。きたなき物。けが。けがす。

志(擊) 困を。なふ。いたむ。なる。やぶる。ゆく。いたる。いたす。達(た)す。届(と)く。及ぶ。はたく。打(う)つ。荒(わ)々(わ)しく。猛(たけ)さ状(じ)を云ひ表はす語。

志(貢) 困朝廷にさし上る土産物(と)の。神佛に奉(ほう)つる禮物。即ちにへのこた。

志(驚) 困猛禽類の總稱。即ち驚(おど)の。驚(おど)などの類(るい)を云ふ。轉じて猛烈なる狀(じ)を。

云ひ表はすに用ゆる語。

志(肆) 困はしいま。勝手氣(か)ま。正(ち)き。正直(ち)なる狀(じ)を云ふ。極度(き)きはまるコト。つらぬ。ならぶ。ゆるやか。ゆるし。品物(ひん)を賣(ばい)する處(ところ)。みせ(店)。

志(耳) 困五感器の一名。み。きく。こた。すなはなる狀(じ)。從(したが)ふ。狀(じ)を云ひ表はす語(ご)だけ。のみ。云ふ。決定(てい)の意を表はす語。

志(聾) 困口もそのこた。

志(聾) 困耳より出る血のこた。鶏(け)を殺し其の血を以て神を祭るコト。

志(餌) 困家畜(け)類に與ふる食物。即ち。み。ま。米(こ)の粉(こな)にて作りたるもち。即ちだんごのこた。

志(珥) 困耳飾(み)に用ゆる一種の珠(たま)の。珥(み)に通す。血まつり。

志(則) 困耳を斬るコト。支那の昔時の刑罰の一。耳(み)の刑。

志(寺) 困佛像を安置して祀る處。即ち。精舎(けい)官府役所のこた。侍(ざい)に通す。お。お。お。は。に。仕(つか)へ。は。い。ん。べ。つ。て。る。人。の。こた。又は。さ。む。ら。ひ。

志(肆) 困耳。耳。耳。耳。寺。而。八三三

志 越、飼、賜、演、盜、熾、箇、輜

志 筒、刺、鱧、鱒、鰒、鷄、薪、漸、漸

志 肆、耳、聾、珥、寺、而 八三三

志 餌、餽、瀆、餽、次、事、時、境、時

し、其れから。しかし。しかも。しかれ
ども云ふ意を表はす語。そこで。す
なはち云ふ意を表はす語。
志(餌)餽(餽)のこト云ふ。
志(餽)餽物を煮(く)こト煮(く)き過し
たるこト煮きつめてドロドロになり
たる物を云ふ。
志(瀆)瀆(瀆)の垂れ流る、狀(ク)を云
ひ表はすに用ゆる語。
志(餽)餽魚類の胎兒(イ)即ちばらこ
のこト云ふ。
志(次)餽つき。つぐ。第二番目。ついで
達す。届く。こまる。こまる。やどる
轉じて宿屋のこト、又た軍隊の泊(ト)
つてる處の稱、即ち兵營。道中の宿場
志(事)餽わけがら。仔細(シ)こがら。
こ。つかふ。つかふまつる。しこ。
しわざ。爲す。いさなむ。取り行ふこト
つかふ。仕事をさせる。
志(時)餽さき。じかん。時刻(キ)しほ。
なり即ち時機(キ)たづぬる。おさづる
うかがふ。よろしきこト。よきなりの
こト。よきしほのこト。
志(境)餽鳥類の宿(ト)る處、れぐら、
志(時)餽種(ト)なまく。うえる。

志 時、茲、磁、慈、滋、爾、風、瀝、爾

志(時)餽祭(ハツ)を爲す場處、即ち祭場(マ)
まつりの庭(マ)。
志(茲)餽この。こ。こ。年月(ト)に
云ふこトを云い表はす語、例は茲に何
年月何日など。
志(磁)餽じしやくのこト、即ち鐵氣(テ)
を吸ひ寄(ク)せる力を有す石。
志(慈)餽なまけ深きこト、いつくしみの
厚(ク)きこト。
志(滋)餽味(シ)のうまさ食品。養(シ)と
なる汁(シ)ふえる。ます。多くなる
いよ。ます。云ふ意を表はす
語。
志(爾)餽そなた。おまへ。なんぢ。ちかづ
く。ちかよるこト。かやう。しかく。斯
の如し。云ふ意を表はす語(然(シ))
り其の通り云ふ意を表はす。又たの
み。だけ云ふ意をも表はすに用ゆ。
志(風)餽天子の用ひさせたまふ印形のこ
トを云ふ語、天子の御印。
志(瀝)餽近(シ)きこト。近まるこト。近づ
き行くこト。
志(爾)餽總て草木の花の盛んに咲(ク)き
開ひてる狀を云ひ表はす語。
志(二)餽一に一を加へたる數、即ちに。ふ
た。二番目。つぎ。二度(ニ)。ふた

志 貳、式、字、兒、辭、季

志(貳)餽二に同じ。そへ。ひかへ。うた
がひ。うたがふこト。
志(式)餽二の字の古文字。
志(字)餽假名(カ)に對して漢字のこトを
云ふ。人類が總て其の心に思ふ事を云
ひ表はすに用ゆる符號、即ち文字(ジ)
別の名、あざな。あひが。いつく
しむこト。
志(兒)餽こ。こ。おきな。
志(辭)餽言語(ジ)こ。語句。云ひた
つ。説き明す。知らせる。聞(ク)せる。
こ。はる。即ち辭す。
志(季)餽辭に同じ。前條を見よ。
志(兒)餽はげむ。つこめる。同種類の物
がふゆる。即ち繁殖(シ)する。轉じて
交尾(シ)する。つるむ。
(まじあ)
志(慈愛)餽いつくしみ。あいす。
志(自愛)餽自から愛す。云ふ意にて
我が身體(カ)を我にて大切になすこト
を云ふ。
志(自愛主義)餽自分の身に利
益をつけるこトのみを考へる主義。

志(至惡)餽此の上もなき惡しきこト
志(爲飽)餽動爲しあく。續(ツ)けて爲
していやになる。
志(仕上)餽動しさげる。揃(ツ)え上
る。仕事を爲し終る。
志(仕上)餽しあぐるこト。爲し上げ
たる其の容子を云ふ。
志(仕上)餽(仕上)餽削(カ)り上げた
る木材(カ)の、其の表面(カ)を美しく
する爲めに、用ゆるかん。
志(明後日)餽あまつての其の
翌日、明々後日。
志(仕合者)餽運(シ)のよき人
のこトを云ふ。
志(仕合)餽しあふこト。互ひに物事
を争(ツ)そふて爲す。特に擊劍(カ)柔
術(カ)などの技(カ)を闘はすこトを云
ふ。
志(仕合)餽(仕合)餽仕合を爲す人、
志(仕合)餽(仕合)餽仕合を爲す其
の相手方のこトを云ふ。
志(爲敢)餽動しさげる。爲し終る。
志(爲合)餽(爲合)餽物事を互ひにはりあつ
ていさなみなす。
志(字餘)餽和歌にて、五文字の句
が六文字となりたる如きを云ふ。
志(あ)餽、志(あ)ま

志(爲過)餽動しせ。なふ。しそ
んする。
志(思案)餽考(カ)のこト、工夫(カ)
のこト。
志(思案)餽(思案)餽思案にくれふさが
つてるかほつき。
(まじいる)
志(紫衣)餽僧侶の衣服の名、紫色(シ)
に染めたる衣(カ)官府の許(カ)を得れ
ば、着用し能はぬもの。
志(私意)餽自分の意見。秘(シ)かいた
くむ。はかり事。勝手(カ)なる考えの
こトを云ふ。
志(緇衣)餽僧侶の用ゆる黒き衣(カ)を
云ふ。
志(恣意)餽かつて。きままのこト。
志(旨意)餽むね。こころ。いみ。
志(驪夷)餽馬の皮(カ)にて作られたる
袋(カ)の如きもの、酒を入れる、具。
志(卮)餽酒を入れる具、大形の盃
(カ)の如きものなり。云ふ。
志(侍醫)餽宮中に奉仕する醫士。
志(時衣)餽當季、當季の衣服。
志(四維)餽東南、東北、西南、西北の四

つの隅(カ)の稱、即ち乾坤長巽の四つの
方角。禮義廉恥(シ)の四大道のこト
を云ふ。
志(思惟)餽考(カ)えるこト、心に思ひ
居るこト。
志(示威)餽自己(カ)の威光(カ)を、殊更
に表はし示めすこト。
志(四圍)餽ぐるり、まわり。轉じて世
間(カ)と云ふこト。
志(辭彙)餽じびき、字書。
志(字彙)餽字書(カ)、字引。
志(自爲)餽勝手に物事を爲すこト。自
分の意志にまかせて爲す、はたらきを
云ふ。
志(詩友)餽互ひに詩を作り合ふて、
樂(ク)しみ遊ぶ友達(カ)。みやびなる
遊(カ)をなす友達。
志(師友)餽教師と友達。
志(四友)餽(四友)餽紙(カ)墨(カ)硯(カ)硯(カ)
のこトを云ふ。雪中に咲く四つの花の
稱にて、玉梅、臘梅、水仙及び山茶花(カ)
のこトを云ふ。
志(死友)餽死に訣(カ)れたる友達。
死すとも交(カ)を變(カ)まじと契(カ)ひ
たるほどの仲のしたしき友達のこトを
云ふ語。
志(あ)ま、志(あ)い

まいう

あいう(私有)個人所有物、官有物
 なごに對しての稱
 あいう(事由)圖物事のわけがら、事物の
 次第のコトを云ふ
 あいう(自由)圖自己の思ふまま、己(己)の
 心のまゝ、我(我)も、かつて他(他)より
 干渉(干)束縛(束)などを受けて、思ふ
 まゝに活動なすコト、又は其の行爲の
 コトを云ふ
 あいう(自由港)圖各國の商船が、何
 等の干渉をも受けて、勝手に出入(入)し
 得らるゝ港の稱
 あいう(自由刑)圖身軀の自由を拘束
 (拘)する刑と云ふ意にて、懲役、禁錮、
 拘留などの刑刑のコト
 あいう(自由行動)圖相手の都合
 などに頓若(頓)せず、我が思ふ通り
 に活動するコトを云ふ
 あいう(自由結婚)圖双方の親
 (親)の承諾を求めずして、爲したる結婚
 のコト、即ち野合(野)夫婦
 あいう(自由市)圖市制(市)を
 敷かれてある自治團體の所有となつて
 る財産のコトを云ふ、此の財産は其の
 團體の必要以外には、何人(何)と雖も、
 如何なる理由あるも、流用し得られざ

まいう、まいら 試歸

るものさす
 あいう(自由貿易)圖財政學の語
 にて、保護貿易に對する語、即ち政府
 が各國との貿易に對して、何等の干渉
 (干)をもなさず、貿易者双方の自身の
 心のまゝに爲さしむる貿易のコトを云
 ふ、解(解)りやすく云へば、重き海關稅
 を課して、我が國の産物を保護するが
 如き、手段を執(執)らざるコトを云ふ
 あいう(試逆)圖君又は父母を殺害せ
 る大逆(逆)を云ふ
 あいう(侍醫局)圖宮内省内に在る一
 局、宮中に於ける疾病の治療衛生の事
 務を司(司)るところ
 あいう(慈育)圖いつくしみ、やしなふ、
 あいう(試)圖大逆(逆)の行爲(行)を、即
 ち臣にして君を害し、子にして親(親)を
 損する
 あいう(戸位素餐)圖無能(能)なるに
 拘はらず、其の職に居て、食祿を貪(貪)
 てゐるコトを云ふ
 あいう(爲出)圖動しはじめる、行ひ出
 す、なしかける
 あいう(鱈)圖魚の名、大き二尺内外にて
 扁平(平)な形を爲す、背(背)は淡青(青)
 色にて、腹部は銀色(銀)を呈す、鱗(鱗)

まあり、まゐん

まあり、まゐん
 (ま)は極めて細かく、頭部(頭)に突起あ
 り、又は下腹部に短き鋸(鋸)の如き物あ
 り、肉は白色にて味は中等なりと云ふ
 あいう(自爲力)圖自己の考のみにて
 物事を爲し能ふ力の稱
 あいう(仕入)圖商品を買ひ入れる、
 あいう(仕入)圖商賣品を買ひ入れて置く
 コト、商品を貯へるコト
 あいう(仕入)圖商品を買ひ入れて貯
 (貯)へ置く
 あいう(市隱)圖仕入れたる商品、
 (市)ながら、官にも仕(仕)えず、世の中
 の爲めにも活動(活)せず、市井(市)に
 隱居してゐるコト、又は其の人
 あいう(私印)圖自己(己)の所持する印形
 (印)を云ふ
 あいう(市尹)圖市の長、即ち市長
 あいう(四韻)圖漢字の四つの音、即ち平
 (平)上(上)去(去)入(入)の音
 あいう(子音)圖母音より出たる音にて、
 アイウエオを除(除)く、他の音(音)の音
 コトを云ふ
 あいう(子韻)圖同上
 あいう(次韻)圖他人の作りたる詩の韻字
 を用ひて作りたる詩

八二六

あゐん(寺院)圖てらのコト

(まじう)

あゐ(舟)圖ふれのコト(載)す
 あゐ(手)圖又たしゆと音す、てのコト(手)
 轉じて自(自)から、手(手)からと云ふ意
 を表はす
 あゐ(授)圖又たしゆと音す、あたへる
 さづける(授)あたへられたるコト、さづ
 かりたるコト
 あゐ(撤)圖麻幹(麻)にぎる、持つ(撤)夜
 番(夜)のコト、即ち拍子木(拍)を打ち
 つゝ夜歩くコト
 あゐ(秋)圖四季の第三位の名、即ちあき
 (秋)さいちゆうと云ふ、即ち時期のコトを
 云ふ
 あゐ(愀)圖さびしくあり、心細(細)くあ
 るコト(愀)顔色(顔)の變(變)りゆく状(状)
 を云ふ
 あゐ(愁)圖案(案)じる、うれひる(愁)なげく
 かなしむコト
 あゐ(嗽)圖總て物かなしく(嗽)かななる
 聲にて鳴くコトを云ふ
 あゐ(秋)圖草の名、よもぎのコト(草)草花
 の名、はぎのコトを云ふ
 まゐん、まゐ 舟、手、授、秋、愀、愁、秋

あゐ(整)圖石を積(積)み重(重)められたるもの
 即ち石がき(石)しき石のコト
 あゐ(楸)圖木の名、梓(梓)の種類にてひ
 さぎの木(楸)基盤(基)のコト
 あゐ(湫)圖池(池)大なる池(池)心地(地)よ
 く涼(涼)しきコト(湫)案じうれふる状を
 云ひ表はす語
 あゐ(鞆)圖馬具の名、しりがひ
 あゐ(鞆)圖寄(寄)る、あつめる、一束(束)を
 さなす(鞆)なまむ、取り入れるコト、即ち
 收斂(斂)を云ふ
 あゐ(魚)圖魚の名、ごちやうのコト(魚)川
 魚の名、かじか、其の形状はせに似たる
 小ききもの
 あゐ(鷲)圖鳥の名、う(鷲)
 あゐ(守)圖まもる、もりする、もり(守)ふせ
 きたもつ(守)視張(張)を嚴重に爲すコト
 を云ふ
 あゐ(狩)圖鳥獸を捕(捕)る、即ちかりする
 かる、かりのコト(狩)轉じてさぐる、たづ
 め、さがす(狩)君命を奉じて守つて居る
 土地、即ち任地
 あゐ(酒)圖又たしゆと音す、さけ
 あゐ(四)圖さらへる、つかまへる、捕(捕)
 ばる(四)捕(捕)はれたる人、めしうご
 ざりこのコト
 まゐ 整、楸、湫、鞆、鷲、守、狩、酒、四

あゐ(鯛)圖魚の名、はやのコト
 あゐ(酒)圖水中を泳(泳)ぎ行く、水上に浮
 (浮)んでゐるコト
 あゐ(周)圖ぐるり、まはり(周)めぐる、曲
 (周)しまひ、おはり(周)達す、届く、至
 る(周)ふ、備(備)はる(周)行きたる、
 あまれし
 あゐ(賜)圖にぎほふ、にぎあはす(賜)物を
 與(與)へて助(助)ける
 あゐ(週)圖周(周)に同じ、一まわり
 あゐ(會)圖すぐれる、すぐれたる者(會)を
 さ、かしたら即ち會長(會)しまひ、をばり
 をはる、はつ
 あゐ(醜)圖みにくき、きたなし、あしし、
 けがらひ(醜)顔容(容)の、みにくき人
 (醜)精神のよろしからぬ人(醜)いまはしき
 行ひ(醜)恥(恥)けがれ、よこれ(醜)仲間
 (醜)種類、たぐる
 あゐ(檜)圖木の名ならぬ木
 あゐ(鱸)圖淡水魚の名、ごちやう
 あゐ(酬)圖返禮(禮)す、むくゆる(酬)受(受)
 けたる盃(盃)を返す、返盃
 あゐ(適)圖無くなる、つきる、をばる(適)堅
 (適)固なるコト(適)たつしや、つよきコ
 ト(適)直(直)ちに忽(忽)ちと云ふ意を表
 はす語
 まゐ 酒、周、賜、醜、檜 八二七

まう 就、秀、锈、锈、終、岫、岫、州

志(就) 圖目的(秀)を達す、成る(就)つく
●成る云ふ意より轉じて、なほる。こ
ぐる(就)あたふ。よくす。
志(锈) 圖金錢を出して物を借り、又は
使ふ、即ちやこふ、又たやこはれる(返
禮)に拂ふ金子、即ち實金。
志(岫) 圖すぐれる。ひいでる。ぬきんで
る(秀)すぐれたる人又はぬきんでる者(秀)
うつくし。うつくしき人(岫)樹木などの
能く發育して生(秀)ひ茂(秀)れる状を云
ふに用ゆる語。
志(锈) 圖さび。さびたる鐵。
志(锈) 圖總て玉の如き美しき石のコト
を云ふ。
志(終) 圖木の名、ひいらぎの木。
志(岫) 圖際立(秀)て大きく高き山を云
ふ(秀)轉じて山の高きコトを云ひ表はす
に用ゆる語。
志(岫) 圖衣物の名所、そで(秀)轉じて總
て袖(岫)の如く、傍(岫)に附着(秀)して
る物のコトを云ひ表はす語、例は山の
袖(岫)などのる。
志(岫) 圖山の頂上(岫)山に在るほ
ら穴(岫)のコトを云ふ。
志(州) 圖水中に在る陸地、即ちしま(州)
水中の淺瀬、即ちす(州)國(州)のコト(州)國

まう 洲、收、修、脩、售、呪、臭

志(洲) 圖劃したる一部分の稱にて、府縣の
上に在るもの。例は武州が攝州さか
の如し(洲)轉じて物の多く集まれる状を
云ふに用ゆる語。
志(洲) 圖州(洲)に同じ(洲)地球上の六大
陸の稱、即ちアジア洲、ヨーロッパ洲、
アフリカ洲、オーストラリア洲及び南北
アメリカ洲。
志(收) 圖取り入れる。なまめる。なまむ
●あつめる(收)入り來れるもの、即ち收
入物(收)のへる。なままる。おちつく
志(修) 圖なまめる。即ち學藝などを習
ふ(修)こまなふ(修)正しくする(修)すぐる
人(修)まさりたる人のコトを云ふ(修)備
(修)ばる。そなはれる。
志(售) 圖修(售)に同じ、前條を見よ(售)
(售)たる肉即ちほじし(售)干(售)すコトか
はかすコト。
志(售) 圖うる。賣買(售)する。
志(售) 圖草の群(售)り生(售)てる處、即
ちくまむら(售)むらがる。多く一處(售)し
に集(售)まる。
志(呪) 圖又たじゆきも音す、のろふコ
ト(呪)まじなひのコト(呪)のろふべく、又
たまじなふべく爲めにいひの言葉(呪)
志(臭) 圖物のくさるコト(臭)きたなきコ

まう 陳、緞、緞、緞、搜、八二八

志(陳) 圖陳(陳)の如き雨。細雨、
例は邊陳(陳)など。
志(緞) 圖青(緞)に赤味(緞)を帯(緞)てる
色に染めたる絹布(緞)●青に赤味を帯
びてる色合(緞)の稱。
志(緞) 圖色糸にて布帛(緞)に飾(緞)を
施すコト、即ちぬひ、又はぬひせし物。
ぬひせりのコト。
志(緞) 圖ちやみたる糸。
志(緞) 圖乗るべく飼ふ馬(緞)馬を飼ひな
らすコト、又は其の人(緞)馬に乗りてか
けり行く。
志(緞) 圖籠(緞)の如き一種の器具、酒を
渡(緞)に用ゆるもの。
志(緞) 圖鐵に生するさび。
志(搜) 圖つかれる。おさるへる。やせる
やせのコト。
志(搜) 圖又たさうと音す。さがす。しら
べるコト。
志(搜) 圖軽く握(搜)る。つまむ。取る(搜)
ひつばる。はじく。

志、搜、搜、搜、搜、搜、羞、蒐、蒐、首

志(搜) 圖鳥獸をさがし捕(搜)ふるコト、
即ちかり(搜)特に秋の季節に於て爲すか
りのコトを云ふ。
志(搜) 圖物を水に入れてまぜる(搜)つけ
る。ひたす(搜)米をかしぐ時に生する音
(搜)のコトを云ふ(搜)小便(搜)のコト。
志(搜) 圖猛き鳥の名、わし。
志(搜) 圖洩(搜)の(搜)に同じ(搜)米をかし
きたる水、即ちしるみす。
志(搜) 圖風吹く。風の烈(搜)しく吹きす
さぶ状(搜)を云ふ語。
志(搜) 圖臭(搜)に同じ(搜)甚だしくさ
き呼吸(搜)のコトを云ふ。
志(羞) 圖食すべき物、肴(羞)●食物を
すまめる(羞)はづかしがる。はづる。はぢ
(羞)の(羞)コト。
志(蒐) 圖あつむ。あつまる(蒐)ひそむ。隠
(蒐)す(蒐)狩(蒐)するコト、特に春先(蒐)
に於て爲す狩の(蒐)コト。
志(蒐) 圖家具の名、はうきのコト(蒐)轉
じてはく。きまむ。
志(蒐) 圖奔(蒐)る(蒐)る(蒐)度々(蒐)數
々(蒐)度々(蒐)速(蒐)か。突然(蒐)に
にわか。
志(首) 圖(首)の字の、古字。
志、搜、搜、搜、搜、搜、羞、蒐、蒐、首

まう 緞、緞、柔、採、採、採、採

はじめ。もさひ。もさづく(採)肝要なるコ
ト、かなめ(採)申し出る。進(採)る。白状
す(採)降参す。服従(採)す(採)知らせる。知
られる。現(採)はす。
志(採) 圖あだ。かたき(採)むくゆる。むく
う。かたふ(採)正(採)し改める。改め直(採)
す(採)おきのう。つぐのう。まごふ(採)類
(採)ぬ。やから。さもがら(採)相同(採)じ。
ひさし(採)しるし。かんじ(採)售(採)に通
す。うる。
志(採) 圖又たじゆきも音す、昔時官吏の
帯(採)し印(採)の、環(採)をつなぎ掛(採)
て置く組、即ち現今の勳章に附いてあ
る組(採)組み組の稱。
志(採) 圖やさしきコト。すなほなるコ
ト(採)やはらか。やはらぐ(採)草木の生(採)
たばかりの芽(採)。嫩葉(採)●安(採)すらか
あんたい。
志(採) 圖もむコト。にぎりて軟(採)らか
くす(採)ため直(採)す(採)入り亂(採)れてる
状(採)を云ふ。
志(採) 圖なめしたる皮。さらしてやは
らかくせし皮(採)干(採)したる皮。さらし
皮。
志(採) 圖ふみにじる(採)あはれ廻(採)る。
志(採) 圖猿の種類、手長ざる。

まうい 獸、籌

志(獸) 圖四つ足の動物、けもの。
志(籌) 圖又たじゆきも音す。こまき。な
がいき。まはひ。年(籌)●老人(籌)のコ
トを云ふ。
志(雨) 圖雨(雨)の如き雨。細雨、
志(雨) 圖有(雨)佛法の語にて、生(雨)と死
(雨)と色身(雨)と中陰(雨)の稱。
志(雨) 圖養ひさなる雨さ云ふ意にて
降るべき時に降りて作物をうるほす、
よき雨のコトを云ふ。
志(雨) 圖(雨)雨の末より冬の初めへかけ
て、時をさらはずに降る雨、即ちしぐ
れ(雨)時々降る雨。
志(雨) 圖(雨)雨けがらはしきコト(雨)其
の形のみにくく、きたなきもの。
志(雨) 圖(雨)雨くされてきたなきもの
悪しきにはひを放つもの。
志(雨) 圖(雨)雨甚だしくせまきコト、
志(雨) 圖(雨)雨みつもまなきコト、恥
すべきコト、あしき行ひ。
志(雨) 圖(雨)雨ぐるり。まはり。
志(雨) 圖(雨)雨著(雨)るしくひいでるコ
志(雨) 圖(雨)雨へめぐりて遊び歩くコ
ト。漫遊(雨)に同じ。
志(雨) 圖(雨)舟に乗りて遊び歩くコ
トを云ふ。

まうい、まうか

あういつ(秀逸) 図秀吟(秀吟)に同じ、其の條を見よ。
あういふ(獸醫部) 図各師團司令部に屬して、軍馬の衛生事務をつかさどる所。
あうり(驟雨) 図にはか雨、夕立(夕立)のこトを云ふ。
あうりつ(愁鬱) 図うれひて氣をくさらせるこト。案じふさぐこト。
あうえい(秀穎) 図著(著)るしくすぐれてかしこきこトを云ふ。(發明)
あうえい(涸泳) 図水およぎ。水れん、あうえい(収益) 図受けおさめたる利益、もうけのこトを云ふ。
あうえい(獸疫) 図牛馬に生ずる流行病(流行病)のこト。
あうえい(周易) 図五經(五經)の一なる易經(易經)のこト。委しく云へば支那の伏羲氏が創せし八卦を、周の文王が總説を爲し、其れを周公が細説し、其を亦た孔子が説明せしものなり。
あうえん(終焉) 図終り。最後(最後)轉じて死するこトを云ふ。
あうえん(愁怨) 図うれひうらむこト。
あうかり(周航) 図各地を其から其れへと船で廻(廻)るこトを云ふ。
あうかり(舟行) 図舟に乗りて行く、即ち

まうか

航海のこト。
あうかり(醜行) 図恥なる行ひ、悪しき行ひ。みだらなる行爲。
あうかり(修交) 図交際を結ぶこト。
あうかり(秋郊) 図秋の野邊(野邊)。
あうかり(醜交) 図色情に關する男女間のいやしきまじはり。
あうかり(離校) 図互ひに比(比)べ合せて、誤(誤)を正すこト、即ち校正。
あうかり(秋遊) 図非常に小さき物事、又は非常に小さきことを云ひ表す語。
あうかり(獸行) 図色情の行ひ。
あうかり(柔剛) 図やわらかきと、かたきと、(や)さしきと、つよきと。
あうかり(收額) 図收入したる金錢の全額。取り入れ高(高)のこト。
あうかり(就學) 図學問をなし始むこト。子供が初めて小學校へ入るこトを云ふ。
あうかり(修學) 図學問をおさめるこト、學藝を習ふこト。
あうかり(獸革) 図なめし皮のこト。
あうかり(周洽) 図ゆきわたる。あまれきこト。
あうかり(周問) 図一週間のこト。
あうかり(收監) 図罪人を監獄へ入れるこト、監獄が罪人を受取るこト、

まうか、まうき

あうかり(醜漢) 図凡て恥づべき行狀を爲す男子。品行の正しからざる人のこトを云ふ。
あうかり(羞汗) 図羞(羞)かしさのあまりに出る汗(汗)のこト。
あうかり(柔翰) 図筆(筆)の異名、あうかり(秋海棠) 図草の名、しめりたる地を好むものにて、葉は圓くして小さく、光澤(澤)ありて、薄紅(紅)し。秋の末に莖(莖)の尖(尖)に、小さき紅色(紅)の花を咲かして美しきもの。
あうかり(修業) 図修業(修業) 図地理歴史理科等の研究を爲すを目的として爲す學生の旅(旅)行(行)のこト。
あうき(秋季) 図秋の時期。
あうき(週期) 図一まはりの期間(期間)のこト。
あうき(秋氣) 図秋の時候。秋の趣き。
あうき(周忌) 図死したる人の年回(年回)のこトを云ふ。
あうき(祝儀) 図いわひこト。おくりものはな。
あうき(臭氣) 図くさきかざ。よろしからざるにはひのこト。
あうき(修技) 図技藝(技藝)をおさむるこト。又た修(修)めたる技藝。
あうき(蹴鞠) 図昔時に流行せし一種の

遊戯けまりの遊びのこトにて、(草)(草)にて製されたる、内の空(空)をなせしまりを、けり合つて遊ぶもの、
あうきん(就擒) 図とりこなるこト。
あうきん(囚籠) 図捕(捕)はれるこト。
あうきん(酬金) 図報酬として差し出す金子のこトを云ふ。
あうきん(秀吟) 図和歌俳諧等の出來の良き者のこトを云ふ。
あうきん(修行) 図物事を研究(研究)すべく爲めに、諸國を遍歴するこトを云ふ。
あうきん(佛敎) 図道を修むるこト。學藝を習ふこトを云ふ。
あうきん(わらわ) 図さい(秋季皇靈祭) 図秋の彼岸の中日に、宮中の皇靈殿に於て、御代代の皇靈を祭(祭)らせ給ふ祭事のこト。
あうきん(秀句) 図詩歌などの巧みなる文句。總て巧みなる語句(語句)。
あうきん(愁苦) 図なげきくるしむ。うれひもがくこトを云ふ。
あうきん(醜窟) 図みだらがましき行ひを爲す者どものある所。恥(恥)なるべき行ひを敢てする者のある所。轉じて醜業婦などのある所、即ち遊里。
あうきん(繡花) 図花の模様を美しく、め

ひせし物を云ふ。
あうきん(州郡) 図州と郡、轉じて地方のこト。
あうきん(周回) 図ぐるりまはり。
あうきん(秋光) 図秋の眺め、秋のけしき。秋のおもむきのこトを云ふ。
あうきん(周郭) 図ぐるりの輪。ぐるりのかこひ。輪廓(輪廓)のこト。
あうきん(收移) 図田島(田島)の作物を取り入れるこト。
あうきん(秋穫) 図秋に於て穀物を取り入れるこト。
あうきん(柔滑) 図やわらかくして、つるつるしてゐるこト。やわらかくして、手ざわりのよきこト。
あうきん(わらわ) 図(羞花閉月) 図女子の容貌(容貌)の美しき爲めに、花もはち月もかくるこト。非常なる美人のこトを云ふ語。
あうきん(周經) 図ぐるりまわり。
あうきん(秋景) 図秋の景色。秋の眺め。
あうきん(收繫) 図罪人を獄につなぎ置くこトを云ふ。
あうきん(囚繫) 図さらえてつなぎ置くこト。
あうきん(週勁) 図甚だ強きこト。猛(猛)き

あうきん(秀傑) 図すぐれひいでてるこト。
あうきん(周月) 図まる一月(一月)のこト。
あうきん(秋月) 図秋の夜の冴(冴)輝ける月のこトを云ふ。
あうきん(修業) 図學藝を習ひおさめる。藝術を研究するこト。
あうきん(醜業) 図みにくきなりはひ。羞(羞)べきなりはひ。淫賣婦(淫賣婦)のこト。
あうきん(就業) 図業務につくこト。
あうきん(州縣) 図州と縣、轉じて地方のこトを云ふ。
あうきん(酬恩) 図神佛にこめたる祈願の成就(成就)せし爲めに、禮參(禮參)をするこトを云ふ。
あうきん(獸園) 図獸類を入れて置くをり。のこトを云ふ。
あうきん(醜業婦) 図淫賣婦(淫賣婦)をする女子。娼妓(娼妓)のこト。
あうきん(醜語) 図みだらなる物語(物語)のこト。
あうきん(囚獄) 図獄屋へさらえて置くこト。単に牢獄(牢獄)のこト。
あうきん(秀才) 図すぐれたる學才ある人のこトを云ふ。
あうきん(周歲) 図周年に同じ。
あうきん(秋霜) 図秋に降る、しも、

あうさ、まうし
あうざり(修造) 図おさめつくる。つくらふ。しゆせんのコト。
あうざり(收藏) 図ざり込むコトおさむるコト。たぐはふるコト。
あうざく(酬酢) 図盃(サカ)のやりとりをして、酒をすむるコトを云ふ。
あうざく(繡錯) 図色取の美しく入り亂(カ)れてある模様(サマ)のコトを云ふ。
あうざふ(周匝) 図まはりぐるり云ふコト、轉じてあまねく行きわたれるコトを云ふ。
あうざん(聚散) 図あつまつて来るコトとちちかるコト、又はあつめるコトと、ちらばすコト。
あうざん(獸産) 図獸類が子を産むコトを云ふ語。
あうざん(羞慙) 図はづるコト。はづかしきコトを云ふ。
あうし(舟師) 図ふないくさ。海軍。
あうし(舟子) 図ふなこ。せんどう。
あうし(修史) 図歴史を編輯するコト。
あうし(愁思) 図うれひかなしむ心。
あうし(洲泚) 図あさせ。なきさ。州(シ)のコトを云ふ。
あうし(秀士) 図ひいでたる人士。

まうし
あうし(收支) 図おさむるさ出すコト。即ち金錢の出入(イジ)のコト。
あうじ(修辭) 図文章の語句を優美(ヒツ)に巧(ヒ)みになすコト。
あうし(秋收) 図秋のさり入れさ云ふコトにて、秋に穀物類を取り入れるコトを云ふ、即ち收穫(サツ)。
あうし(啾啾) 図小聲でしゆくしゆく泣くコト。哀(ヒ)れなる泣き聲。
あうし(湫湫) 圖秋のさびしき日に、物思ひにふさがる状(サマ)を云ふ。
あうし(周悉) 圖委(ヒ)しく知るコト。あまねく知るコト。
あうじつ(秋日) 圖秋の日。
あうじつ(周日) 圖一週間即ち七日間のコトを云ふ。
あうじつ(秀實) 圖草木類の十分に盛長して、十分に實(ヒ)のるコト。
あうじつ(柔日) 圖十干の乙己辛癸にあたる日のコトを云ふ。
あうし(柔質) 圖其の質のやわらかなるコト、やはらかなるしつ。
あうし(修葺) 圖家屋(サマ)を修繕(セツ)するコトを云ふ。
あうし(舟楫) 圖舟さかちさ。轉じて單に舟のコトを云ふ。

まうし
あうし(修習) 圖習ひおさめるコト。
あうし(收拾) 圖ひろいあつめる。えりあつめるコト。
あうし(蒐輯) 圖よせあつめるコト。又はよせ集(ヒ)めたるもの。
あうし(聚集) 圖よせる。あつめる。
あうし(舟車) 圖ふれさ車さ。
あうし(秋社) 圖秋の社日。轉じて地方の鎮守神社の秋祭のコトを云ふ。
あうし(舟首) 圖舟のかしら。即ち舟のへさきのコト。
あうし(收取) 圖おさめ取るコト。
あうし(抽手) 圖ふさがる手のコト。
あうし(收受) 圖受けおさめるコト。
あうし(洲渚) 圖なきさのコト。水中の淺瀬(サマ)のコト。
あうし(洲嶼) 圖水中の陸地。しま。
あうし(修身) 圖身を修めて徳を養ひ、行ひを正しくするコト。
あうし(愁辛) 圖うれひかなしむ。いたみなげくコトを云ふ。
あうし(周慎) 圖殊につしみふかき。
あうし(周親) 圖近き親類。近親。
あうし(舟人) 圖舟をこぐ人即ちせん頭。
あうし(舟人) 圖さらはれ人さい人。
あうし(周章) 圖あわてるコト、うろ

たへるコト。
あうし(補匠) 圖ぬひしりを業とする人、刺繡の職人。
あうし(愁傷) 圖いたみなげく。かなしむ。
あうじ(醜狀) 圖みにくきありさま。みだらがましき行ひ。
あうじ(柔弱) 圖かまわきコト、ひよわきコト。
あうし(縮) 圖ちぢかまるコト。
あうし(秀出) 圖才智のたちまさつてゐるコト、ぬきんでゐるコト。
あうじ(術) 圖武術の一種、武器を持たずに、敵と組打(サマ)する術、即ちやわらの手。
あうし(秋昏) 圖秋の夜。
あうし(秋色) 圖秋のありさま。秋のながめ、秋のけしき。
あうし(收購) 圖金錢を差し出して罪をあがのふコト。
あうし(修飾) 圖つくるひかざるコト。さとのへるコト。
あうし(就職) 圖職業(サマ)に就く、役(サマ)につくコトを云ふ。
あうじ(ゆん) 圖すなはなるコト、やさしきコト。

あうじ(修辭學) 圖言葉(サマ)を巧みに遣ひ、語句をうるはしく爲すコトを習ふ學問、文章を作らんとする人には大切なもの。
あうじ(修辭法) 圖修辭學と同じ。
あうし(修身學) 圖身を修め徳を養ふを目的とする學科。
あうし(修身書) 圖修身の道を記せし書物。
あうし(秋水) 圖秋の水。刀の光りのするどき状をたごえて云ふ語。
あうし(酋帥) 圖かしら。えびすの總大将のコト。
あうし(秋晴) 圖秋の空の晴れ(サマ)てゐるを云ふ。
あうし(秋聲) 圖秋に風が木の葉を拂ひ落(ヒ)す音(サマ)。
あうし(醜聲) 圖恥となるべきうわさのコトを云ふ。
あうし(修正) 圖正しなほすコト。
あうし(臭腥) 圖なまぐさきコト。なまぐさき物のコトを云ふ。
あうし(監砌) 圖石をしきしもの。敷石(サマ)。石たみ。
あうし(收税) 圖税金を取り立るコト。
あうし(秋夕) 圖秋の夕べ、秋の夜。

あうし(因稱) 圖罪人の姓名及び罪科等を記したる帳簿。
あうし(醜態) 圖いやしきコト。みにくきコト。
あうし(秀絶) 圖すぐれまさつてゐるコト。
あうし(秋扇) 圖秋の扇(サマ)と云ふ意に不用となりしコトにたごえて云ふ語。
あうし(周旋) 圖せわをするさりもつ力を盡すコト。
あうし(愁然) 圖うりようるさま。なげく状(サマ)を云ひ表はす語。
あうし(蹙然) 圖にはか。だしめけの状を云ひ表はす語。
あうし(修繕) 圖つくるひなほすコト。
あうし(蹠踐) 圖ふみつぶす。ふみにじるコトを云ふ。
あうし(修禪寺) 圖和紙の名雁皮紙(サマ)の一種、伊豆の修善寺地方より産するに依り此の名あり。
あうし(周旋屋) 圖土地家屋などの賣買(サマ)、奉公人の世話(サマ)等を業とする人。日入屋(サマ)。
あうし(愁訴) 圖なげきうつさう。うれひれがふ。
あうし(醜俗) 圖みにくき風俗のコトを

まうり、まうれ

まうりよ(因慶) 園さりこ、ほりよ、
 まうりよ(醜慶) 園野蠻園(オウ)の人、又は
 捕虜を鄙(オウ)みて云ふ語。
 まうりん(秋霖) 園秋のなが雨(オウ)、
 まうりん(蹂躪) 園ふみまわる、あらし歩
 く(オウ)み返つて、威張(オウ)り歩くコ
 トを云ふ。
 まうりやう(舟梁) 園舟橋(オウ)のオト、
 まうりやう(秋涼) 園秋口のさむさ、
 まうる(愁涙) 園うれひに沈みて出る涙
 かなしなみたのオト。
 まうる(醜類) 園あしきともがら。悪者
 (オウ)仲間(オウ)。
 まうる(歌類) 園げものオト、「ト
 まうれい(修飾) 園長いき。命(オウ)長きコ
 まうれい(秋冷) 園秋のさむさ、
 まうれい(秀麗) 園すぐれて美しきオト、
 まうれい(秀麗) 園すぐれて、ゆかしきコ
 トを云ふ。
 まうれん(修練) 園習ひたる技藝(オウ)など
 を、きたへみかくオト。
 まうれん(聚斂) 園おさま集む。取り込む
 コト、一般に租税(オウ)に就て云ふ。
 まうれん(收斂) 園ちぢかめ、しめ
 る効能(オウ)を有(オウ)てる薬、此の種の薬
 品は概れ其味しふし、

まうろ、まうい

まうろ(袖爐) 園小さき火鉢のオト、即ち
 手あぶり火鉢のオトを云ふ。
 まうろ(醜陋) 園いやしきオト。甚だし
 く劣(オウ)つてるオトを云ふ。
 まうわ(柔和) 園おりあひのよきオト(オウ)
 さしくやわらかきオト、
 まうわい(收賄) 園まいなひを取る、わい
 ろを取るオト。
 まうわい(收賄罪) 園官吏又は公吏が
 其の職務上の件につきて、まいなひを
 取りたる罪(オウ)。「まわり合せ
 まうん(時運) 園其の時の運氣時節(オウ)の
 (オウ)仲間(オウ)。
 (まじえろ)
 まえ(紫衣) 園僧侶(オウ)の用ゆる紫色(オウ)
 (オウ)の衣(オウ)、官(オウ)より許(オウ)さるるに
 あらざれば、用ひられぬもの。
 まえ(自衛) 園自分の身軀を、自分で保
 護(オウ)するオトを云ふ。
 まえ(自營) 園獨立(オウ)にて事業をいこ
 なむオト(オウ)獨立にて生計(オウ)を立てる
 コトを云ふ。
 まえ(侍衛) 園君主のお側(オウ)を守護(オウ)
 するオト、又はして人、

まえき、まなる

まえき(私益) 園自家のみの利益、
 まえき(使役) 園役向(オウ)に使ふオト、
 まえき(厮役) 園下男(オウ)しもべ、
 まえき(時疫) 園傳染性(オウ)の流行病の
 コトを云ふ。
 まえき(滋液) 園滋養分(オウ)に富(オウ)てる
 汁(オウ)味(オウ)よき汁、
 まえつ(私謁) 園自分の用事にて、お目に
 かかるオト(オウ)こつそりま、お目(オウ)に掛
 (オウ)るオト、
 まえふ(枝葉) 園枝(オウ)葉(オウ)轉じて物
 事の末(オウ)、別(オウ)のオトを云ふ。
 まえん(詞筵) 園會合して詩歌俳諧(オウ)を
 催(オウ)すオト、
 まえん(肆筵) 酒宴に同じ。
 まえん(紙薦) 園竹を骨とし紙にて貼り、
 糸をつけて風に逆(オウ)ひて空中へ揚る
 一種の玩具、たこのオト、
 まえん(私怨) 園私の怨み。「田園
 まえん(自園) 園我が所有せる庭園、又は
 (まじおを)
 まお登(仕置) 園爲し置くオト、して置く
 コト(オウ)しきたり(オウ)其の罪狀(オウ)を法
 律に照(オウ)して、處分(オウ)するオト、

まおく(仕置) 園動かさのへて置く、して
 を、爲し置く。
 まおち(爲落) 園手ぬかり、爲さざるへか
 らざる事を、忘れて爲さぬオト、
 まおり(枝折) 園山中などに樹の枝を折
 (オウ)て、道知るべしなすオト(オウ)總て物事
 のみちびきをなすオト、即ち案内(オウ)手
 引(オウ)一種の文具(オウ)、厚紙(オウ)又
 は薄き板を、長さ五六寸、巾(オウ)七八
 分乃至一寸外に切りたる短冊(オウ)形
 のもの、書物を習ふ時に、字つきにし又
 は読みかけたる書物の其の部へ、挿(オウ)
 みて印(オウ)を爲し置くに用ゆる物、
 まおり(葉) 園枝折に同じ、前條を見られ
 よ。
 まおりと(枝折戸) 園樹の枝を体裁(オウ)よ
 く折(オウ)り曲(オウ)て、作りし戸、重(オウ)に
 庭園の垣根などに取りつく。
 まおる(萎) 園動しほむ、おこるえるよは
 くなる。かれる。がつかりする。力をお
 ます。
 まおる(撓) 園動たわめる。たわましむ。
 まおる(責) 園動こらす。さます。いましむ
 る。
 まおる(葉) 園動しをりさす、手引(オウ)と
 まおん(師恩) 園師匠より受けたる恩義の
 まおく、まおん 葉、萎、撓、責、葉

まおん(四恩) 園佛教の語、天地(オウ)國王
 (オウ)父母(オウ)衆生(オウ)の四つの恩。
 まおん(私恩) 園自分の心に適(オウ)ふ人に
 のみ、施(オウ)す恩義(オウ)公平ならざる恩
 義のオトを云ふ。
 まおん(紫恩) 園草の名、春に前年の宿根
 (オウ)より芽(オウ)を出す、其の高さ六尺
 内外に達す、葉は細長くして、周圍(オウ)
 にギザギザありて、互生す、夏の中頃
 に莖(オウ)の上部に、七八本以上の、細き
 枝を生じ、其の末(オウ)に小さき單瓣(オウ)の
 の、淡紫色(オウ)又は白色の菊(オウ)の如
 き花を咲す、一般に觀賞用(オウ)とし
 て、盛(オウ)に栽培(オウ)さる。
 まおん(字音) 園漢字の音のオト、
 まおん(慈恩) 園なまけ厚きめぐみのオト
 深きなまけのオト、
 (まじか)
 まか(鹿) 園鹿の名、山中の森林中に棲息
 (オウ)する獸類にて、四肢は際立(オウ)て
 細く、且つ長し、故に丈(オウ)は割合に高
 く、其の大なる者は三尺以上四尺あり
 其の毛色は春(オウ)の中頃より秋の初めへ

かけては、淡褐色(オウ)にして、一面に
 大なる黒き斑點(オウ)あれども、冬季(オウ)
 に至れば一變して、灰色(オウ)を帯び
 たる、褐色(オウ)なるを常とす、又此の獸
 (オウ)の雄(オウ)には、殊に固(オウ)くして枝
 (オウ)のある角(オウ)を有す、此の角は生へ
 代(オウ)る、且つ一定の年限までは、毎年
 枝(オウ)を一つ宛増(オウ)す者とす、雌(オウ)に
 は角なきものなり、性質(オウ)は極(オウ)め
 て温良にして、能く人に馴(オウ)るもの
 とす、肉は食用角は器物の材料とさる。
 まか(鹿) 園鹿のオト、
 まか(私家) 園自分の家(オウ)官宅(オウ)など
 に對して云ふ、私の家、
 まか(市價) 園市場にて賣買する直段、即
 ち相場(オウ)のオト、
 まか(紙價) 園紙の直段(オウ)轉じて書物の賣
 れ方と云ふ意を表はす語、例は紙價を
 高むなど、
 まか(詩歌) 園詩と和歌、
 まか(賜暇) 園暇(オウ)を賜(オウ)はるオト、休
 暇を賜はるオト、
 まか(然) 園其のやうに其の通りにと云ふ
 まか(齒牙) 園齒(オウ)と牙(オウ)轉じて口と
 云ふオトになる、
 まか(時價) 園市價に同じ、即ち其の時々
 まか 然 八三七

志かみ、まから 響、而、然、無

志がみつゝ(察擲著) 志動つまくからまり

志かみづら(筆面) 志しわみたる顔、

志かみひばち(獅嚙火鉢) 志金屬製のツバ

志かむ(聲) 志動額(比)にしわをよせる

志かむ(聲) 志動額(比)にしわをよせる

志かむ(聲) 志動額(比)にしわをよせる

志かむ(聲) 志動額(比)にしわをよせる

志かむ(聲) 志動額(比)にしわをよせる

志かむ(聲) 志動額(比)にしわをよせる

志かむ(聲) 志動額(比)にしわをよせる

志かむ(聲) 志動額(比)にしわをよせる

志かむ(聲) 志動額(比)にしわをよせる

志かむ(聲) 志動額(比)にしわをよせる

志かり、まかん 然、叱

志を呈せる粗末なる陶器にて、近江の

志かり(然) 志動左様(比)である、如何に

志かりつゝ(叱付) 志動聲を立て、まがめ

志かむ(叱) 志しかりつけるコト 志徳川時

志かむ(叱) 志しかりつけるコト 志徳川時

志かむ(叱) 志しかりつけるコト 志徳川時

志かむ(叱) 志しかりつけるコト 志徳川時

志かむ(叱) 志しかりつけるコト 志徳川時

志かむ(叱) 志しかりつけるコト 志徳川時

志かむ(叱) 志しかりつけるコト 志徳川時

志かむ(叱) 志しかりつけるコト 志徳川時

志かむ(叱) 志しかりつけるコト 志徳川時

志かむ(叱) 志しかりつけるコト 志徳川時

志かん、まき 識、式、関、色 八四〇

志かん(時間) 志時と時の間(比)の志コト

志かん(慈眼) 志なきけの厚き心と云ふコ

志かん(字眼) 志文章の字句の中で、最も

志かん(字眼) 志文章の字句の中で、最も

志かん(字眼) 志文章の字句の中で、最も

志かん(字眼) 志文章の字句の中で、最も

志かん(字眼) 志文章の字句の中で、最も

志かん(字眼) 志文章の字句の中で、最も

志かん(字眼) 志文章の字句の中で、最も

志かん(字眼) 志文章の字句の中で、最も

志かん(字眼) 志文章の字句の中で、最も

志かん(字眼) 志文章の字句の中で、最も

志かん(字眼) 志文章の字句の中で、最も

即ち人の心持(志)

志(指揮) 志さしつするコト、きりもり

志(指揮) 志さしつするコト、きりもり

志(指揮) 志さしつするコト、きりもり

志(指揮) 志さしつするコト、きりもり

志(指揮) 志さしつするコト、きりもり

志(指揮) 志さしつするコト、きりもり

志(指揮) 志さしつするコト、きりもり

志(指揮) 志さしつするコト、きりもり

志(指揮) 志さしつするコト、きりもり

志(指揮) 志さしつするコト、きりもり

志(指揮) 志さしつするコト、きりもり

志(指揮) 志さしつするコト、きりもり

志(指揮) 志さしつするコト、きりもり

志(鳴) 志鳥の名、嘴(比)及足共に長く

志(鳴) 志鳥の名、嘴(比)及足共に長く

志(鳴) 志鳥の名、嘴(比)及足共に長く

志(鳴) 志鳥の名、嘴(比)及足共に長く

志(鳴) 志鳥の名、嘴(比)及足共に長く

志(鳴) 志鳥の名、嘴(比)及足共に長く

志(鳴) 志鳥の名、嘴(比)及足共に長く

志(鳴) 志鳥の名、嘴(比)及足共に長く

志(鳴) 志鳥の名、嘴(比)及足共に長く

志(鳴) 志鳥の名、嘴(比)及足共に長く

志(鳴) 志鳥の名、嘴(比)及足共に長く

志(鳴) 志鳥の名、嘴(比)及足共に長く

志(鳴) 志鳥の名、嘴(比)及足共に長く

志(鳴) 志鳥の名、嘴(比)及足共に長く

志あみ(敷網) 志水の底に敷きて魚を捕

志あみ(敷網) 志水の底に敷きて魚を捕

志あみ(敷網) 志水の底に敷きて魚を捕

志あみ(敷網) 志水の底に敷きて魚を捕

志あみ(敷網) 志水の底に敷きて魚を捕

志あみ(敷網) 志水の底に敷きて魚を捕

志あみ(敷網) 志水の底に敷きて魚を捕

志あみ(敷網) 志水の底に敷きて魚を捕

志あみ(敷網) 志水の底に敷きて魚を捕

志あみ(敷網) 志水の底に敷きて魚を捕

志あみ(敷網) 志水の底に敷きて魚を捕

志あみ(敷網) 志水の底に敷きて魚を捕

志あみ(敷網) 志水の底に敷きて魚を捕

志あみ(敷網) 志水の底に敷きて魚を捕

まきり、まきん 類

まきりやち(識量) 圖物事を判断する智力に富(ふ)るコト、
 まきりをとこ(仕切男) 圖芝居の仕切場に於て場代(バツ)等の計算(ケヅメ)を爲す人、
 まきりちやち(仕切帳) 圖商家(カ)にて取引の精算を爲す帳面、
 まきる(類) 自動度(ヒ)かさなる、しげくなまきる(仕切) 圖働(ヒ)しきりをつける、區域を定める、堺(サカイ)を爲す、勘定(カネヅメ)の決算を爲す、
 まきろち(食籠) 圖飯(ヒ)を盛る器具、圓(ヒ)として蓋(フタ)ある、辨當箱(ハバタコ)の如きもの、
 まきん(賜金) 圖朝廷(テウテイ)より賜(カヒ)はるまきん(資金) 圖資本金、
 まきん(詩吟) 圖詩をうたふコト、
 まきん(至近) 圖きわめて近きコト、
 まきん(紫金) 圖金屬の名、赤銅(セウドウ)の一名、其の色がや、むらさきの如くなるより此の名あり、
 まきん(黄眼) 圖はぐきのコト、
 まきん(疵疊) 圖總て物に、きづ、かけてる部分のあるコトを云ふ、
 まきん(罪科過失) 圖失(ヒ)つた部分のあるコトを云ふ、
 まきん(試金) 圖金又は銀類の眞偽(マコト)を試(シ)し見るコト、

まきん、まき 宿、敷、藉、若

まきんこ(支金庫) 圖中央金庫の別(ワカ)れにて、各府縣に置かれてある、金庫のコトを云ふ、
 まきんせき(試金石) 圖石の一種、金又は銀の眞偽を試(シ)してみるに用ゆる黒色の石、轉じて人材の眞偽(マコト)を試めしみるコトを云ふ、
 (まじく)
 まく(詩句) 圖漢詩の起句(キキョウ)轉句(テウケン)結句(ケツク)對句(タイク)などのコトを云ふ、
 まく(宿) 圖しゆくの訛にて、や、ごるコト、宿場(ヤク)久(ヒサ)きコト、
 まく(敷) 圖動下へ物を平等(ヒトコト)に置く、假令(カレバ)敷物を敷く(シ)のはすのべる、假令(カレバ)夜床を敷く(シ)電線(デンセン)を敷く(シ)など、偏(ヒョウ)れく知らせる、一般に及ぼす、假令(カレバ)法律を敷く、
 まく(藉) 圖動或る物を敷物(シ)の代(カ)り、さす、假令(カレバ)落葉(ラクエツ)を藉(シ)て休息(キヤウシヤク)すなど、
 まく(若) 圖動まさる、よくあてはまる、及ぶ、假令(カレバ)此の事は彼(カ)に若(カ)ばなしなど、又た如の字をも用(ヨウ)ゆ、
 まく(市區) 圖市制を敷(シ)れてある大都

まき 夫、熊

まき(死苦) 圖死ぬほどの苦(ク)しみ、甚(シ)だしき苦痛(クツウ)、
 まく(夫) 圖此の上もなきおろかなコト、
 まく(至愚) 圖此の上もなきおろかなコト、甚(シ)たしき馬鹿(バカ)なるコト、
 まく(字句) 圖文章中の文字と其の文句とのコトを云ふ、
 まく(爲合) 圖動二人以上の人と同時に仕事をなし合ふ、
 まく(四隅) 圖ますみ、あたりきんべんのコトを云ふ、
 まく(仕種) 圖しやう、しかた、しぶり、まじり(失敗) 圖動あやまつ、しぞこなふ、
 まく(試掘) 圖試(シ)に掘る、掘つて見まく(罷) 圖ひぐまのコト、
 まく(仕組) 圖もくろみ、くふう、小説や狂言などの趣向(クウキウ)をたてるコト、
 まく(仕組) 圖動くわだてる、工夫(クワフ)する、趣向(クウキウ)を立てて、小説脚本などを作る、
 まく(時雨) 圖動時雨が降り来る、
 まく(時雨) 圖秋より冬へ掛けて、時々降り、やさしき雨のコト、

まぐれる(時雨) 圖動時雨が降り、シクシク泣(ナ)く、
 まぐれごち(時雨心地) 圖時雨の降り来たらんごちする空模様(ソラカモ)、
 まぐれはまぐり(時雨蛤) 圖蛤のむき身に生薑(シヤウ)の根を切り込み、醬油にて煮きたる物、伊勢富田地方の名産(シヤク)の一種、赤小豆(アカアヅキ)にて製したる餅(シヤク)を、そぼろにして、其れにて餡(シヤク)を包みたるもの、
 まぐわ(齒科) 圖齒の病氣を癒(イ)すを専門(センモン)とすコト、
 まぐわ(死火) 圖消(シヤク)えたる火、火の炭(シヤク)なれるもの、
 まぐわ(死貨) 圖貨物を活用(カクワツ)させるコトを知らぬコト、
 まぐわ(耳科) 圖耳(ミミ)の病氣を癒(イ)すを専門(センモン)とせるコトを云ふ、
 まぐわ(自火) 圖誤(サ)まつて我が家より火を出して焼(ヤ)るコト、
 まぐわ(死灰) 圖火の氣の無くなりたる灰、
 まぐわ(雌花) 圖めしべのみついでる花のコト、例は松などの球状を呈して花が、即ち是(コト)なり、
 まくれ、まくれ

まぐわい(詩會) 圖詩を作りて樂(シヤク)む會合(カウ)のコトを云ふ、
 まぐわい(私會) 圖懇意にせる人人のみの會合(カウ)私(シ)に爲す會合のコトを云ふ、
 まぐわい(市會) 圖市會議員に依りて開かる會議(カウ)を云ふ、
 まぐわい(市外) 圖市(シ)のそと、
 まぐわい(次會) 圖次ぎの會合、
 まぐわい(次回) 圖次のくわい、
 まぐわく(字畫) 圖漢字の畫のコトにて、假令(カレバ)木は四畫(シ)なり、
 まぐわし(私寓子) 圖淫實婦のコトを云ふ、
 まぐわつ(死活) 圖死すま生るま、生死の境(カウ)動(カウ)らくま休(カウ)むむ、
 まぐわつ(自活) 圖獨立(カウ)にて、生活(カウ)するコト、
 まぐわん(指環) 圖ゆびわのコト、
 まぐわん(史官) 圖歴史の編輯に従事する官吏(カウ)のコトを云ふ、
 まぐわん(仕官) 圖官途(カウ)に就くコト、官吏(カウ)なるコト、
 まぐわん(祠官) 圖郷社(カウ)の神主(カウ)のコトを云ふ、
 まぐわん(視官) 圖眼球(カウ)のコト、
 まぐわん(士官) 圖陸海軍の少尉以上の軍

まぐわん(志願) 圖志(シヤク)して願(カウ)ひ出づ、
 まぐわん(寺觀) 圖寺(シヤク)を云ふ、
 まぐわん(耳環) 圖西洋の婦人が、飾(カウ)として耳(ミミ)へ挿(カウ)てる環、
 まぐわん(次官) 圖各省大臣の次(シヤク)に位する官、
 まぐわん(自畫自讚) 圖自分の描(カウ)きたる畫に、自分が讚(カウ)を記すコト、又記したるもの、我が爲したる事を我がほめるコトを云ふ、
 まぐわん(志願兵) 圖自から志願して陸海軍の兵役に服せしもの、
 まぐわい(枯木) 圖何等の役(カウ)にも立たぬもの、毫(カウ)も働(カウ)きを不能(カウ)はぬもの、
 まぐわい(市會議員) 圖市會を組織(カウ)する議員(カウ)のコト、
 まぐわん(士官學校) 圖陸軍の士官(カウ)たらんを欲する者に、必要なる學科(カウ)を授くる學校、
 まぐわん(四君子) 圖竹梅菊蘭の四種を云

まげ、まげい 桂

(まじけ)

まげ(濕氣) 固水氣(水)を舍(つ)みてジト
ついでる即ちしめつてるコト、
まげ(風雨) 固海(海)があらて魚(魚)の捕(と)ら
ぬコトを云ふ、
まげ(桂) 固しけ糸の略、即ち粗末(つ)な
る絹糸(絹)の糸を云ふ、
まげ(寺家) 固寺に居る人、
まげ(詞契) 固詞兄(兄)に同じ、
まげ(詞兄) 固詩歌文章(文)を巧(う)み
にせる人を尊(た)ぶて云ふ語、
まげ(詩形) 固詩の規定にかなふて
まげ(紙型) 固組(組)たる活版を鑄(こ)型(が
こ)として、紙に取りたるもの、紙の版
木、
まげ(支系) 固えだわかれ、
まげ(死刑) 固殺してしまふ刑、死罪、
まげ(詞藝) 固詩歌文章などを作る仕方
の科(か)を云ふ、
まげ(刑刑) 固支那の刑罰の一、耳を斬
る、
まげ(慈悲) 固なさをかけてめぐむコ
ト、あはれむコト、
まげ(自利) 固首(首)を自ら斬て死する

まげい、まげし 紫

まげいと(桂系) 固蘭(蘭)の外画より織り
たる粗末(つ)なる絹糸、
まげいさ(淑景舎) 固昔時宮中に在りし御
殿(と)の一名にて、桐壺(桐)の
名なり云ふ、
まげいざい(私經濟) 固自家のけいざいの
コトを云ふ、
まげいあん(慈善醫院) 固細民の疾病(び
び)を施療する爲めに設けたる醫院、
まげいとをり(桂絲織) 固くづ糸にて織
りたる絹織物、
まげち(司教) 固キリスト教、天主教など
の位置(ち)の高き牧師(し)の科(か)、
まげち(示教) 固さし示して教ゆるコト、
まげき(繁木) 固枝の張りて、おひしげつ
てる木、
まげき(史劇) 固歴史の事實(じ)を脚色(か
し)たる芝居、
まげき(刺撃) 固刺(さ)して撃(う)つ、
まげき(刺戟) 固はげますコト、
まげき(感動) 固興(き)ふコト、
まげき(縫紉) 固しけ糸にて織りたる絹
織物(き)、
まげき(刺戟性) 固甚だしく神経が刺
戟する性質の科(か)、
まげし(紫) 固しげくなり、
まげし(紫) 固しげくなり、
まげし(紫) 固しげくなり、
まげし(紫) 固しげくなり、

まげし、まげる

まげし(度々) 固くりかへしてあり
まげし(字消) 固文字を塗(ぬ)りて消すコト、
まげし(文字) 固文字を消すに用ゆ白墨(びやくぼく)、
まげし(繁繁) 固度々幾度(たび)も、
まげつ(死結) 固繩や組の結び方、こまむ
すびの科(か)、
まげつ(支撃) 固妾腹(めかけ)の子、
まげつ(辭訣) 固いさまこひの挨拶(あいさつ)、
まげつやく(止血藥) 固血どめ藥、
まげとち(重藤) 固弓の拵(と)へ方の名、
五分置きに一寸ほどの長さに、藤の蔓
(つた)を巻きたるもの、
まげふ(事業) 固爲すべき物事、しごと、
まげふ(試業) 固覺(さ)えたるコトを試み
てみるコト、即ち試験の科(か)、
まげふじとく(自業自得) 固自分の所業
(しご)の如何に依りて、其れだけの報(はら
い)のあるを云ふ、
まげみ(繁) 固草木のおひ繁つてる處、
まげめゆひ(滋目結) 固鹿子絞(かじま)の其の
質の細かき物の科(か)、
まげやま(繁山) 固草木の生ひ茂げつてる
山の科(か)、
まげり(繁) 固しげつてるコト、
まげる(濕氣) 固動物が水氣を含む(す)雨
(あ)が續く、

まげる(繁) 固自動上(じどうじやう)が上へ生ず、ふえる
重(おも)なる、
まげん(支券) 固割符(わりひ)を半分に切りた
る其の片方、
まげん(私權) 固人民が双方(たがひ)の間に
ふ權利、公權に對しての語、
まげん(私見) 固自分だけの意見(けんい)、
まげん(熾妍) 固みにくきま、うつくしき
ま、
まげん(試験) 固しらへるコト、
まげん(問題) 固し
を示し、答を求(と)めて、其の學力(がくりき)な
をためすコト、
まげん(至言) 固尤(よし)も千萬(せんまん)なる言
まげん(始元) 固はじめ、
まげん(示現) 固神佛が一種の不可思議な
る靈驗(れいげん)を現はし示さるるコトを云
ふ、
まげん(自謙) 固自からへりくだつてるコ
トけんそのコト、
まげん(慈眼) 固じがんに同じ、
まげん(事件) 固こと、
まげん(時限) 固時間のくぎり、
まげん(試験紙) 固化学上にて液體(えきたい)の
性質(せいしやう)を試験する紙青色と淡黄色
との二種あり之れを液(えき)の中に入れ
其の色の變するを見て其の液の性質を
まげる、まげん

まげん(四絃琴) 固樂器の名、其形三
味線に似て、棹(しやう)の長さ三尺二寸餘り
あり、四筋の糸を張れる物、
まげん(試験針) 固ある金屬が他のあ
る金屬を混合せる其の割合(わ)の分量
を量(はか)るに用ゆるもの、
まげん(試験料) 固試験を受け又は試
験を頼む爲めの手数料、
まげん(試験管) 固硝子(びやうし)の六七
寸ほどの長さのある管(びやう)、
まげん(化学的試験) 固
に用ゆる物、
まげん(四顧) 固四方八方(しやうはつぱう)を見廻
(みまわ)すコト、
まげん(市虎) 固をさかだて、いさみ肌(いさみ)の
人、
まげん(根も葉もなき出放題) 固(おぼ)の噂(うわさ)の
コトを云ふ、
まげん(指願) 固目の前(まへ)に在る物を指さ
しつ、後(のち)を振り向きて人に教(しや)へ
知らせるコト、
まげん(指呼) 固指(さし)せば返事(へんじ)するま
ま、
まげん(極) 固極めて近き距離
(きょり)と云ふコト、
まげん(大勢) 固(おほ)の中より名

まげる(四股) 固相撲(すもう)にて、力士(りきし)の
足の科(か)を云ふ、
まげる(死後) 固死したる後、
まげる(死期) 固死すべき時期、死ぬるまじ、
まげる(死語) 固現時にては全く用ひぬ言葉
又は熟語(じやくご)の稱、
まげる(枝梧) 固ささえ止むるコト、
まげる(爾後) 固此(こゝ)より後、今より後、
まげる(私語) 固ささやくコト、
まげる(自己) 固我れ、自分(おれ)、
まげる(耳語) 固みみするコト、
まげる(事故) 固事(こと)から譯(わけ)がら物事の仔
細(こま)な、
まげる(嗜好) 固好み、たしなむコト、
まげる(至公) 固此の上もなき公平なるコ
ト、
まげる(祇候) 固謹(つつし)みてお伺(かま)ひを
するコト、
まげる(伺) 固君側(きみがは)に侍(まじ)つ
てるコト、
まげる(伺候) 固侍(まじ)べつてるコト、
まげる(伺) 固爲すコト、
まげる(至巧) 固此の上もなき巧(うま)なる
まげる、まげん

まさん、まし 猪、肉、尿

らになる、
あさん(自讃) 固我が描きし(あ)に、我が
讀(あ)を爲すコト 我が事を我がほめ
たてるコトを云ふ。
あさんか(資産家) 固財産の多分にある人
財産家のコト。
あさんりよくする(紫山緑水) 固山水の風
景の、極めて美しきコトを云ふ語。

(まじり)

あし(猪) 固獸の名、いのししのコト。
あし(肉) 固又た(あ)の字を書く、にく。
あし(尿) 固俗語、小便(あ)のコト。
あし(改改) 固意(あ)たらずにはげみ勤(あ)
むる(あ)を云ひ表はす語。
あし(四至) 固四隅(あ)のさかひ目。
あし(施施) 固甚だしく喜(あ)ぶ(あ)を云ひ
表はす語。
あし(指使) 固さしして召(あ)し使(あ)ふ
コトを云ふ。
あし(恣肆) 固勝手氣儘(あ)のほしいま、
の(あ)を云ふ。
あし(矢疵) 固矢(あ)の中(あ)りて受けたる
きづ、即ち矢きづの(あ)。

まし

あし(姉姉) 固乳母(あ)の(あ)コト。
あし(修修) 固十分なる(あ)ゆたかなる
状を云ひ表はす語。
あし(詩史) 固出来事の仔細を一篇の詩に
作りたるもの、人の傳記を詩に作りた
るもの、稱。
あし(四肢) 固手及び足。
あし(私資) 固我れの財産(あ)。
あし(私子) 固内證子、即ち私生兒(あ)。
あし(市肆) 固市中に在る店舗。
あし(死屍) 固しびさ、しかばね。
あし(死士) 固死を決したる軍人、又は死
を決したる男子。
あし(獅子) 固猛獸中の王とも云はるる獸
にて、アフリカ地方の熱帯地に多く産
す、長さ七八尺、高さ三尺内外ありて、
頭は圓くして且つ大きく、眼亦た圓く、
腰は割合に細くして尾は殊に長し、全
身の毛色は淡黄色にして、常に鋭利な
る爪(あ)を隠し居るも、怒りたる時
は此を表はして、敵を傷(あ)く、又た其
の(あ)には、たてがみあれど、(あ)に
は無し、性質は非常に猛獁(あ)なり
ししまひの略語。
あし(志士) 固國家社會の爲めに身を棄て
、忠節(あ)を勵む人。

まし

あし(支子) 固總て分れて生(あ)たる物の
稱、(あ)の子を云ふ。
あし(嗣子) 固よつぎ、あさり子。
あし(刺史) 固封建(あ)時代の一國の主
支那の官名にて、一州の長官、我が國の
府縣知事に當(あ)る。
あし(指示) 固ゆびさして示し教(あ)ゆる
をさしづする、云ひ附る。
あし(子事) 固子(あ)の如き心地にて親(あ)
しくつかえるコトを云ふ。
あし(私事) 固我が事、勝手なるコト、公
事に對しての稱。
あし(師事) 固其の人を師匠(あ)のやふに
思ひて、うやまひつかふる。
あし(次子) 固二番目に生れたる子、次男(あ)
の(あ)を云ふ。
あし(自恣) 固氣づい、氣ままの(あ)コト。
あし(自肆) 固我の思ふまま、自分勝手、
あし(兒子) 固子供(あ)の(あ)コト。
あし(侍士) 固主君の側(あ)に侍(あ)てる
士(あ)の(あ)を云ふ。
あし(侍史) 固貴人の傍(あ)にあて、書物(あ)
を爲す役、又は其の人、手紙の宛名
の脇(あ)に敬意を表する爲めに認(あ)る
むる語。
あし(時事) 固其の時時に生ずる國家及び

世間の出来事、

あじ(時時) 固ときどき、ままたびたび、
ときどきより云ふ意を表はす語。
あじ(侍兒) 固身分高き人の傍(あ)に在り
て、小用を足す者、即ち小姓(あ)の(あ)
コトを云ふ。
あしち(刺繡) 固ぬい、ぬいどり、
あしち(四洲) 固佛法の語にて、須彌山(あ)
の四方に在り云ふ、東勝神州、西
牛貨洲、南瞻部洲、北俱盧洲の四つの(あ)
コトを云ふ。
あしち(自修) 固師に付かず、自分にて學
問を爲すコトを云ふ。
あじち(四獸) 固青龍(あ)、朱雀(あ)、玄武
(あ)、白虎(あ)の稱。
あしおき(尖置) 固肉つき、のよろしきコト
あしがき(鹿垣) 固鹿柴(あ)の(あ)コト、即ち
枝(あ)の付きたるま、の樹にて作りた
る垣根(あ)の稱。
あしがり(猪狩) 固猪(あ)を始めとして、
鹿兎等を狩るコトを云ふ。
あしがしら(獅子頭) 固獅子舞(あ)に用ゆる
もの獅子の顔の形を木にて作りたるも
の、稱。
あしきゆち(獅子宮) 固天體の十二宮の一
あしく(獅子吼) 固佛教の語、邪道異説を
あしく、あしく

まし

あし(へて) 固佛教を害せんとする者ある
も、其を怖(あ)れず、佛(あ)の正道を説
教するコトを云ふ、獅子が吼(あ)れば百
獸皆屈伏す云ふ意より出たる語、夫
(あ)を怒鳴(あ)つける強情なる妻を嘲
(あ)りて云ふ語。
あし(獅不食) 固植物名、やぶかう
じの一名、おにあの一名。
あじこく(時時刻刻) 固時のグングン
と過ぎ行く状を云ふ語。
あし(獅子座) 固佛のあます坐席、學識
高き僧侶のあます坐席。
あし(獅子身中の虫) 固獅
子の体内に在りて、生活を續(あ)けなが
ら、其の思をも思はず、後(あ)に獅子
に害を興(あ)へるを云ふ、轉じて思
を仇(あ)にてかへす不埒者(あ)の(あ)コト
を云ふ語。
あし(孫孫) 固子孫孫、固孫子(あ)の末
々(あ)代々の(あ)コトを云ふ。
あし(猪田) 固猪(あ)などの踏(あ)み荒
(あ)したる植田(あ)の(あ)コト。
あし(猪草) 固菌(あ)の一種、濕地(あ)
びに自生す、柄(あ)長く傘蓋(あ)共に其
の内は空(あ)なり、傘の色は鹿毛の如く
にして、食料になるを云ふ。
あしく、あした

まし

あしつ(資質) 固うまれつき、天性(あ)。
あしつ(紙質) 固紙のたし、紙の良否。
あしつ(至日) 固冬至(あ)の當日。
あしつ(痔疾) 固病氣の名、痔の(あ)コト。
あしつ(次日) 固つぎの日。
あしつ(自失) 固はつとしてしまふ、氣を
取り逆(あ)せる(あ)コト。
あじつ(時日) 固時と日、日にち、ひま。
あじつ(事實) 固ありし事から。
あしつ(肉付) 固肉が出來てふさがる。
こえて大きくなる。
あしづく(肉豆蔻) 固草の名、にくづくの
コト、其の條を見よ。
あしぬく(繁實) 固盛はげしくつらぬく。
あしほぬ(猪鼻) 固低(あ)くして仰向(あ)ひ
ける(あ)の鼻(あ)を嘲(あ)りて云ふ語。
あしふ(詩集) 固詩を集めたるもの、又は
詩を集めたる書物。
あしぶえ(鹿笛) 固獵師が鹿(あ)を狩り出
すべく爲めに吹く、鹿の革(あ)にて作
られたる笛(あ)、口の如き形を爲せる物
あしぶから(四十雀) 固鳥の名、やまがら
の一種、躰(あ)小さく頭及び翼(あ)は黒
色を呈し、頬(あ)は白色にして、嘴(あ)は
は鋭(あ)く尖(あ)むる、其の鳴(あ)き聲は、
あしつ、あしふ

志しふ、志しみ、燈、蜆
 すいやかにして愛(あ)らし、
 志しふくはち(四十九日) 蜆佛の語、死
 後四十九日に行ふ佛事の語を云ふ
 志しふはつて(四十八手) 蜆相撲道(まがひ)の
 語相撲(まがひ)して投(な)げ合ふ一定の
 仕方の總稱にて、其れに四十八種あり
 他人をあやなしまるめる手段(まがひ)の
 コトを云ふ、
 志しふつ(事事物物) 蜆種々雑多の物
 事の語を云ふ、
 志しふんじん(獅子奮迅) 蜆獅子が怒つて
 たけり狂ふが如くに、はげしく強き勢
 の語を云ふ、
 志しまひ(獅子舞) 蜆獅子の顔を爲せる面
 (まがひ)を被(か)つて舞(ま)ふ踊(おど)り、重に笛
 (まがひ)を吹いて舞ふもの、
 志しまふ(自動如何) 蜆さも爲し難(まがひ)く
 方法手段の盡(まがひ)てあり、
 志しまる(蜆) 自動ちりまる。小さくなる
 がむくつする、
 志しみ(蜆) 蜆介(まがひ)の名、形は蛤(まがひ)に似
 て稍や圓く、且つ膨(ふ)れてあれども、
 蛤よりは(まがひ)に小し、殻(まがひ)の外
 (まがひ)は暗褐色にして、其の内面は紫色
 を呈す、川の砂地(まがひ)の中に住む、肉
 (まがひ)は味(まがひ)よし、

志しみ、志しや、肉
 志しみかひ(蜆貝) 蜆(まがひ)に同じ、
 志しみば(蜆花) 蜆草の名、小米樓(まがひ)の
 一名なり、
 志しむし(獅子蟲) 蜆虫の名、さかげの如
 きもの、全身灰色(まがひ)にして、脊(まがひ)を
 縦(まがひ)に黒き細き線(まがひ)あり、又た細か
 き斑點(まがひ)あるものにて、多く草の中
 に住居るもの、
 志しむら(肉) 蜆切りたる獸類の肉の塊(まがひ)
 の語を云ふ、
 志しや(修養) 蜆おこりかざるコトを云ふ
 せいたくをするコト、
 志しや(肆赦) 蜆罪科(まがひ)を許すコト、
 志しや(輜車) 蜆荷物を積む車、即ちにく
 るまの語を云ふ、
 志しや(死者) 蜆死したる人、
 志しや(詩社) 蜆詩人の仲間、詩人の組合
 志しや(使者) 蜆使(まがひ)する人。使に立つ
 人の語を云ふ、
 志しや(支社) 蜆神社の分(まがひ)れ、即ち末社
 (まがひ)會社の分れ、支店(まがひ)、
 志しや(侍者) 蜆君主の側(まがひ)に侍(まがひ)て
 る人、お側(まがひ)つかへの人、
 志しや(辭謝) 蜆こまざるコト、こまむコ
 トを云ふ、
 志しや(寺社) 蜆寺院と神社、

志しや、志しや
 志しや(支隊) 蜆さしきばり。さしつか
 へ。さまたげの語、
 志しや(師匠) 蜆學問藝術等を教ゆる人
 即ち先生、教師、茶の湯生花歌舞音曲
 を教ゆる人、
 志しや(私債) 蜆内分にて、つぐのひ置
 くコト。まごふコトを云ふ、
 志しや(死傷) 蜆死するコトと疵(まがひ)つ
 くコトを云ふ、
 志しや(紙障) 蜆明(まがひ)を取る障子のコ
 ト、あかり障子、
 志しや(志尙) 蜆こころざし。心に抱(まがひ)
 ける望(まがひ)の語を云ふ、
 志しや(詞章) 蜆文章詩歌などの語を
 志しや(司掌) 蜆つかさどる。取り行(まがひ)
 するコトを云ふ、
 志しや(祠掌) 蜆下級の位置に在る神官
 志しや(史生) 蜆昔時の官名にて、大政
 官及び各省の書記官の如きもの、
 志しや(梓匠) 蜆又たしんしやうとも讀
 む、死者を納(まがひ)むる棺(まがひ)を製作する
 人の語を云ふ、
 志しや(史上) 蜆歴史(まがひ)の語、
 志しや(市上) 蜆町(まがひ)の内。市街、
 志しや(紙上) 蜆紙の上、特に新聞紙の

コトを云ふ、
 志しや(詩情) 蜆詩を作る材料として心
 に感ずる思ひ、景色などの取分け奥ゆ
 かしきコトを云ふ、
 志しや(私情) 蜆自分の利益及び便
 利等を思ひ願ふ心を云ふ、
 志しや(至情) 蜆情愛の極度に達したる
 コト、即ちまごころ、無理(まがひ)ならぬ人
 情。尤もなるおもひやり、
 志しや(自省) 蜆我が身を省(まがひ)して
 氣を附けるコトを云ふ、
 志しや(自性) 蜆其の物本來の性質(まがひ)
 のコトを云ふ、
 志しや(事情) 蜆こまごら。容子。物事の
 次第の語を云ふ、
 志しや(辭讓) 蜆へりくだりて人にいづ
 るコトを云ふ、
 志しや(時尙) 蜆其の時々に起り來たれ
 る望(まがひ)の語を云ふ、
 志しや(子爵) 蜆五等爵の一にて第四位
 志しや(自若) 蜆物事に由(まがひ)て驚き
 騒(まがひ)がぬコト。落つき拂(まがひ)ふて平氣
 なるコトを云ふ、
 志しや(磁石) 蜆礦物の名、一種の石、色
 黒くして表面に無數の細孔ありて、其
 孔内は鉄さび色を呈す、能く鉄を吸引
 ましや

する性質を有す、
 志しや(寺社) 蜆徳川時代に神社佛
 閣の取締(まがひ)を爲せし役人の稱、即ち
 寺社奉行及び其の部下の人々の語を
 云ふ、
 志しや(死傷) 蜆死したる人、
 我(まがひ)を爲したる人、
 志しや(磁石盤) 蜆方角を知るに用
 ゆる一種の具にて、圓形の盤に方位の
 名を記し、其の中央に磁石針(まがひ)が
 自由に廻轉するやうに取り付けられあ
 るもの、其の針は常に北方のみを指す
 に依りて、方角を知るコトを得、
 志しや(寺社奉行) 蜆徳川時代に
 於ける三奉行の一、神社佛閣の取締を
 つかさざりしもの、
 志しや(自縛) 蜆我が縛(まがひ)
 にて我が身軀(まがひ)をしるさ云ふ意に
 て、即ち自業自得(まがひ)の語、
 志しや(詩趣) 蜆詩のおもむき。詩の趣向
 (まがひ)詩歌に作るべき趣(まがひ)のある床
 (まがひ)し風景の語を云ふ、
 志しや(詩酒) 蜆詩人が集りて詩を作りつ
 酒を飲みて楽しむ、みやびなる遊(まがひ)
 どの語を云ふ、
 志しや(旨酒) 蜆味のよき酒の語、
 ましや、ましや

志しや、志しや
 志しや(旨趣) 蜆こまごら。おもむき。むれ
 こころの語を云ふ、
 志しや(死守) 蜆生命を棄て、守る。死に
 もの狂ひとなつて守るコト、
 志しや(鑑録) 蜆支那の故事にて、極めて
 僅少(まがひ)なるコトを云ふ、
 志しや(斯須) 蜆つかぬま。わづかの間の
 コトを云ふ、
 志しや(卮酒) 蜆盃(まがひ)に盛りたる酒、
 志しや(斷壁) 蜆下男。しもべ、
 志しや(自首) 蜆我が犯(まがひ)したる罪科(まがひ)
 を、我れより官へ名乗つて出るコト
 逃走なしたる罪人が、我れより官府
 へ名乗(まがひ)て出るコト、
 志しや(寺主) 蜆寺院の主(まがひ)、即ち住職
 寺院の首席の役僧の語、
 志しや(自主) 蜆一本立(まがひ)を爲つて、他
 人の保助(まがひ)や干渉(まがひ)などを斷じて
 受けぬコト、他人の力などを借(まがひ)す
 自己の權力にて、自由に活動するコト
 を云ふ、
 志しや(恣縱) 蜆我がま、勝手。氣ま、
 氣づいの語を云ふ、
 志しや(始終) 蜆初(まがひ)と終(まがひ)り、轉
 じて總て其の物事を相伴(まがひ)なふて行
 くコトを云ふ、例は何々々相終始(まがひ)

志しゆ
 志しゆ(始終) 圖絶(じつ)す。つれづれと云ふ意を表はす語。
 志しゆ(時宗) 圖浄土宗より分れたる一つの宗旨(しゅう)の稱、又たの名を遊行派(ぎやうはい)と云ふ、建治二年に高僧一遍上人(いちへん)が、始めて開きしもの、本山は相模國藤澤町の清浄光寺なり。
 志しゆ(侍従) 圖天子のお傍(わき)に奉仕して、雑事を兼(かね)する近臣の官職名、即ち侍從職の職員。
 志しゆ(私淑) 圖自己の信(しん)崇(たか)めて人の行爲(ぎやう)を見て、其れに習ふて我が身を善き方に導くコト。
 志しゆ(止宿) 圖さまる、さまつて居るコト。
 志しゆ(尸祝) 圖神に事(こと)する人のコトを云ふ。
 志しゆ(私塾) 圖一個人にて、設(た)けたる學問を教ゆる所の稱。
 志しゆ(輒首蛇) 圖頭(かぶ)の二つある蛇(へび)の科トを云ふ。
 志しゆ(支出) 圖拂ひ出すコト。
 志しゆ(四出) 圖四方へ出るコト、又た四方へ出すコトを云ふ。
 志しゆ(施術) 圖術を施(ほ)すコト。

志しゆ、志しよ
 志しゆ(外科の治療) 圖施(ほ)すコト。
 志しゆ(自出) 圖自分の生みたる子のコトを云ふ。
 志しゆ(四手類) 圖足が手の如く自由自在に物を握り、又は取り扱(つか)ひ得る機能(きかむ)を有して動物のコトを云ふ、猿の類此なり。
 志しゆ(至醇) 圖此の上もなき純粹なるコト。
 志しゆ(水の混) 圖らざる純良なる酒のコトを云ふ。
 志しゆ(諮詢) 圖たしはかる、即ち相談するコト。
 志しゆ(視準) 圖物理学上の語にて、視むとする物の方向と並行に、望遠鏡(ぼうえんきやう)の軸(じく)を据(た)てるコトを云ふ。
 志しゆ(耳順) 圖支那の故事にて六十歳のコトを云ふ。
 志しゆ(止宿所) 圖れままりをしてある所のコトを云ふ。
 志しよ(四書) 圖大學、中庸、論語、孟子、志しよ(士庶) 圖人民。もろもろの民、志しよ(私書) 圖一個人の書状、又は文書。
 志しよ(内密) 圖紙の手紙のコト、志しよ(趁起) 圖行きなやむコト。しざるコトを云ふ。

志しよ
 志しよ(齒序) 圖年齢の順序(じゆ)即ち年(とし)じゆんのコトを云ふ。
 志しよ(自署) 圖我が姓名を自身で認むコト、又た認めたるもの、志しよ(自書) 圖自分で書くコト、志しよ(自序) 圖自分で書きたる文書のコト、志しよ(辭書) 圖國語、熟字等を集めて解釋せる書物の稱、志しよ(字書) 圖漢字(かんじ)を集めて解釋したる書物の稱、志しよ(自序) 圖自分の著作物に自分が序文(じゆ)を作るコト、又は其の物、志しよ(自如) 圖以前の通り。もこの通りおちついて居るコト、志しよ(自助) 圖獨立にて、事業を營(か)む。獨立にて生計を立てる、志しよ(次序) 圖順次(じゆんじ)について、したいコトを云ふ、志しよ(刺衝) 圖刺して疵(きず)つ、志しよ(詩頌) 圖偉人の功德盛業を褒(ほ)めたる詩歌を云ふ、志しよ(支證) 圖罪の毫(こ)もなきこと云ふ證據(しやうこ)。
 志しよ(私稱) 圖私(ひそ)に付けたる稱(な)に公稱に對しての稱、志しよ(自稱) 圖自分で勝手に、自分

の事を稱(な)ふるコトを云ふ、例ば自稱紳士などの類。
 志しよ(史乘) 圖歴史の科ト、志しよ(自乘) 圖同じ數を互に乘(か)合すコト、假令(たとへ)ば五に五を乘(か)るなど、志しよ(姿色) 圖みかたのうるはしきコトを云ふ、志しよ(四囑) 圖四方を眺め見るコト、志しよ(詞色) 圖言葉(ことば)づかひと顔つきのコトを云ふ、志しよ(死色) 圖將(まさ)に死せんとする其の時のさまを云ふ語、志しよ(四職) 圖左京職、右京職、大膳職、修理職の稱、足利時代に於ける四人の所司の稱にて、即ち細川、山名、畠山、一色(いっしき)の四家を云ふ、志しよ(餌食) 圖鳥獸に與ふる食物、即ちえいのコトを云ふ、志しよ(耳食) 圖實際の味を判別し能はぬコト、志しよ(耳學問) 圖(じゆ)の科トを云ふ、志しよ(滋殖) 圖ふやすコト、ますコト。種類を増加(ぞうか)すコト、志しよ(辭職) 圖職務を止(と)めるコト、官途(くわんと)をやめるコト、志しよ(辭色) 圖こざげづかいと、其の

志しよ、志しん
 志しよ(かほ色のコト)を云ふ、志しよ(士庶) 圖身分の相當に在る人と、平民とのコトを云ふ、志しよ(爾汝之交) 圖極めて親密なる交際(こうざい)のコトを云ふ、志しよ(私署證書) 圖私にて作りたる總ての證書類の稱、即ち普通の證書類の科ト、公正證書に對しての稱、志しよ(縮羅) 圖織物の名、ちりめん(ちりめん)の如く其の地合(ぢあ)を縮(ちぢ)ませたる絹織物を云ふ、又た緘(ひも)の字を書く、志しわ(獅子王) 圖獅子の科ト、志しわ(臙理) 圖肉と肉との連(つ)なり合つて居る部分の稱、轉じて肉のあや、即ち肌理(ひ)の科トを云ふ、志しん(侈心) 圖をこる心。たかぶる心、志しん(始審) 圖法律の語、凡ての訴訟(しゆ)の初めの裁判、即ち初審、控訴(こうそ)上告に對しての稱、志しん(仕進) 圖出でて官途(くわんと)に仕ふコト、官吏(くわんじ)なるコト、志しん(指針) 圖磁石(じせき)の針(はり)の轉じて物事を教(し)えみちびくコト、志しん(史臣) 圖國家の記録(きらく)の掛り、即ち編修官(へんしゅう)の科トを云ふ、志しん(使臣) 圖全權大使、全權公使の科トを云ふ。

志しん
 志しん(私心) 圖自分の一丁簡(いちやうかん)自身の利のみを得んとする心、志しん(私信) 圖互ひの音信(おんしん)秘密(ひみつ)の志しん(至親) 圖殊に親(かたが)しき間柄、志しん(死心) 圖死を怖(おそ)れ忌まざる心と云ふ意にて、此上もなき熱心(ねつしん)なるコトを云ふ、志しん(私人) 圖自分、自身、公人及び法人などに對しての稱、志しん(至仁) 圖極めてなまけ深(ふか)きコト、志しん(詩人) 圖詩を巧みに作る人、志しん(至人) 圖人道(じんどう)を確實(じやく)に守りて、徳望(とくぼう)比類(ひるい)なき人のコトを云ふ、志しん(市人) 圖市民に同じ、志しん(慈心) 圖なまけ深(ふか)き心の科ト、志しん(漸盡) 圖消(しょう)して無なるコト、志しん(貳心) 圖甲(こう)にも乙(おつ)にも心を寄(よ)するコト、ふたごころの科ト、志しん(慈親) 圖なまけぶかき親(おや)我が親(おや)の科トを云ふ語、志しん(侍臣) 圖主君のお側(わき)に侍(ま)つて居る家來、志しん(自信) 圖自分の考へ、自分の技量(ぎりやう)等(ら)を自分で信(しん)ずるコト。

ましん

ましん(自身) 固我が身、自分(マシ)。
 志じん(自及) 固自殺に同じ。
 志じん(自盡) 固自から盡(マシ)るさ云ふ意にて自殺のコト。
 志じん(寺人) 固昔時支那にて、宮中の後宮に仕へたる男子のコトを云ふ、即ち宦官(マシ)のコト。
 志じん(時人) 固其の時代の人々。其の時志じん(侍人) 固おそばに仕へてる人。おつきの人のコトを云ふ。
 志しん(時辰儀) 固時計のコト。
 志しん(視神經) 固腦より出で、眼球に循(マシ)つて神經の名、物を見分(マシ)るコトを、つかさどるもの。
 志しん(紫宸殿) 固京都の御所内に在る正殿の名、南面に建設さる大禮を行はせらるる處。
 志しん(自身番) 固現今の派出所の如きものにて、徳川時代に江戸市中に在りて、其の町々の出来事を取り扱ひ、及び町内の安全を取締(マシ)たる番屋のコトを云ふ。
 志しん(四神旗) 固天の四方に在る星にかたざりたるものにて、青龍、朱雀、玄武、白虎の四旗のコト、天皇御即位の時に樹(マシ)るもの。

志しん、志すま 死、次、侍、辭

志しん(使臣會議) 固其の國に駐在せる、各國の使臣が、集りて開く會議のコトを云ふ。
 志しん(四親王家) 固有栖川宮、伏見宮、桂宮、閑院宮の御四家の御事を申す語。
 (志じす)
 志す(死) 固動生命なくなる、呼吸(マシ)たゆる、死ぬる。
 志す(次) 固動つぎにある(マシ)つらなり行く(マシ)宿(マシ)を取る、即ちさまる。
 志す(侍) 固動傍(マシ)にはんべる、かしづく(マシ)辭(マシ)固動えんりする(マシ)こさばる(マシ)暇(マシ)を告げる(マシ)立ち去る(マシ)死する(マシ)即ち此の世を辭す。
 志す(四陸) 固四方の國境。
 志す(止水) 固又た死水とも書く、動ぬ水、流れぬ水、たまり水のコト。
 志す(雌藥) 固めしへのコト。
 志す(自水) 固身を投(マシ)るコト、入水、志す(自飲) 固自分で飲(マシ)を炊きて生活(マシ)をい、さなでるコト。
 志す(紙數) 固紙の數(マシ)書物などの、志す(爲濟) 固動成し終(マシ)る。しこげ

志せい

志せい(妾勢) 固自身がまへ(マシ)身軀(マシ)つき、志せい(資性) 固天性、うまれつき。
 志せい(至誠) 固此の上もなきまこと。極めて正しきコト。
 志せい(施政) 固政治(マシ)をひきおこなふ(マシ)紙製(マシ)固紙(マシ)を原料として作りたるもの、總稱。
 志せい(試製) 固試(マシ)みに作る(マシ)こしらへてみるコト。
 志せい(市井) 固繁華(マシ)なる處町の内市中のコトを云ふ。
 志せい(四姓) 固源平藤橘の四つ、手製(マシ)に同じ。
 志せい(私生) 固婚姻(マシ)の正式の手續を履(マシ)ず、夫婦となりし人の間に、子の生る、コトを云ふ。
 志せい(市制) 固市政に關する法律。
 志せい(市政) 固自治團體の最上に位する市が行ふ政務(マシ)。
 志せい(史生) 固編輯官の屬官のコト。
 志せい(至性) 固此の上もなき善良なる生

八五六

れつきのコトを云ふ、

志せい(至正) 固極めて正しきコト。
 志せい(市税) 固市の權限(マシ)内にて徵收し、市の所得となる諸種の税金のコトを云ふ。
 志せい(織盛) 固勢(マシ)の盛んに起(マシ)る(マシ)四聲(マシ)固漢字の韻の語、即ち平、上去、入の稱なり。
 志せい(自生) 固人の力をかりず、ひそりて生ずるコト。
 志せい(自製) 固自分で作る、手(マシ)く、志せい(時勢) 固其の時代の形勢(マシ)。
 志せい(辭世) 固死ぬコト(マシ)死にきわに作りし詩歌。
 志せい(自制) 固我れが我が精神の慾望(マシ)などを、抑(マシ)へつくるコト。
 志せい(私生兒) 固母の籍に入れる子、ないし、子。
 志せい(指笑) 固指さして笑ふ、指さしてあざけるコト。
 志せい(嗤笑) 固馬鹿にして笑ふコト。
 志せい(咫尺) 固甚だ近きへたたりコト。
 志せい(史籍) 固歴史を記せる書物。
 志せい(事績) 固いさほし、成績(マシ)。
 志せい(次席) 固首席の其のつぎ。
 志せい(磁石) 固じしやくのコト。
 志せい、志せき

志せきえい(紫石英) 固石の名、紫色の水

品(マシ)のコトを云ふ。
 志せつ(施設) 固こしらへる、もうける、志せつ(使節) 固君主(マシ)の命令を奉じて外國へ使する人。
 志せつ(死絶) 固しぬコト。
 志せつ(私設) 固民間(マシ)にて、設立するコト、私設鐵道など。
 志せつ(自説) 固自分の抱てる意見。
 志せつ(時節) 固機會(マシ)時(マシ)、假令ば時節到來(マシ)時(マシ)候(マシ)。
 志せふ(待妾) 固そばめ(マシ)こしも、志せん(紙線) 固かんじこより、志せん(私擅) 固勝手さままのコト、志せん(子錢) 固利息のコト、志せん(資錢) 固もさきん、資本金、志せん(詩仙) 固衆人に秀(マシ)て詩を巧みに作る人、志せん(詩箋) 固詩を書く紙、書箋紙(マシ)又は唐紙(マシ)を、方形に裁(マシ)ち、罫(マシ)を引き、模様(マシ)を表(マシ)はせるもの、志せん(指尖) 固ゆびさき、志せん(死戦) 固勝敗を決する戦(マシ)死ものぐるひになつてた、かふコト、志せん(私戦) 固上官の指揮命令を受けず、勝手に戦(マシ)ふコトを云ふ、志せき、志せん

志せん(支戦) 固枝隊の戰闘(マシ)、斥候(マシ)の衝突など、

志せん(支川) 固本流より分れし、小さき志せん(支線) 固本線より分れたる線路、志せん(視線) 固目の向ふ方、志せん(至善) 固此の上もなきまこと、志せん(自然) 固少しも手を加へざる本来の状態(マシ)生れつきの状(マシ)、即ち本性(マシ)人力もて如何(マシ)も爲し能(マシ)はぬ勢(マシ)天が萬物を生じ、又た萬物が變化(マシ)する状態(マシ)を云ふ、志せん(自然) 固ひそり、おのづか云ふ意を表す語、志せん(慈善) 固なさをかけて助くコトめぐみほご、こすコト、志せん(自然美) 固自然の美しきコトを云ふ、即ち山水、花鳥等の美を云ふ、志せん(慈善家) 固あわれみ深く、なさいあつき人のコトを云ふ、志せん(自然界) 固人間以外の萬物の存在してゐる場所(マシ)を云ふ、即ち天地間のコト、志せん(自然鉄) 固自然に鉄となりて志せん(自然銅) 固石に混らずに、銅のままにて自然に出来し銅、志せん(自然物) 固凡て人工を加へず

八五七

志せん、志そ
自然に生じたる物を云ふ、魚介、鳥獣、金石、草木等を云ふ、
志せんくわい(慈善會) 慈善善的の事業に使用する資金を得んが爲めに、特別の料金を取り立てて爲す與行、又は普通の價より高き價を取りて、物品を賣る會のト、
志せんしゆき(自然主義) 自然の發達變化狀態作用等を根據として、説を立て、自然の事にはあくまで逆らはぬようにして、其れの發達變化をすすむる主義を云ふ、
志せんたりん(自然淘汰) 闘争ぐれたる者が、榮え、劣りたるものが衰へるは、自然の勢なりと云ふト、

(志そ)

志そ(尸素) 闘其れだけの能力なくして、俸給を受けてるト、
志そ(始祖) 祖先のト、
志摩(達摩) 大師のトを云ふ、
志そ(遊戯) 闘ぐだぐだして進まぬト、
志そ(紫蘇) 闘草の名、葉は一般に紅紫色(シロ)を呈せる、手掌の如く周圍

志そ、志そく
細かきギザのあるもの、時に青き色の物もあり、一種の香氣を有す、花は小さくして淡紅色又は紫色を呈す、葉及び其の實は、共に食用となる、
志そ(私訴) 闘法律の語、公訴に對する語にて、犯罪の爲めに蒙りし損害の返濟を公訴に附帶して提出する訴のトを云ふ、即ち民事の訴訟、
志そ(緇素) 闘僧侶の俗人のトを云ふ、
志そ(自訴) 闘自分で自分のトを訴ふト云ふ意にて自首のト、
志そ(馳走) 闘速に走るト、
志そ(調宗) 闘文學を嗜める人を敬ひて云ふ語、詞兄に同じ、
志そ(詩僧) 闘詩を巧みに作る僧侶、
志そ(寺僧) 闘其の寺の僧侶、
志そ(待曹) 闘貴人のお側について人人のトを云ふ、

志そく(子息) 闘むすこのト、
志そく(止息) 闘ごまりて休むト、
志そく(紙燭) 闘昔時、宮中にて用ひられたる一種のさし火、燈松の一端を焼きて、油を塗りて火を點て燃せしもの、其の持つ方の端を、青紙にて巻きたるより、此の名ありと云ふ、

志そく、志そこ

志そく(四足) 闘四つあしの獸類のト、
志そく(支族) 闘分れたる一族、即ち分家のトを云ふ、
志そく(支屬) 闘分れたるもの、えだはのトを云ふ、
志そく(矢鏃) 闘やじりのト、
志そく(士族) 闘華族の下、平民の上に位する身分の稱なれど、其の與へられたる權利義務其の他官達の待遇は、總て平民に同じ、
志そく(使賊) 闘人を、そそのかして自分の用に使ふトを云ふ、
志そく(指賊) 闘人をおだてて自分の思ふトを、なましむ、即ちけしなかける、
志そく(氏族) 闘我が一族、同じ氏の仲間、
志そく(鸞族) 闘鸞、鷹などの猛き鳥の種類を云ふ即ち猛禽類、
志そく(時俗) 闘其の時世の一般の風俗ならはせのト、
志そく(自足) 闘自から足れり云ふ意にて、其の分に満足せるトを云ふ、
志そく(兒息) 闘子供のト、
志そく(爲損) 闘損するト、
志そく(爲損) 闘損するト、
志そく(爲損) 闘損するト、

志そしゆ(紫蘇酒) 闘混成酒(コシト)の一種、アルコールに紫蘇の葉の汁を混ぜて製せし酒、
志そつ(士卒) 闘兵卒のト、
志そびしほ(紫蘇醬) 闘一種の食品、梅酢を漬けて紫蘇の葉を搾りつぶし、砂糖を入れて煮きつめたる物、
志そまき(紫蘇巻) 闘麻の實などをに入れて煮たる味噌、日光唐辛、梅干、梅干などの鹽漬(シロ)にして、紫蘇の葉で巻きたるもの、
志そめし(紫蘇飯) 闘鹽漬になしたる紫蘇の葉を、細かく刻みて、炊きたる飯の上に掛けたるもの、
志そん(子孫) 闘子の孫、先祖代代、其の家をつぎ來りし人人のト、
志そん(至尊) 闘此上なき貴きト、
天皇陛下の御事を申す、
志そん(自尊) 闘我が品格を保つコト、
志そん(自勝) 闘我が勝つコト、
たかぶるコト、
志そん(耳孫) 闘ひまの孫、
志そん(自存) 闘自己の生存を云ふ意にて、生きながらふ。自活と云ふコトに爲る、
志そん(慈尊) 闘佛法の語にて、佛の

(志た)

志た(舌) 闘人及び動物の口の中に在る、肉状の厚き葉の如きもの、此れに味神經が分布してゐるから味を知り、且つ食物を食道へ送る機能(シロ)を爲す、大切な具、言葉(ハ)のト假令が舌が軽ひなど、
志た(下) 闘上に對して下の稱、人民即ち下々のト、
志た(劣) 闘あるコト、場所の低き所、
志た(我) 闘より位置の低きコト、
志た(代) 闘るもの、即ち下に取るべく金錢に代りもの、
志た(接頭) 或る語に附け加えて、劣を表はすに用る語、
志た(齒叢) 闘草の名、凡て酸(シロ)イなどの雜草の總稱、即ち芽の出たる時は、莖のまゝにて、長に及

(志た)

んで、細かく製したる長き葉を出す種類の雜草の稱、
志た(自他) 闘我と人のト、
志た(耳衆) 闘耳たぶらのト、
耳に耳のトを云ふ、
志た(下顎) 闘上顎に對しての稱にて、下部の方の、
志た(舌) 闘舌のト、
志た(四諦) 闘又たしていとも讀む、佛教の語、集(シロ)苦(シロ)滅(シロ)の四つのトを云ふ、
志た(四大) 闘四大種の略にて、即ち萬物の生成する基礎となるべき四つの物の稱にて、地(シロ)水(シロ)火(シロ)風(シロ)の四つを云ふ、
志た(肆大) 闘甚だしく大なるト、
大なるト、
志た(肢體) 闘手と足と手足と腕と、
志た(枝隊) 闘本隊より分れ、獨立にて行動を爲す一軍隊、
志た(姿態) 闘なりふり、すがた、容子、
志た(四體) 闘頭と胴(シロ)と手足(シロ)と轉じて身體、
志た(死體) 闘しが、
志た(次第) 闘わけから順序(シロ)を、

またさ、またす 親

またさき(舌端) 舌のさき、
 またさく(下作) 他人の田地を借て、物を作るコト、即ち小作、
 またし(親) 図仲のよき、れんころのコト、
 またし(仕出) 図したすコト、芝居にて幕の開きたる時に、其の幕の主(ま)なる役者の出る前に、一寸(す)出て来る役者のコトを云ふ、
 またし(下敷) 図物の下に敷く物、物の下になりたるコトを云ふ、
 またしく(親) 圖みづから、自身で、
 またたり、目のまへ云ふ意を表(す)はす語、
 またじた(下下) 図下下の者、即ち人民、
 またし(下柴) 図木の下又は木かげに生(す)して、雑木(す)のコト、
 またし(親) 圖仲よくす、れんころにする、
 またしめ(下締) 圖女の帯の下に、しめる、
 またしん(親) 圖仲よくする、むつまじくする、
 またす(仕出) 圖動作(す)り出す、拵へ出す、
 ①注文(す)に依りて、種々の料理を作る、
 ②勤(す)めて、身代を豊(す)にする金持(す)なる、
 またす(下摺) 図、ころみに摺りたる印

またす、またつ 健、認、滴

またす(校) 校正(す)るコト、
 またす(下籠) 圖貴人のめさせらるる車の、籠の内側(す)に掛ける、白き絹(す)のコト、
 またぞめ(下染) 圖本染を爲す前に、先づ他の色に染めて置くコト、
 またたか(健) 圖おびたくしく、たくさん、
 ①強(す)く、きつく甚だしく云ふ意を表はす語、
 またたむ(認) 圖書書き記(す)す、書きさめる、かきつける、
 またたむ(舌訛) 自動、こぼがなまる、
 またたり(滴) 図しづく、水などのしづくになつて、落(す)るもの、
 またたる(滴) 自動水がしづくとなつて落したたらす、舌不足、圖舌のまわらぬコト、
 ①即ち言葉が、はつきり云へぬコト、
 ②したたかもの(健者) 圖甚だしく強き人、手に合ぬ人、
 またち(下地) 圖物事の生じたる、又は働(す)を起す原因、
 ①下(す)らへ、
 ②醬油のコトを云ふ、
 またつ(紫圍) 圖宮城の門、
 ①轉じて宮城(す)の皇居のコトを云ふ、
 またつ(仕立) 圖、こしらへる、
 ①衣服を縫

またつ、またて

またつ(四達) 圖道路の四方に通(す)つてるコトを云ふ、
 またつみ(下積) 圖積み荷の、下の方になつてゐるもの、
 またつゆ(下露) 圖木の下などに、たまれる露(す)のコトを云ふ、
 またつかさ(下司) 圖位置の極めて低(す)き官吏のコト、
 またつく(下津國) 圖黄泉(す)、
 またつづみ(舌鼓) 圖味(す)のよきために舌打(す)を爲すコト、
 またつみち(地道) 圖地下に穿(す)たれたる道、
 ①即ちトンネルのコト、
 またて(下手) 圖相手(す)より劣(す)つてるコト、
 ①取り組(す)て下の方より差したる手、
 ②取り組みて下敷(す)になりたるコト、
 またて(仕立) 圖こしらへるコト、
 ①しこむコト、
 ②衣物を裁ち縫ふコト、
 またて(仕立屋) 圖衣服の仕立を業(す)する人、
 またてかた(仕立方) 圖したる仕方、
 またてが(仕立顔) 圖殊更に其の容子を、
 つくろひ爲せし顔、

またて、または 墓

またてもの(仕立物) 圖仕立べき物、
 ①裁(す)ち縫(す)するコト、
 またどし(舌疾) 圖早口(す)に物を云ふ、
 ①云ひつ振(す)の早(す)きなり、
 またぬき(下泣) 圖しのびなきコト、
 またぬがし(下流) 圖地面に直接(す)に設けたる洗ひ場、
 またぬらし(下刷) 圖實地に活用する時の用意にならし置くコト、
 またぬめ(舌背) 圖舌の尖にて、上下の唇(す)を背(す)めまわすコト、
 またぬり(下塗) 圖上塗(す)を爲す前に塗る、
 ①あら壁(す)の、
 またのぬ(舌根) 圖舌のもと、
 ①轉じて云ひたる言葉(す)、
 ②假令(す)舌の根のかわかぬ中など、
 または(下端) 圖下の方、下の部、
 またはし(墓) 圖こひしひ、したはしひ、
 またはひ(下延) 圖心がひそかに、
 ①其の方に傾(す)き向ふコトを云ふ、
 またはら(下腹) 圖腹のへそより下の部を云ふ、
 またはり(下貼) 圖本ばりを善くす爲め

またば、またま 墓

またば(別) 粗末(す)な紙にて貼(す)るコト、
 またば(下働) 圖人の下につきて働(す)くコトを云ふ、
 ①特に臺所(す)にて、煮炊(す)を爲す召使(す)のコトを云ふ、
 またひ(下樋) 圖琴(す)の胸の内部の稱、
 またひ(下火) 圖燃火(す)の勢の衰(す)たるコトを云ふ、
 またひ(下髭) 圖下あごの下に生ゆるひ、
 またひ(菓葉) 圖草木(す)の葉の下の方に生(す)して、少なき葉、
 またひ(舌平目) 圖魚の名、形は薄くして平たく、色は一方が紅橙色(す)にして、一面に小さき黒點あり、一方は白色を呈す、味は淡白にして美味なり、
 ①其の形恰も舌の如きより、此の名あり、
 またひ(墓) 圖動か(す)なつかしく思ふ、
 ①こがれる、
 ②後(す)を追ひ行く、
 またひ(舌振) 圖舌を振るふと云ふ意より轉じて、物の云ひつぶり、
 またま(下前) 圖衣物の合(す)せ目の下になる方の稱、
 またま(下廻) 圖勝手手向(す)などの、
 ①細細せる用事を爲す役(す)、
 ②又は其の役

またみ、またり 垂

またみ(下見) 圖あらかじめ見る、又は讀(す)み置くコト、
 ①住宅の周圍(す)の塀(す)の、
 またみ(離) 圖動絞つて汁(す)を出す、滴(す)をからして出す、
 またむ(下向) 圖下の方を向ひて、垂れ下つてゐる、
 まため(下目) 圖人を侮(す)るコト、
 ①下の方を見るコト、
 またもつ(舌縫) 圖舌の運動が、自由(す)ならぬコト、
 またもみ(下紅葉) 圖樹木の下、又は木間陰(す)に在るもみち、
 ①云ふ、
 またや(下役) 圖下に使(す)はれる人を、
 ①またや(下宿) 圖下邸(す)の、
 またやし(下屋敷) 圖しもやしき、
 またよみ(下讀) 圖書物の習ふべき部、又は人前(す)にて讀むべき部を、さらえ置くコトを云ふ、
 またらく(自墮落) 圖だらしなきコト、
 ①身(す)のしまりなきコト、
 またり(垂) 自動たれ下つてゐる、
 ①下向ひてるコトを云ふ、
 またり(垂尾) 圖鳥や獸(す)の尾の長く垂れ下つてゐるものを云ふ、

またり、またん 垂

あたりがほ(爲顔) 図得意願とも書く、ほ
これる顔つきのコトを云ふ、
またりざくら(枝垂櫻) 図櫻の一種、葉は
普通の櫻(サシ)の其れに似て細長く、楕
圓形を爲す、花の柄の元(元)に毛あり、
枝は柳の如く、下垂(下)する特性ある
もの、
またりやなぎ(枝垂柳) 図柳の一種、其の
枝の下垂せる特性を有するもの、
またる(垂) 図したれに同じ、
またれ(垂) 図物の下(下)つてるコト、
またん(紫檀) 図木の名、我が國には産せ
ず、熱帯(熱帯)地方に産す、其の木材(材)
は極めて堅(堅)くして、紫色(紫)を呈
し、且つ頗(頗)る麗(麗)はしき光澤(澤)
あり、上等の器具を製す、
またん(香歎) 図なげく、かなしむコト、
またん(師檀) 図僧侶と檀家(檀)の、
またん(指彈) 図つまはじきするコト、
またん(史談) 図歴史の話、歴史の話を書
せる物、
またん(師團) 図陸軍の編制上の名、歩兵
二旅團と騎兵一聯隊と、砲兵一聯隊と
を主として、工兵輜重兵彈藥隊列各一
大隊と、軍樂隊及び野戰衛生隊とより

またん、またち 實

成れるものにて、全國の各要地に一師
團づつを置く、
またん(詩壇) 図漢詩を作る人の仲間、
またん(寺壇) 図寺と檀家(檀)の、
またん(事端) 図物事のいさぐち、事件の
初まり、お、り、
またん(示談) 図互(互)ひに相談して仲直
(直)を爲すコト、
またんまへ(下前) 図衣物(衣)の右の方の
前巾(巾)のコトを云ふ、
またんちやう(師團長) 図師團の長官、陸
軍中將を以て、親任せらるる官職、
またんしれいふ(師團司令部) 図師團長の
軍務を行ふ所を云ふ、
(まじち)
またち(質) 図約束なしたる事を違へぬと云
ふ保證に、相手方に預(預)くる物のコト
を云ふ、若し約束に違(違)ひし時には、
其の物は其の人が勝手に處分し得る定
め、即ち人質(質)など、
またち(質) 図物を預けて
期間を約して、相當の金錢を借るコト、
即ち其の期限に至りて、金子を返さぬ
時は、其物は貸主が勝手に處分するコ
トとなる、

またち 七、實

またち(七) 図三と四を合せたる數、即ち
な、つ、
またち(私智) 図自家の利益のみを計(計)り
て、他を省(省)ぬと云ふ、正しからぬ智
恵のコトを云ふ、
またち(妾致) 図すがた。容子、
またち(死地) 図一つ間違(誤)えば、生命を
棄(棄)るさ云ふ、危険なる場處のコト、
九死一生の場合を云ふ、
またち(圃地) 図肥料(肥)を、殊に人糞類(糞)
を貯(貯)て置く所を云ふ、
またち(支持) 図持ちこたゆる、ささえたも
つコト、
またち(橋車) 図御所車(御)の如き車の轆
(轆)を載(載)る臺(臺)のコト、脚(脚)の高
き經机(經)の如き形のもの、
またち(實) 図しつに同じ、正しきコト、ま、
こなるコトを云ふ、
またち(自治) 図自分の事を自分で仕末(末)
するコト、
またち(地方) 図自治團體が、其の團
體內に、法律の與(與)へられた權限に依
りて、團體の整理を爲し、併せて其の發
達を圖(圖)るコトを云ふ、自治團體とは
市町村の事なり、
またち(四知) 図支那の故事にて、密(密)かに
二人にて、事をなせば、他に漏(漏)せずと

云ふは、大なる考へちがひにて、即ち天
知る、地知る、我知る、相手の人知るこ
云ふコトにて、即ち知れる者四つあり
と云ふ意、
またち(買入) 図しちに置くコト、
またち(七曜) 図日月と火水木金土の五
星を合したる稱、此れを七日に割り當
てたる名稱にて、日曜日(日)乃至土曜
日(土)のコト、
またち(自治機關) 図法律の語、自
治團體(體)を組織せる機關のコトに
て、府縣郡及び市參事會並に町村長と、
府縣會、郡會、市町村會のコトを云ふ、
またち(紫竹) 図竹の一種、芽(芽)を出した
る年は、其の幹(幹)も綠色を呈するも、其
の翌年よりは、濃(濃)き紫色を呈するも
の、細工物の材料となる、
またち(絲竹) 図おんがく(音樂)のコト、
またち(質積) 図質に置くべき品物即ち
質物(物)のコト、
またち(質倉) 図質に取りたる品を入れ
て置く處、
またち(七絃琴) 図琴の一種、絃(絃)
の七筋よりなるもの、
またち(七五三) 図芽出度き事に用ゆ
る數(數)しめ繩(繩)のコト、

またち(七言古詩) 図漢詩の一體
古詩の七言なるもの、
またち(七言律) 図漢詩の律體の、
七言より爲れるものを云ふ、
またち(七言絶句) 図漢詩の一種
七言四句よりなるもの、
またち(七書) 図七種の兵書と云ふコト
即ち孫子、吳子、三略、六韜、司馬法、尉
繚子、太公問對のコトを云ふ、
またち(七情) 図七つの情、即ち喜、怒
哀、樂、愛、惡、欲、の情、
またち(七生) 図七たび生れかばるコ
トを云ふ、
またち(七色) 図七種の主たる色、即
ち赤、青、黃、紺、紫、紅、紺の稱、
またち(七絶) 図一週、即ち七日の其
の日の日、日曜、月曜、火曜、水曜
木曜、金曜、土曜の稱、
またち(七夕) 図五節句の一、陰曆の七
月七日の夜、たなばた、
またち(七絶) 図漢詩の一句が七言より
成れるもの、七言絶句の略、
またち(七堂) 図寺の建物(建)の稱、
即ち佛殿、法堂、僧堂、厨(厨)、浴室、東司

及び山門のコト、
またち(七和) 図大和の國に在る七
つの大きな寺、即ち東大寺、興福寺、西
大寺、大安寺、元興寺、藥師寺のコトを
云ふ、
またち(七堂伽藍) 図建物(建)の
完全せる寺院のコトにて、即ち山門、佛
殿、法堂、方丈、食堂、東司及び浴室の設
あるを云ふ、
またち(自治團體) 図法律の語、一
定の土地と、其土地の住民とに依りて、
成り立つてる共同團體のコトにて、國
家より法律に依りて委(委)されたる權
力を以て、其の團體の公共事務を、團體
自からが整理するもの、即ち府縣郡市
町村のコトを云ふ、假令ば村と云ふ土
地と、其村の住民とに依りて成り立つ
てる、公共團體、即ち村そのものコト
またち(七條) 図七幅(幅)を用ひて製し
たる袷(袷)の、
またち(七轉八起) 図な、ころび
やなきのコトを云ふ、
またち(七頭八倒) 図のた打ち
まわつて苦しみがくコトを云ふ、
またち(七度燒) 図最上のやきつけ鉾
金(金)のコト、即ち七度も焼付けたる

またち、またち

またち、またち

またち、またち

志ちば、志ちめ

志ちめ、志ちや

志ちや、志ちよ

八六六

鏡金と云ふ意、
志ちばら(七寶)陶器(七宝)に施す模様
の名、しちばうやきのコト、其條を見よ
志ちばらやせ(七寶焼)陶一種の美術的の
焼きつけ方にて、陶器又は銅器の表面
に、珧瑯(カキ)を用ひて、人物花鳥さては
山水(山水)等の模様(模様)を、美しく焼き
出して、其の模様(模様)を、美しく焼き
極めて細き針金(針金)にて區域を表(表)
はしたるもの、又針金を用ひて、區域
を表はさぬ物もあり、
志ちばらつなせ(七寶鑿)陶七つの金銀珠
玉をつなぎ合せて、一つの模様を表し
たる物、
志ちふくじん(七福神)陶七人の福の神と
云ふコトにて、即ち大黒天、蛭子三郎、
毘沙門天、辨財天、福祿壽、壽老人、布袋
和尚の、
志ちめんぢら(七面倒)陶甚だしく面倒な
志ちめんぢら(七面倒)陶鳥の名、形は鶏
(鶏)に似て、甚だ大きく、頭は毛なくむ
き出しにて、上嘴(嘴)に垂れ下つてる
ささかの如き肉あり、此れが時々、其
の色を變ず、羽毛は種々の色の雜(雜)り
毛にて、尾を開けば、團扇(団扇)の如き状
を呈して頗る美し、原産地は、北アメリ

カなりと云ふ、
志ちめんぢらくさし(七面倒臭)陶甚だし
く面倒なり、きわめてうるさし、
志ちもの(質物)陶抵當(抵當)として金錢を
借る品物、しちばら、
志ちや(質屋)陶抵當を取りて、小額の金
を貸す業とせる家、
志ちや(七夜)陶子が生れてより、七日目
のコトを云ふ、
志ちや(視聽)陶見るコトと、聴くコト、
志ちや(次長)陶凡て長官の次の位置に
在る官吏のコトを云ふ、
志ちや(紙帳)陶紙にて作りたる蚊帳
(蚊帳)のコトを云ふ、
志ちや(弛張)陶のびひろがるコト。ゆ
るむコトを云ふ、
志ちや(仕丁)陶宮中の掃除(掃除)の、其他
小用を達す最下級の備員(備員)、其他
志ちや(支廳)陶本廳より他地方へ派出
してある役所、
志ちや(市廳)陶市役所のコト、
志ちや(市長)陶市長と云ふ自治團體の長
即ち東京市長、大阪市長など、
志ちや(市場)陶商品の賣買、金錢の取
引の行はれる處、他人數集(集)まりて、
盛んに商業を營(營)む所、いちば、

志ちや(視場)陶肉眼(肉眼)にて見渡し得
らるる範圍内(範囲内)のコトを云ふ、
志ちや(弛張熱)陶熱病の名、おこ
り、まらりや熱のコト、
志ちや(せんせい)市町村制)陶市と町村
との行政上の手續(手續)を規定したる法
律のコト、
志ちや(支柱)陶ささえ柱、つつかひ棒
(柱)のコトを云ふ、
志ちや(市中)陶市内、町の内、
志ちや(四仲)陶仲春、仲夏、仲秋、仲冬
のコトを云ふ、
志ちや(仔虫)陶昆虫類が、卵(卵)より
かへりて、未だ一定(一定)前の虫とならぬ
間の稱(稱)なり、
志ちや(寺中)陶寺のなか、
志ちや(市住民)陶其の市内に居住
せる人民のコト、即ち市民、
志ちよ(次女)陶男子と女子、
志ちよ(兒女)陶男の子と女の子、
志ちよ(侍女)陶腰元(腰元)そば女、
志ちよ(至重)陶此の上もなき大切(大切)
なるコトを云ふ、
志ちよ(輻重)陶軍用の小荷物(小荷物)兵糧(兵糧)

志ちよ、志ちづ

志ちづ、志ちぢ

志ちぢ、志ちぢ

八六七

志ちよ(自重)陶自分で自分の身體を
大切にせずコト、即ち自愛、
志ちよ(輻重兵)陶陸軍兵科の一、
糧食彈丸その他の軍用品の整理、運搬
等をつかさどる兵士、
志ちよ(輻重輪卒)陶輻重兵に屬
して、軍用品の運搬をつかさどる兵卒、
志ちよ(司直)陶法律を適用して是非曲
直を判断するコト、轉じて司法官、即
ち裁判官のコト、
志ちりん(七厘)陶こゝろ、かんできのコ
トを云ふ、
志ちん(襦袢)陶織物の名、しゆちんの訛
志ちりけつかい(七里結界)陶七里四方の
結界のコト、忌(忌)みきらふて傍(傍)へよ
せつけぬコト、いさふて近づけぬコト
を云ふ、

(志ちぢ)

志ちづ(腹)陶つまづく、こける。たをる、
志ちづ(剛)陶わりふ。手形(手形)のコト、
志ちづ(假)陶木の名さばらき、木材を研
磨(磨)る具にて、研(研)り台(研)り台、
志ちづ(膝)陶身軀の名所ひせ、ひさ、ぶし。

志ちよ、志ちづ、腹、剛、襦、膝

志ちづ、志ちぢ、風、疾、悉、嫉、桂、懸、叱、質

志ちぢ、質、漏、室、懸、失、櫛

志ちづ(鐵)陶鉄を研(研)る、又は延(延)すに
用ゆる鑿(鑿)、かたて、
志ちづ(蛭)陶虫の名、ひろのコト、又たてつ
とも音す、
志ちづ(虱)陶虫の名、しらみのコト、
志ちづ(疾)陶病氣、やまひ、わづらふ。やむ
くるしむ、にくむ、いむ。さらふ。うら
む。ぬれたむ、速(速)かなり。はやし。こ
し、
志ちづ(悉)陶このらす。こごさく。こまや
かに、そなはる。さなふ、
志ちづ(嫉)陶にくむ。それむ。れたむ、
志ちづ(桂)陶足へはめる戒具、即ちあしか
せのコト、くさびのコト、轉じて、し
ばる。自由を利(利)さぬ、
志ちづ(僂)陶聲の小なきコト、こごえ、小
聲にてうなるコト、
志ちづ(叱)陶しかる。おこる。たしなめる、
腹(腹)たて、舌を打つ、
志ちづ(質)陶物の中身(中身)、しやうみ、即ち
實質、人のうまれつき、即ち氣質(氣質)
物のしたち即ち成り立つてるものと、
假令ば其實が良(良)さか悪(悪)さか、
ごだい、基礎(基礎)おさなしきコトすな
ほなるコト、やくそくするコト、かざ

りなき、いつわりなきコト、たづねる
さふ。たす、たてがた即ち證書、
志ちづ(質)陶接尾、或る語の下に附け加えて
其の物の本來のたしと云ふ意を表はす
に用ゆる語、假令ば金質、木質、紙質な
ど、
志ちづ(漏)陶しめつてるコト、うるほふて
るコト、ぬれてるコト、
志ちづ(室)陶部屋(部屋)、むろ、穴、女房、妻君
志ちづ(懸)陶絲數(懸)を二十五張りたる琴
即ち二十五張の琴のコト、
志ちづ(失)陶けがあやまち、欠點(欠點)、
志ちづ(櫛)陶頭髪を、さかす具、即ちくしの
コト、くしげづる。頭髪を掃除(掃除)す
る、物が數多く集まり、並(並)んでる状
を云ふ、
志ちづ(濁)陶水の劇(濁)しく流るゝ音を云
ひ表はす語、水が互いに衝突(衝突)して發
する聲を云ふ、
志ちづ(漆)陶うるし、光澤(光澤)ある黒色の
コトを云ふ、
志ちづ(腹)陶いやしきコト、身分の低(低)き
人のコトを云ふ、
志ちづ(垂)陶動たらさせる。ひたたらさせ
る。おささせる、
志ちづ(倭文)陶昔時に流行せし一種の織物

まつ、まつい 實、日、和、馴、靜

(静)の名、赤き青との緯糸(和)にて、やたら縞に織りたる物。
 ① 確かに在るコト、即ち現存(静)存在(静)果實(實)即ちくだもの器具(静)ある、防禦(静)力あるコト、芝居道の語、實役(静)のコト、即ち善人に扮(静)する役。
 ② 日(日)固(日)にち。ひるま日數(日)を數ふるに用ゆる語。
 ③ 和(和)固婦人の肌(和)につける、袖(和)のなき襦袢(和)常着(和)。ふだん衣(和)のコトを云ふ。
 ④ 和(和)固しゆくつぎの馬、即ち傳馬(和)の(和)コトを云ふ。
 ⑤ 接頭(和)或る語の上に冠(和)らせ、總て物事の靜かなる状を云ひ表はすに用ゆる語。
 ⑥ 執拗(和)固自己の意見を堅(和)く信じて、他人の意見に従(和)はぬコト、即ちかたくなの(和)コト。
 ⑦ 實惡(和)固芝居道の語にて、甚だしき惡人に扮(和)する役(和)の名の(和)コトを云ふ。
 ⑧ 執意(和)固自己の意見を堅(和)く守りて、變ぜぬ(和)コトを云ふ。

まつい、まつか

まつい(失意)固がつかりするコト即ち失望(和)あてはづれの(和)コト。
 ① 實意(和)固まごころ。かざり氣のなき心根(和)の(和)コトを云ふ。
 ② 執友(和)固仲のよき友だち。
 ③ 實印(和)固自己の權利義務を證明するの爲めの印形、現籍地の役所へ届け置きて使用(和)するもの。
 ④ 失限(和)固うしなふ。なくなすコトを云ふ。
 ⑤ 齒痛(和)固齒の痛むコト。
 ⑥ 私通(和)固男女が互ひに秘密に情を通するコトを云ふ。
 ⑦ 室字(和)固家。すみ家。
 ⑧ 四通(和)固四方へ往き來の出來能ふやうになつて道路(和)の(和)コト。
 ⑨ 四通八達(和)固四方八方に通じてる道路の(和)コト。
 ⑩ 下枝(和)固下の方に在る枝。
 ⑪ 疾疫(和)固傳染病、ばやり病。
 ⑫ 實益(和)固實際の利益。實際に役に立つ(和)コトを云ふ。
 ⑬ 疾惡(和)固にくむ。うらむ。
 ⑭ 膝下(和)固ひざまご。そば。
 ⑮ 室家(和)固住宅(和)住居(和)轉じて一家内。うちの(和)コト。

まつか

まつか(靜)固さはがぬコト。動かぬコト。おだやかなる。かばりなきコト。おちついでるコト。たまつてるコト。聲(和)を立てぬ(和)コト。
 ① 叱呵(和)固しかりつける。しかる。
 ② 實家(和)固我が生れたる家、里(和)の(和)コトを云ふ。
 ③ 實價(和)固かけ引きのなき直段(和)正價(和)の(和)コト。
 ④ 悉皆(和)固のこらす。ことごとく。
 ⑤ 十戒(和)固佛法の語、五戒(和)の外に、肉食、邪見、毀謗、欺誑の五つを合して十戒と云ふ。
 ⑥ 十界(和)固佛教の語、佛、菩薩、緣覺、聲聞、天上、人間、修羅、餓鬼、畜生、地獄の十を云ふ。
 ⑦ 疾行(和)固早く進むコト。
 ⑧ 疾行(和)固早く進むコト。大急ぎにて歩み行く(和)コト。
 ⑨ 膝行(和)固坐(和)りたるまま膝先(和)にて進む、又た退(和)くコト、貴人の前にて行ふ作法(和)。
 ⑩ 失行(和)固道徳(和)に反(和)したる行狀(和)の(和)コト。
 ⑪ 失効(和)固効力(和)を失ふ。
 ⑫ 執行(和)固實地(和)に行ふ。
 ⑬ 實効(和)固實際の効力、まごころ

効能(和)

効能(和)固實地に行(和)なふ。
 ① 實學(和)固實際の用に、立てべき學問。
 ② 實證(和)固かくし立てせず、極めて正しき(和)コトを云ふ。
 ③ 實學(和)固實地に必用なる學問の(和)コトを云ふ。
 ④ 固千子(和)の(和)コトにて、即ち甲乙丙丁戊己庚辛壬癸の十の(和)コトを云ふ。「細工の(和)コト」
 ⑤ 漆器(和)固漆(和)を塗(和)し器具、漆(和)を塗(和)うたがはしき事を聞きた(和)すコト。
 ⑥ 字突(和)固書物を讀む時に、字を突(和)く物、しなりの類。
 ⑦ 實氣(和)固正直(和)にして、忠實な(和)實記(和)固本當の事實を記(和)せるもの、かざり氣なく記せしもの。
 ⑧ 實況(和)固實際の景況、まごころのありさま。
 ⑨ 實境(和)固實際の處。實地の個(和)所(和)の(和)コトを云ふ。
 ⑩ 失脚(和)固足をすべらせて倒れる(和)しそんじる(和)コト。
 ⑪ 疾驅(和)固早くかける。
 ⑫ 疾(和)固、まつく

まつく(仕付)働動(和)

まつく(仕付)働動(和)固しらへる。したてる。① 作法(和)のたしなみをつける。② 田に苗(和)を植(和)る。
 ③ 疾苦(和)固苦しむコト、なやむ。
 ④ 水(和)固水のひたたるもの。
 ⑤ 室隅(和)固座敷(和)のすみ、部屋(和)のすみ。
 ⑥ 爲盡(和)固盡すしてしまふ。
 ⑦ 漆喰(和)固石灰(和)又は牡蠣(和)の殼(和)を煮きて、フノリの汁にて練(和)り、スサを入れて混(和)し物。
 ⑧ 失火(和)固過(和)つて火を出す、火事の(和)コト。
 ⑨ 下鞍(和)固したぐらの(和)コト。
 ⑩ 漆畫(和)固色漆(和)にて、描(和)きたる(和)畫(和)の(和)コト。
 ⑪ 濕氣(和)固しめつてる(和)コト、水分の(和)多く含(和)まれてある(和)コト。
 ⑫ 仕付(和)固仕付の略、家庭教育を仕立る(和)コト。仕付糸の略、家庭教育をつくる(和)コト。
 ⑬ 失計(和)固計畫(和)のはづれたる(和)コト。しくじる(和)コト。
 ⑭ 失敬(和)固失礼、無禮。
 ⑮ 實兄(和)固ほんごうの兄(和)。
 ⑯ 實形(和)固實際の形狀。

まつけい(實景)固實地の景色、本當(和)

まつけい(實景)固實地の景色、本當(和)のありさま。
 ① 靜(和)固しづかなり。おだやかで
 ② 日月(和)固太陽と太陰即ちつきとひ。
 ③ 實業(和)固農工商等の經濟にたづさわる事務、實地になす仕事。
 ④ 濕氣眼(和)固赤癬(和)が原因となりて生じたる眼病の(和)コト。
 ⑤ 失權(和)固有(和)てた權利(和)を失ふ、權力(和)がおとろへる。
 ⑥ 執權(和)固昔時の武家の職名、將軍を助(和)けて、政治を爲す役(和)。
 ⑦ 失言(和)固云ひ損(和)じて失禮なる(和)コトを云ふ。
 ⑧ 實驗(和)固實地にためし見る(和)コト。學理に依つて生ずる種々(和)の變化を、實地に表(和)はして示す(和)コト。⑨ 自分が實際になしたる經驗(和)。
 ⑩ 實權(和)固實際に得てある權力。
 ⑪ 實檢(和)固實(和)か偽(和)か即ち實否を確(和)と取り調(和)ぶる(和)コトを云ふ。實地の検査。
 ⑫ 實現(和)固實地に現(和)はる。
 ⑬ 實見(和)固實地を見る、實物を見る(和)コトを云ふ。
 ⑭ 疾(和)固、まつけ

まつけ、まつい、

まつけいと(仕付絲) 縫ひし衣服の縫目(まじ)をならす爲めに、粗末(のろ)に其の上より縫ふて置く糸、

まつけかた(仕付方) 縫行儀(まじ)を教ゆるまつけはり(仕付針) 縫しつけをつくるに用ゆる縫ひ針、

まつげふかい(實業界) 縫實業家の仲間、まつげふかく(実業學校) 縫實業家を爲らんとする人に、必要なる學理と智識とを教ふる學校、

まつげふだんたい(實業團體) 縫實業家が互ひに組織せし團體、

まつご(疾呼) 縫あわただしく呼(まじ)ぶ、まつご(失語) 縫云ひそこなひ、まつご(失誤) 縫あやまち、しくじり、しそんじ、

まつごち(漆工) 縫漆(まじ)を塗る細工、又は其の事を業させる人、

まつごく(漆黒) 縫うるしの如く色の純黒なるコトを云ふ、

まつごく(桎梏) 縫あしかせと、手かせ、まつごと(實事) 縫まここのコト、本當(まじ)のコト、

まつごん(昵近) 縫又たジツキンとも讀む懸意になる、むつまじきコト、

まつごとし(實事師) 縫芝居道の語、實直

まつこ、まつし

なる役に扮(まじ)つ役者の稱、

まつごころ(靜心) 縫靜かなる心。おちついでる精神のコト、

まつさ(實査) 縫實地(まじ)に就きて調査(まじ)するコト、

まつさい(實際) 縫まここの、ありのまま(まじ)に在る物、又は行はれつつあるコト

まつさき(漆瘡) 縫うるしかぶれ、

まつさき(濕瘡) 縫ひぜん、ひつ、

まつさき(疾走) 縫一散(まじ)に走り行く、

まつさき(失策) 縫しそんじる、やりそなふ、あやまち、

まつし(嫉視) 縫にらみつける(まじ)にくく思まつじ(執事) 縫其の家の重に家治(まじ)に關する事を勤(まじ)むる家來(まじ)又は家人、

まつし(實施) 縫實地に取行ふコト、

まつし(十死) 縫層の語にて、大凶日、甚だ悪しき日のコトを云ふ、

まつし(十指) 縫十本の指(まじ)轉じて多くの人人のゆび、

まつし(實子) 縫我の生みたる子、

まつじ(實事) 縫實際に在りしまここの事まつじ(實字) 縫形狀(まじ)の具(まじ)はつてる物を表はす漢字(まじ)のコトを云ふ、

まつし

假令ば馬、牛、鳥、橋など、

まつしつ(蟋蟀) 縫ほろぎのコト、

まつじつ(實實) 縫極めて正直なるコト、

まつしつ(實實) 縫實物、實際の物質(まじ)まつしふ(實習) 縫實地に就いて物事を習ふコト、

まつしよ(濕暑) 縫むしぐるしくあつきコトを云ふ、

まつしよ(出處) 縫仕(まじ)るコトと、退ぞまつしよ(櫛梳) 縫髪をさくコト、くしけづるコトを云ふ、

まつじよ(疾徐) 縫極めて速やかなるコト最さ早きコト、

まつしやち(漆匠) 縫漆(まじ)細工を爲す職まつしやち(實性) 縫實際の性質(まじ)たしかなるコトを云ふ、

まつしやち(實正) 縫まここのなるコト正しまつじやち(實狀) 縫まここの有様(まじ)實際の容子、

まつじやち(實情) 縫まここのありさま(まじ)かざり氣のなき心根(まじ)、

まつしやち(實證) 縫たしかなる證據(まじ)まつおより(濕蒸) 縫むしあつきコト、

まつじよく(叱辱) 縫しかりつけて、はつかしめる、

まつま、まつせ 失、叱

まつしつせん(漆然) 縫一心にれるコト心を盡すさまを云ふ語、

まつす(失) 縫動(まじ)しなふ、しくぢる、

まつす(叱) 縫動(まじ)しがる、しかりつける、

まつすち(實數) 縫まここの數(まじ)、

まつせい(執政) 縫政をさる、政事(まじ)を行ふコト、

まつせい(失政) 縫政治(まじ)を、しそんじまつせい(叱正) 縫いましめ正すと云ふ意より、詩歌文章等を直(まじ)して教(まじ)ゆるコト、

まつせり(失笑) 縫こらえかれて笑ひ出す

まつせき(失跡) 縫物事のあま方の無くなるコト、

まつせき(叱責) 縫しかりせむ、まがむるコト、

まつせき(實跡) 縫たしかなる事蹟(まじ)本當(まじ)のてがら、

まつせき(實跡) 縫たしかなるあまかた、

まつせつ(實説) 縫周達(まじ)のなき取り沙汰、

まつせん(實踐) 縫其の事を實際(まじ)の行ひに現(まじ)はすコト、

まつせん(實戰) 縫ほんたうの戦争、演習に對しての語、

まつせんきゆう(實踐) 縫行(まじ)實地にまつま、まつせ 失、叱

まつそ、まつた

ふみ行ふまここの意にて即ち怠たらすに熱心(まじ)にふみ行ふコトを云ふ、

まつそ(實業) 縫つましくしておごらぬコまつそ(疾足) 縫早や足(まじ)、かけ足、

まつそち(失踪) 縫飛び出して行衛の不明なるコト、

まつそち(執奏) 縫取り次(まじ)て奏上するコトを云ふ、

まつそく(失足) 縫負傷(まじ)其の他の障害に依り、足を失(まじ)ふコト、

まつそく(疾速) 縫はやきコト、すみやかにるコト、

まつそく(實測) 縫實地につきてはかり見るコトを云ふ、

まつた(叱咤) 縫しかりつけるコト、しかりてはげますコト、

まつた(悉達) 縫佛語、釋迦如來の功(まじ)名(まじ)なりと云ふ、

まつたい(失體) 縫物事の次第をわきまへぬコト、

まつたい(不體裁) 縫なコトを爲す、即ち面目(まじ)を失(まじ)ふコト、

まつたい(實體) 縫まここの形、本體、

まつたち(濕道) 縫しつけ道(まじ)専門語にて、金銀銅などの眞偽又は其の質(まじ)の眞否を酸類(まじ)を用ひ試験するコトを云ふ、

まつた、まつつ

まつた(失當) 縫道理(まじ)に反する、

まつたつ(執達) 縫上(まじ)の命令(まじ)を受けて下に通達するコト、

まつたん(實彈) 縫彈丸(まじ)を銃砲に填(まじ)込みたるコト、

まつたつり(執達吏) 縫區裁判所に屬(まじ)す公吏の名、訴訟(まじ)に關する書類の送達、及び強制執行(まじ)等の事務を取り扱ひて、手数料を受る役人、

まつたんえんしふ(實彈演習) 縫實彈を發射して爲す演習のコト、

まつち(濕地) 縫しめり氣の多くある土地

まつち(疾馳) 縫早く走る、

まつち(實地) 縫實際(まじ)の物、現場(まじ)まつち(實竹) 縫竹の一種、其の幹(まじ)の内が木材の如く充(まじ)つて竹、印材(まじ)其の他の細工物に用ひらる、

まつちん(繡珍) 縫上等の絹織物の名、絹の糸にて種々の模様(まじ)を浮き織(まじ)にせしもの、

まつちやく(實著) 縫かざり氣のなき誠(まじ)なるコトを云ふ、

まつちよく(實直) 縫正直にしてまめやかにまつてんばつた(七顛八倒) 縫非常に、ただえ苦しむコトを云ふ、

まつつた(失墜) 縫おさすコト、おちるコまつた、まつつ

あつて(十手) 図鐵製の一尺五六寸ほどの細き棒の、手元(テ)の部に鈎(物)の付ける物、犯罪人を捕ふ時に用ゆる具、あつてい(疾速) 図激烈(サキ)なる、いかづちのコトを云ふ、あつてい(實弟) 図まことのおとをさ、あつてい(實體) 図正直(サキ)にして、まめやかなるコト、正直にて親切なるコト、あつと(嫉妬) 図れたむコト、うらむコト、あつと(濕土) 図水分多き土、あつてん(贖頭) 図つまづくコト。ころぶコト。たをれるコト、あつとく(失徳) 図道徳(サキ)に反す行ひ、品行の宜(サキ)からぬコト、あつとく(十徳) 図衣服の名、被布(サキ)の一種、被布の如き仕立にて、腰より下にヒダのある物、あつとつ(質訥) 図かざりなく無口なるコト、あつどり(賤鳥) 図鳥の名、ほこまぎすの一名、あつとん(悉曇) 図梵字(サキ)、梵語(サキ)、あつどけい(湿度計) 図空氣中に含(サキ)入る温度(サキ)の割合(サキ)を計(サキ)る器械を云ふ、あつない(室内) 図部屋(サキ)のなか、

あつに(實) 圖まこと、ほんとうに、正しき、あつぬの(倭文布) 圖文(サキ)模様のある布(サキ)織のコトを云ふ、あつねん(失念) 圖わすれたるコト、あつのめ(賤女) 圖下賤なる男子、あつばい(失敗) 圖やり損(サキ)ふ、しそんじる、あつばち(失望) 圖望(サキ)を失ふ、見込はづれ、がっかりする、あつばち(十方) 圖四方さ、四隅(サキ)、さ上下(サキ)の十のコト、佛法の語、大千十方世界のコトを云ふ、あつばち(七寶) 圖佛法の語、七つの寶(サキ)を云ふ、意にて、金銀珊瑚(サキ)瑪瑙(サキ)琥珀(サキ)瑠璃(サキ)の七種、七寶燒(サキ)の略、あつばち(失亡) 圖なくなるコト、なくなつてしまふコト、あつばた(倭文機) 圖しづめの同じ、あつばちやき(七寶燒) 圖陶器の名、しちばうに同じ、其の條を見られよ、あつばちながし(七寶流) 圖七寶燒のコト、あつび(櫛比) 圖櫛の齒の列(サキ)入る如く、家の建てつまつてるコト、

あつび(失費) 圖入用(サキ)、物いり、あつび(實否) 圖信(サキ)か虚(サキ)か、あつび(實費) 圖實際の費用、あつび(實否) 圖まこと、うそ、あつびつ(執筆) 圖筆をさるさ云ふ意にて、他の實物を取り換ふるコトを云ふ、即ち金錢を用ひず、甲の品と乙の品と取り換ふるコト、あつぶち(疾風) 圖はげしき風、あつぶち(實父) 圖まことのお父、あつぶつ(實物) 圖本當のもの、實際(サキ)あつぶつかうかん(實物交換) 圖實物を以て、他の實物を取り換ふるコトを云ふ、あつぶち(疾風) 圖本當のもの、實際(サキ)あつぶつかうかん(實物交換) 圖實物を以て、他の實物を取り換ふるコトを云ふ、即ち金錢を用ひず、甲の品と乙の品と取り換ふるコト、あつぶち(疾風) 圖はげしき風、あつぶち(實父) 圖まことのお父、あつぶつ(實物) 圖本當のもの、實際(サキ)あつぶつかうかん(實物交換) 圖實物を以て、他の實物を取り換ふるコトを云ふ、

あつて、まつな

あつに、まつひ

あつひ、まつり

あつら、まつわ

あつら(竹筒) 圖一種の勝負事の遊戯にて、勝ちたる者は、負けた者を竹筒にて打(サキ)くコトを云ふ、あつら(竹筒返) 圖しつべいに打(サキ)かれたる時に、同じくしつべいに打(サキ)き返すコト、轉じて仕返(サキ)をするコト、あつら(尻尾) 圖しりを同じ、あつら(實母) 圖生(サキ)のはは、あつら(質朴) 圖かざりなきコト、正直(サキ)のこト、あつら(卓袱) 圖卓袱臺(サキ)の略、一種の料理、そば切又はうどんなどに、蒲鉾(サキ)松茸(サキ)椎茸(サキ)玉子焼などを入れたるあつ物、あつら(卓袱臺) 圖食事を爲すに用ゆる臺、机の如きもの、あつら(卓袱料理) 圖一種の料理、しつぽくに同じ、其條を見よ、あつら(實妹) 圖まことのおもうと、あつら(實動) 圖おだやかになる、世の中が、よくおさまる、騷動(サキ)がやんでおちつく、あつら(實動) 圖十分に充(サキ)てる、あつら(實名) 圖ほんとうの名、あつら(失名) 圖其の人の名前(サキ)の知

あつら(失命) 圖生命(サキ)を失ふコト、あつら(失明) 圖目を損(サキ)す、盲目(サキ)になるコト、あつら(實名) 圖ほんとうの名、本姓、あつら(實録) 圖正しき心、まこと、あつら(執務) 圖事務(サキ)に従事するコト、あつら(鎮) 圖さしづめるコト、安寧(サキ)を保つコト、あつら(鎮) 圖おさめ平(サキ)らぐ、安らかにする、さえて平(サキ)かにす、安神を安置す、あつら(沈) 圖自動水の中へ下りて行く、氣がふさがる、なやむ、貧乏(サキ)する、困(サキ)る、身を投(サキ)じて死する、あつら(沈) 圖動しづめる、あつら(實務) 圖じつさいのつとめ、あつら(實務家) 圖其の事務(サキ)に精通せる人、實用的の事務に忠實(サキ)なる人のコトを云ふ、あつら(實問) 圖聞きたたすコト、あつら(疾恙) 圖病氣、やまひ、あつら(實用) 圖實地の用に立つ、實地に用ゆる、あつら(實用新案) 圖實用に適する物品に就きて、新工夫を爲したる

あつら(疾雷) 圖はげしきかみなり、はなはだしき雷、あつら(日來) 圖このころ、ひこのころ、あつら(裝置) 圖できあがるコト、でかすコト、あつら(裝置) 圖こしらえる、でかす、あつら(實利) 圖純利益(サキ)、實際の利益(サキ)、あつら(雪墜) 圖樹の枝(サキ)につもれる雪の、すべり落ちるコトを云ふ、あつら(實理) 圖實際の道理、まことこの道理のコトを云ふ、あつら(實力) 圖實際の力、掛引(サキ)あつら(失禮) 圖禮儀を失ふ、無禮なるコト、あつら(實例) 圖本當(サキ)に在りたるたあつら(實歴) 圖實地に經驗(サキ)したるコト、まことこの履歴、あつら(實歴談) 圖己(サキ)が實歴し來たりし事に就ての物語、あつら(實録) 圖實際の記録、在りし事實を其のまま書き記すコト、又は其の物、あつら(後輪) 圖馬の鞍(サキ)の後の方の高くなつてゐる部分の稱、

あつて、まつな

あつに、まつひ

あつひ、まつり

あつら、まつわ

志て、志て、

(まてし)

志て(仕手) 志て物事を爲し行ふ人。能樂(能)の語、一つの能樂(能)に就きて、其の肝心の役を勤むる人の稱。
 志て(四手) 志て四五三繩(四五三繩)や神(神)に附けて、神前に供(供)ふる紙にて切りたもの、へいの如きもの。
 志て(死出) 志て死出三途(死出三途)の意にて、死出の山の山のコト。
 志て(指定) 志て其れならばさ定(定)るコト。さしづして定めるコト。
 志て(師弟) 志て師匠(師匠)と弟子(弟子)のコト。
 志て(噴詠) 志て馬鹿にしてそしる。あざけりて悪く云ふ。
 志て(仕丁) 志てしもべ。小使。めしつかひの男(男)しちやうに同じ。
 志て(枝蹄) 志て四足獣の、げづめの二つ以上に分(分)れたるもの、コトを云ふ。
 志て(子弟) 志て子弟(子弟)でしのコト。
 志て(私邸) 志て私邸に對しての稱、即ち自邸(自邸)のコト。
 志て(自邸) 志て我が邸(邸)、自己の住宅。志て(耳底) 志て耳のそこ、耳のなか。

志てい、志てき

志てい(指校) 志て指定學校(指定學校) 志て文部大臣(文部大臣)其の學校の卒業生に、或る資格(資格)を與へる云ふコトを、定めたる學校。
 志て(翅鳥) 志て善く高くを飛び行く鳥の類を云ふ。圓碁(圓碁)にて遊(遊)る石を、順次に追ひつめるコト。
 志て(鶯鳥) 志て性質の猛(猛)き鳥の種類を云ふ。即ち鶯(鶯)や鷹(鷹)の類。
 志て(思潮) 志て其の時代の世間の思ひ考へ、其の時代の一般の心の傾向。
 志て(枝條) 志て樹木のえだ。
 志て(慈鳥) 志て鳥(鳥)の別名。
 志て(施條銃) 志て小銃の一種、其の筒(筒)の内に、金屬にて螺旋(螺旋)を作リたる物を仕掛け、其の螺旋のはじく力に依りて、銃丸(銃丸)の飛び出るもの。又の名を、シナイドル銃(シナイドル銃)と云ふ。
 志て(指摘) 志て其の物を指(指)さして示めすコト。
 志て(市糶) 志て米穀を賣り、又は買ふコト。
 志て(詩的) 志て詩になつてゐる。一種の名狀すべからざる床(床)しき趣きのあるコトを云ふ。
 志て(嗣嫡) 志てあそり、よつぎ。
 志て(自適) 志て我れの思ふ通りに物事を爲し、又は身を持つコトを云ふ。

志てき、志てん

志てき(四手樓) 志て四手樓(四手樓)に同じ。
 志て(磁鐵) 志て磁石(磁石)に同じ。
 志て(死出) 志て死出(死出)に在り云ふ山にて、死者の行く處(處)云ふ意なり、轉じて死ぬるコトを云ふ。
 志て(仕手柱) 志て能樂の語、能樂臺(能樂臺)の柱(柱)に在る柱(柱)の柱(柱)にて、仕手が所作(所作)を爲す起點(起點)も爲り、又は終點(終點)もなる所なり云ふ。
 志て(四手柳) 志て山中に自生する木の名、幹(幹)は粗糲(粗糲)にして、一面に白き斑點(斑點)あり、葉は櫻に似て小さく、向ひ合つて生ず、夏の初めに穂を出して、細かき五瓣(五瓣)の白き花を咲す、實(實)は圓くして、大きき三分内外あり。
 志て(指點) 志て多くの中より選抜(選抜)して、是れぞと示(示)し教(教)ふるコト。
 志て(支店) 志て本家より分れたる家、即ち分店(分店)のコト。
 志て(肆座) 志て店(店)、店舖(店舖)。
 志て(師傳) 志て師匠(師匠)よりつたへ教えられるコトを云ふ。
 志て(祠殿) 志て神を祀れるところ、即ちほこら。神殿(神殿)と傳記。
 志て(史傳) 志て歴史(歴史)と傳記。

八七四

志てん、志て

志てん(次點) 志て二番目に當る點數。
 志てん(字典) 志て字書、字引。
 志てん(辭典) 志て國語、熟語等を集めたる字引の科トを云ふ。
 志てん(自轉) 志て自分にて、ころがるコト。機械力(機械力)など借(借)す、自然(自然)に轉(轉)がる如く、廻(廻)り行くコト、假令(假令)地球の自轉(自轉)など。「たるコト」
 志てん(自傳) 志て自分の傳記を自分で作りしや(自傳) 志て車(車)の一種、多く二輪車にて、乗り手が自己の足にて車を踏(踏)んで走り行く仕掛になつてゐる車のコト。
 志てん(四天王) 志て佛語にて、帝釋天(帝釋天)の家來なり云ふ。持國天(持國天)、增長天(增長天)、廣目天(廣目天)、多聞天(多聞天)の四ト轉じて部下の武勇(武勇)すくれし四人のコトを云ふ。

志てん、志てん

志てん(兄弟) 志て兄弟(兄弟)の稱。
 志て(緇徒) 志て緇衣(緇衣)を着用して徒(徒)と云ふ意にて、僧侶(僧侶)のコト。
 志て(磁土) 志て磁土(磁土)の一種にして、磁器(磁器)を燒くに用ゆる土の稱。
 志て(指頭) 志て指(指)のさき。
 志て(私闘) 志て私闘(私闘)同士(同士)のたたかひ。
 志て(市燈) 志て市燈(市燈)往來(往來)を照(照)らす爲めに設けられたる燈火(燈火)。
 志て(紫銅) 志て紫銅(紫銅)からかれの科ト。
 志て(絲桐) 志て絲桐(絲桐)の木に絲を附けたる物と云ふ意より轉じて、琴(琴)の科トを云ふ。
 志て(兒童) 志て兒童(兒童)も、わらんべ。
 志て(自動) 志て自然に動く、力も加えずとも動く。自身にて活動するコト。文法上の語、自動詞の略語、即ち物又は人が自から表(表)はす動作(動作)を云ふ。
 志て(侍童) 志て侍童(侍童)に侍(侍)つてゐる子供と云ふ意にて、小姓(小姓)の科ト。
 志て(自動車) 志て自動車(自動車)に供す至便なる車(車)の一種、形は殆んど上等の馬車の如き狀にて、車は四つありて、何れも厚きゴム輪(輪)なり、瓦斯發動機(瓦斯發動機)又は石油發動機(石油發動機)を仕掛け、其の動力に依りて疾走するもの、中には電氣發動機(電氣發動機)を仕掛け

志てん、志てん

志てん(自動電話) 志て何人(何人)にても、一定の代金を、設けられてある孔(孔)に投ずれば、相手の人を呼び出して、話を爲し能ふ仕掛に爲つてゐるものにて、多く大都會の街上の要處に、設けられあるもの。
 志て(自動鐵道) 志て其の軌道(軌道)を小山(小山)の並(並)んでゐる如き狀(狀)にして、其の上を車が惰性(惰性)にて疾走するやうにせるもの。
 志て(自動人形) 志て一種の人形、體內に時計の器械(器械)の如き仕掛の爲しあるが爲めに、其の人形が獨力(獨力)で動くやうに爲る物。
 志て(自動販賣器) 志て箱(箱)の如き物の内に、賣るべき品(品)を入れ、其の上部に孔(孔)を穿け、一定の代金を其の孔へ入るれば、金錢(金錢)の重みにて、内の仕掛が動きて、其の賣品(賣品)が其の孔より出るやうになつてゐる物。
 志て(自動電量機) 志て自動販賣器(自動販賣器)の如き仕掛に爲つてゐる、鉢重(鉢重)を計る器具にて、臺の上に乗せ、上部の孔の内へ、特定の代金を投ずれば、時計の表面の如き仕掛に爲つてゐる針(針)が廻り

八七五

まごき、まごけ 菜

て、其の重量を表はすなり。
 志と巻(菜) 厨神前に供(マ)ふる團子(マ)、
 卵圆形(マ)に作りしもの。
 志と巻つば(菜) 厨神前に供(マ)ふるし
 まき餅の如き形を爲せる餅(マ)、
 形(マ)を爲せる餅(マ)の稱。
 志とく(手徳) 厨德行徳望(マ)の極(マ)め
 て高きコトを云ふ。
 志とく(私匿) 厨こつそりさかくれる
 くれたる悪事、即ち舊悪(マ)の
 志とく(私徳) 厨公德に對しての稱、自分
 に就(マ)ての道徳。
 志とく(爲途) 厨勵寫し得る、目的を達し
 志とく(自得) 厨我れさ我にてささるコト
 志とく(侍讀) 厨君主のお側(マ)に侍(マ)
 つて、書を講(マ)する役、又は其人、
 志とく(四徳) 厨女子の嚴守せればならぬ
 四つの徳さ云ふコトにて、即ち言、徳、
 容、功の四つのコト、功さば仕事(マ)の
 コトにて、容さばみえかたちのコトを
 云ふ。
 志とくのあい(紙牘之愛) 厨親が子をいつ
 くしむ渡(マ)かなる愛情のコトを云ひ
 表はす語。
 志とびる(爲途) 厨勵なしさげる、なし終

まごし、まごみ 磯、蓑

志とまご(徐徐) 厨最さ静かに歩み行く足
 音(マ)のコトを云ふ語、
 志とまご(湯) 厨湯(マ)れりさ
 云ふ意を表はす語。
 志とまご(不取締) 厨取り亂してあり。だらしな
 くりあり。不取締(マ)なり。
 志とたる(四斗樽) 厨四斗はご入る酒のた
 る、又たかたうまも云ふ。
 志とづつ(小便筒) 厨昔時禮服を着て外出
 せし時に、供(マ)に持せ行きたる小便を
 爲す具、塗物の竹の筒の如き物。
 志とど(鷗) 厨小鳥の名、山野に棲む、形雀
 に似て毛色は淡褐色(マ)にして、翅(マ)
 下に黒き小き斑點(マ)あり、且つ眼
 の周圍(マ)に、細き輪狀(マ)を爲せる
 毛あり。
 志とぬ(褥) 厨坐布團(マ)又は敷布團(マ)
 じのコトを云ふ。
 志とぬ(蓑) 厨神社佛閣(マ)又は高貴人
 の人の邸宅に、風雪を防ぎ、又は日光の
 直射を避(マ)る爲めに用ひし、戸の如き
 もの。
 志とみ(櫃子) 厨木の名、山野に自生す長
 さ三四尺にして、春の頃五瓣(マ)の黄
 色(マ)なる花を咲かせ、其の枝(マ)には
 多くの刺(マ)あり、實(マ)は小さく圓く
 して、上下(マ)の四(マ)める物。

まごむ、まごい 湯、科、品

志とむ(爲留) 厨勵射さめる、打ちさむる。
 志とやか(閑雅) 厨起居動作(マ)さて
 は言葉遣(マ)のやさしくして、みやび
 なるコト、
 志とや(氣質) 厨(マ)のやさしくして、
 氣高きコト。
 志とり(湯) 厨ぬれるコト、うるほうコト
 しめるコト。
 志どりべ(償從) 厨さもびさ、おつき。
 志とる(湯) 厨ぬれる、うるほう、しめる
 志とる(踏跟) 厨取り亂す意、心の狂(マ)ふ
 状を云ひ表はす語。
 志とろやき(志土呂燒) 厨陶器の一種、遠
 江の志土呂村より製出す、其の色一般
 に暗紅色を呈する物。
 (まごな)
 志な(科) 厨木の名、しなの木の略。
 志な(品) 厨物の種類、即ちたぐひ(マ)人か
 ら、假令(マ)品がよい、
 志な(品) 厨(マ)ふるまひ即ち動
 作(マ)こころから容子(マ)物、品物のコト、
 志な(品) (接尾) 厨其の種類(マ)なる品
 物の數(マ)を數(マ)ふるに用ひ語、假令
 ば五品、六品など。
 志な(支那) 厨國の名。
 志ない(市内) 厨市中。町の内、

志ない(寺内) 厨寺院の構内。

志なが(品書) 厨種類の異なりたる品物
 の目錄(マ)のコトを云ふ。
 志なが(品數) 厨品物の數、點數。
 志なが(品草) 厨齒菜(マ)の葉の形を白
 て現はしたる、藍(マ)にて染めし草。
 志なが(品形) 厨人物(マ)風采(マ)、
 即ちひさがらのコトを云ふ。
 志なが(支那) 厨革(マ)にて作りた
 る、つらの如きもの、
 志なが(支那) 厨製(マ)の箱に革
 又は革紙を貼(マ)し物、衣類を入る具
 なり。
 志なが(品草) 厨品草にて、お
 ごしたる(マ)の品、
 志なが(品切) 厨品物が悉(マ)く賣れて
 しまひたるコトを云ふ。
 志なが(品定) 厨品物の善悪を評議し
 て定めるコト、
 志なが(品品) 厨種々雑多の品、多くの
 品物のコトを云ふ。
 志なが(品品) 厨けたかし。品(マ)よる
 しくあるなり。
 志なが(品品) 厨しなやかなり。かよ
 わくあるなり。
 志なす(作爲) 厨(マ)こしらへる。つくりあ
 ない、まなす

げる。行(マ)ふ。

志なす(兼) 厨勵れかす。いれさす。
 志なす(兼) 厨(マ)あそばせ言葉
 のコトを云ふ。
 志なす(品玉) 厨小き玉を投げては受
 け、受けては投げる一種の技藝、現今の
 大神樂(マ)の如きもの。
 志なす(垂垂) 厨細長き物の、やさし
 く垂れ下れる、例は柳の枝(マ)などの
 しほみて垂れる、
 志なす(品付) 厨品がきに同じ。
 志なす(科木) 厨木の名、葉は滑(マ)か
 して平(マ)たく圓く、花は白くして
 小き五瓣(マ)の物、多く深山に自生
 す、其の木材は火繩(マ)を製し、又は登
 (マ)の縁(マ)に用ゐる。
 志なす(信濃柿) 厨柿の一種、其の葉
 は極(マ)めて小さく、五分ほどにて葉柄
 (マ)あり、表面は黒綠色にして、裏面は
 灰白色を呈す、其の果實は小形(マ)に
 て、十分に熟せざる時に取れて、實(マ)
 より溢(マ)を取る、木材は種多の細上物
 の材料として一般に用ひらる。
 志ない(挽) 厨(マ)たゆむコト。
 志ない(竹刀) 厨擊劍に用ゆる器具、厚き
 まなす、まない 挽

割竹(マ)を合し作りたる刀(マ)。

志ない(竹刀) 厨竹にて作りたる刀
 竹刀(マ)の略語。
 志な(萎) 厨(マ)が弱くなる
 生物(マ)の元氣がおさるる。
 志な(挽) 厨(マ)に、たゆみま
 がる。やさしく垂れ下がる。
 志な(品) 厨(マ)たり、紛失(マ)
 したりせし、品の明細書を作りて、世間
 へ知せて、其の品の注意を求むるもの。
 志な(爲直) 厨(マ)すコト。
 志な(爲直) 厨(マ)つくりかへる、
 らへ直す、
 志な(品) 厨(マ)有様のゆかし
 くある状(マ)を云ふ語。
 志な(支那文字) 厨漢字のコト。
 志な(品物) 厨(マ)はつて
 なるもの、
 志な(品) 厨(マ)を云ふ語。
 志な(支那) 厨(マ)物、やさしく見ゆる
 状を云ふ、
 志な(支那) 厨(マ)く美(マ)く
 しきコト、
 志な(支那) 厨(マ)自由(マ)延(マ)
 び曲(マ)るコトを云ふ。
 志な(爲留) 厨(マ)なして馴
 (マ)みになつてゐる。なれてゐる。
 志な(爲留) 厨(マ)なして心得て
 ゐる。なれてゐる。
 まない、まなる 萎、品、編 八七七

志なわけ(品別) 志な(四男) 志な(指南) 志な(指南車) 志な(指南車) 志な(指南車) 志な(指南車) 志な(指南車) 志な(指南車) 志な(指南車)

志にお、志にそ 何等の働(勤)をも爲さぬ石(石) 相手(相手)に負(負)かされて、尙ほ盤面上に在る石(石)のコトを云ふ、 志におくる(死後) 志におく(死後) 志におく(死後) 志におく(死後) 志におく(死後) 志におく(死後) 志におく(死後) 志におく(死後) 志におく(死後) 志におく(死後)

志にの、志にん 志にのこり(死後) 志にのこり(死後) 志にのこり(死後) 志にのこり(死後) 志にのこり(死後) 志にのこり(死後) 志にのこり(死後) 志にのこり(死後) 志にのこり(死後) 志にのこり(死後)

志ぬん(自任) 志ぬん(自任) 志ぬん(自任) 志ぬん(自任) 志ぬん(自任) 志ぬん(自任) 志ぬん(自任) 志ぬん(自任) 志ぬん(自任) 志ぬん(自任)

思ふてゐるコト、 志ぬ(稻) 志ぬ(稻) 志ぬ(稻) 志ぬ(稻) 志ぬ(稻) 志ぬ(稻) 志ぬ(稻) 志ぬ(稻) 志ぬ(稻) 志ぬ(稻)

志の(籐) 志の(籐) 志の(籐) 志の(籐) 志の(籐) 志の(籐) 志の(籐) 志の(籐) 志の(籐) 志の(籐)

志ぬん(思念) 志ぬん(思念) 志ぬん(思念) 志ぬん(思念) 志ぬん(思念) 志ぬん(思念) 志ぬん(思念) 志ぬん(思念) 志ぬん(思念) 志ぬん(思念)

志ぬ、志ぬん 志ぬ、志ぬん 志ぬ、志ぬん 志ぬ、志ぬん 志ぬ、志ぬん 志ぬ、志ぬん 志ぬ、志ぬん 志ぬ、志ぬん 志ぬ、志ぬん 志ぬ、志ぬん

志の、志のす 志の、志のす 志の、志のす 志の、志のす 志の、志のす 志の、志のす 志の、志のす 志の、志のす 志の、志のす 志の、志のす

志のた、志のひ 忍

志のたけ(篠竹) 忍群(忍び)がって生ずる細
き竹の科を云ふ、
志のつくあめ(篠衝雨) 忍太く烈(忍)しく
降りしきる雨の科を云ふ、
志ののめ(東雲) 忍夜あけ、明け方、
志のふぶき(篠吹雪) 忍篠(忍)の葉(忍)を
押し分けて、劇(忍)しく吹く吹雪(忍)の
科を云ふ、
志ののめ(東雲) 忍あさ(忍)がほの一名
志のはら(篠原) 忍篠竹の澤山に生えて
原、
志のひ(忍) 忍秘密に事を爲す 忍人に氣附
め(忍)れぬやうに、こつそり(忍)人の家へ
入る 忍まわしもの(忍)しのび歩く科ト、
志のひね(忍) 忍人にかくれてれむるコ
トを云ふ、
志のひね(忍音) 忍小聲(忍)ひそひそ聲、
志のひび(忍火) 忍秘(忍)さ打ちかける切
り火、
志のひあひ(忍達) 忍しのび合ふ科ト、
志のひあふ(忍達) 忍動(忍)ひそかに會ふ、人
目につかぬやうにかくれて會ふ、
志のひいる(忍入) 忍動かされて入(忍)り
込む 忍深くこへる、
志のひごと(忍言) 忍ひそひそばなし、内
證(忍)なし 忍人の死を悼(忍)みて其人の

志のひ

平生の事を、賞(忍)述べたることば、
志のひごと(忍事) 忍かくしごと、ないし
ようこそ、
志のひごま(忍胸) 忍三味線の胸に、物を
はさみて、其の調子の高(忍)まらぬやふ
にして弾く科ト、
志のひごむ(忍込) 忍氣づかれぬやうに
入(忍)り、忍こト、 一の科ト
志のひづま(忍妻) 忍かくし女、かこいも
志のひづま(忍夫) 忍かくし男、かこいも
志のひなき(忍泣) 忍聲を立てずに泣くコ
ト、
志のひのそ(忍緒) 忍兜(忍)につけて、頭
に結(忍)む科ト、
志のひびと(忍人) 忍しのびもの、かくし
男、又はかくし女、
志のひあるき(忍歩) 忍ぬき足にて歩くコ
ト、 忍目をかすめて歩く科ト、
志のひがへし(忍返) 忍人の忍び入るのを
防ぐ爲に、屏(忍)や垣の上(忍)に尖(忍)りし
竹、又は釘の類を打ちつけたる物を云
ふ、
志のひどころ(忍所) 忍かくれてある所、
志のひめつけ(忍目附) 忍かくしめつけ、
探偵(忍)科ト、
志のひもとゆひ(忍元結) 忍元結(忍)の外

志のふ、志のめ 忍、忍、忍 八八〇

(忍)に、表(忍)はれぬやうに、髪を結ぶコ
ト、又は髪を結(忍)びたる元結、
志のふ(忍) 忍草の名、しのぶ草の科ト、
志のふ(忍) 忍動かされて、ひそむ 忍人
目をくらませて通ひ行く、
志のふ(忍) 忍動(忍)しんぼする、こらゆる 忍
人に知られぬやうにす、かくる、こひ
しこぶ、
志のふ(忍) 忍動(忍)ありし事を思ひ出
す、昔の事がうかび来る、
志のふえ(篠笛) 忍笛の一種、細き竹にて
作りし横笛(忍)、
志のふき(忍草) 忍草の名、深山に自生
する草、地下茎を有して、其の葉は槍(忍)
の其れに似て青く、夏向に人家の軒
(忍)に吊し、水(忍)を合(忍)ませて觀賞する
もの、
志のふすり(忍摺) 忍岩代國信夫地方の名
産にて、忍草の葉(忍)を、種々の色(忍)
色の間(忍)にはさまて、美しく布に
摺りつけしもの、
志のまき(篠巻) 忍糸をつむぐべく爲めに
管(忍)に綿(忍)を巻きつけたるものを云
ふ、
志のめだけ(篠芽竹) 忍竹の一種、葉細く
して節(忍)と節(忍)の間(忍)の長き竹(忍)

(志)は

色の青くして、苦(忍)き竹(忍)の科、
志のや(篠屋) 忍女竹(忍)を以て、葺(忍)た
る家、
志は(支派) 忍わかれ。えたは、
志は(芝) 忍蔓草(忍)の名、細き根の地上
をばひて、ひろがるものにて、枝を生ぜ
ず、葉は薄(忍)の嫩葉(忍)に似てやさ
しく、秋の頃に穂を出す 忍荒地(忍)に
生ずる雜草の名、しばくさの科ト、
志は(柴) 忍山に生ずる小さき雜木(忍)の
科ト、切りて薪(忍)とす 忍樹の細き枝
(忍)を切りて、薪(忍)とす 忍したるもの、
稱、
志は(紫草) 忍芝(忍)に同じ、しばぐさ、
志は(紫葩) 忍紫色の花の稱、
志は(駒馬) 忍四頭びきの馬車、
志はあめ(柴雨) 忍むらさめの科ト、
志はあめ(塵雨) 忍前條に同じ、
志はい(紙牌) 忍紙に物事を記して貼りた
るもの、紙のはり札、
志はい(紙背) 忍物事を認めたる紙の背面
(忍)を認められてある文章より、以上
の意味と云ふ意を表はす語、
志のや、志はい、芝、柴

(志)は

志はい(支配) 忍部下の人々のかんこくを
して、取締(忍)る科トを云ふ、
志はい(詩牌) 忍漢詩を記したるかるた、
しがるたの科トを云ふ、
志はい(地蔵) 忍又たはつとも讀む、總
て物事の衰へたる科トを云ふ、
志はい(市賣) 忍うりかひする科ト、
志はる(芝居) 忍歌舞伎(忍)の技(忍)を演
ずる所 忍かぶきの科ト、
志はい(兒童) 忍こどもたち 忍子供のやう
な連中と云ふ科ト、
志はい(塵息) 忍塵次(忍)息(忍)をす
と云ふ意より轉じて、息づかひの荒き
科ト、いきざれの科ト、
志はい(うち) 忍支配してある場處、
又は物事の範圍内(忍)を云ふ、
志はい(した) 忍支配してある物事
の範圍、又は場處の區域(忍)の科トを
云ふ、
志はい(しよ) 忍支配してある場處の
區域の科トを云ふ、
志はい(ん) 忍(支配人) 忍商店會社等にて、
其營業事務(忍)を支配する人 忍總て物
事の處理(忍)を爲す人の科トを云ふ、
志はる(ちや) 忍(芝居小屋) 忍芝居をする家即
ち劇場(忍)の科ト、
志はい、志はる

(志)は

志はち(紫袍) 忍むらさき色に染めたる上
衣(忍)の科トを云ふ、
志はち(香訪) 忍おさづれる科ト。たづね
る科トを云ふ、
志はち(恣放) 忍かつてきまゝの科ト、
志はち(修放) 忍わがまま、きづいきまゝ
の科トを云ふ、
志はち(四方) 忍よすみ 忍(東西南北)ぐる
り、まはりの科ト、
志はち(四寶) 忍四つ(の寶)と云ふ意
よりして、筆、紙、墨、硯の科ト、
志はち(私報) 忍公報に對しての稱、一個
人の通知 忍秘密の知らせ、
志はち(四望) 忍よものながめ、
志はち(子房) 忍植物學上の語、雌蕊(忍)の
下の方に在る膨(忍)れる部の稱にて、
後に至りて、實(忍)とさなる物 忍はなれ座
敷の科トを云ふ、
志はち(脂肪) 忍動物の筋肉、及び皮下に
在る白色の光澤(忍)あるもの、即ちあぶ
らの科ト、
志はち(姿貌) 忍かほつき、みえ、すがたの
科トを云ふ、
志はち(資望) 忍財産(忍)と人望(忍)、
志はち(死亡) 忍しにはつる科ト、
志はち(自暴) 忍我が身を我がおさす科ト

志のや、志はい、芝、柴

志はい、志はる

志はち

八八一

まはら、まはく

自から我が身をなまはぬコトを云ふ。
まはら(時報) 固其の時々の出来事を知らずコト、又は其の知らず、

まはく、まはの 吝、暫、腰

まはく(市舶) 固あきなひ船。
まはく(死魂) 固陰曆の朔日(初日)のコトを云ふ語。
まはく(自白) 固自己の爲せし事、又は犯罪などを白状するコト。

まはら、まはら

王の故事に出づ、役に立ちたる人の、年老ひて衰(や)えて、又た昔日の勢力(ちから)なき事を云ひ表す語。
まはら(芝原) 固しばの生てる處。
まはら(司法) 固人民の國法に違(たが)ひたるを、取り調ふるコト。
まはら(四法) 固漢詩の作法の、起句、承句、轉句、結局のコトを云ふ。

まはら、まはら

まはら(市舶) 固あきなひ船。
まはら(死魂) 固陰曆の朔日(初日)のコトを云ふ語。
まはら(自白) 固自己の爲せし事、又は犯罪などを白状するコト。

まはら、まはら 暫、縛

まはら(縛) 固期限(かぎ)の、くきりま云ふ。
まはら(柴見) 固ひそかに忍び寄りて、敵の容子をさぐる人、斥候(しやくこう)。
まはら(柴屋) 固柴ぶきの粗末なる家。
まはら(支拂) 固金銭を拂ひ渡すコト。

まはら、まはら

ふ意を表はすに用ゆ語。
まはら(縛首) 固昔時の刑罰の一、罪人の手足を縛り置きて、首(かしら)を斬(き)るコトを云ふ。
まはら(縛) 固縛りつけるコト。
まはら(縛) 固縛りつけるコト、身軀の自由のきかぬやうにする。

志はん、志ひ 椎、鋪

志はんふん(四半分) 志四つに分(志) ちた
る一部分の志を云ふ。
志はんがくかう(師範學校) 志小學校の教
員たらむ望(志)の人を、養成する學校
の志、

(志ひ)

志ひ(椎) 志木の名、其の葉は玉子形にて、
先(志)は尖(志)り、周圍(志)に粗(志)きギ
ザギザありて、表は緑色(志)なるも、
裏は灰白色にして、四時葉あり、即ち常
盤木(志)にて、高さ二丈より三丈に達
す、花は小さく黄色なり、其の實(志)は
秋の季(志)に熟して落つ、形は豆の如く
にして、其の先(志)尖り、粗(志)き固き皮
に包まる、此の實は燒(志)て食料と爲り
木材は建築用に供せられ、其の樹皮は
染色の原料となる。
志ひ(鷗尾) 志宮殿(志)神社、又は城の天
守(志)などの屋根の棟(志)の兩端(志)
に在る飾(志)りのもの志、即ちしやち
ほ、又は、鬼瓦(志)の類を云ふ。
志ひ(修磨) 志がさる志、おこる志、
賢澤(志)の志、

志ひ、志ひた

たる物の稱にて、其の大き七八尺あり、
志ひ(侍婢) 志めしつかひ、女中、
志ひ(自費) 志自己の力にて、費用を辨(志)
する志、又辨(志)する入費、
志ひ(慈悲) 志なさをかくる志、あは
れむ志、いたはりたす、
志ひ(市費) 志府費や縣費などに對しての
語、市の財力にて、其の費用を辨する費
用の稱、

志ひ(私費) 志自費(志)に同じ、
志ひがひ(慈悲買) 志必用なけれど、おな
さけにて買ふ志、
志ひがたり(強語) 志人のいやがりこぼむ
をも聞かすに、無理に物語りする志
を云ふ、
志ひき(字引) 志字書に同じ、
志ひくわ(柴藪花) 志さるすべりの一名、
志ひごと(評言) 志在もせぬ事を、在るや
うに云ひたる志を云ふ、
志ひしば(椎柴) 志(志)の木の名、
志ひしん(慈悲心) 志あわれみ深き心、な
さけ深き心、
志ひしんてう(慈悲心鳥) 志鳥の名、其の
形ひまごりに似たるものにて、野州の
日光山に棲(志)るもの、
志ひたけ(椎茸) 志一種のきのこ、椎の木

志ひた、志ひな 強、靴 八八四

標(志)の木の等に生ずる菌(志)にて、
蓋(志)の色は暗褐色にて、裏は黄色
を呈す、乾(志)して用ゆ、香氣高く味よ
き食料品なり、
志ひたけまび(椎茸) 志女の髪のかき方
の一種、タボを左右(志)大きく張(志)りて
椎茸(志)の蓋(志)の如き形に結びたる
もの、
志ひつ(史筆) 志歴史をかき志、歴史を
編輯(志)する志、
志ひつ(試筆) 志かきぞめ、
志ひつ(自筆) 志自分で書きたるもの、自
志ひつく(強付) 志無理無理におしつけ
る、無理に進める、
志ひて(強) 志たつて、無理に、矢體(志)、
志ひと(死人) 志死したる人、死骸(志)、
志ひと(死人) 志死人の如く、あを
さめて元氣の全く失せし顔、
志ひとばぬ(死人花) 志山野に自生する草
の名、莖は鱗形(志)を爲し、秋に至り
て其の尖に、糸の如き紅色の花が群(志)
り咲く、有毒草にて、多く墓場に生ず
るより、此名あり、
志ひぬ(靴) 志米や麥(志)などの實乘(志)
すして、靴(志)がらのみのもの、即ちみ
よさ、

志ひの志(椎木) 志樹の名、しひの志、
志ひのみ(椎實) 志椎の木に生ずる果實
(志)さんぐり志云ふ、

志ひのこやで(椎之小枝) 志椎の木の小枝
(志)の志を云ふ、
志ひのみふで(椎實筆) 志小供(志)が手習
(志)に用ゆる、穂の短(志)かき筆の志
を云ふ、
志ひやち(時評) 志其の當季の評判、其の
志ひら(繙) 志上裳(志)うはもの志に
て、即ち男子は袴の上に着け、女子は、
からの上に着(志)るもの、
志ひる(辨) 志自動神經が知覺(志)を失ふ、
志ひれ(辨) 志しひれる志、
志ひれる(辨) 志自動身軀の、かんかくを失
ふ、麻痺(志)す、
志ひれをすり(辨) 志自動神經の感覺(志)を
鈍(志)くする志、
志ひん(尿瓶) 志又た洩瓶とも書く、小便
をする器具、しゆびんに同じ、
志ひん(自費) 志我が髪(志)を、自身で結
(志)ふ志、

(志ひ)

志ひ(詩賦) 志詩と賦との志、一口に云

志ひの、志ふ 稽、辨

へば支那の韻文(志)、
志ひ(師傅) 志教育(志)を授(志)けつ志守
(志)をする役、又は其の人、即ちおもり
やくの志を云ふ、
志ひ(師父) 志師匠と父(志)師匠を第二の
父として敬(志)ふ志云ふ語、
志ひ(私夫) 志まをさ、かくし男、
志ひ(純布) 志岩代國の白石(志)地方の名
産(志)にて、天具帖(志)を細(志)く切
りて、紙捻(志)し、(志)を横糸(志)
とし、縦(志)に絹糸を織りたる薄(志)き
織物、夏季の衣物として珍重(志)さる
もの、

志ひ(執) 志さる志、ささる志、さりあつか
ふ志守(志)る。しまつする志さへる。
さらへ置く、
志ひ(集) 志あつめる。あつまる志おほく
いろいろ志おちつく。さつまる。やすん
する志城のさりで志文章、詩歌等をあ
つめて一つの書物となしたる物の稱、
志ひ(漚) 志圃水の盛(志)に湧(志)き出る状
(志)を云ふ、又た水の噴出(志)する聲の
志を云ふ、
志ひ(習) 志ならふ。なれる。ならひ志しき
たり志重(志)なる志又た志重(志)ぬる志
ト(志)安(志)らかに、のびくせる志(志)

志ふ 執、集、漚、習

志を云ふ語、
志ひ(繙) 志あわせた衣物志二枚がされの衣
物志袴(志)の志を云ふ、
志ひ(楫) 志舟をやる具、かち(志)か
の志を云ふ、
志ひ(轉) 志あつめる志調(志)べて
まごめる、即ちおさめる、
志ひ(葺) 志屋根をふく志、屋根をつく
るひ直(志)す志、
志ひ(霰) 志大雨(志)の降る志(志)を云ふ
志雨の烈(志)しく降る音(志)、
志ひ(載) 志仕舞(志)ふ直(志)す。藏(志)む。
たくはふ志かくす。かくし置く志よせ
る。あつめる、
志ひ(濕) 志うるほふ。しめる。しめり。ぬ
る志牛馬などの食物を咬(志)さきに、
耳を動(志)かす志(志)を云ひ表はす語、
志ひ(襲) 志つひ。そのひ志かさね。志かさ
れて着る衣物志敵の備(志)なきを窺(志)
ひて討つ、即ちおそふ志つく。うける
例は襲撃など、
志ひ(遊) 志遊(志)に同じ、其の條を見られ
志ひ(遊) 志自動用をなさぬ志はたらく力が
失せる志價值(志)が無くなる、即ちす
たれる、
志ひ(誣) 志動ありもせぬ志を、あるや

志ふ 稽、楫、葺、載、濕 八八五

まふ、強、拾、掛、遊、十

うに無理を云ふ。●理を非に枉(か)て云ひなす。
まふ(強) 働働無理に行はす。●氣に進まぬコトを、たつてさせる。●こじつけて事を爲す。
まふ(拾) 固ひらふコト。ひらひさるコト。あつめるコト。
まふ(掛) 固つらなる。つらく。●糸をつむぐ。●衣物などをぬふ。●輯(つ)に同じ。
まふ(遊) 固しぶき味(か)の液。●遊柿より取りたる淡黒色(か)の液。●香膏(か)の人のコトを罵(の)して云ふ語。●あか(垢)汁。
まふ(支部) 固本部より分れて、他地方に在りて、其の地方の事務(か)を取り扱ふ所の稱。
まふ(四分) 固十(か)に割(わ)つた四つ、即ち十分の四。●一割の十分の四。●一寸の十分の四。
まふ(使部) 固官省の小使(か)の科、
まふ(自貢) 固うねほれ。じまん。
まふ(入) 固いる。はいる。●入用(か)の租税(か)のいりかの科。
まふ(慈父) 固なさけの厚き父。我が父の科トを貴(か)びて云ふ語。
まふ(十) 固五に五を加えたる數、即ちま

まふ、まふい、廿、汁、什

うを。●またび。●十分の十にて、全たき意味を表はす語。●十は數の單位のおほりなるより、物事の終(か)の科トを云ひ表はす語。
まふ(廿) 固十の二倍、二十。はたち。
まふ(汁) 固しる。つゆ。●雪(か)の半ば解(か)たる物、即ちみぞれ。
まふ(什) 固平生使(か)ふコト、又は常に使ふもの、即ち什器。什物など。●十に通ず。●詩經(か)より出たる語にて、詩及び歌の科トを云ふ。例は佳什(か)など。
まふ(十惡) 固佛敎の語、十の惡事。惡業。云ふ意にて、即ち殺生、偷盜、愚痴、邪淫、貪欲、惡口、妄語、兩舌、綺語、瞋恚の稱。
まふ(襲衣) 固重(か)れて着る衣物。かされきの科ト。
まふ(習肄) 固ならふコト。ならひならずコトを云ふ。
まふ(拾遺) 固著書又は編輯物などに、漏れ落ちたる事實(か)を、あつめおきなふコト、又は其の物。
まふ(四分板) 固厚さが四分程ある板(か)の科トを云ふ。
まふ(四) 固一つの物を四つに分けたる一つ。●金屬(か)の名、銅(か)に

まふい、まふか

其の量の四分の一だけの銀(か)を混(か)したるもの。
まふい(澁色) 固柿の澁の如き色目を云ふ。
まふい(澁色) 固觀世音の佛像の稱、觀世音の頭の上に、九つの顔あり、其の上更に一體の觀世音あり、故に本鉢(か)合して十一面に爲る觀世音の像。
まふ(士風) 固上に立つ人の行狀(か)、又は容子(か)の科トを云ふ。
まふ(刺諷) 固其の事を他の事になぞらへて云ふコト、又は云ひたるコト、即ちあてこすり。
まふ(遊園) 固大形の團扇の兩面に、柿の澁をばきたる物。
まふ(集英) 固すぐれたる人物を集むるコト。●總てすぐれたる物を多くあつめるコト。●轉じて人物、人才の科トを云ふ。
まふ(燭燿) 固光(か)るコト、かがやけるコトを云ふ。
まふ(遊柿) 固澁き味を有(か)てる柿の果實(か)の科トを云ふ。
まふ(習學) 固學問をならふコト。
まふ(澁皮) 固樹木又は果實などのあま皮の科ト。●色黒く垢(か)じみてる皮

まふか、まふく

の科ト例は澁皮が剥ける。
まふか(集合) 固あつまり合ふコト。
まふか(澁紙) 固質(か)の善良なる日本紙を、つなぎ合せて、一面に柿の澁を引きし物、重に敷物用とす。
まふ(集議) 固人々がよりあつまりて、相談(か)するコトを云ふ。
まふ(澁木) 固澁柿の木。
まふ(繁吹) 固又た重吹とも書く、水の物に打たれ、雨(か)の風に拂はれたりして、細かく八方に飛ぶコトを云ふ、又た類吹とも書く。
まふ(什器) 固道具(か)の器物(か)、
まふ(集金) 固金錢を寄せあつむるコトを云ふ。●掛金あつめ。
まふ(頻吹雨) 固斜(か)かひに降る、じとじと雨の科トを云ふ。
まふ(祉福) 固しやわせ。幸ひ。
まふ(賜覆) 固功勞其の他の理由に依りて、一生涯政府へ納(か)むる租税を、免(か)せらるゝコトを云ふ。
まふ(至福) 固此の上もなき幸ひ。無上の幸福の科トを云ふ。
まふ(字腹) 固活字の字母(か)を拵(か)へる基礎(か)の型(か)。
まふ(什具) 固道具。調度(か)。
まふか、まふく

まふく、まふし

まふく(紙幅) 固かみはば、
まふく(繁吹) 固動水細かく爲つて、八方に飛び散す。
まふく(時服) 固其當季(か)當季に着用する。●十九布。固其の地を極めて細(か)かく美しく織(か)たる布。
まふく(集會) 固よりあひの科ト。
まふく(習慣) 固しきたり、ならわしの科ト。
まふ(襲撃) 固をそひ撃つコト。●不意打(か)の科ト。
まふ(祝言) 固婚禮、結婚の科ト。
まふ(十五夜) 固陰曆の十五日の満月の夜の科ト。●特に陰曆八月十五日の明月の科トを云ふ。
まふ(襲殺) 固敵を不意(か)に打ち殺(か)すコトを云ふ。
まふ(集散) 固凡て物の集(か)るコトと、ちらばるコトを云ふ。
まふ(澁) 固味しぶくあり。●なさけなくして(か)のみあり。●ばでやかならず。●なめらかならず、滑(か)りてあり。
まふ(拾集) 固えりあつむるコト。ひらひあつむるコト。
まふ(澁澁) 固いやいやながら、物事を爲す狀(か)を云ふ。
まふく、まふし

まふし

まふ(十字架) 固キリストを刑に處せし時用ひし、十字形を爲して柱(か)轉じてキリスト信徒の記章(か)に用ひらるる十字形のもの。
まふ(集輯) 固あつめるコト、よせる。
まふ(執心) 固佛敎の語、一心に心をこむるコト。思ひ込むコト。
まふ(十字街) 固十字文字に爲つてる。●町形(か)の科トを云ふ。
まふ(十字石) 固石の名、白色にして硝子(か)の如き、光澤(か)のある石、硝石の一種なりと云ふ、之を溶(か)して硝子を作る。
まふ(十字帶) 固ツボン吊(か)の科ト、其の組(か)が十字形に爲つてるより此名あり。
まふ(襲爵) 固父の爵位をつぐコト。
まふ(四部衆) 固佛敎の語比丘(か)比丘尼(か)優婆夷(か)優婆塞(か)の科トを云ふ。
まふ(習熟) 固ならひなるコト。
まふ(襲職) 固職務をうけつぐコト。
まふ(十七殿) 固音時宮廷(か)に在りし十七の御殿の稱にて、即ち紫宸殿(か)仁壽殿。承香殿。常寧殿。貞

志ふせ、志ふち

観殿。春香殿。宣陽殿。綾綺殿。温明殿。麗景殿。宜輝殿。安福殿。校書殿。清涼殿。後涼殿。弘徽殿。登華殿の稱。
志ふせん(習染) 固ならひ。ならばし。
志ふせん(葺繕) 固ふきつくらふ云ふ意にて、家屋(カ)をつくらひ直(チ)すコトを云ふ。
志ふせん(十全) 固まんぞくなるコト。申分なく全(ツ)たきコト。
志ふせん(漉煎) 固柿の漉(シ)を入れて、煉(チ)りたる糊(カ)。
志ふそく(習俗) 固世の中のならはし。しきたりのコト。
志ふそち(集簇) 固しふぞくと讀(ク)は誤(ツ)りなり、あつまる。たかりむらがるコトを云ふ。
志ふたい(漉滞) 固さごふるコト、つかふるコト、ばかざらぬコト。
志ふたり(鞆踏) 固他人の作り爲したる事を、其の通りまねして爲すコトを云ふ。重に詩文などに就きて云ふ語。
志ふたく(漉濁) 固音聲の、しぶりにこるコトを云ふ。
志ふちや(漉茶) 固其の味のしぶき茶、即ち番茶を漉く煮沸(チ)せし物。
志ふちやく(執著) 固執心(ジツ)に同じ。

志ふち、志ふに

志ふちゆち(集中) 固人又は物の一處(ヒト)に集(ツ)まるコト。其物事に精神を、あつめそむくコトを云ふ。
志ふちゆち(集註) 固註釋(キョウ)を集(ツ)めるコトを云ふ。
志ふちかん(集治監) 固監獄の一、舊刑法の徒刑。流刑及終身懲役囚を入れて、苦役に服(ツ)する處。
志ふつ(市物) 固市上に在る物と云ふ意にて、うり物のコトを云ふ。
志ふつ(死物) 固死んでるもの。役(ウ)に立ぬもの。
志ふつ(事物) 固物と事と、ものこと。
志ふつ(私物) 固官有物などに對して、個人の所有物と云ふ意。
志ふづら(漉面) 固つかしき顔つき。満(ツ)足せぬ、不平らしき顔つき。黒(ク)き色を呈せる、みつきむなきかは、
志ふとし(剛慢) 固強情(キョウ)なり。つよきなり。固すなはならぬなり。
志ふはし(十二支) 固えこの名。即ち子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥の十二支を云ふ。
志ふにぶん(十二分) 固此の上なし。十分(ヒト)に満足(ツ)ならぬと云ふ意を表はす語。
志ふにりつ(十二律) 固支那にて、昔時に

しふぬ、志ふね

確定し置きたる音楽上の十二律(ツ)の調子のコトを云ふ、又たの名を十二調子と云ふ、即ち宮、商、角、徵、羽の五音にて、自然の音調を定め、其れより此の五音の高低(ツ)に依りて、更に十二の順序に其れを十二ヶ月に配當したるものにて、平調(ヒラ)を正月、勝調(カチ)を二月、下無(ゲム)を三月、雙調(フタ)を四月、覺調(カク)を五月、黄鐘(ワウ)を六月、蕤調(レイ)を七月、盤渉(ハン)を八月、神調(カミ)を九月、上無(ウエム)を十月、壹越(イツ)を十一月、斷金(ツグ)を十二月とす、之を更に十二月十二支に配當して、黄鐘(ワウ)を十一月子、大呂(タイ)を十二月丑、大簇(タイ)を正月寅、夾鐘(カウ)を二月卯、姑洗(コウ)を三月辰、仲呂(チュウ)を四月巳、蕤賓(レイ)を五月午、林鐘(リン)を六月未、夷則(イ)を七月申、南呂(ナン)を八月酉、無射(ム)を九月戌、應鐘(オウ)を十月亥と云ふ、以上の如くに區別したるものを十二律と云ふ。
志ふぬり(漉塗) 固柿漉(シ)を塗るコト、又はぬりしもの。
志ふねん(執念) 固執心(ジツ)に同じ。
志ふねん(十念) 固淨土宗にて、其の信徒に六字の名號を興えて歸依(キイ)せしむる

るを云ふ。
志ふのち(十能) 固一種の家具、炭及び火を盛りて持ち運ぶ具、鐵又は銅にて製し柄あるもの。
志ふはち(什寶) 固たから物のコト。
志ふはち(十方) 固陰曆にて、甲申(ツ)の日より、向ふ十日間のコトを云ふ、此の間は相談事を爲すに忌(ツ)むこと。
志ふはち(十八公) 固松の異名。
志ふはち(十八番) 固其の物事に得意なるコトを云ふ、即ちおはこ。轉じて定(ツ)つてる、又たさ云ふ意を表はすに用ゆる語。
志ふはち(十八紅豆) 固草の名、ささげの一種、莢(カ)の細くして且つ極(ツ)めて長きもの。
志ふふん(十分) 固此の上なし満足と云ふ意を表す語。
志ふへき(習癖) 固ならひとなりたる、くせのコトを云ふ。
志ふほち(襲封) 固父の領地を其のままつぎ受るコト。
志ふぼく(輯睦) 固仲よく、したしむコト。
志ふまん(十萬億土) 固極樂淨土の

志ふの、志ふま

志ふぬ(漉味) 固味(ツ)のしぶきコト。じみな有様(ツ)。
志ふぬん(漉面) 固顔をしかめるコト、又たしかめたる顔。
志ふぬつ(什物) 固種々の器具、だう具、志ふぬん(十文字) 固アツちがぬになつてるコト、十の字の形になつてるコト。
志ふぬ(漉屋) 固漉柿より取りし漉を賣てる家。しわんぼうなる人。
志ふぬ(十夜) 固淨土宗にて行ふ佛事の一日。即ち陰曆の十月六日より十五日まで、十夜の間念佛を唱(カ)へ、勤(ツ)むる佛事の稱。
志ふぬねん(十夜念佛) 固十夜(ツ)に志ふぬ(襲用) 固つぎ用ひ、其のままにて用ゆるコト。
志ふぬら(襲來) 固不意に襲ひ來るコトを志ふぬら(習禮) 固家庭にて禮儀作法の稽古(ツ)を爲すコトを云ふ。
志ふぬ(漉) 固動かしつゝ。さごころる。出し惜(ツ)む。なめらかに通(ツ)せぬ。氣が進まぬ。
志ふぬん(習練) 固ならひれる、さらえる、志ふぬく(輯錄) 固あつめ書き。ぬき書きするコト、又はなしたるもの、志ふぬく(十六夜) 固陰曆十六日の夜。

志ふぬ、志ふる

十六日の夜の月、即ちいさよひ。
志ふるく(十六紅豆) 固十八紅豆の一名。
志ふるく(むさし) 固十六指(ツ)固遊戯の一種。將棋(ツ)の如きもの、紙に縱横(ツ)の一種の形を引き、親石(ツ)一個と、子石(ツ)十六とを以て、互ひに其の線(ツ)を傳(ツ)ふて動き、親石が子石の間へ入つた時には、其の二個の小石を取る、而して小石(ツ)二個となりたる時には、子方(ツ)の敗(ツ)にて、親石が一定の處(ツ)まで追ひ詰められたる時には、親石の敗となるもの。
志ふる(自刎) 固自から我が首を斬る、即ち自殺のコトを云ふ。
志ふる(自分) 固我れ。我が身。拙者(ツ)。
志ふる(死文) 固個條のみありて、實地に用ひて規定書などを云ふ、即ち空文(ツ)の科ト。
志ふる(時分) 固其のさき、ころあひの志ふる(脂粉) 固紅と白粉(ツ)轉じて化粧(ツ)の科ト。
志ふる(私憤) 固自分の事に就ての怒り、志ふる(新文) 固此の學問、此の道義と云ふコト。
志ふる、志ふる

志ふん(士分) 志ふん(四分五裂) 志ふん(四つに分) 志ふん(五つに分) 志ふん(分) 志ふん(分) 志ふん(分) 志ふん(分) 志ふん(分) 志ふん(分)

志ふん(紙幣) 志ふん(日本銀行) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣)

志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣)

志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣) 志ふん(紙幣)

志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入)

志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入)

志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入)

志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入) 志は(入)

志ふん、志へ、薬、稽

志へつ、志ほ、潮、鹽

志ほ、志ほか、入

志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽)

志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽)

志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽)

志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽) 志ほか(鹽)

志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入)

志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入)

志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入)

志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入) 志ほか(入)

志ほか、志ほけ

志ほか、志ほた

志ほか、志ほた

志ほな、志ほふ 織

志ほならぬりみ(不潮海) 潮水(しほ)でなき海と云ふ意にて、潮水のこたを云ふ。
 志ほに(鹽煮) 鹽にて味(し)を付けて煮(ゆ)たるもの。
 志ほのやほち(潮八百路) 潮大海原(しほのうら) 遠き舟路(はつち)のこた。
 志ほはま(鹽漬) 鹽を製造する海岸(しほ)のこたを云ふ。
 志ほはゆし(鹹) 鹽(しほ)からし。
 志ほひ(潮干) 潮(しほ)の引きて干(ひ)くこた。 潮干狩(しほ)の略。
 志ほひき(鹽引) 鹽(しほ)を鹽漬(しほ)せし又は鹽を塗りたるこたを云ふ。
 志ほひがた(潮干湯) 潮(しほ)の引きたる後(しほ)の海岸(しほ)。
 志ほひがり(潮干狩) 潮(しほ)の引きたる後(しほ)にて、貝類を取るこた。 重に陰曆の三月の初めに爲す遊び。 「の稱」
 志ほひきさき(鹽引鮭) 鹽漬(しほ)せし鮭(しほ)のやほ(しほ) 沙干山(しほ) 冥途(しほ) 彼の世のこたを云ふ。
 志ほふた(鹽豚) 鹽(しほ)の肉を鹽漬(しほ)せしもの。
 志ほふね(潮船) 潮(しほ)上をこぎ行く舟。
 志ほふる(鹽風呂) 潮(しほ)水を沸(しほ)せし風呂、海水浴のこた。

志ほま、志ほり 蒸

志ほま(潮間) 潮水(しほ)即ちうしほの干(しほ)てる間(しほ)のこたを云ふ。
 志ほみち(潮道) 潮(しほ)の流れゆく道すじ、即ち潮路(しほ)。
 志ほみづ(潮水) 潮(しほ)の水、うしほ。
 志ほみづ(鹽水) 鹽(しほ)を溶(しほ)したる水。 しほからき水。
 志ほみむぎ(潮見草) 潮(しほ)の花の一名。
 志ほむ(萎) 自動してほれて弱(しほ)くなる。 しほんで勢(しほ)がなくなる。
 志ほむき(鹽割) 鹽(しほ)のむき身。
 志ほもの(鹽物) 鹽(しほ)になしたる魚類の總稱。
 志ほもみ(鹽揉) 鹽(しほ)野菜などを鹽(しほ)にてもむこた。
 志ほや(鹽屋) 鹽(しほ)がまの設けある小屋。 鹽を賣(しほ)する家。
 志ほやき(鹽焼) 鹽(しほ)をゆりつけて、焼きたる魚類の稱。
 志ほゆ(鹽湯) 鹽(しほ)水にて沸(しほ)したる風呂。 鹽を混(しほ)たる湯。
 志ほゆで(鹽茹) 鹽(しほ)水にてゆでるこた。
 志ほり(絞) 絞(しほ)るこた。 絞(しほ)染(しほ)にせし反物。
 志ほりがみ(絞紙) 絞(しほ)紙の一種、質(しほ)の白き和紙(しほ)を絞(しほ)りて、一面に種々の

志ほり、志ほん 絞

志ほりぞめ(絞染) 絞(しほ)布(しほ)の染め方の一種、凡て、染むべき布帛を思ふままの形に絞(しほ)りて染めて、其の絞(しほ)り目を解き、其の後に白く洗(しほ)せし染め方の稱。 志ほりばなし(絞放) 絞(しほ)染(しほ)め、くくりたる其の糸を解きて、其のままにて縮(しほ)ませたるもの。
 志ほる(絞) 自動強(しほ)くれて汁を出す。 強(しほ)く(しほ)えて汁を出す。 強(しほ)く(しほ)れて水を去らしむ。 強(しほ)く無理に押し出す。
 志ほわた(潮曲) 潮(しほ)水の深く陸地に入り込みたる部分の稱、入江(しほ)。
 志ほん(四品) 潮(しほ)親王の御位の名。 武人の四位に叙せられたるもの、稱。
 志ほんきん(資本金) 資本(しほ)とて、資本とし用ゆ金子のこたを云ふ。
 志ほんぬし(資本主) 資本(しほ)を出して呉れる人、即ち金方(しほ)のこた。
 志ほんばしら(四本柱) 潮(しほ)角力場(しほ)の土俵の四隅(しほ)に立つてある柱(しほ)のこたを云ふ。
 (志ほま)

志ま、志まう 島 編

志ま(島) 四面水にて圍(しほ)まれたる土地のこた。 庭園(しほ)などの、泉水の中(しほ)に設(しほ)けられたる小山(しほ)の類を云ふ。
 志ま(編) 固色糸(しほ)を以て織物に表(しほ)したる、種々の模様(しほ)のこた。
 志ま(死魔) 固生命(しほ)を奪(しほ)ふこと。 敵、即ち死神(しほ)。 精神を、まごはせて考(しほ)へ力を失(しほ)はすこと。 云ふ敵(しほ)考(しほ) 揣摩(しほ) 固物事を想像(しほ)して云ふこと。 世の中の形勢(しほ)を推察(しほ)して云ふこた。
 志ま(脂麻) 固草の名、こま(胡麻)の一名、志まあひ(綿合) 固織物の、しま模様の色合(しほ)のこた。
 志ま(姉妹) 固姉(しほ)妹(しほ)。
 志ま(姉妹艦) 固二つの同じ大きさ同じ型(しほ)の艦(しほ)をけふたい船。
 志ま(綿織) 固水禽(しほ)の名、鶴の種類。 其の羽毛に斑(しほ)のある綿。
 志ま(四孟) 固孟春、孟夏、孟秋、孟冬の四つを云ふ。
 志ま(二毛) 固白髪(しほ)交りの毛の稱、志ま(編馬) 固馬の一種にて、毛に虎の斑(しほ)の如き黒き模様の一面に在るもの、アフリカに産すこと。 志ま、志まう 島 編

志まお、志また

志まお(編織物) 固編(しほ)に織つてある反物、しま布(しほ)。
 志まか(編蚊) 固蚊の種類、やぶ蚊のこた。
 志まがら(編柄) 固織物の模様(しほ)。
 志まき(蓋木) 固又た蓋木とも書く、鳥居(しほ)の上(しほ)に渡(しほ)してある横木のこたを云ふ。
 志まき(風巻) 固はげしく吹きすさむ風の考(しほ) へ力(しほ)を失(しほ)はすこと。 云ふ敵(しほ)考(しほ) 揣摩(しほ) 固物事を想像(しほ)して云ふこと。 世の中の形勢(しほ)を推察(しほ)して云ふこた。
 志ま(少時) 固しばらく。 わづかの間(しほ)を織り出したる、しゆす。
 志ま(島田) 固女の髪(しほ)の結び方、島田髷(しほ)の略。
 志ま(編鯛) 固魚の名、鯛の如き形をなせるものにて、全身に青き白きの細き筋(しほ)の一面に在るもの。
 志ま(島臺) 固婚禮の儀式に用ゆる飾り物の名、支那の蓬萊山(しほ)の形を表はしたるものにて、州濱(しほ)の臺の上(しほ)に、松竹梅の造花を置き、其の傍(しほ)に尉(しほ)姥(しほ)鶴(しほ)などを飾(しほ)り

志また、志また

志またわび(島田髷) 固女の髪(しほ)の結び方、たかまげのこた。
 志またくづし(島田崩) 固女の髪(しほ)の結び方、島田髷(しほ)を崩(しほ)に結(しほ)ひたるが如きもの。
 志またつ(始末) 固はじめと、終り。 物事を善くささるこた。 志またつ(むだ遣) 志またつ(物事)の次第。
 志またつ(始末屋) 固つましき人、けんやくする人。 「記すこた」
 志またつ(始末書) 固事情の容子を書き志またつ(始末書) 固事情(しほ)の容子を委しく記したる文書。
 志またつ(編包) 固紙の一種、地質厚くして強きもの、多く編織物を包むに用ゆるより、此の名あり。
 志またつ(島津島) 固總て嶋に樓(しほ)でる島(しほ)の名。 志またつ(島津島) 固總て嶋に樓(しほ)でる島(しほ)の名。 志またつ(島津島) 固總て嶋に樓(しほ)でる島(しほ)の名。
 志またつ(始末心) 固始末(しほ)のしやうと思ふ心。 儉約(しほ)する。 つましくしやうと思ふ心。
 志またつ(編手本) 固編織物の参考(しほ)を爲すべく、異(しほ)りたる編織物の切れ端を、張り付たる帳簿(しほ)。
 志またつ(島流) 固利罰の名、罪人を島

志む、志め、使、坪

志む(使)(助動)他を使(使)ひて思ふ通(通)に働(働)らかせる云ふ意を表(表)はすに用ゆる語、假令は行(行)はしむ、従はしむなど、

(志む)

志め(駒馬)駒馬四頭にて馬車を挽くコト又たは四頭にて挽きたる馬車、志め(注連)注しめかざりに用ゆる、しめ繩のコト、

志め、志めな、鷓

志めかす(搾滓)搾滓(搾)大豆などより油をしほり取りたる、其の滓(滓)のコトを云ふ、

志めし、志めつ、濕、示

志めしあはせ(喋合)喋合(喋)もつて打ち合消す、志めす(示)示(示)見せて教ゆる、現(現)はして知らせる、見せて告知らす、手本となさしむ、

志めつ、志めん、沈、締

志めつ(締)締(締)戸障子などを堅くし、志めな(注連)注しめかざりに用ゆる、志めり(濕)濕(濕)雨(雨)が降る、水氣の爲めに火の消るコト、

志めん、志もか、霜、下

志めん(四面)四面(四面)四方八方、四方の面、志もか(霜)霜(霜)降りたる露(露)が、寒氣の爲めに凍(凍)りたるものを云ふ、

まもく、まもこ 鬘、簪

まもく(耳目)鬘耳ま目(耳)轉じて視るコト
まもこ(耳)コトを云ふ、
まもくち(下朽)鬘寒氣の爲めに、皮膚に
生ずる病氣の名、即ちしもやけ、
まもくづれ(霜崩)鬘霜のさけて、くづれ
るコトを云ふ、
まもくもり(霜曇)鬘ゆき空のコト、
まもごころ(霜衣)鬘霜のふりかかりたる
衣服のコトを云ふ、
まもざ(下座)鬘座席の下位、
まもざい(下代官)鬘代官の次(下)に
位する役人にて、年貢(年貢)の取立(取立)の
司(司)たりたるもの、
まもつかた(下方)鬘したじた。しもざま
のコトを云ふ、
まもつぎ(霜月)鬘陰曆十一月の別名、
まもつひび(鬘)鬘下あに生へてるひげ
したひげのコト、
まもつやみ(下闇)鬘後(後)の暗夜(暗夜)を
云ふ意にて、月の末(下)下旬のコトを云
ふ(轉じて足許(足許)の甚た、くらきコ
トを云ふ、
まもて(下手)鬘下(下)の方、下(下)の方、
まもと(管)鬘罪人を打つ刑罰(刑罰)に用ゆ
具、細き木の枝(枝)にて作りたる杖(杖)の
如きもの、

まもこ、まもん

まもと(楷)鬘若木(若木)の、小枝の澤山に
在るもの、コトを云ふ、
まもの(下句)鬘和歌に於ける、第四句
と第五句とのコトを云ふ、
まものつる(霜鶴)鬘其の毛色の純白なる
鶴のコトを云ふ、
まもばしら(霜柱)鬘大寒の頃に、地面の
土が水氣の爲めに氷りて、柱の如く細
く立てるものを云ふ、
まもひと(下人)鬘下男女の稱、
まもふくら(下腹)鬘顔の下の方、即ち左
右の頬のふくれて、ゆたかなる容(容)を
なせるを云ふ、
まもぶくれ(下腹)鬘しもぶくらに同じ、
まもふりつき(霜降月)鬘陰曆の十二月の
別名、
まもふりらし(霜降羅紗)鬘黒又は鼠の
地に、細かき白き模様のある羅紗の稱、
まもべ(下部)鬘奉公人(奉公人)特に下男のコト
を云ふ、
まもみぎ(霜見草)鬘菊の一名、
まもやしき(下邸)鬘大名の別荘(別荘)控(控)の邸、
まもよ(霜夜)鬘霜(霜)の下りたる夜(夜)寒
るん(師門)鬘師匠の家、先生の家、
まもん(詰問)鬘たづねて相談する、協議

まもん、まや 者、者、捨、樹 八九八

まもん(私門)鬘自分の一族、
まもん(耳門)鬘耳の孔(孔)の口、
まもん(自問)鬘我が心か心に問ふ、即ち
自己で判断(判断)するコト、
まもん(寺門)鬘寺の門、
まもんせん(四文銭)鬘寛永通寶の一種、
現今の二厘錢のコト、
まもんくわい(詰問會)鬘或る物事に就き
て、相談し合ふ會合、
まもんあた(自問自答)鬘自分で問ふて
自分で答(答)ふるコト、即ち一人思案(思案)の
コトを云ふ、
(まじや)
まや(者)鬘ものま云ふ意を表はす語、も
の(物)事を指す語、人(人)を指す語、
何々(何々)はま云ふ、はの意を表はす助
辭(助辭)、
まや(者)鬘おこる。せいたくする。かざる
みへるコト、
まや(捨)鬘ゆるす(捨)つるコト、
まや(樹)鬘庭園などに設けられてある屋
根のある臺(臺)、うてな(書法)、文字を
習ふ家屋(家屋)、道具器種類を蔵(蔵)め

まや 車、些、卸、借、斜、蔗、遮、紗、蚊

置く(假倉)置、
まや(車)鬘二つの輪の附ける、物又は人
を乗(乗)せて運(運)ぶ具、即ちくるま(車)頭
(頭)の骨のコトを云ふ、
まや(些)鬘僅(僅)ひばかり、少しま云ふ意
を表はす語、無(無)し皆無(皆無)ま云ふ
意を表はす助辭、
まや(卸)鬘おろす。さげる。おつ(お)まこめ
る例はおろしうりな(卸)解(解)く。ぬぐ
な(卸)、
まや(借)鬘かかるとかきるコト(か)かす。か
あさふ(借)ゆるす。きき入れる(借)かりに。
たさひま云ふ意を表はす語、
まや(斜)鬘はす。なまめ、
まや(蔗)鬘草の名、ささうきび。いものコ
トを云ふ、
まや(食)鬘切(切)たる魚類獸類の稱、即ち
切り肉。切り身のコト、
まや(遮)鬘おほひかくす(遮)さへざる(遮)待
ち伏(伏)せして、くひさむる、
まや(紗)鬘織物の名、絹(絹)又は木綿(木綿)に
て、薄(薄)く織りたる物の稱、
まや(蚊)鬘罪をゆるして、咎(咎)めぬコト
天皇が特別の思召(思召)を以て、罪人
の罪をゆるさるコト、
まや(謝)鬘わびる。あやまるコト(ま)こ

まや 射、嗟、舍、除、寫、社

はるコト(去)る。立ち去る(去)禮を申し
述ぶるコト(官職を辭)するコト(去)
おとるへる。よほりゆく。しりぞける、
まや(射)鬘弓をいれるコト(鐵砲をはなち
うつコト)其の方にの心をそまぐ(射)
まや(嗟)鬘なげく。うれふる(嗟)ア、ま(嗟)
(嗟)きたむ意を表はす語、ア、ま(嗟)
褒(褒)めたりゆる意を表はす語、
まや(舍)鬘家(家)、住宅(住宅)こもるコト、や
どりするコト、假りに宿(宿)り住むコト
軍隊が普通に歩むべき一日の里程(里程)
の(コト)を云ふ(役所のコト)、即ち官
舎(舎)さるまる。ま(與)へる。施
(施)す(施)ゆるす。はなつ(置)置く。居
(居)る、
まや(除)鬘おこる。かざる。せいたくする
除(除)くあり。はるかなり、又はおそ
し(ま)云ふ意を表はす語、
まや(寫)鬘かきうつす。うつし(写)かく(寫)
まれる。にせる。其の通りにうつす(無)
くする。取りのける(寫)に(寫)通す、そ
ま(寫)る、
まや(社)鬘神社の社にて、やしろ、ほ(社)
事業を起すべく、又は物事(物事)を爲
す可く爲に、多数の人の集りたる一團
體(體)の(社)コトを云ふ、即ち社を組(組)む

まや 藉、漚、且、惹、蛇、蛇、麝 八九九

又は會社(會社)名、曆日(曆日)の名、立春及
び立秋より、第五番日の戌(戌)に當(當)
る日のコト、即ち社日(社日)昔時の制
度、人家二十五戸を一社(社)と云ふ、
まや(藉)鬘赤土(赤土)轉じてあか。あか
き色のコトを云ふ(無)くなりて空(空)か
しき意を表はす語、例は藉山(藉山)即ち
はげやまなど、
まや(漚)鬘もぐ。くだす。くだる。即ち
下痢。はらくだる、
まや(且)鬘又た。更(更)に。かされてま云
ふ意を表はす語、即ちかつ(且)しはら(且)
しばし(且)つ(且)しむ、うやうやし(且)かり
そめ、
まや(惹)鬘引く。引きおこす、
まや(蛇)鬘蛇(蛇)に同じ、
まや(蛇)鬘虫の名、へびのコト、
まや(麝)鬘麝(麝)の名、中央亞細亞地方
に産する物、其の大きさは大なる狗(狗)程
にて、形は鹿に似て角(角)なく、上あご
に二つの牙(牙)あり、下に反(反)て外へ
出(出)ぐ、全身(全身)は淡黒色にして、腹の下
部、陰部の上部に、鵝卵(鵝卵)の稍や大な
るほどの麝(麝)あり、之を麝香(麝香)と
云ふ、中には一種の香料を貯(貯)ふ、藥
用及び香料となる、又の名を麝香鹿(麝香鹿)と

まや、まやい、暗、邪

まや(暗) 闇詰(ダ)に同じ、謹しみて承知する意を表はす語。
 まや(邪) 闇よこしま、まがつてるコト。氣候が悪くして、身軀(カラダ)に害(ガイ)あるコト。かたむく、曲る。横に通ずる。
 まや(親野) 闇見渡(ミワタ)して物を見能ふ區域内(キョウ)のコトを云ふ。
 まや(子夜) 闇子の刻(ツキ)の夜と云ふ意にて、夜の十二時のコト。轉じて真夜中(マヨイ)のコト。
 まや(四野) 四方の野邊(ノヘ)。
 まや(次夜) 闇次(ツギ)の夜。翌晩(アシタ)。
 まや(時夜) 闇鶏(ニワトリ)が夜中に鳴(ナ)りて、時を知らずコト、假令(カレバ)鶏鳴(ニワトリノネ)時夜を報(ウ)すなど。
 まや(邪惡) 闇よこしまなるコト。よろしからざるコト。
 まや(遮遏) 闇くひ止(トメ)むる。さへぎり止(トメ)むるコトを云ふ。
 まや(謝意) 闇禮をいたす心。こぼり云はんとする心。
 まや(寓意) 闇うつしたるありさま。ふかきたる容子(カラダ)。
 まや(邪意) 闇わるがしこき心。よこしまなる意(イ)のコト。

まやい、まやう、生、性、笙、粧、上

まやい(報宥) 闇ゆるすコト。ゆるしなだむるコトを云ふ。
 まやい(社友) 闇同一社内(イシノ)に在る人々。其の社内(イシノ)にあらざるも、其の社交(カウ)をなしてゐる人々のコトを云ふ。
 まや(社員) 闇其の社中(イシノ)の人。其の社に抱(カ)はれてゐる人。
 まや(邪嬖) 闇みだらがましき男女の關係、私通(シツウ)のコト。
 まや(生) 闇生(イ)きてるコト。生命(イ)。
 まや(性) 闇性(イ)なるコトを云ふ。
 まや(性) 闇性質(イ)質(シツ)質(シツ)、うまれつき。心根(ココロ)に、精神(イ)たち。もちまへ。精神(イ)はたらき。すがた。
 まや(笙) 闇又たさうとも讀む。雅樂(イ)に用ゆる樂器(イ)の一種、しやうのふる。コトを云ふ。即ち桐(イ)にて作(イ)りたる。笙(イ)の上に、十三又は十九の長短ある細き竹の管(イ)を圓形に取りつけ、其の竅(イ)に有る小き孔(イ)を吹きて、種々の音色を出(イ)す、ふえ。
 まや(粧) 闇かざる。よそぼう。けしやう。みじまひのコト。
 まや(上) 闇かみ。うへ。天子(イ)の御事(イ)を申す語。天(イ)のコト。目上(イ)の人。

まやう、昌、娼、倡、葛、席、九〇〇

まやう(昌) 闇あがる。のぼる。たてまつる。して美(イ)しきコト。
 まやう(娼) 闇うかれ女。遊女。
 まやう(倡) 闇技藝、即ちわざ。重(イ)に歌舞(イ)の類(イ)について云ふ。さなふ。うたふ。おたやか。やはらく。
 まやう(葛) 闇草の名、はなしやうぶ。
 まやう(席) 闇くるひさわぐ。たけりくる。ふコトを云ふ。
 まやう(唱) 闇さなふ。歌をうたふ。轉じて歌(イ)のコト。ささう。つれ出す。いざなふ。
 まやう(匠) 闇職工(イ)のコト。特に大工(イ)のコト。官吏(イ)のコト。
 まやう(祥) 闇めでたきコト。うれしき。幸(イ)ひなるコト。めでたきしるし。死者(イ)の忌日(イ)を、さむらふコトを云ふ。特に一周忌及び二周忌の祭事(イ)のコトを云ふ。
 まやう(席) 闇學校。塾(イ)。
 まやう(詳) 闇つまびらかなる。くばしきコト。善美(イ)なるコト。
 まやう(粧) 闇獸(イ)の名、女性の羊(イ)。めんたひつじのコトを云ふ。
 まやう(翔) 闇鳥(イ)が飛ばさる十分(イ)に張(イ)て飛ぶコト。おたやか。安(イ)んずる状態(イ)。

まやう、將、漿、齋、蔣、蔣、獎、蟹、相

まやう(將) 闇軍隊(イ)を引きつれて指揮する長、即ち大將。陸海軍の大申少將のコト。おごそかなる狀(イ)を云ふ。うけたまはる。養(イ)ふ。世話(イ)す。助(イ)く。むらがる。あつまる。つれゆく。ひきぬる。また。はた。其の上(イ)にて云ふ意を表はす。はたらきかゝる。爲(イ)しかゝる。云ふ意を示す語、即ちまことに。
 まやう(漿) 闇總て液(イ)の如きもの。稱(イ)る水、米泔水(イ)。
 まやう(齋) 闇音樂を奏(イ)する聲。金石(イ)の鳴り響く聲。
 まやう(蔣) 闇山の高くそびゆる狀(イ)を云ふ。いかめしき狀(イ)を云ふ。
 まやう(蔣) 闇草の名、まこものコト。
 まやう(獎) 闇すゝめる。はげます。ほめてすゝめる。助け、みちびく。
 まやう(蟹) 闇舟(イ)を行(イ)る具、かひ。
 まやう(蟹) 闇虫の名、つくつくぼうし。
 まやう(相) 闇帝王(イ)を扶(イ)けて、政事(イ)を行ふ人、即ち大臣宰相(イ)。主(イ)たる者。たすけて、物事を爲(イ)す人、即ちかひぞへ。案内者。手引(イ)する人。治(イ)む。たすける。案内(イ)する。あふ。あひ。双方(イ)。

まやう、醬、廂、箱、尙、尙、尙、尙、尙、尙

まやう(醬) 闇あひ互(イ)ひの。かたち。容子(イ)。かほつき。委(イ)しく。視(イ)て察(イ)しはかる。例(イ)ば人相(イ)をみるなど。
 まやう(尙) 闇たつきコト。うやまひ。あまひ。より外(イ)へ。突き出(イ)しある物、即ちひさし。わたり。廊下(イ)の。コト。
 まやう(箱) 闇物(イ)を入れる具、はこ。米(イ)を納(イ)めて置く倉(イ)。
 まやう(尙) 闇たつきコト。うやまひ。あまひ。むる。ひさへ。願(イ)ふ。切(イ)に望(イ)む。主(イ)として取り扱(イ)ふ。つかさどる。ふるし。久(イ)し。云ふ意を示す語。
 まやう(尙) 闇さまよう。ぶらつく。無意(イ)味(イ)に歩くコトを云ふ。
 まやう(尙) 闇やめる。止(イ)むコト。
 まやう(尙) 闇四方(イ)をかまざる家。壁(イ)のなき家のコト。假小屋(イ)。
 まやう(尙) 闇うりかひ。あきなひ。くばしくする。あきらかなす。秋(イ)の時。候(イ)のコト。數學(イ)の語にて、割(イ)て得(イ)たる其の數(イ)のコト。音樂(イ)の基礎(イ)たる五音(イ)の一つの名。
 まやう(尙) 闇染色(イ)の名、あさぎ色のコト。轉じて淺黄色(イ)に染めし布。

まやう、餉、饗、昶、裳、嘗、粹、九〇一

まやう(响) 闇正午(イ)。日中(イ)のコト。
 まやう(餉) 闇兵糧(イ)のコト、衣物(イ)のコトを云ふ。
 まやう(昶) 闇夏(イ)の日のながきコトを云ふ。
 まやう(裳) 闇もすも。きもの。
 まやう(嘗) 闇なむる。なめて味(イ)を試(イ)みる。かつて。まへか。以前(イ)に。ためす。ころみる。秋季(イ)に於て行(イ)ふまつり、即ちひなめまつりのコト。
 まやう(掌) 闇手のひら。たなこ。取り扱(イ)ふ。つかさどる。
 まやう(賞) 闇ほうび。其の功(イ)をほめた。へて物をあたふコト。ほめてあたふる。ほむる。ほめた。愛(イ)して、もてあそぶ。即ち賞(イ)。
 まやう(償) 闇まごふ。おきなふ。つぐなふ。
 まやう(章) 闇文章(イ)の中(イ)の一(イ)きりのコト。詩歌(イ)文章(イ)のコト。總(イ)て書きたる物、又は手紙(イ)のコト。り。て。ほん。おきて。科目(イ)の。きり。あきらかなるコト。くばしきコト。表(イ)はす。知(イ)れ渡る。印形(イ)の。あや。あやもやう。いるざり。
 まやう(樟) 闇木(イ)の名、くすの木。
 まやう(障) 闇さへ。ささふ。さばり。じやます。じやまとなるコト。くひま。

志やう(瘴) 瘴、彰、嶂、狀、象、牆、牀、像、莊 志やう(瘴) 瘴、彰、嶂、狀、象、牆、牀、像、莊 志やう(瘴) 瘴、彰、嶂、狀、象、牆、牀、像、莊

志やう(瘴) 瘴、彰、嶂、狀、象、牆、牀、像、莊 志やう(瘴) 瘴、彰、嶂、狀、象、牆、牀、像、莊 志やう(瘴) 瘴、彰、嶂、狀、象、牆、牀、像、莊

志やう(瘴) 瘴、彰、嶂、狀、象、牆、牀、像、莊 志やう(瘴) 瘴、彰、嶂、狀、象、牆、牀、像、莊 志やう(瘴) 瘴、彰、嶂、狀、象、牆、牀、像、莊

志やう(瘴) 瘴、彰、嶂、狀、象、牆、牀、像、莊 志やう(瘴) 瘴、彰、嶂、狀、象、牆、牀、像、莊 志やう(瘴) 瘴、彰、嶂、狀、象、牆、牀、像、莊

志やう(瘴) 瘴、彰、嶂、狀、象、牆、牀、像、莊 志やう(瘴) 瘴、彰、嶂、狀、象、牆、牀、像、莊 志やう(瘴) 瘴、彰、嶂、狀、象、牆、牀、像、莊

志やう(瘴) 瘴、彰、嶂、狀、象、牆、牀、像、莊 志やう(瘴) 瘴、彰、嶂、狀、象、牆、牀、像、莊 志やう(瘴) 瘴、彰、嶂、狀、象、牆、牀、像、莊

志やう 上

志やう

志やう

九〇三

まやう

志やうくわん(上院) 志やうくわん(上官) 志やうくわん(上院) 志やうくわん(上官) 志やうくわん(上院) 志やうくわん(上官)...

まやう

志やうけん(商榷) 志やうけん(商榷) 志やうけん(商榷) 志やうけん(商榷) 志やうけん(商榷) 志やうけん(商榷)...

まやう

志やうけいもんじ(象形文字) 志やうけいもんじ(象形文字) 志やうけいもんじ(象形文字) 志やうけいもんじ(象形文字)...

まやう

志やうこち(相公) 志やうこち(相公) 志やうこち(相公) 志やうこち(相公) 志やうこち(相公) 志やうこち(相公)...

まやう

志やうこん(上根) 志やうこん(上根) 志やうこん(上根) 志やうこん(上根) 志やうこん(上根) 志やうこん(上根)...

まやう

志やうざり(傷創) 志やうざり(傷創) 志やうざり(傷創) 志やうざり(傷創) 志やうざり(傷創) 志やうざり(傷創)...

まやう

ふ、天文学より出し語、
 まやらし(尙子) 園長男。そりやう、
 まやらし(嘗試) 園ためしてみる。こころみてみるコト。
 まやらし(將指) 園中ゆび。中だか指(む)の
 コトを云ふ。
 まやらし(傷死) 園天死に同じ。わかじに
 のコトを云ふ。
 まやらし(掌侍) 園宮中の女官の名、即ち
 ないじのしやうのこト。
 まやらし(尙侍) 園宮中の女官の名、即ち
 ないじのかみのこト。
 まやらし(障子) 園建具の名、室内の境(ま)
 ひ目にはめるもの、其の種類多けれど
 も、一般に棧(ま)ありて紙を貼(ま)たる
 ものを云ふ。
 まやらし(商事) 園商業に關する事項(ま)
 のコトを云ふ。
 まやらし(床子) 園腰掛(ま)倚子(ま)、
 まやらし(賞辭) 園賞詞(ま)に同じ。
 まやらし(上梓) 園じやうしんと讀むは誤
 なり、文書を出版する爲めに、版木(ま)
 に刻るコトを云ふ。●轉じて書籍(ま)を
 出版するコト。
 まやらし(上巳) 園五節句の一にて、三月
 三日の稱、即ち女兒の祝ふものにて、難

まやう

遊(ま)を爲しつゝ、難壇(ま)に桃花白
 酒草餅などを供ふ儀式、即ちじやうみ。
 難節句。
 まやらし(上使) 園上(ま)より差し立られ
 たる使者のこトを云ふ。
 まやらし(上司) 園位置(ま)の高き官署の
 コト。●位置の高き役人。
 まやらし(狀師) 園總て訴訟の代理を業と
 せるものを云ふ、即ち辯護士、辯護人の
 コト。
 まやらし(城趾) 園しろあまのこト。
 まやらし(城市) 園城の内に設(ま)けられ
 てる町のこトを云ふ。
 まやらし(情死) 園男女が互ひに申し合せ
 て、生命(ま)を棄るコト、心中。
 まやらし(情思) 園心に思ふコト。●戀愛(ま)
 じに關する思ひ。
 まやらし(常時) 園常々(ま)いづも、
 まやらし(常事) 園あたりまへの事。常々
 (ま)の事。變りなき事。
 まやらし(情事) 園男女間の色情、戀愛(ま)
 じ等に關する事柄(ま)。「を云ふ語
 まやらし(商秋) 園秋の時候(ま)のこト
 まやらし(常式) 園常の方法、常のしき
 たり。
 まやらし(常識) 園普通に備(ま)はつて

まやう

る判断力、即ち一般に普通の智識に依
 つて、理解し能ふ是非(ま)善惡の分別(ま)
 びのこトを云ふ。
 まやらし(生色) 園黄金(ま)の一名。
 まやらし(上飽) 園仕上(ま)に用ゆる上
 等のかんなのこトを云ふ。
 まやらし(詳悉) 園くわしきこトつまび
 らかなるこト。
 まやらし(正日) 園死者の四十九日に當
 (ま)る日。●一周忌日のこト。●一周忌後
 年の忌日のこト。
 まやらし(情實) 園まことの有様、しん
 しやくなすべき事から。「こト
 まやらし(常日) 園常々(ま)ふだんの
 まやらし(上日) 園正月の元日。
 まやらし(翔集) 園小鳥類の四方よりか
 け集(ま)り來るこトを云ふ。
 まやらし(常習) 園平素のならばし●法
 律の語、或る事を常のなりはひの如く
 にしてあるを云ふこト、假令は賭博を
 常習としてるなど。
 まやらし(精舍) 園寺のこトを云ふ。
 まやらし(商社) 園商人の組合(ま)のこ
 ト。「家の稱
 まやらし(廠舍) 園四方に圍(ま)のなき
 まやらし(生者) 園生きてるもの、生(ま)

まやう

れて來たもの、
 まやらし(盛者) 園さかんなる者。
 まやらし(淨寫) 園文字を、きれいに寫
 (ま)すコト、又は寫せし物。
 まやらし(情趣) 園まよす、あじはひ。お
 もむきのこトを云ふ。
 まやらし(城主) 園一城の主人。●城を守
 (ま)つてる大將。
 まやらし(城守) 園城を守つてる大將。●
 封建時代の大名のこト。
 まやらし(釀酒) 園酒を造るこト。
 まやらし(上酒) 園上等の日本酒。
 まやらし(成就) 園なりたつ、成功(ま)
 するこト。
 まやらし(庠序) 園學問を修むる所、即
 ち學校のこト。
 まやらし(情緒) 園情愛の動き出したる
 コト。こまやかなる情合。
 まやらし(淨書) 園丁寧(ま)に書くこト。●清
 書(ま)のこト。
 まやらし(上書) 園事實(ま)を文章に認
 めて、天皇に奉(ま)ぐるこト、又は其の文
 章のこト。
 まやらし(精進) 園熱心に佛道を修むる
 コト。●身を清(ま)むるこト。●魚類肉類
 を食(ま)べぬこトを云ふ。

まやう

まやらし(正眞) 園いつわりならぬこト
 まことにして正しきこトを云ふ。
 まやらし(正身) 園まことの身軀、
 まやらし(傷心) 園心をいたむこト、氣
 をつかふこト。
 まやらし(詳審) 園細細しきこト、くわ
 しきこトを云ふ。
 まやらし(情人) 園意中の人、こひ人、
 まやらし(上申) 園官府へ物事を申し出
 るこト。●下級官署より、上級の官廳へ
 申し出るこトを云ふ。
 まやらし(障子紙) 園障子を貼るに用
 ゆる美濃紙(ま)を、つなぎ合せたるも
 のの稱。
 まやらし(將相) 園大將と宰相、
 まやらし(章草) 園物事のあきらかな
 る狀(ま)を云ひ表はす語。
 まやらし(猩猩) 園猿(ま)の一種、身長
 四五尺、全身赤褐色の毛もて被(ま)はれ
 凡ての形は猿に似て、口は圓く、前肢(ま)
 びの非常に長きもの、南洋諸島の森林
 中に棲(ま)む。●好んで大酒を爲す人の
 コトを云ふ。
 まやらし(昌昌) 園最(ま)も盛んなる
 狀を云ひ表はす語。
 まやらし(賞狀) 園其の物事を褒めた

まやう

る印(ま)として、與(ま)ふる書付、
 まやらし(象狀) 園ありさま。かたち、
 まやらし(清淨) 園いさぎよくしてけ
 がれのなきこト。●心身共に正しくして
 けがれなきこト。
 まやらし(城將) 園其の城の大將、
 まやらし(情狀) 園まよすありさま、
 まやらし(常情) 園人生普通の人情、
 まやらし(常狀) 園ふだんのありさま
 一定の容子(ま)。
 まやらし(城墻) 園城のかき。城壁、
 まやらし(穢穢) 園五穀のみのりさま
 を云ふ。●數多(ま)きこトを云ふ。●豐(ま)
 なる狀を云ふ。
 まやらし(蒸蒸) 園むし暑(ま)き狀(ま)、
 ●盛(ま)に興(ま)る狀を云ひ表はす語。
 まやらし(上上) 園此の上もなき善き
 コト。
 まやらし(詳述) 園委(ま)しく述ぶる。
 委しく書き表はすこト。
 まやらし(上述) 園上に述(ま)たるこ
 ト。●已(ま)に述べたるこト。
 まやらし(上旬) 園月の第一日より十
 日までの間を云ふ。
 まやらし(上衝) 園のぼせるこト、即
 ち逆上(ま)。

まやう

まやうじよち(上乘) 図佛教の語、此の上もなきコト、即ち上の上、
 まやうじよち(淨拭) 図きよく美しくふききまむるコトを云ふ、
 まやうじよち(常職) 図日常の職務、
 まやうじよち(常食) 図日に用ひて食食物、
 まやうじよち(障子越) 図障子を隔ててあるコトを云ふ、
 まやうじよち(常芝居) 図絶(ぜ)ず芝居をまやうじよち(常事犯) 図國事犯以外の凡ての犯罪を云ふ、
 まやうじよち(粧飾) 図かざりまなすコトかざるコトを云ふ、
 まやうじよち(牀蓐) 図れんじ、
 まやうじよち(尙齒會) 図老人が會合して談話(だんわ)を交換する、みやびなる會を云ふ、通例は其の會員中の最年長者を座長まなすものなり、
 まやうじよち(掌璽官) 図天皇の御印(ごいん)をつかさどつての官職、
 まやうじよち(猩猩絨) 図染色の名、極めて鮮(あざ)やかなる紅色(にじ)を云ふ、
 まやうじよち(精進明) 図一定の期日間精進をなしたるコト、
 まやうじよち(精進場) 図野菜物(じやうじやく)を油にて揚(あ)げたるものを云ふ、
 まやうじよち(精進落) 図精進を終りたるコト、即ち一定の期日間精進をなしたるコトを云ふ、
 まやうじよち(精進物) 図野菜物及び乾物(かんぶつ)のものを云ふ、
 まやうじよち(生死長夜) 図佛教の語、人生は長き夜の夢の如しと云ふ意なり、
 まやうじよち(商習慣) 図商業上に就きてのしきたりのコト、
 まやうじよち(清淨石) 図庭前の手洗鉢(ひし)の時に置かれてある、飾(かざ)り石のものを云ふ、
 まやうじよち(猩猩蟹) 図朝日(あさひ)のまやうじよち(清淨心) 図迷氣(まよひ)を去りて曇(くも)りのなき心、
 まやうじよち(生身世世) 図生きかへり死にかへるまよひ、
 まやうじよち(精進料理) 図野菜乾物(じやうじやく)等のみにて、調(た)ひのへたる料理、魚類を用ひぬ料理、
 まやうじよち(盛者必衰) 図盛(さか)んに爲つた者は、必ず衰(しぼ)るふる時の來るものなりと云ふコト、
 まやうじよち(生者必滅) 図生れて來た者は、必ず死(し)ぬまよひ、

まやう

まやうぜん(生前) 図死後に對して、生(なま)てゐた時のコトを云ふ、
 まやうぜん(常課) 図日常の飯(いひ)、
 まやうぜん(上僮) 図學識德行ある人の死去を、うやまひて云ふ語、
 まやうぜん(將星脫) 図陣中にて大將の死殺せしコトを云ふ、
 まやうぜん(商船學校) 図船舶(せんぱく)を用ゆる仕方(かた)や、船舶の機關を取り扱ふ事や、航海の事を教ゆる學校、
 まやうぜん(上疏) 図文書をたてまつるコト、
 まやうぜん(尙崇) 図たつさぶコト、あがむるコト、うやまふコト、
 まやうぜん(將送) 図人の出立を送るコトを云ふ、送別(おくわかれ)、
 まやうぜん(上層) 図重(おも)なつてある、一番の上のかわ、
 まやうぜん(上奏) 図事實(じじつ)を文書に認め、天子に奏聞するコト、
 まやうぜん(裝束) 図いでたち、身仕度、
 まやうぜん(常則) 図日常の規定(きぎん)、
 まやうぜん(上足) 図門弟中の最上位の者、即ち高弟(たかてい)、
 まやうぜん(將卒) 図士官と兵卒、

まやう

まやうじよち(清淨潔白) 図極めて正しくけがれなきコト、
 まやうじよち(上衆) 図又たじやうじよちとも讀む、佛法の語、身分ある人の稱、
 まやうじよち(請) 圖翻(か)ねく、招待(せうたい)、
 まやうじよち(常數) 圖其の人に自然に定まつてある運氣(うんき)のものを云ふ、
 まやうじよち(將帥) 圖全軍の大將、全軍の指揮官、
 まやうじよち(淨水) 圖神社佛閣に在る手洗(てうせん)ひ水のものを云ふ、
 まやうじよち(上水) 圖上等の水、
 まやうじよち(祥瑞) 圖めでたきコト、さちあるコト、
 まやうじよち(昌盛) 圖かんにさかゆるコト、
 まやうじよち(昌世) 圖さかえてる世、おだやかなる世、
 まやうじよち(彰旌) 圖善なる行を天下にあらはし示すコト、
 まやうじよち(醜成) 圖かもしなるまよひにて動亂(どうらん)などを起すコト、
 まやうじよち(狀勢) ありさま、その時のいきほひのものを云ふ、
 まやうじよち(情勢) 圖いきほひの容子、成り行きの有様、

九一〇

まやう

まやうせい(上製) 圖上等の製品、又は其の物、
 まやうせい(上世) 圖おほむかし、神代のまやうせい(掌跡) 圖(ま)しつけたる手のひらのおさかた、
 まやうせい(賞賜) 圖功勞を賞して與ふる金錢物品のものを云ふ、
 まやうせい(城跡) 圖城の在りしあこ、
 まやうせい(攘斥) 圖しりぞける、よせつけぬ、うちてのけるコト、
 まやうせい(定石) 圖圍碁の語、盤面に碁石(いし)を排置する、一定の方則(かたじ)のものを云ふ、
 まやうせい(上席) 圖上座(じやうざ)の位置の上のものを云ふ、
 まやうせい(詳説) 圖委しく説(せ)たるコト、又は委(あ)しく説きたる物、
 まやうせい(攘竊) 圖ぬすむ、かすめ取る、
 まやうせい(常設) 圖絶(ぜ)す設け置くコト、又は絶(ぜ)す設けあるコト、
 まやうせい(商戰) 圖商業のかけ引のものを云ふ、
 まやうせい(商船) 圖商船を積み、運搬(うんぱん)する船、あきなひ船、
 まやうせい(鏘然) 圖鐘(かね)の鳴る音聲、
 まやうせい(彰善) 圖善行善事を世に表はし示すコト、

まやう

まやうぜん(倡率) 圖一部の指揮者を爲りて、部下をひきゐてるコトを云ふ、
 まやうぜん(讓遜) 圖白から我が身を卑(ひ)しめて、人にへり下るコト、
 まやうぜん(上奏案) 圖天皇陛下に奏し奉る文書のしたかきのコト、
 まやうぜん(正體) 圖まごの身、本來の體、
 まやうぜん(請待) 圖人をまねきて、さりなすコト、
 まやうぜん(掌大) 圖手の掌(てのひら)ほどの大きさのものを云ふ、
 まやうぜん(昌大) 圖盛大(さか)へて大きくなるコトを云ふ、
 まやうぜん(狀態) 圖ありさま、やうすのまやうぜん(上代) 圖おほむかし、太古、
 まやうぜん(城代) 圖其の城を守つてゐる者のなき時に、其の城を代(か)つて守(まも)つてゐる代官を云ふ語、
 まやうぜん(常體) 圖平常の身體、普通のまやうぜん(情態) 圖其の有様(ようさま)、其の容子、其のこなしのものを云ふ、
 まやうぜん(正當) 圖正しきコト、
 まやうぜん(倡導) 圖倡率(しょうそつ)と同じ、
 まやうぜん(傷悼) 圖いたみなげくコト、

まやう

まやうぜん(倡率) 圖一部の指揮者を爲りて、部下をひきゐてるコトを云ふ、
 まやうぜん(讓遜) 圖白から我が身を卑(ひ)しめて、人にへり下るコト、
 まやうぜん(上奏案) 圖天皇陛下に奏し奉る文書のしたかきのコト、
 まやうぜん(正體) 圖まごの身、本來の體、
 まやうぜん(請待) 圖人をまねきて、さりなすコト、
 まやうぜん(掌大) 圖手の掌(てのひら)ほどの大きさのものを云ふ、
 まやうぜん(昌大) 圖盛大(さか)へて大きくなるコトを云ふ、
 まやうぜん(狀態) 圖ありさま、やうすのまやうぜん(上代) 圖おほむかし、太古、
 まやうぜん(城代) 圖其の城を守つてゐる者のなき時に、其の城を代(か)つて守(まも)つてゐる代官を云ふ語、
 まやうぜん(常體) 圖平常の身體、普通のまやうぜん(情態) 圖其の有様(ようさま)、其の容子、其のこなしのものを云ふ、
 まやうぜん(正當) 圖正しきコト、
 まやうぜん(倡導) 圖倡率(しょうそつ)と同じ、
 まやうぜん(傷悼) 圖いたみなげくコト、

九一一

あやう

あやうたる(牀榻) 図寢臺(イ)のコト、
 あやうたる(唱道) 図云ひこのふ、云ひつ
 たふ。廣く告げ知らすコト。
 あやうたる(正道) 図正しき道。
 あやうたる(聖道) 図佛教の語にて、天台
 宗と眞言宗とのコトを云ふ。
 あやうたる(餉道) 図兵糧を運搬する道す
 ち、即ち糧道(イ)。
 あやうたる(常道) 図一定してかわらざる
 道。人の皆な行ひ守(イ)るべき正しき
 道のコトを云ふ。
 あやうたる(常套) 図めづらしからぬコト
 ありふれたるコト。
 あやうたる(上騰) 図上の方へのほりゆく
 ①物の價(イ)の高くなるコト。
 あやうたる(上達) 図學問技藝等の進歩す
 るコトを云ふ。②物事の巧(イ)になるコ
 トを云ふ。
 あやうたる(撰奪) 図うばひ取る。
 あやうたる(上玉) 図凡て上等の物のコト
 を云ふ。③上等のさんご樹や寶石(イ)の
 コトを云ふ。
 あやうたる(賞嘆) 図太く心に感じて褒め
 ただゆるコト。
 あやうたる(嘗膽) 図支那の越王(イ)の故
 事にて、苦勞して敵(イ)を報(イ)ゆる意

あやう

あやうたる(傷歎) 図いたみなくコト、
 あやうたる(商談) 図商業上の取引に就き
 ての、はなし。商業上の相談。
 あやうたる(常談) 図普通の物語。おどけ
 ばなし、たはむればなし。
 あやうたる(章段) 図文章の段落(イ)。
 あやうたる(上段) 図上方の段。①上座(イ)
 ②座敷の中に床(イ)の如く一段高く
 なしる處を云ふ。③劍道(イ)にて刀(イ)
 を兩手に持ちて額(イ)の中央(イ)に
 かざして敵に向ふ仕方(イ)のコトを云
 ふ、即ち上段にかまふ。
 あやうたる(正氣) 図本心を失ふて
 るなり。①正氣を失ふてゐるなり。
 あやうたる(請待) 図招きて馳走
 せんとする人に發する案内状のコトを
 云ふ。
 あやうたる(情致) 図ようす。ながめ。おもむ
 け。差し出す土地。
 あやうたる(上地) 図上等の土地。お上(イ)
 へ差し出す土地。
 あやうたる(城壁) 図城のかき。城壁。
 あやうたる(正直) 図道に反かぬ、正しき
 行ひのコトを云ふ。
 あやうたる(彰著) 図目だちてあらはるる
 コトを云ふ。

あやう

あやうちよ(娼女) 図遊女。女郎。
 あやうちよ(倡女) 図歌女。藝妓。
 あやうちよ(情緒) 図心に感じて起る愛情
 及び悲情(イ)のコト。
 あやうちよ(撰除) 図はらひのける。
 あやうちよ(掌中) 図手の申。轉じて我
 が物と爲すコトを云ふ。
 あやうちよ(挿柱) 図ささゆるコト、食
 ひ止めるコト。
 あやうちよ(城中) 図しるの内。
 あやうちよ(常住) 図共の處に絶えず住
 んでゐるコトを云ふ。
 あやうちよ(常住) 圖つれに、たえずこ
 云ふ意を表す語。
 あやうちよ(上編) 図朝廷のお耳に達す
 あやうちよ(上長官) 図陸海軍の
 上官のコトにて、將官及び佐官のコト
 を云ふ。
 あやうちよ(祥月) 図死したる人の一年を
 経てから、其の人の死したる月のコト
 を云ふ。
 あやうちよ(祥禎) 図めでたきしるし。
 あやうちよ(常程) 図常の道。常ののり。
 あやうちよ(上帝) 図天にあます神。
 あやうちよ(城塞) 図城に結(イ)ひ廻(イ)ら
 せてある、ひめがきのコトを云ふ。

あやう

あやうてる(賞典) 図褒美(イ)として賜は
 る物品、又は金錢のコト。
 あやうてる(掌典) 図物事をつかさどるコ
 ト。①宮中の祭事をつかさどる役人の名
 あやうてる(粧點) 図化粧(イ)を爲すコト
 こそほひを、らすコト。
 あやうてる(商店) 図あきなひをする店。
 あやうてる(聖天) 図佛の名、歡喜天(イ)の
 の一名。
 あやうてる(詳傳) 図つまびらかに記した
 る傳記のコト。
 あやうてる(上田) 図上等の田地。
 あやうてる(上天) 図天、大空(イ)、空(イ)
 のコト。②冬の天空のコトを云ふ。
 あやうてる(常典) 図常に用ひ一定せるお
 きてのコトを云ふ。
 あやうてる(賞典) 図明治維新の際
 に、公卿(イ)大名(イ)及び士族の、國家
 に對して功勞ありたる人に、特に賜(イ)
 はりたる祿のコトを云ふ。
 あやうてる(壤土) 図土地。①土(イ)のコト、
 あやうてる(淨土) 図佛教の語、佛のあます
 る、極めて清らかなる世界を云ふコト、
 あやうてる(上途) 図旅(イ)へ出掛(イ)るコ
 ト。出立のコト。
 あやうてる(正統) 図血すじの正しきコト

あやう

あやうとし(上棟) 図家の棟(イ)を取り付
 けたるコト。
 あやうとし(常燈) 図神佛に毎日、欠(イ)さ
 す絶(イ)す供(イ)える燈火(イ)。①往來(イ)
 びなどに、毎夜絶えず點(イ)して置く燈
 火(イ)。
 あやうとし(橋頭) 図船の帆柱(イ)の尖
 (イ)のコト。
 あやうとし(城頭) 図城のそば、
 あやうとし(上騰) 図のぼる。あがる。
 あやうとし(彰徳) 図德行をあらはし知ら
 すコトを云ふ。
 あやうとし(生得) 図うまれつきのコト、
 あやうとし(毒毒) 図毒を含める氣、
 あやうとし(上等兵) 図兵士の階級、
 最上位の兵卒。
 あやうとし(淨土宗) 図佛教の一派、
 天台宗(イ)より分(イ)れたるものに
 て、源空和尚(イ)の創始にかゝり、阿
 彌陀經(イ)无量壽經(イ)、觀无量
 壽經(イ)を所依(イ)とし、南無阿
 彌陀佛を念する宗旨(イ)。
 あやうとし(淨土主) 図阿彌陀佛(イ)
 のコトを云ふ。
 あやうとし(淨土眞宗) 図一向宗
 (イ)のコトを云ふ。

あやう

あやうとし(常燈明) 図常燈(イ)に
 同じ。
 あやうとし(莊内) 図領分地の内。①支配地
 あやうとし(城内) 図城壁(イ)の内(イ)。
 あやうとし(樟腸) 図一種の藥品、楠(イ)
 の木質の液(イ)を取りて製したる物、白
 色の透明(イ)又は半透明の、光澤(イ)あ
 る結晶體、一種の芳香ある興奮性の物、
 香料、殺菌、殺虫等、種々の效力を有す、
 あやうとし(上納) 図官府へ租税などを納
 (イ)むるコトを云ふ。
 あやうとし(性無) 図意氣地(イ)のなきコ
 ト。①其の物の實質が、非常に弱(イ)くな
 つてゐるコトを云ふ。
 あやうとし(正日) 図喪(イ)に會(イ)ひたる
 四十九日目のコト。①一周忌の日のコト
 ②年々に来る祥月忌日のコトを云ふ。
 あやうとし(商人) 図あきゆの、
 あやうとし(聖人) 図學識德行共に高くし
 て且つ慈悲(イ)厚き人を敬ひて云ふ語、
 あやうとし(上人) 図佛道(イ)に歸依(イ)
 して學識德行共に優れたる人を云ふ。①
 すぐれたる僧侶を敬ひて呼ぶ語、
 あやうとし(上人) 図美德(イ)を備へたる
 正直なる人のコトを云ふ。
 あやうとし(商人氣質) 図あきゆの

まやう

かたき、
 まやうぬ(性根)固心れ。心のそ、
 まやうぬつ(情熱)固感動して振ふ心の勢
 ひのコトを云ふ。
 まやうぬん(正念)固正しき心。確(ま)かな
 る考のコトを云ふ。
 まやうぬん(生年)固年齢のコト即ちまは
 ひ(生)れたる年のコト。
 まやうぬんぶつ(常念佛)固日欠さす念
 佛を唱(な)ふるコト。
 まやうのふえ(笙笛)固雅樂(が)に用ゆる
 笛の一種、笙(せい)のコトを云ふ。
 まやうはい(賞盃)固其の功勞をほめて與
 (け)ふる盃(さか)金、銀、木等にて作らる
 まやうはい(賞牌)固其の功勞を賞
 (め)る證(あ)として與(け)ふる物にて、
 金(きん)銀(ぎん)銅(どう)にて作られし勳章、
 まやうはい(商賣)固物品を賣りたり、買
 たりして、利益を圖(か)るコト、即ちあ
 きなひ。
 まやうはい(上輩)固目上の人。
 まやうはら(詳報)固委しき知らせ、
 まやうはら(障防)固堤防(づ)物と物との
 しきり、
 まやうはら(城堡)固城。こりでのコト、
 まやうはら(情報)固事情の報知、

まやう

まやうばら(淨房)固大小便所、せついん
 子、
 まやうばら(狀貌)固かほかたち、顔の容
 子、
 まやうばら(商舶)固商品を運搬(おん)する
 船、
 まやうばら(狀箱)固細長き小さき箱(こ)に
 て、書状を入れて持ち運ぶ具、
 まやうばら(贈入)固贈り物、
 まやうばら(賞罰)固ほむるコトと、罰す
 るコト、
 まやうはら(正法)固正しき方法(は)り、
 まやうはら(商法)固あきなひをする仕方
 (は)り、
 まやうはら(常法)固一定せる方法、一定
 せる規定、
 まやうばら(情張)固強情(こ)を張(ひ)こ
 まやうはん(増藩)固結(む)ひめくらした
 るかきれのコト、
 まやうはん(掌躰)固熊の手のひら、
 まやうはん(相伴)固正客が馳走(ち)を受
 る爲めに、其の席(せき)なりて、共に
 馳走を受るコト、
 まやうはん(酒宴)固酒宴の席に侍(は)つ
 て、主人を扶(た)けて、客を待遇(たい)コ
 ト、又は其の人(ひと)我に格別に功勞、又は
 技藝等なきも、上達せる人と共に、物事
 を爲せし爲め、其のお蔭にて、利益を得
 たるを云ふ、

まやう

まやうはん(城番)固城に在る番兵、
 まやうはん(商法家)固商賣をする人、
 まやうはん(商賣屋)固料理屋、遊女屋
 などの、重に客商賣を爲す家を云ふ、
 まやうはん(商賣人)固商賣を營(か)つ
 むる人、
 まやうはん(商人)固其の事に精(こ)しき人、即ちく
 ろうこのコト、
 まやうはん(商法人)固商業家に同じ
 まやうはん(商賣上)固俗語にて藝
 妓の泥水(どろ)を離れて素人(ひ)さな
 りしたを云ふ、
 まやうはん(商賣敵)固同種類の商
 業に従事する人が、其の商業に付き互
 ひにはり合ふコト、
 まやうはん(商賣氣質)固商人が商
 業上の経験に依りて、自然に得たる特
 別の性質、假令ば金錢の利益を見るに
 敏(びん)きならわせたの如きを云ふ、
 まやうはん(商賣上手)固商賣を
 營(か)む事に巧みなる人を云ふ、
 まやうはん(淨玻璃鏡)固佛教の
 語、地獄の閻魔大王の許(もと)に在り云
 ふ、想像上の一種の鏡、亡者が此の鏡に
 向(む)かへば、生前に爲したる善惡の事實(じ)が
 皆(みな)映(うつ)るを云ふ、
 まやうはん(蓄藏)固木の名ばら、

九一四

まやう

まやうび(賞美)固ほめた、ゆるるコト、
 まやうびつ(正筆)固其の人の書き、又は
 描(か)きたる正しきもの、
 まやうびん(商品)固賣買する代物(しろ)の
 まやうびん(上品)固上等の品、いやしか
 らぬ品、
 まやうびん(上賓)固大事の客、丁寧(てい)に
 取り扱はればならぬ客、
 まやうびす(薔薇水)固化粧水の種類、
 まやうびす(香水)固化粧水の高き水、
 まやうびす(常備兵)固平時に備へ置く
 兵隊、
 まやうびす(薔薇油)固化粧品の一種、
 まやうびす(傷病兵)固傷(け)を受
 け、又は病氣に罹(か)つてゐる兵士、
 まやうびん(商品陳列場)固農商務省の監督に屬し、廣く内外の
 商品の見本を集めて、商業家の商品に
 對する智識を與ふべく、一般に縦覽せ
 しむる所、
 まやうびす(武備)固武事。武備を重するコ
 トを云ふ、
 まやうぶ(菖蒲)固草の名あやめのコト、
 まやうぶ(丈夫)固達者(た)なるコト強き

まやう

コト、
 まやうぶ(上布)固上等の麻(あ)の布(は)、
 まやうぶ(情夫)固いろなき、かくした
 る、
 まやうぶ(情婦)固いろなき。かくした
 る、
 まやうぶ(正札)固價格をいつわらずに
 記したる直段札、
 まやうぶ(昌風)固秋風のコト、
 まやうぶ(祥風)固めでたきさま、
 まやうぶ(正物)固現物即ち實際の物品
 まやうぶ(成佛)固佛の加護(か)を得て、
 佛となりたるコト、
 まやうぶ(菖蒲湯)固五月の節句に用ひ
 し、菖蒲を入れて沸(わ)したる風呂(ふ)の
 コト、
 まやうぶ(祥氣)固めでたき氣、
 まやうぶ(性分)固うまれつき、もちま
 る、きたての、
 まやうぶ(上聞)固貴人の聞き給ふコト
 貴人の聞かれ給ふコト、
 まやうぶ(菖蒲皮)固色皮の一種、鹿
 (か)の革(かわ)を藍(あ)にて染(ぞ)め、白
 にて菖蒲花又は其の葉の形を細かく表
 したるもの、
 まやうぶ(狀袋)固手紙を入れる紙袋
 まやうぶ(菖蒲酒)固五月の節句に用

まやう

る、菖蒲の根を浸(ひ)したる酒を云ふ、
 まやうぶ(常不斷)固絶えず、欠かさ
 すを云ふコト、
 まやうぶ(菖蒲刀)固昔時五月の節
 句に、子供が戯弄(あ)したる菖蒲の莖に
 て、巻きたる、おもちゃの刀(や)の、
 まやうぶ(正札付)固確實なる賣直
 段を附したる商品のコト、かけ直に對
 しての稱、
 まやうへい(障蔽)固か、ひ、かき、
 まやうへい(傷兵)固傷(け)を受し兵士、
 まやうへい(昌平)固世の太平(たい)の、
 まやうへい(障屏)固かき(垣)かゝる、
 まやうへい(商標)固秋の風、
 まやうへい(商標)固自家の製品なりと云
 ふ證據として、其の商品に附する標(め)に
 て、法律の保護(ほ)を受くるもの、
 まやうへい(城兵)固城内に在つて城を守
 (ま)り居る兵士、
 まやうへい(上表)固表(は)をたてまつる
 まやうへい(増壁)固かき、か、
 ①物と物との間のじやま物のコトを云
 ふ語、
 まやうへい(障壁)固敵を防ぐ爲めに、築
 きたるかゝる、か、へいなど、
 まやうへい(城堡)固城のかべ、

九一五

まやか

志やかち(麝香) 固香料の一種、麝云ふ
 獸の腹部(の)に在る、卵子(の)の如き
 物より取し物にて、一種の香氣を有す
 暗黒色の物、香料と爲り、又た薬用とな
 る、價(の)高し。
 志やかち(社號) 固其の社、又は會社の名、
 志やかち(社格) 固神社の資格、假令は官
 幣社と社稱社などの稱、
 志やかち(蛇籠) 固竹を割(つ)て圓く荒く
 編みたる籠(の)、内に小石を填(め)め、川
 に沈めて、水流を防ぐに用ゆる物、
 志やかち(蛇蝎) 固へびと、まむし(の)轉じ
 て恐れきらふコトを云ふ、
 志やかち(踏踏) 固動かがむ、うづくまる
 中腰(の)になつてする、
 志やかち(舍監) 固寄宿舎(の)の取締、又
 は其の人を云ふ、
 志やかち(馬鈴薯) 固ジャガタ薯のこ
 トを略して云ふ語、
 志やかち(麝香猫) 固熱帯地方に棲め
 る、尾の長き小猫の如き形をなせる獸、
 其の味より麝香を取る、
 志やかち(麝香間) 固宮中に在る御居
 間(の)の一つの御名、「ちんに同じ
 志やかち(遮眼燈) 固がんどうちよう
 志やかち(釋迦半尼佛) 固しやかの

まやか、まやき

志やかち(馬鈴薯) 固つる草の名、
 コトを云ふ、
 其根は一般に、橢圓形を爲せる、塊(の)に
 にて、多く群(れ)り生ず、色は概(して)淡
 淡黄赤色にて味はさつまいもに似てあ
 つさりせり、
 志やかち(斜暎) 固夕映(の)夕陽のコトを云
 志やかち(射騎) 固弓術と馬術のコトを云
 志やかち(車騎) 固砲兵と騎兵のコト、
 志やかち(車軌) 固車の齒あこ、即ちわだち、
 志やかち(謝儀) 固謝意を表す爲めに贈(り)
 る物、又は金子のコトを云ふ、
 志やかち(邪鬼) 固崇(り)をなす神、
 志やかち(邪氣) 固よこしまなる心(の)風(の)
 をひきたるが如き有さま、
 志やかち(謝金) 固禮として贈る金子、
 志やかち(砂金) 固黄金(の)が砂の如き形
 を爲して、砂に混(じ)りて、河底(の)な
 るに在るもの、稱、
 志やかち(射御) 固車騎に同じ、
 志やかち(邪曲) 固よこしまなるコト、
 まがつてるコト、
 志やかち(砂金石) 固訛りてさきん石
 とも云ふ、石の一種、一鉢に茶褐色を呈
 して、一面に細かき黄金の如き光(の)を
 を放つ物にて、種々の細工品に用ひら

まやう、灼、燂、燂、燂、借、九一八

志やかち(茶金石) とも書く、
 志やかち(灼) 固やく。やける(の)やけるが如
 くあつきコト(の)盛(り)なるさま(の)明
 (の)かなる状を云ひ表はす語、
 志やかち(燂) 固火の燃(る)るが如く明らか
 なるコト(の)照(り)かやくコト、
 志やかち(燂) 固甚だしく急ぐさま、驚きあ
 はてる状を云ひ表はす語、
 志やかち(燂) 固さらかす、さるける(の)てる、
 志やかち(燂) 固さらかす、さるける(の)てる、
 美しく、はでやか、
 志やかち(燂) 固前條に同じ、
 志やかち(燂) 固ゆるやか。ゆるくある(の)し
 なやか。やさし。美し、
 志やかち(借) 固金銭物品をかりるコト、
 志やかち(借) 固華族(の)に列して授けられ
 る爵位のコトにて、世襲(の)の位階(の)
 五等に區別さる、即ち公、侯、伯、子、
 男のコト、
 志やかち(積) 固病氣の名、俄かに起る胃痛
 志やかち(折) 固そぐコト。けづるコト(の)折
 (の)る。たはめる(の)小形(の)の及物(の)も
 小がたな(の)もろし、よはし、
 志やかち(竹) 固獨木橋(の)に同じ、
 志やかち(鵲) 固鳥の名、かささぎのコト、
 志やかち(酌) 固くむ(の)酒をのむ(の)そぐ、

まやく、杓、笏、勺、尺、嚼、斫、燂、釋、雀

まやく、箸、寂、弱

まやく

九一九

くみ取る(の)酒を倍(の)む。孟をさす(の)孟
 (の)てらし察する即ちくみわける、
 志やく(杓) 固ひしやく(杓子) (孟) (の)物、
 志やく(笏) 固禮装に用ゆる一種の器具、
 東帯(の)の禮服を着(る)し時に、右の手
 に持つべき木製の細長き板、長さ一尺
 二寸、巾(の)二寸が、其の規定(の)なり、
 志やく(勺) 固樹目(の)の名、一勺は一合
 の十分の一(の)地面の積(の)を量(の)る名
 一勺は一坪(の)の百分の一、
 志やく(尺) 固物の長さ、たけ(の)物の長さ
 を度(の)る具、即ち物さし、さし、
 志やく(尺) (接尾) 物の長さをはかる語、
 一尺は一寸の十倍なり、
 志やく(嚼) 固物をかむ(の)轉じて食(む)ふ。
 くふ(の)更に轉じて味(の)あふ。味を試(す)
 (の)みる、
 志やく(斫) 固切る。斬る。たつコト、
 志やく(燂) 固燈火(の)炬火(の) (の)轉じて
 光(の)る。てる。かやく、
 志やく(釋) 佛法の語、佛に事(つ)じて僧侶
 となりたる人の、一般の姓に用ゆる語、即
 ち釋迦(の)の釋の字を用ひたるもの、
 志やく(雀) 固小鳥の名、すゝめのコト、(の)
 色合の名、雀(の)の頭に在る毛色の如
 き色合を云ふ(の)喜(の)んで小躍(る)す

るコトを云ふ、
 志やく(竹) 固竹の種類くま笹(の) (の)竹の
 あら皮(の)のコトを云ふ、
 志やく(寂) 固佛法の語、僧侶(の)の死を
 云ふ(の)無欲(の)、無の境、さびしきコト
 を云ふ、
 志やく(弱) 固よわきコト、おこるえるコ
 ト(の)單位以下の端數(の)をくり下げて
 單位以上(の)したる時に云ふ語、假令は
 九合八勺を一升として云ふ時に、一升
 弱と云ふが如し、(の)わかきコト(の)まだ
 物事に達し居らざるコトを云ふ(の)二十
 前後の年配(の)の人のコトを云ふ、
 志やく(爵位) 固五等の位、即ち公、侯、
 伯、子、男、
 志やく(爵位) 固爵位と封土、
 志やく(爵位) 固もゆる、やくる、
 志やく(爵位) 固さき明すコト、
 志やく(爵位) 固五等爵の名、假令は
 公爵と、男爵と、
 志やく(爵位) 固あだ名のコト、
 志やく(尺輪) 固てがみ(手紙)、
 志やく(若干) 固わづかばかり、少し
 ばかりのコト、
 志やく(瘴氣) 固しやくの起りそうな容
 子(の)しやくもち、

志やく(借) 固委しく説明するコト、
 又は説明せし物、 「コト
 志やく(借居) 固借家住居をしてある
 志やく(借許) 固若干に同じ、
 志やく(借金) 固金をかりるコト、又
 は借りたる金子、
 志やく(積極) 固せきまよくの説
 (の)り、其の條を見よ、
 志やく(借金) 固借りたる金を
 請求する人、
 志やく(積極) 固せきまよく
 てきに同じ、
 志やく(借居) 固借りて土地の區域(の)
 (の)コトを云ふ、
 志やく(借火) 固少しばかりの火、勢
 よわき火のコトを云ふ、
 志やく(借取) 固金圓を借り入れる
 コト(の)金圓を借り入れるに就きての條
 件のコトを云ふ、
 志やく(借取) 固年のゆかぬ男子(の)
 二十歳の男子、
 志やく(借取) 固釋迦の教(の)え、即ち
 佛法のコトを云ふ、
 志やく(借取) 固文章の意義を解きあ
 かすコトを云ふ、
 志やく(借取) 固借金、

まやく

まやくより(借用)図金銭物品等を借るコトを云ふ。
 まやくよりしよろしよ(借用證書)図金銭を借る爲めに、差入れる證書のコトを云ふ。
 まやくら(雀籠)図雀(まづ)などの小鳥を捕ふる網(ま)を張りて用ゆる。
 まやくら(釋老)図釋迦を孔子。
 まやくら(借覽)圖書物などを借りて讀むコト。
 まやくらん(灼爛)図きらめくコト、明か。
 まやくり(吃逆)醫學上にて云ふ、横隔膜の痙攣(けいれん)のコト、即ちせき込む如く、むせぶが如き呼吸(そく)づかひを起すコトを云ふ。
 まやくりあ(歡歌)自動すより泣きする。
 まやくりなき(歡歌)図聲をすより泣(ま)コトを云ふ。
 まやくりやち(酌量)図くみはかる、さつ。
 まやくりやちげんけい(酌量減刑)図其の罪狀を酌み分けて、刑罰を輕(か)くするコトを云ふ。
 まやくる(抄)圖動杓子などにて物をすくふ。かきまざる(四)むやうにえぐり取る。
 まやくち(借置)図かり宅。かり家。

まやく、まやけ

まやく、まやけ(石榴)図木の名、ざくろのコト。其の條を見よ。
 まやくろく(爵祿)圖爵のくらゐさふちとコトを云ふ。
 まやくろく(尺六)圖一尺六寸のコト。
 まやくろくち(栢榴口)圖ざくろ口の口。
 まやくろく(奢華)圖おこりにふけるコト。ぜいたくを極むるコト。
 まやくわい(社會)圖世の中。同じ種類の人。仲間のコト。
 まやくわち(砂鐵)圖砂金や、砂鐵などの。
 まやくわん(舍箱)圖さまるべき家。やど。はたこやのコト。
 まやくわい(社會學)圖人類社會の構造成立(けいせい)、變化發達(はつたつ)等の事實(じじつ)を、研究(けんきゅう)する學問(がくもん)のコト。
 まやくわいたち(社會黨)圖社會主義を採(と)る過激なる黨派(とうはい)の稱。
 まやくわいしゆき(社會主義)圖社會に格段(かくたん)なる貧富(ひんぷ)の差なく、利益を一般に得せしめんとする主義(しゆぎ)を云ふ。
 まやくん(斜曠)圖夕夕陽(たそが)。
 まやくけ(鮭)圖魚の名、さけに同じ。
 まやくけ(捨家)圖俗人が僧侶となりし人の稱。

まやけ、まやい

まやけ(社家)圖神官(かみ)の、かんぬし。
 まやけい(舍兄)圖自分の兄、實の兄。
 まやけい(射藝)圖弓術のコト。
 まやけい(邪計)圖あしきたくみ。
 まやけい(邪徑)圖細き道。横丁(よこぢ)。
 まやけち(邪教)圖よこしまなる教え。
 まやけき(射擊)圖小銃(せうじゆ)を放ち撃つコト。小銃にてうつコト。
 まやけん(奢儉)圖おこりさ、けんやくの。
 まやけん(邪慳)圖むこたらしきコト。なさけ心のなきコト。
 まやこ(鷓鴣)圖鳥の名、本邦には産せず。支那に多く産す。腹(はら)は灰白色、脊部は淡青色にして、紅黄色(こうじやく)の小まき斑點あり、形は鶉(うず)に似て其よりも大なり。
 まやこ(蝦蟇)圖蝦(か)の類、長さ三寸内外より五六寸に達す、形は蝦(か)に似て平(ひら)つたく、八對(はつたい)の脚(あし)あり、其の殻(から)きコト宛然(あつぜん)と剃刀(かみばし)の如し又別に三對(さんたい)の小まき脚あり、脊(せ)は一面に細かき節(ふし)ありて、自在(じざい)に屈伸(くつしん)す、全體の色は、帶青白色にして、煮(に)れば淡紫色に變ず、小なる物は餌(え)又は肥料(けいり)さし、大なる物は食料(じきりょう)と爲す、味よし。

まや

まやこ(碑碣)圖具の名、七寶燒(しちほうやき)の飾(かざり)に用ゆる物、蛤(かき)の一種にて大なり、殻(から)は白色にして光澤(こうさつ)あり、研(けん)きて用ゆる。
 まやこ(車庫)圖車を入れて置く倉。
 まやこ(雜魚)圖ザコに同じ。
 まやこち(射候)圖的(の)のほし。
 まやこく(車轂)圖車のことき。
 まやこく(社告)圖其の社の廣告。
 まやこく(精黑)圖赤くさき色の稱。
 まやさい(社債)圖株式又は株式合資會社が商法の規定に従ひて、債券を發行して、金銭を一般より借り入れるコト、又は借り入れたる金銭。
 まやさい(社祭)圖神社の祭禮のコト。
 まやさい(瀆刑)圖下し藥。下劑(げざい)。
 まやさい(社財)圖會社の財産。
 まやさい(謝罪)圖あやまちをわびるコト。
 まやさん(社參)圖神もふて、即ち神社に參詣(さんぎ)するコト。
 まやさん(砂竈)圖こかひのコト。
 まやさん(藉山)圖あか土のみの山、はげ山、即ち火山のコト。
 まやさいけん(社債券)圖株式組織の會社が商法の規定に依りて、募集(ぼくじふ)したる社債の證券の稱。

まやし

まやし(斜視)圖やぶにらみ。
 まやし(社祠)圖神社、ほこら。
 まやし(奢侈)圖おこりかざるコト。
 まやし(社司)圖府縣社及び郷社の神事をつかさどる人、即ち神主(かみ)。
 まやし(砂嘴)圖潮流(さざなみ)川流(がは)又は風向(かぜ)等にて、砂洲(さし洲)が自然にのびて、廣(ひろ)がりしもの稱。
 まやし(寫字)圖文字を寫(か)すコト、又は寫(か)したる文字。
 まよし(社寺)圖神社と寺院。
 まよし(謝辭)圖禮を述ぶる言葉。こまはる言葉。過失(ごうじつ)を詫(わ)がる言葉。
 まよし(邪思)圖よこしまなる考へ。
 まよし(車室)圖汽車電車の乗客の坐席(ざせき)のコトを云ふ。
 まよし(社日)圖しやにちに同じ。
 まよし(斜日)圖ゆひひ。日ぐれ。
 まよし(寫實)圖實際のままを寫し現はすコトを云ふ。
 まよし(寫眞)圖本當の形を寫し現はす。寫眞器を用ひて、現物と寸分の違ひなく物像を寫すコト、又は寫したる物。
 まよし(舍主)圖やどぬし。其の家の主人のコトを云ふ。
 まよし(社主)圖其の社の持主。

まやし

まよしん(砂塵)圖砂ほこり。
 まよしん(舍人)圖めしつかひ、やまひ人。宮内省の小官の名、さねり。
 まよしん(社人)圖神官のコト。
 まよしん(邪心)圖邪念に同じ。
 まよしん(寫字生)圖文字をかき寫すを業(わざ)せる人。
 まよしん(寫象)圖心に感動を起すはた。縣及び郷社(ごほ)に在つては社司(かみ)の次に在り、村社にては其の首位に在る神官の名。
 まよしん(車掌)圖汽車や電車に乗りて其の車に就きての、運轉事務を執れる人。
 まよしん(車上)圖車の上、車に乗つて。
 まよしん(謝狀)圖謝意を表す手紙(てがみ)あやまりの意を述べたる文書。
 まよしん(邪宗)圖正しからざる宗教。
 まよしん(射術)圖弓術(きうじゆ)のコト、鐵砲(てっぽう)を撃(う)つ術。
 まよしん(社禮)圖朝廷又は國家のコトを云ふ。
 まよしん(寫眞器)圖寫眞に用ゆる凡て。まよしん(寫眞師)圖寫眞をうつすを業(わざ)せる人。

まやし、まやせ 謝、舍、瀉

まやじきよく(社寺局) 圖文部省内に在る一局にて、神社及寺院の監督取締(まやじ)を爲すところ。
まやしんばん(寫眞版) 圖寫眞を其のまま洋紙に印刷(まや)する原版(まや)のコトにて、寫眞の種板(まや)を銅板(まや)又は鉛板(まや)の上に載(まや)せ、日光に曝(まや)したる後(まや)に藥品を用ひてくさらせ、其の寫眞を其の銅板、又は鉛板に移(まや)して、製したる版(まや)のコト、まやしんせきばん(寫眞石版) 圖寫眞を一定の方法に依りて、滑(まや)かなる石に寫し、其れを更にくさらせて製したる版(まや)のコトを云ふ。
まやしんじゆつ(寫眞術) 圖寫眞をうつす技術、即ちしかた。
まやす(謝) 圖勸進を云ふ(まや)詔(まや)る(まや)こさばる、しやせつす(花など)が散(まや)り(まや)む。
まやす(舍) 圖自動假りに住(まや)宿(まや)を取(まや)る、こまるやどりす。
まやす(瀉) 圖自動下痢す、腹がくだる。
まやする(砂水) 圖砂にて、こしたる水、まやする(邪推) 圖心のひがみより、人の事をわるく推量(まや)するコト、まやせい(寫生) 圖凡て物の其のまの、の状

まやせ、まやそ

まやせい(邪正) 圖よこしまなるこ、正しきこ(まや)轉じて悪人と善人と、まやせき(砂石) 圖すなのコト、まやせき(積石) 圖小豆色を爲せる石、まやせつ(社説) 圖新聞紙雜誌などへ、其社の意見として掲ぐる論説、まやせつ(謝絶) 圖こころるコト、まやせつ(邪説) 圖よこしまなる説、まやせつ(射線) 圖發射(まや)したる彈丸(まや)の通つて行く道のコト、まやせん(斜線) 圖斜(まや)に引きし線(まや)斜に爲つてる線、まやせい(寫聲機) 圖音楽をうつし取る機械、即ち著音機(まや)、まやせい(寫生) 圖寫生したる畫、まやせいけん(紗生絹) 圖生糸(まや)にて織りたるまの絹、まやそ(社僧) 圖神佛合體の制度(まや)の時代に、神社に仕(まや)えたてた僧、まやそ(社車) 圖客車のまご、まやそ(社則) 圖其の社の規定、又は定ま(まや)蛇足(まや)を添えて、足を附けたまご云ふ故事より出づる語、不用の

まやた、まやち 蟻

まやた(射案) 圖弓術にて的(まや)を置く基礎(まや)となるべき、土を盛りし土手(まや)の如き物、即ちあづちのコト、まやち(車代) 圖乗りたる車の貨錢、まやち(邪道) 圖邪法に同じ、まやち(酒脱) 圖すつぱりさして、いやしからぬコト、まやち(蛇卵) 圖又た蛇玉(まや)と云ふて子供の慰(まや)に爲す一種の戯物、水銀と硫黄とより成れる灰白色の土の如きもの、此の小き塊(まや)に、火を點(まや)すれば、著しく長く延びて、蛇の如き形を爲す、まやち(遮斷) 圖さへぎり絶つ、さへぎまやち(社壇) 圖神社の拜殿(まや)、まやち(社團) 圖二人以上の人人が同一の目的を以て、共同にて團體を設立せしコトを云ふ、まやち(鮫) 圖海獸の名、さちほこのコト、まやち(砂地) 圖すなち、すなつばら、まやち(社地) 圖神社の境内地(まや)神社の所有地、まやち(車地) 圖家又は石などの非常に重き物を引くに用ゆる具にて、ろくろ仕掛(まや)になつて物、之を地上に据え、

まやち 蟻

其の軸(まや)に太き繩(まや)を結び付け、其の長き繩の端(まや)を、其の引くべき物の心(まや)に結びつけて、其の軸を廻(まや)し、繩(まや)の巻き附くにつれて、其の物が近か寄つて来る仕掛(まや)になれるもの、まやち(邪智) 圖あしき智慧、悪才(まや)、まやち(車軸) 圖車の心棒、まやち(鮫) 圖海獸の名、頭は虎に似て脊に鋭(まや)針の如き物あり、非常に猛烈にして、能く鮫(まや)を刺し殺すこと云ふ(まや)此の海獸の形を刻りて、宮殿又は樓門の兩端に飾りとして置きたるもの、稱、まやち(社長) 圖其の會社の長、まやち(射場) 圖弓術を行ふ場處、弓を射る處、まやち(砂場) 圖砂の置ひてあるこ、まやち(社中) 圖仲間中、連中、まやち(鮫瓦) 圖屋根の棟(まや)の兩端につける、シヤチホコ(まや)の形になしたる瓦、即ち鬼瓦(まや)のコト、惡魔除となること云ふ、まやち(鮫張) 圖自動身軀(まや)が曲(まや)らぬやうに固(まや)くなる(まや)極(まや)めていかめしき状(まや)を粧(まや)ふ、まやち(鮫立) 圖頭(まや)と手(まや)を

まやつ、まやの

下につけ、足を二本揃(まや)へて延(まや)し立つるコト、其の状(まや)が宛然(まや)シヤチホコ(まや)の如くなるより云ふ(まや)轉じて一生懸命(まや)に爲つても、やりきれぬこと云ふ意を表はすに用ゆる語、まやつ(褌衣) 圖はだき、まやつくり(吃遊) 圖しゃくりのコト、まやてい(沙汀) 圖海岸の砂地の稱、まやてい(舍弟) 圖おさうまのコト、まやてき(射的) 圖小銃にて的(まや)をれらひ放(まや)るコト、まやてつ(車轡) 圖車輪の地上を行きし、まやてつ(砂鐵) 圖鐵が砂の如き状を爲し砂に混じて河底などに在るもの、まやでん(社殿) 圖神殿に同じ、「地まやでん(社田) 圖神社に附屬してある田まやど(砂土) 圖砂(まや)を含むむでる土、まやど(積土) 圖あか土のこト、まやど(社頭) 圖神社のそば、まやにち(社日) 圖曆上の名、春分及び秋分に、最も近き日(まや)の日のコトを云ふ、まやにち(斜日) 圖斜陽に同じ、まやねん(邪念) 圖よこしまなる考へ、あしきこと云ふ、まやのめ(蛇目) 圖紋所の名、太き輪を描きし物(まや)蛇目傘の略、

まやの、まやば

まやのひび(蛇蟻) 圖俗語にて、夢門冬(まや)のこトを云ふ、まやのひび(蛇目傘) 圖蛇目の紋の如き形に彩色(まや)たる雨傘(まや)のこト、まやば(車馬) 圖車と馬(まや)のこト、まやば(婆娑) 圖佛法の語にて此の世のこト、現世(まや)獄裡(まや)に對して、獄外(まや)の社會、世間(まや)のこトを云ふ、まやば(斜方) 圖並行方形のこト、まやば(砂防) 圖小石を以て積みたる土手(まや)堤防のくづれを防ぐもの、まやば(砂漠) 圖木なく水なき廣大なる砂原の稱、まやば(射法) 圖弓を射る方法、弓術、まやば(邪法) 圖悪しき教へ、まやば(蛇腹) 圖伏蟻(まや)の仕方(まや)一種(まや)の部の稱、即ち伸縮(まや)の自由(まや)出来るやうに、革又は布にて、ヒダを取りて作られあるもの、まやば(車馬道) 圖車馬のみの通行に供すべく區劃(まや)をつけられある道、まやば(婆娑) 圖爲すこトなく、生きてゐて、却つて世の中の邪魔(まや)となる人を云ふ、まやば(蛇腹伏) 圖蟻(まや)の一方(まや)一種、

まゆら

志ゆらえい(充盈) 固十分みつるコト、
 志ゆらえん(終焉) 固生命の終り果(終)ん
 とする時、即ち死にきばのコト、
 志ゆらかせい(從價税) 固關稅の一種、其
 の品物の價格に依りて、取り立つる税
 金の稱、
 志ゆらき(戎器) 固戰爭を爲すに必用なる
 道具、即ち武器の科ト、
 志ゆらきるん(衆議員) 固帝國議會の一部
 一般の人民より選出したる國會議員に
 依て、組織せる議會、
 志ゆらきよく(終局) 固事件の終り、則ち
 落着(おち)き(終)を打ち終るコト、
 志ゆらきよくはんけつ(終局判決) 固法律
 の語、或る訴訟事件の一部、又は全部の
 局を結(む)ばしむる判決(おひ)の科トを
 云ふ、
 志ゆらぐ(戎具) 固武器の科ト、
 志ゆらぐわ(衆寡) 固人數(た)の多きと少
 きと、
 志ゆらぐわ(銃火) 固小銃を放つ時に出る
 志ゆらぐん(衆軍) 固多くの軍勢(おほ)き、
 志ゆらぐん(從軍) 固戰爭につき従ふて行
 くコト、
 志ゆらぐわん(縱觀) 固我れの思ふままに
 見物するコト、勝手に見物するコト、

まゆら

志ゆらぐわん(縱貫) 固たてに通りつらぬ
 いてるコト、特に南北に通(つ)つて
 コトを云ふ語、
 志ゆらぐわん(銃丸) 固小銃の丸(たま)、
 志ゆらぐわん(從軍記者) 固軍隊に
 従ふて戦地へ行く新聞、又は雜誌記者
 (た)の科ト、
 志ゆらぐわん(從軍記事) 固何何の
 戦役にたづさはつた云ふ印(お)に、
 政府より賜はる一つの記章、
 志ゆらぐわん(從軍記者) 固其の地
 域の南の端より北の端へ通つてる鐵道
 (た)の科トを云ふ、
 志ゆらけい(銃刑) 固小銃にて殺す刑罰、
 志ゆらけい(從兄) 固年上(た)の男のい
 このコト、
 志ゆらけい(從兄弟) 固をち及びなば
 の子(こ)の科ト、
 志ゆらけい(宗教) 固神佛の教えを説き聞
 せて、人人の心を善道(ぜん)にみちびき
 治(ち)むるを目的とするもの、
 志ゆらけい(銃撃) 固小銃を以て撃つコト、
 志ゆらけい(終決) 固終りのまごまるコト、
 志ゆらけい(終結) 固終りのまごまるコト、
 志ゆらけい(終成) 固出來上るコト、
 志ゆらけい(最後) 固最後(さい)の科ト、

まゆら

志ゆらけい(充血) 固血が一所に集りて皮
 の色の、紅色を呈すを云ふ、
 志ゆらげん(祝言) 固よるこびのこさば
 嫁入(よめい)の科トを云ふ、
 志ゆらげん(戎軒) 固兵車(へい)砲車、
 志ゆらげん(銃劍) 固小銃と劍(けん)と小銃の尖
 (せん)につけある劍、
 志ゆらげん(宗教家) 固宗教(しん)に熱
 心なる人、宗教に迷して人、
 志ゆらげん(銃術) 固銃劍(けん)に熱
 心を用ひて敵を撃ち、又は己を防ぐ術、即
 ち銃劍を用ひ爲す撃劍(けん)、
 志ゆらけい(銃口) 固小銃の筒口(ぐ)を云ふ、
 志ゆらけい(縱谷) 固山脈と相並(な)びて
 通(つ)つてる谷の稱、
 志ゆらけい(主殺) 固其の主人を奉公人
 が殺すコト、
 志ゆらけい(終歲) 固一年中、
 志ゆらけい(戎裝) 固戰爭に出る仕度、
 志ゆらけい(銃槍) 固銃劍(けん)と同じ、
 志ゆらけい(銃劍) 固銃彈を受けて生じた
 る劍、即ち鐵砲劍(てっぽう)、
 志ゆらけい(銃殺) 固小銃にて打ち殺すコト、
 志ゆらけい(銃術) 固銃に槍(けん)を
 につけて、敵を撃ち、己を防ぐ術の科ト
 を云ふ、

九三〇

まゆら

志ゆらし(益斯) 固虫の名、きりぎりすの
 コトを云ふ、
 志ゆらし(終始) 固はじめと、なはり
 志ゆらし(終止) 固をはり、はて、終局、
 志ゆらし(宗旨) 固宗門の肝要なる趣旨、
 志ゆらし(從子) 固(た)の科ト、
 志ゆらし(從事) 固其の事をなす、仕事す
 るコト、
 志ゆらし(充耳) 固耳をふさぐコト、
 志ゆらし(或事) 固いくさ、戰爭、
 志ゆらし(終日) 固一日中、
 志ゆらし(充實) 固みちみちてるコト、
 十分なるコト、満足なるコト、
 志ゆらし(從者) 固さも人、
 志ゆらし(袖手) 固袖へ手を入れてるコ
 ト、
 志ゆらし(主從) 固主人と家來、
 志ゆらし(衆庶) 固人民、人人、
 志ゆらし(終身) 固一しよがいの科ト
 を云ふ、
 志ゆらし(終審) 固刑事又は民事の訴訟
 に就きて、其の事件の確立(た)せる裁
 判の科トを云ふ、
 志ゆらし(執心) 固熱心なるコト、一心
 志ゆらし(熱心) 固熱心なるコト、一心

まゆら

志ゆらしん(衆人) 固多くの人人、
 志ゆらしん(銃身) 固小銃の基礎(た)の部
 にて、彈丸をこめて發射するところを
 云ふ、
 志ゆらしん(獸心) 固極めていやしき心根
 志ゆらしん(銃傷) 固銃丸に中(な)りて
 受けたる傷(た)の科ト、
 志ゆらしん(從順) 固すななるコト、
 志ゆらしん(銃床) 固銃の筒(ぐ)を取り
 付けてある部分の名、即ち木にて作ら
 れし部分、
 志ゆらしん(就職) 固又たじゆ職(た)も讀
 む、或る職務に採用(た)されるコト、
 志ゆらしん(終身官) 固過失犯罪等
 のあらざる限りは、終身其の官を免ぜ
 られぬ官の科ト、
 志ゆらしん(終身定期金) 固法
 律の語、確固(た)たる理由の下に於て、
 一生涯の間(た)、定期に給與する約束
 をなしたる金子の科トを云ふ、
 志ゆらしん(終身懲役) 固死
 まで、苦役に服する懲役、即ち無期懲役
 の科ト、
 志ゆらしん(終成) 固出來上るコト、

まゆら

志ゆらしん(終生) 固終身に同じ、
 志ゆらしん(銃鎗) 固鐵などのさびたるコ
 トを云ふ、
 志ゆらしん(銃聲) 固小銃を放つ時に生ず
 る音(ね)を云ふ、
 志ゆらしん(終審) 固さうしもの科ト、よ
 しから、
 志ゆらしん(衆生) 固佛語多くの生ある者
 を云ふ、
 志ゆらしん(終夕) 固夜もすがら、夜ごう
 志ゆらしん(充積) 固みちみちてるコト、
 志ゆらしん(衆説) 固衆論に同じ、
 志ゆらしん(充溢) 固此の上もなき満足な
 るコト、満ち餘(た)れるコト、
 志ゆらしん(縱線) 固たてのすじ、
 志ゆらしん(銃戰) 固小銃を打ち合ふて戦
 ふコトを云ふ、
 志ゆらしん(從前) 固從來に同じ、
 志ゆらしん(充塞) 固みちみちがつてるコ
 ト、
 志ゆらしん(充足) 固たすコト、みたすコ
 トを云ふ、
 志ゆらしん(從屬) 固つき従ふてるもの
 の科トを云ふ、
 志ゆらしん(銃卒) 固小銃を持つて戦ふ兵
 士の科ト、歩兵、
 志ゆらしん(從卒) 固其の隊に附屬して

九三一

